

Fate/alternative

ギルス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本来とは違う歴史を辿る第五次聖杯戦争。

ー主人公は女の子。

Fate／Grand Orderの主人公であった彼女はこの世界では、廃れた魔術師の家系に生まれた一人の少女に過ぎなかった。

人理焼却の起こらなかった世界に生きる一人の魔術師。

しかし、聖杯は否応無しに彼女を戦いへと駆り立てる。

衛宮士郎との出会い。

遠坂凛との共闘ー、そして：彼女を護る「オルタ」。

朱の魔槍は乾いた血に黒く染まり、その牙は三日月の様に並び、鋭く覗く。
クー・フリーリン・オルタ。

異なる可能性を引き寄せた世界は、ありえなかった現実へと転げ落ちて行く。
ーさあ、選ばれなかった物語、i fの世界に、ようこそ。

目次

【オルタニキで】「プロローグ」【第五次聖

杯戦争】
1

第1話 『始まり』
5

第2話 『神成る槍』
16

第3話 『正義の味方』
49

第4話 『虎VS…』
57

第5話 『兆し』
74

第6話 『絆／傷の名』
86

第7話 『神性』
102

第8話 『円環矛盾』
113

第9話 『瞳』
128

第10話 『アイウォーカー』
141

第11話 『見上げる空は』
155

第12話 『神話』
172

第13話 『別離／醒』
185

第14話 『夜空の華』
204

第15話 『テムロツソ・エル・ドラゴ』
220

220

第16話 『封印指定執行者』
233

Fate／alternative
m

aterial ②＋③
246

第17話 『雷霆』
266

Fate／alternative
m

aterial ④
286

第18話 『歪み』
302

第19話	『我儘』	316
第20話	『因子』	332
第21話	『蛹』	353
第22話	『恩讐』	368
第23話	『赤と青』	382
第24話	『混沌』	397
第25話	『未来／見来』	412
第26話	『鳥籠』	429
第27話	『酒精』	442
第28話	『アンゴルモア』	455
第28・5話	「タイガー道場 a i t e r n a t i v e」	470
第29話	『凧』	493

第30話	『絶招』	506
第31話	『神々の系譜』	521
第32話	『激怒』	539
第33話	『雅、翳りて。』	552
第34話	『悪夢』	567
第35話	『胎動』	584
第36話	『500年の妄執』	599
第37話	『無限の剣製』	621
第38話	『眩き黄金』	642
第39話	『昏き聖女』	670
第40話	『魔術師(キャスター)』	
第41話	『 』	683

第42話 『仇
すアダ
す
』
—

707 693

【オルタニキで】「プロローグ」【第五次聖杯戦争】

それは、稲妻の様な切っ先だった。

心臓を串刺しにせんと繰り出される槍の穂先。

躲そうとする試みは無意味だろう。

それが稲妻である以上、人の目では捉えられない。

死にたくない、死んで、いいはずがない。

兄さん、兄さんー私は、まだ。

死ね、ない。

その思考を最後に、我が身は百舌鳥の早贄よろしく貫かれるのかと。

身を強張らせた。

加速した思考が、ゆっくり、ゆっくりと迫る槍を認識して。

だが、身体はそれを回避できるだけの動きはできず。

ただ、必死に考えに考えた。

何かを、聞いて、答えた様な気がした。

そして、稲妻はどうとう私の身体をー、

だが。

この身を貫こうとする稲妻は、

稲妻以上の速度を持った紅い暴風に吹き散らされた。

ズシン、と言う重い足音。

目の前の敵が踏み鳴らした踏み込みよりなお重く、速い。

我が身を襲った稲妻と、奇しくも同じく長い柄を持つ「槍」と呼ばれるその武器は。

紅く、暗く…そして、何より余りに恐ろしかった。

「問おう、貴様が俺のマスターか。」

巨大な黒い影が喋った。

紅く、暗いその凶器を構えたまま。

「え？あ、え？」

混乱の極みにある私の頭はまともな答えを返せず。

目の前に立つ存在が私に語りかけていると理解するまでに暫しの間を必要とした。

「…ちつ、ハッキリしやがれお前が俺のマスターか、と聞いている。」

気怠そうに、しかし眼は相手の動きの一端すら、視界から外さない。

「小僧、貴様が何者かは知らんがな…この儂を前に余所見とは良い度胸じゃー！」

こちらが悠長に会話するのをいつまでも待つてくれる筈も無く、槍を構えた赤い影は

苛立ちを含んだ声で叫んで来た。

ジャツ！

と風切り音を立て、鈍色の鋼が再び稲妻の様な速度で迫る。

今度は目の前の…：紅い暴風の主に。

「は、しやらくせえ！」

ガイン！

と激しく音を立て、鋼が打ち合う音が暗い土蔵の中に響いた。

「まあ、いい…：その手に宿る令呪…：お前が俺のマスターで間違いはなさそうだ。」

不敵な笑み。

まるで牙の様にずらりと並ぶ尖った歯。

三日月の様に歪めた口元を隠しもせず、眼前の敵を見据える、漆黒の立ち姿。

フードに半ば隠れた顔は野性味あふれ、両耳には長い水晶の様なイヤリング。

両脚は黒い、まるで捻れた角の様に見える無数の棘に覆われた生物じみた装甲に鎧わ

れている。

腰から伸びるのは…：尻尾???

まるで巨大な百足にも見える尻尾がゆらゆらと揺れていた。

紅い月が輝く空が。

土蔵の窓から怖いくらいの赤光を差しいれている。

私は――

初めて、誰かに「畏怖」と「憧れ」を同時に抱いた。

第1話 『始まり』

打ち合いはたったの2合。

睨み合いに至っては恐らく2秒に満たない。

だが、それがまるで永遠にすら思えた。

「ふん、いけ好かないマスターじゃて…この好機に戻れと来たか…まあ、良い…そこな槍使い、貴様がなんのクラスかは知らぬが…次におうた時こそ、全力で打ち合おうぞ。」

「は、逃げるのか爺、少しは楽しめるかと思っただがな？」

「生憎我がマスターは臆病でな、貴様のように武人氣質だと良かったんじゃがな。」

赤い中華風の衣装、結われた赤髪。

喋り方こそ老獪ながら目の前の、自分を殺そうとした相手は若々しく、鍛え上げられた身体をしていた。

「かつ、冗談…俺は王だ、殺し、奪い、強さを示す…在り方はただそれだけでいい。」

否定しながら、何処か嬉しそうに口角を吊り上げる、漆黒。

「ふ、覚えておれよ、必ず、必ず貴様の本気を見せてもらう。」

そう、言い捨ててバックステップ。

中華風の男は土蔵の入り口から出たかと思えば急にその気配が消えた。先ほど迄の圧倒的存在感が嘘のように。

「気配遮断ー？いや、違うな…目視出来なくなつた途端に気配が完全に消えただと…厄介な野郎だな、フン。」

男が消えた先に殺気を叩きつける様にしていた彼が、振り向く。怖い。

けど、震えるほどにーその強さに憧れる。

「サーヴァント、バーサーカー…呼び声に応えて来てやつたぞ、小娘。」

さて、訳がわからない。

聖杯戦争???

いや、確かに私の家は魔術師の家系だ。

しかし。

私は…今や完全に一般人だったはず。

なにせ父の代で魔術師としては終わっている。

魔術師には…魔術刻印と言うものがある。

言うなればそれは魔術師の家系にとって一子相伝の魔術の奥義書みたいなもので、先

祖代々受け継がれていくその家系の魔術の結晶みたいなものだ。

兄が居たが、兄は後継者にはなれなかった。

そのままならば私が後継にされていただろう。

だが、不幸な事故で父は他界。

遺体すら残らない惨状で…魔術刻印もまた失われた。

バーサーカーによればこれは聖杯戦争。

聖杯を巡り、七人の魔術師とサーヴァントが殺しあう大儀式。

母は早くに亡くし、身寄りもなく父の古い縁故に頼って仮の住まいにとこちらに引越してきた訳だが――真逆。

狙った様にそんな儀式が開催されるなんて。

聞いてない。

第一、私がその魔術師マスタだなんて。

「は、ははは…なんだろ、こんな…私が何をしたって言うの?」

「何をだど? お前、馬鹿か。」

思わず零した言葉に、辛辣な答えが返ってきた。

「お前は俺を召喚した。」

「は、はあ。」

「故に、俺は貴様を旗印に全てを刺し殺し、踏み壊し、蹂躪する。」

「え…、何、なん、え？」

「お前となら…楽しい覇道を歩めそうだな…マスター。」

凶暴な、笑み。

それを見た途端だった。

胸が、痛い。

ズキズキと痛み、息までが苦しい。

「あ…どうしたよ、無駄にでけえ自分の胸なんざ驚掴みにして？」

「し、知らない、わよ…急に、なんか苦しく…カハッ」

視界が揺らぐ。

グニャグニャと景色が歪み、立っているのか、倒れているのかすらわからない。

拙い、意識もつていかれ、る…。

《…朔弥…！》

声。

懐かしい声。

「つ…がはっ！」

酸素が急激に脳へ供給される様な感覚。

身体中から奪われたものが一気に満たされ、私は激しくむせ込んだ。

地面についた自分の両手、ことに左手に見える痣ー、令呪が見える。

三つの巴が追いかけて合う様に配置された美しい赤い図柄。

それは、目の前のバーサーカーの胸にも刻まれた文様。

「そうか、俺の維持が殊の外堪えたのか。」

言うや、バーサーカーはその姿を光に包み、消えた。

「…あ。」

途端に楽になる身体。

『不便なもんだな、魔力が足りないなんぞ。』

頭に直接語りかける様な声。

「……!?!」

『狼狽えるんじゃないやねえ、霊体化しただけだ、この声はお前との魔力経路を通じた一種のテレパシーだよ。』

「あ、え、そうか…これ、貴方の声なんだ」

『ああ、後でもう少し説明してやる、今は休め。』

意外に優しく言われてしまう。

…ツンデレ…?

『お前…死にてえのか、あ？』

ギャー!?

し、思考が筒抜けっ!?

「い、いめんなさいーっ!?!」

思わず飛び上がり、土蔵の壁に背中を押しつける形でひつつく。

ずるずるへなへなとへたりこみ、床に崩れ落ちる。

驚愕と安堵から力が抜けた。

情けない話だが…下着を濡らさなかつただけマシだと思う。

「あうあう…誰か助けて…。」

割と本気で。

意識を手放す寸前、

その時は本当にそう思ったりした。

朝。

朝だ。

太陽が顔を出し、大半の人にとって1日が始まる時間。

いつもと同じその朝に。

何故か今日は珍客が居た。

いつもの様に早起きし、食事の支度をする前に先日散らかしたままだったと思い出した土蔵に来ると、扉が半開きになっていた。

「…なんでさっ？」

中を覗けば、そこには女の子が倒れていた。

橙色の明るい髪を肩まで伸ばした健康的な印象を受ける顔立ち。

視線が下にいくにつれ、その豊満な胸が強調されて見えてしまう。

逸らそう、と思いついながらもつい見えてしまうのは男の性が。

「桜より…あ、いやそうじゃない大丈夫か、あんた？」

白い、何処かの高校のブレザーの様な服装。

いや、年格好からして実際に高校の制服なのだろう。

「あ？この娘…確か…」

そうだ、昨日の転校生じゃないか。

記憶を辿れば、つい先日見たばかりの服装。

顔立ちまではあまりハッキリ記憶していなかったが確か一年に転校生が来たただか人だからができていた、その中心に居た人物だ。

もうすぐ、予鈴の鐘が鳴る。

ホームルームまで間がない、急がなければ。

「やばいな、つい修理に夢中になっちまった。」

朝も早くから、生徒会から頼まれた備品を修理していたのだが意外に手間がかかる作業について、時間を忘れて没頭してしまつてこの有様だ。

足早に一年の教室の前を通り抜けようとした時、目の前に人だかりがあるのが見えた。

どうやら女子生徒と男子生徒がながしか口論をしているようだった。

「ね、君今日から来るって聞いていた転校生だよな、なかなか可愛いじゃん、どう、良かったら弓道部に見学に来ない？朝練は終わったけどさ、夕方にでも見に来いよ、ボクの美しい立ち姿を見せてあげるからさ？」

…時間も無いし、関わり合いになつている場合では無いのだが。

「あの、先輩…私弓道に興味はありませんし…あと、転入手続きがあるから忙しいんです…申し訳ありませんがどうしてもらえませんか？」

「は！照れるのは仕方ないけどさあ、この僕が誘つてるんだ、後から後悔しちゃうぜ？」

「何このワカメ…うん」

「は？何だつて？聞こえ無いんだけど。」

渦中の人物、片方は良く知った顔だった。

文武両道、学問も部活もそつなくこなす秀才…何だが、どうも他者との関わりの持ち方に問題がある友人であった。

「はあ、仕方ない…おい、慎二。」

「ああ？衛宮あ？」

「もうすぐ予鈴鳴るぞ、お前も2年なんだから早く行かないと藤姉…つと、いや藤村センセに怒られちまうぞ？」

「…ちつ、腹立たしいけど確かにね…まあ、一応感謝するよ衛宮。」

「はは、感謝なんかいいさお前とは友達だからな、さ、行こう。」

そう、そのまま教室に向かつて…完全に置き去りにする形で放置してしまったのが確か。

この娘だったはずだ。

すやすやと硬い土蔵の床で眠る姿はもはや堂々とすらしている、が。

このままにもできまい。

「おい、起きなよ、おーい？」

つん、つんと頬を突くが、一向に起きない。

「んゝむにや、兄さん…エツチな本の隠し場所はもうすこし考えなよ…ふにや。」

…なんだこの寝言。

仕方ない。

「よい、しよつ…とお。」

すこし躊躇したが、やはりこのままにも出来ないな、と彼女を抱き上げ、和室の一角に運ぼうと歩き出す。

…所謂お姫様抱っこだ。

藤姉や桜に見つかる前に早いところ運ばないと。

「ふ、ふふふもう食べられませんよ…、ヤん。」

「な、なっ!？」

なんだ、偶然か？

今、衛宮んつて言わなかったか？

いや…ハッキリ聞こえたわけじゃないしなにか別の単語かもしれない。

なごやん、とか。

「はあ、まあいいや…とりあえず…」

和室の戸を足で開け、中に入る。

「布団、をー」

「おう、小僧…布団これでいいか？」

何故か。

先回りする形で上半身半裸、フードを被って下半身はジーンズ姿の野性味溢れる筋肉質の男が布団を引いてその前に佇んでいた。

「は…?」

「おう。」

「な、なんだお前…?」

衛宮士郎。

穂群原学園2年生。

こうして、彼を巻きこんで私と、バーサーカーの冒険譚は幕を開けたのでした。

第2話 『神成る槍』

いつの間にか随分と暗くなつてしまつた。

夕日は沈みかけ、グラウンドにも誰一人居ない。

転入届を出し、不備があつたとかで初日終了後に職員室に向かい、暫く書類の書き直しに没頭し、やつと終わつたと廊下を歩けば、朝のワカメがこちらを睨んでいた。

「おい、お前……待てよ、朝は衛宮が割つて入つて話が流れたけど……」

などと聞こえてきたが今度は努めて無視。

「は？無視かよ……凶太い神経だね転入^{おまえ}生？」

ああ、厄介なのに目をつけられた。

そう考えた瞬間には全力で踵を返し、走り出していた。

「なつ、逃がすかよこのつ……先輩後輩の上下関係つてヤツをたつぷり教えてやるからな
!？」

冗談では無い。

あんな人につかまれば何をされるかわからない。

「はっ…はあ、ま、撒いた、か…な？」

二階に上がる振りをして窓から渡り廊下の天井に飛び出し、雨樋を伝って一階へと戻り、下駄箱を抜けてグラウンドへ。

流れる様な逃げ方である。

「全く…私の美貌に寄ってくるのは仕方ないけど…あんなのはごめんこうむるね、断じて。」

野球部のネット裏に腰掛け、暫くやり過ごす。

携帯を弄り回しながら時間を潰すうちに段々周りが暗く、陽が落ち始める。

「うー、お腹すいたなあ…」

お昼にサンドイッチ一つ食べただけ、それからすでに6時間以上は経過している。

お腹だつて減つてあたりまえだ。

キュルキュル、つと可愛らしい腹の虫を鳴らしながら座り込み、辺りを見る。

誰一人居ないグラウンド。

この広さに寂しさすら覚えながら、本当に誰もいないだろうな、と聞き耳をたてる。すると…遠くから、いや…意外に近くから音が聞こえた。

甲高い、金属音。

鋼と鋼がぶつかり合うその音は――

「何よこれ……」

立ち上がり、グラウンドの逆側を見れば……そこには嵐が吹き荒れていた。

互いにあか。

今夜の月の光とおなじいろ。

赤と、紅。

片や、長い柄を持つ――槍。

片や、一対、黒と白の二刀流。

槍は二刀を近づけまいと遠距離から恐ろしい速度と正確さで突いて、突いて、まるで瀑布の如き攻めを。

二刀使いはギリギリで槍の猛攻を受け流し、懐ろへ入り込む隙を窺っていた。

「……………っ！」

非現実。

まるで現実味が無い光景。

夜の校庭でまるでコスプレイヤーみたいな二人が、しかし真剣を持って人智を超えた速度で殺し合いをしている。

だが、それは無骨でも、殺伐としていられるでも無く…美しいとさえ言える、まさに演武と見えた。

その舞踏が、幾たびも続きー正に終わりを告げんとした、その時。

「よくぞ言った、若僧…ならば食らうか、我が必殺の一撃を…！」

鬼気、とはこれを言うのだろう。

紅い、中華風の衣装をした、槍使いが槍を構え、深く腰を落とした瞬間。

周りの大気が、凍りつく。

それは、気温の低下では無い。

ただ、触れれば死ぬと。

物言わぬ骸になるのだと告げる、死神の視線。

パキン。

緊張の余り。

私は…足元の小枝を踏み折ってしまった。

「誰じゃー！」

槍の穂先が、こちらに向く。

ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイ！

逃げろ、と。

全身の神経が警鐘を鳴らしていた。

身体は弾かれた様に走り出し、私に今可能なすべてを用いて――簡易ながら魔術による肉体強化までかけ、先ほどワカメから逃げた速度の倍は早く走り抜ける。

だが。

「なかなかの俊足よ。」

あれ程必死に走ったと言うのに。

男は息一つ乱さなのまま。

ほんの一瞬きの間に。

私の目の前に、立っていた。

「これで7つ目かーとりあえずここが起点みたいね。」

屋上には堂々と八画の刻印が描かれている。

魔術師にだけ見える赤紫の文字は、見たことの無いカタチであり、聞いたことも無いモノで刻まれている。

「……まいったな。これ、わたしの手には負えない。」

この呪刻を仕掛けた奴は何も考えていない。

だが。

これ自体はおそろしく高度で複雑な術式で編まれている。

推し量れる術式の意味合いとしては…力の吸引。

一時的に機能を止めることは可能だろう。

しかし、相手がこの呪刻に触れ、再び魔力を通せばそれだけで復活してしまう。

正直、嫌がらせ程度に遅延させることしかできない。

「……………」

アーチャーは何も言わない。

屋上で呪刻を見た時から口を噤んでいるのは、この呪刻の正体に気づいているからだろうか。

この結界は対象から「体力を奪う」なんて生易しいモノでは無い。

一度発動すれば、結界内の人間を文字通り「溶解」させる。

内部の人間から精神力や体力を奪うと言う結界はある。

だが、今学校に張られようとしている結界は別格だ。

これは魂喰い。

結界内の人間の身体を溶かして滲み出る魂を強引に集める血の要塞ブラッドフォートに他ならない。

古来、魂と言うものは扱いが難しい。

それは確かに在るとされ魔術に於いては必要な要素と言われているが、魂ソレを確立させ

た魔術師は一人しか居ない程だ。

魂はあくまで「内容を調べるモノ」「器を移し替えるモノ」に留まる。

それを抜き出すだけでは飽き足らず、一箇所に集めるなど理解不能だ。

だって、そんな変換不可能なエネルギーを集めたところで魔術師には使い道がない。

だから、意味があるとすれば、それは。

「アーチャー、貴方たちってそういうもの？」

知らず、冷たい声で聞いたでした。

「ご推察の通りだ、我々は基本的に霊体だと言っただろう。故に、食事は魂^{第二}もしくは精神^{第三}

要素となる。君達が肉を栄養とするように、サーヴァントは精神と魂を栄養とする。

栄養を摂ったところで基本的な能力は変わらないが、取り入れれば取り入れるほどタフになるーつまり、魔力の貯蔵量が上がっていくというワケだ。」

……そう。

自らのサーヴァントを強化させる方法が、無差別に人間を襲うこと。

「マスターから提供される魔力だけじゃ、足りないってこと？」

「足りなくはないが、多いに越したことはない。実力が劣る場合、力の差を物資で補うのが戦争だろう。」

周囲の人間からエネルギーを奪うのはマスターとしては基本的な戦略だ。そういつ

た意味で言えば、この結界は効率がいい。」

「……………」

勝ちたければ人を殺して力をつけろ、とアーチャーは言っている。

なんて単純。

そんな事、わたしだつて知っていた。

だから、これから自分がとるべき道もちやんと判っているつもり。

「それ、癩に障るわ、二度と口にしないで。アーチャー。」

描かれた呪刻を見つめながら告げる。

アーチャーは何故か弾むような声音で

「同感だ。私も真似をするつもりは無い」

そう、力強く返答してくれた。

「さて、それじゃあ消そうか。無駄だろうけどとりあえず邪魔をするくらいにはなる。」

描かれた呪刻に近寄り、左腕を差し出す。

左腕に刻まれた魔術刻印は、私：「遠坂凜」の家系が伝える“魔道書”だ。

ぱちん、と意識のスイッチを入れる。

魔術刻印に魔力を通して、結界消去が記されている一節を読み込んで、後は一息で発

動させるだけ。

「 Adzug Bedienung Mittlestand」

左手をつけて、一気に魔力を押し流した。

これでとりあえずこの呪刻から色を洗い流せるのだが――

「何じゃ、消してしまふのか？」

唐突に。

まるで結界消去を阻むかのように、

第三者の声が響き渡った。

「――！――！」

咄嗟に立ち上がり、振り返る。

給水塔の上、およそ10メートルの距離を置いた上空でそいつは私を見下ろしてい

た。

紅い月明りに同化するように立つ姿は瘦躯。

痩せたかに見える細く長い身体はしかし、一切の無駄の無い筋肉の塊。

中華風の赤い装束、燃える様に赤い髪は結わえ、無造作に頭上に束ねられている。

飄々とした笑みを張り付かせ立つ、若々しく、荒い獰猛な表情。

両袖をつけるようにして腕を合わせ、しゃがみ込みながら此方を睨めつける眼差し

は、虎か、狼か。

猛獣の眼差しは、美味そうな餌を見つけたとばかりに愉悦に浸った光を此方に向けている。

「……これ、貴方の仕業……？」

声が震えそうになるのを抑え、問う。

「いいや？この様な小細工を弄するは脆弱な戯けがやる事よー儂等はただ、命じられた事をこなしてー死合うのみ……そうじゃろう、そこの若僧？」

「……！」

軽々と、しかし殺意に満ちた。

この男、霊体化したアーチャーが見えている！

「やっぱり、サーヴァント！」

「応よ、それがわかるお前は……儂の敵、で良いのだな？」

「……！……！」

背筋が凍る。

何という事はない、飄々とした男の声。

そんなものが、今まで聞いたどんな言葉より冷たく、吐き気がするほど恐ろしいだなんて。

視界がチカチカして、世界が色を失いかける。

どう動くべきか、何が最善かは判らない。

ただ、この男と今ここで戦う事だけは、絶対にしてはいけないと理性が告げている――！

「ほう、たいしたものだ何もわからない様でその実、肝心な事は理解しておるか…小娘、貴様少しは齧っているようじゃな？」

何の事かわからない、が。

スウ、と男が立ち上がり…その腕が上がる。

事は一瞬。

今まで何も無かった男の手には、長さ2メートル余りの槍。

飾りは少なく、刃元に赤い布飾りが見えるのみ。

それは、ただ実戦に特化した無骨極まりない、しかして単純なる殺戮の為の道具だった。

『――神秘の欠片も感じぬ槍だというのに、なんだこの総毛立つ様な圧迫感は…っ』
僅かに焦りを含んだアーチャーの念話。

自信の塊の様なコイツが…つまりは相手はそれだけ強敵だ、という事か。

男の顔に獰猛な笑みが浮かぶ。

「……………!!」

考えるよりも早く、真横に跳んだ。

屋上だから思い切り跳べない、なんて余裕は無い。

兎に角全力で、力の限り、フェンスに体当たりする気で真横に跳躍する……………!!

ぶおん!

風切り音とともに髪を舞い上げる、旋風。

正に間一髪。

ほんの瞬きの間に突進してきたソレは、容赦なくフェンスごと、一秒前まで私が居た空間を斬り払った。

「ふっ、良い功夫じゃ、娘!」

紅い鬼が迫ってくる。

退路など何処にも無い。

背後はフェンス、左右はオーダメダきつと間に合わない……………!!

判断は一瞬。

即座に屋上のタイルを蹴る。

「Es^軽ist^重gros^重, Es^重ist^軽klein……………!!」

左腕の魔術刻印を走らせ、一小節で魔術を組み上げる。

身体の軽量化と、重力調整。

この一瞬、羽と化した身体は軽々と浮き上がりー

「凜……………」

「わかってる、任せて……！」

フェンスを飛び越えて、屋上から落下した。

「っー！」

風圧と重圧が体を絞る。

着地まで十五メートル、時間にして1.7秒ーダメだ、それじゃきつと追いつかれ

る！

「戒律引用Vox 重葬は地に返るGottee Es は地に返るAtlaas ーー！アーチャー、着地まかせたっ！」

ブワ、つと土煙が薄く上がる。

「ーっ、はっ!!」

着地の衝撃をアーチャーに殺させ、地面に足が着いたと同時に走り出す。

とにかく、移動しなければならぬ。

私とアーチャーの特性が活かせる、遮蔽物の無い…広い空間にーー！

「は、っ…はー！」

屋上から校庭まで、7秒かからずに走り抜ける。

距離にして百メートル以上、常人なら残像しか見えない様な速度。

けど、そんなものは、サーヴァント相手にはなんの意味も無かった。

「いや、本気で逸材じゃ……ここで殺すにはちと惜しい程に、な」

過去の英雄たるサーヴァントに手放しに褒められたのは誇るべき事かも知れない。それが私を殺そうと迫る相手でなければ。

「アーチャー!!」

私が後ろに引くのと同時に、前に出たアーチャーが実体化する。

紅月の夜。

アーチャーの手には、月光を反射させる一振りの短剣があつた。

「アーほう……」

まただ。

あの獰猛な笑み。

「そこなくてはな……そういう漢おとこは嫌いでは無いぞ?」

ごう、と言う風音。

それは先程容赦なく私を殺してきた、鋼。

2メートルを超す長槍だった。

「ランサーの、サーヴァント……」

「如何にも…そういう貴様はセイバーの…む、違うな…何奴じや、貴様は。」

目を細め、殺気の塊と化して睨みつける、ランサーに、アーチャーはあくまで無言。

「ふん、真つ当な一騎打ちをする様には見えんな、貴様は。と、なればアーチャーか。」

嘲りを含む声にもアーチャーは答えない。

対峙するは奇しくも双赤。

どちらも紅と、赤。

月光の下、対峙した二人は互いに必殺を計っている。

ランサーは槍を構え、アーチャーは一見棒立ちして片手に短剣を持っているだけにか見えない。

だが、そこには隙など無いであろう事は何よりランサーもまた構えたまま動かない事から理解する。

「どうした、小僧…弓を出さんのか？」

…前言撤回、もしかしたらランサーはアーチャーが弓を出すのを待っていただけなのか？

「それでも礼節は重んじる方だな…貴様が全力を出せる獲物を構える間ぐらい待ってやる。」

「……………」

アーチャーは何も答えない。

敵に語る事は何も無いとばかりに、その「r・b・剣」はがね」の様な背中が語っていた。

それで、気づいた。

私はバカだ。

アーチャーはただ一言、私の言葉を待っているだけだと言うのに。

「アーチャー。」

近寄らず、その背中に声をかける。

「手助けはしないわ…貴方の力、ここで見せて」

「……………」

それは、笑い、だったのか。

私の言葉に応える様に口元を吊り上げて。

赤い騎士は疾走した。

渦巻く突風。

短剣を手に、赤い弾丸が疾走する。

「カッ、戯けがッ！」

迎え撃つは寧猛なる獣。

その笑みは肉食獣のソレに似て。

疾駆するアーチャーが突風なら、迎撃する穂先は神風であつたらう。

奔る刃、流す一撃。

高速で奔る槍の一撃を、アーチャーはすんでに短剣で受け流す。

「……ッ！」

赤い外套が止まる。

敵はアーチャーの疾走を許さ無かった。

槍の間合いまで、僅か2メートルの接近すらさせない。

長柄の武器にとつて、距離は常に離すもの。

2メートルを越えるほどの槍を持つランサーは、射程圏内に入る敵をただ、迎撃すれ

ばいい。

踏み込んでくる外敵を貫くことは、自ら打つてでるよりよほど容易いだから。

にも、関わらず。

ランサーは迅雷の如き速度をもつて、自ら距離を詰めてきた。

アーチャーはその猛攻に、前進すらままならない。

「弓兵風情がこの儂に接近戦を挑んだな……？」

その鼻つ柱を、今すぐに命共々折り砕いてやろう、と。

その猛攻は益々速度を上げて行く。

本来、長柄の武器にとつて自らが距離を詰めるのは自殺行為だ。

槍とは、素人目には「突き殺す」武器に見られがちだが。

その真価は「払い」にある。

薙ぎ払いによる広範囲の打撃は、もとより身を引いて躲すなどという防御を許さない。
い。

半端な後退では槍の間合いから逃れられず、反撃を試みる様な見切りでは、腹を裂かれるのみ。

かといって無造作に前に出れば、槍の長い柄に弾かれ、容易く肋骨を粉碎される。

アーチャーとランサーの体格はさほど大きな差は無い。

重装甲では無いアーチャーにとつて、旋風のような槍の攻撃範囲に踏み込むのは難しい。
い。

だが、それが打突であれば話は別だ。

高速の一刺、確実に急所を貫く突きは確かに恐ろしい。

しかし軌跡が「点」である以上見切ってしまうえば躲す手段は幾らでもある。

アーチャーの様に急所を突きにきた槍の柄を打ち、軌道を僅かでも逸らせばそれだけで隙になる。

弓兵と甘く見た油断だろう。

長柄の利点は自由度の高い射程と間合いだ。

それを自ら捨てた時点でランサーの敗北は――

「……………ぬっ!?!」

赤い外套が停止する。

時間が巻き戻ったかの様な悪夢。

否。

そうでは無い。

ランサーの穂先は先程よりもさらに高速。

刃先が見えず、

鋼が時折月光を弾く様に見えるだけ。

「ぐっ!?!」

軌道を逸らそうといなしにかかるアーチャーが短剣ごと弾かれる。

ランサーの槍に戻りの隙など無い。

いや、それどころか速度はさらに際限なく上がり続け…今やサーヴァントをしても必

殺の域まで到達する一撃一撃が雨あられとアーチャーに降りかかる。

甘く見たのは私たちだ。

あのサーヴァント、ランサーに槍兵の常識など、無いに等しかった。

雷速の打突は更に、まるで柳の枝がしなる様にその打突方向すら自在にコントロールされ、襲いかかる。

「な、なんとというー槍捌き、か！」

「貴様こそ…儂の槍を不得手な獲物でよくも凌ぎおる…が、終わりじゃ！」

ガイインツ！

甲高い音を立て、アーチャーの手から短剣が弾き飛ばされた。

もはや嵐の様な直線的な突きの軌道に加えて、しなる一撃一撃が蛇の様に合間を縫って襲いかかる。

それは、アーチャーにとってはくるのがわかっていながら躲すことのできない一撃だった。

「間抜けめ」

ランサーが止めとばかりに槍を構え直し…

「…アーチャー！」

慌てる私に構わず、アーチャーは徒手空拳のままに両手を広げ、

「己が愚かさを抱いて死ねい、若僧っ！」

ランサーの手から、雷光の如き勢いで槍が突き出される。

眉間、首筋、心臓。

穿つは三連、全弾急所——！

だが、視る事さえできぬ雷光を、一對の光が弾き返す……！

「チツ…二刀使い、じゃと？」

仕留めそこなつたランサーが舌打ちをする。

その視線の先には、先程弾かれたものと同じデザインの短剣、更にもう一つ。

対比するような黒い短剣が増えていた。

中華風のデザイン、鉈にも見える肉厚の刃はしかし、洗練された美しい模様に彩られている。

両手に握られたそれは、左右対称の黒白くくびやくの双剣だった。

「弓兵風情が剣士の真似事、などとは言わぬ、儂とて他人の事はあまり責められたものは無いからな……だが。」

最早プライドが許さぬと、突如再開された槍捌きは先程よりもまだ早く、苛烈になつて行く。

「っ、しつこいな、貴方も！」

「ぬかせ、この赤狸めが！」

耳を打つ劍戟は、まるで激しくも美しい音楽の様だった。

不規則ながらリズムをもって響くソレは、死の舞踏、それを彩る音楽の様だ。

死は、誰のもとにも平等に訪れるのだと言う様に槍と短刀が光を奔らせ、踊る。

一瞬の筈の劍戟はしかし、永遠かと感じられた。

懐に入れまいとするランサーと。

双剣を盾に間合いを詰めるアーチャー。

刃のぶつかり合いは体感だけでも100を超え、激しく音が聞こえる度にアーチャー

は武器を失う。

だが、それも一瞬。

次の瞬間にはアーチャーの手には再び同じ武器があり、その度にランサーは僅かに後退する。

事此処に至り、ランサーは自らが油断していたと認めたのだ。

こ奴が何者かは知らぬ。

だがこれ以上、この男を弓兵と侮れば：敗北するは己であるのだ、と。

瞬間。

槍の嵐が、雷が、止んだ。

隙なく構え、いつでもアーチャーを阻める格好ではあった、が。

「27、これだけ弾いてもまだあるとはー」

視線は油断なく、しかし何処か息を吐き出すかの様に。

「認めよう、愚か者は儂の方であったとな、してー貴様一体全体、どこの国の英霊だ。」
「答える義務はないな。」

あまりに不可解。

奴が手に持つ双剣にはいささかながら心当たりがある。

ー夫婦剣…干将かんしょう・莫耶はくや。

呉王に命じられ造られた名剣。

だが、その鑄造に用いた特殊な鉄が如何しても混ざり合わず、見兼ねた鍛冶師干将の妻、莫耶がその身を炉に投げ入れ、捧げたことで出来上がったといういわれを持つ中国の伝承にある名剣、だが。

干将・莫耶を造った人物は居ても使いこなしたものなぞ終ぞいなかった筈だ。

幾度紛失しようと必ず持ち主の元に戻る、と言われた逸話もまた、先程の現象の答えを出している。

だが、だがしかし。

やはり、使い手なぞ存在する筈が無い。

「干将・莫耶…違うか？」

ピクリ、とアーチャーの肩が動く。

「益々わからんな…案外貴様、近代の無銘の英霊、か？何らかの経緯で干将・莫耶を得ただけのー」

「そういう貴方こそ…近代の英霊、だろう。」

アーチャーの投げかけに、今度はランサーの口角が吊り上がる。

「ふむ、何を根拠に。」

「近代の、などと遙か昔の英霊が使う言葉にしてはいささか不自然、かつー、これほど変幻自在、神速の槍捌きとなればー服装から見るとれる中国には恐らく、たった一人。」

ザワリ。

空気がざわつく。

ランサーの全身から…鬼気が立ち昇り始める。

「よくぞ言った、若僧…ならば食らうか、我が必殺の一撃を…!」

「止めはしない、いずれ越えねばならぬ敵だ。」

瞬間。

周囲の空気が凍りつく。

それは、物理的な気温の低下では無い。

だが、比喩でも無く。

あまりの殺気に、無生物すら恐怖したかと思うくらいの静寂が、場を支配する。大気中のマナは一気にランサーへと集まり、大気が凍る。

「――」

あれは、触れてはいけない。

このままではあの槍が奔って、アーチャーは。

間違はなく、敗れ去る。

あの槍が奔れば最後と。

わかっていながら私は指一本動かせない。

アーチャーを助けなければ、支援しなければと思いつながら。

今、私が動けばそれが開始の合図になりかねないからだ。

あれが発動したら終わりだと、わかっていながら――

だから。

もし、それを止めるとすれば。

パキリ、と。

乾いた小枝を踏み折る音が、響いた。

「誰じゃっ……!!」

それは、私達が見逃していた第三者の登場に、他ならなかった。

「誰じゃ!!」

「……え？」

ランサーから放たれていた鬼気が消えた。

走り去っていく足音。

その後ろ姿は、間違いなく学生服だった。

「生徒……!?まだ、学校に残っていたの……!?」

「その様だな、お陰で命拾いしたが。」

冷静に言うアーチャー。

いやまあ、確かにそれは助かったけど…

「失敗した、ランサーに気を取られて周りの気配に気がつかなかった、って、アーチャー、

アンタ、何してんの」

「見て判らないか、手が空いたから休んでいる」

「んな訳ないでしょ、ランサーはどうしたのよ」

「さっきの人影を追ったよ、目撃者だからな、おそらく、消しに行ったのだろう。」

「—————」

一瞬。

あらゆる思考が、停止した。

「追って！アーチャー！私もすぐに追いつくからっ！」

即座にランサーを追う、アーチャー。

「くそ、なんて間抜け…っ！」

目撃者は消すのが魔術師のルールだ。

だから、それが嫌なら目撃者なんか出さなければいいんだと、今までずっと守ってきたのに。

なんだって今日に限ってこんな失態を…！

走る。

頼むから生き延びていてくれ、と願いながら。

走る、走る、走る、走る。

きつと、一生分走つたに違いない。

一瞬にして追いつかれた事に諦めかけたが、砂を蹴って目潰しを仕掛け、その隙に、死にたくない一心で私は再び走った。

校舎に駆け込み、遮蔽のある空間で、なんとかやり過ごせないかと。

しかし、直ぐにそれが失態だと気づく。

もし、見つければ…袋の鼠では無いか。

何か、何か無いか…

家庭科室。

其処には幸いにも…現状を打破する切り札になり得るモノが揃っていた。

あんな化け物にどこまで、通じるか。

それでも、簡単に諦めてたまるもんか。

白布に覆われて隅に立てかけられていたマネキン、それに自分の髪の毛と、指を噛み、

滲んだ血を一滴。

そこにルーンを施す。

「付け焼き刃の私の魔術で、どうにかなるか判らない、けど…お願い、効いて…っ」

さっきのは、高位の精霊？

あるいは怨念で縛られた人間霊だろうか？

それにしても嫌に知性があつた様子だった、が。

なんにせよ…これに気を取られてくれる間になんとか…逃げなきや。

「なかなか足掻くでは無いか、しかし、終わりかの？」

呟くと、室内に足を踏み入れる、ランサー。

「…今夜はどうにも楽しい日よな…一日に二人も逸材を見つけ、どちらも殺さなきやあならんあたりが悲しいところだがー怨んでくれるなよ、こちらも慈善事業をしとるわけでは無い、のでな。」

部屋の片隅で、うずくまり、震える少女。

白布を巻きつけ、涙ながらにこちらを見やる姿はいつそ哀れを誘う。

「情けなど、期待されても困るな。」

トス、つと。

軽い音を立て、刃が少女の胸へと吸い込まれる。

瞬間、爆発したかの様に広がった閃光の中。

少女が、ニヤリと、嗤った。

「はっ、はっ、はっ、はっ…っ!!」

走る、走る、走る、走る。

先程一生分走った等と言ったが、どうやらまだまだ走らないとならないらしい。空きつ腹に優しくない。

腹痛が、身体を苛むが。

命には変えられない。

道 را 走り、時に他所様の家の庭を突つ切り。

住宅街に隠れる場所を探し、兎に角走る。

今夜行く筈だった下宿先を探したいところだが、住所を記したメモは鞆と共に学校だ。

「なんでもいい、とにかく…隠れなきゃ」

坂道をひた走ること数分後。

視界にやたらと立派な武家屋敷が目に入つて来た。

庭には土蔵らしい建物もたたずんでいる。

人氣は、無さそうだ。

暫しの隠れ場所にさせてもらう分には、良いかもしれない。

重い鉄扉を開け、中に滑り込む。

ガラクタが散乱した土蔵の中はヒンヤリとした空氣だった。

腰掛けれそうな場所に、近くにかかっていた適当な布を敷き、へな、と座り込む。

「や、やっと一息つけた…転入早々、なんで死ぬ様な目に会わなきやいけないの、うぐぐ。」

幻惑のルーンでマネキンを私だと錯覚させ、仕掛けた目眩しで時間稼ぎ。

魔力を伴う光は例え相手が怨霊、精霊であつたとしても多少効果がある筈だ。

確かに作動した手ごたえを感じた。

だからこそ自分は先んじて窓から退散したとは言え、ここまで逃げ切れたのだろう。

魔力も、体力ももう限界だ。

とりあえず、朝までここでやり過ごしてから考え…

「見つけたぞ…小娘。」

「ひっ!？」

鉄扉が開き、入ってきたのは。

先程の赤毛の、怨霊。

「や、ちよ、なんでここまでっ」

「もう少し、貴様が事情を知っておれば…魔力を隠して逃げおおせたかもしれんな。」

か、完全に人語を理解してる！

「あ、悪霊の類じゃ、無い?」

「戯けか、悪霊、怨霊が武器を持って相争うと思うてか？我らはサーヴァント。」

「サーヴァント、サー、ヴァン、トツ!？」

「ここでもうやく合点がいった。」

サーヴァント。

過去の英霊を使役し、扱う。

聖杯の奇跡。

「え、ちよつと…嘘!？」

東国の僻地で開催される大儀式。

それに精霊をも超える英霊を扱うものがあると、噂には聞いていたが—

魔術師であれば垂涎ものの報酬があるが、とんでもなく危険な儀式だ、とは聞いてい
る。

詳しい話は父が居ない今、わからないが…

「さて、随分と面白い真似をしてくれたが—今度こそ、終いじや。」

スウ、と構えた穂先が此方を向いた。

し、死ぬ？

このまま、私は—死ぬ、の？

そう、考えた途端。

左手の甲に激痛が走る。

「い、った…、何!?!」

手には、赤く、三つの痣が浮かび、腫れができていた。

「ソレは…そうか、貴様が、最後の!」

ますます生かしておけなくなった、と言うや男の槍が、閃いた。

第3話 『正義の味方』

それは、稲妻の様な切っ先だった。

心臓を串刺しにせんと繰り出される槍の穂先。

躲そうとする試みは無意味だろう。

それが稲妻である以上、人の目では捉えられない。

死ぬ、シヌ、死んでしまう。

なに一つ成さず、残さず、生きた意味すら解らぬままに。

私は、兄の為にも、生きなければならぬ。

死んで。

たまるか。

身体中に巡る魔術回路。

数にして200余。

数だけなら一流の魔術師を越え、超一流、いや、人外の域。

しかし。

それら殆どが機能していない。

眠ったままの、役立たず。

いま、起きなくてローなんの為の、魔術回路、か！

(なんでもいい、コイツを……)

どうにかする、力を！

強いロー力を寄越せ、私は、死ねないんだ！

ズクン。

手の甲が、熱い、身体が、揺れる。

ロー否。

視界が、緋く染まり……何かが私に。

《欲しいか、全てを蹂躪する、王の力が！》

寄越せ。

誰であれ何であれ構わない。

私を害するモノをロー全て吹き散らす力を！

それは一瞬。

思考が、私に投げかけて来た言葉に、ただ心が無意識に答えを返していた。

《聞き届けた。此れより俺は貴様の、牙だ！》

閃く、闇。

闇が凝縮したかの様な、光を吸い込んで行く闇の帯。

それが、土蔵の床に記された古い魔方陣を書き換えて。

噴き出す様に。

顕現した。

誰も居ない家庭科室。

そこに、胸部を穿たれ、半ば砕けたマネキンと強烈な光に晒され、僅かに焦げ臭くなつた空気だけが残されていた。

「アーチャー。」

「すまない、凜……どうやらランサーを見失つた様だ、魔力どころか痕跡らしい痕跡が見当たらん……どんな手品だ、これは。」

「……今は良いわ、それよりこれ。」

「ああ、一流とは言えんが、魔術、だな。」

幻惑のルーン。

それに加え、魔力を視覚に強烈に作用する様調整された、フラッシュユークレネード魔術的な閃光弾
外からもわかるくらいに強い光を窓越しに放っていた。

全く知らない手口だ。

しかも状況からして、これを仕掛けたのは先ほどの生徒。改造制服か、或いは他校の生徒か？

何にせようちの学生服とはいささか違っていた様に記憶している。

ならば必然、私の知らない第三者だ。

「どこの田舎魔術師かしら…セカンドオーナーであるウチに…遠坂に挨拶も無しとか。」

「怒るところは其処か…、君は」

少々呆れ顔のアーチャーは放置して調べを進める。

まあ、正直な所ほっとしている。

一般の生徒が巻き込まれたわけではなくて。

死体を拝むのはできれば、したくないと思っていたから。

「今日はもう帰るわよ。」

「そうだな、魔力の回復は必要だ。」

頷き、霊体化したアーチャーから視線を外し、一階玄関へと足を運ぶ。

ああ、明日からやる事は山積みだ、などと思いつながら。

ガバ、と。

布団を跳ね除け、起き上がる。

「し、死んでたまるかー！？」

開口一番。

口をつけて出たのは、そんな言葉。

「よう。」

くわ！

つと見開いた瞳に飛び込んできたのは。

自分の中では先ほど見たばかりの、浅黒い肌に、獣の如き双眸のー、バーサーカールの顔があった。

ただ、格好は随分と違う。

足や手に、捻じれた角の様な突起も無ければ、服装もまたジーンズと言うラフさ。

槍も今は構えていない。

「あ…れ？」

自分が盛大に寝ぼけていたのを自覚。

顔が一気に熱くなった。

「バーサーカー？」

「おう、そうだ…おまえの呼び出したサーヴァントだよ、マスター。」

やはりあれは、夢ではなかった。

…しかし。

ここは、何処だ？

作りからして日本家屋。

畳に敷かれた客室用らしい羽毛布団に寝かされていたのか。

畳を形作る蘭草の匂いが、何処か懐かしい。

そ、つか…昨日の武家屋敷の中か。

「お、目が覚めたか、転校生。」

ス、つと襖が開き癖のある赤毛に柔和な笑みを浮かべた男が、手に盆を持って入ってきた。

盆の上には湯気を立てる美味しそうなご飯、味噌汁と焼き鮭に、漬物が乗っている。

「はへ???」

くう、とお腹が鳴るのを感じながら私の目はお盆に釘付けだった。

「ああ、腹減つたらう、まずは食べなよ。」

差し出されたご馳走に、食いつこうとして、躊躇う。

がつついたら…なんか女の子としてだめな気がしたから。

キュルルル…クウ。

「あっ…」

しかし、腹の虫めが全て台無しにしてくれた。

「い、いただきましゅ…!」

嘔んだ!よりによつてこのタイミングで!

し、死んでしまいたいっ!?

恥ずかしさに悶えていると、バーサーカーがニヤニヤしながらこちらを見ていた。

あああああつ、何だかわからないけど物凄く恥ずかしいっ!

ーで。

結局、空腹に負けておかわりまでした後、ようやく自己紹介と状況把握タイムと相成った。

「…つまり、君は偶然その、聖杯戦争とやらに巻き込まれて…偶然うちの土蔵に逃げ込んで…死ぬかと思った矢先に彼、バーサーカーが召喚されて助けられた、と?」

「はい、荒唐無稽な話です、信じろと言う方が無理な話ですがー」

「信じるよ?」

ーはっ!?!」

「いや、だって俺の親父、魔術師だったし。」

「マジで?」

「ああ、普段は隠さなきゃならないらしいが同じ魔術師、しかも敵意がない相手なら問題

ないだろう。」

呆れた。

この人お人好しにも程がある。

「いやいやいや、あっさりバラしてどうするんですかつ、私が実は悪い女って可能性は考えないんですかつ!?!」

「信じるよ、君が悪女なら…最初に魔術師だなんて話さないだろうし、目を見れば悪人かどうかくらいわかるさ。」

な、何と言う…ど天然。

あまりにも、純粹培養過ぎるんじゃないかならうか。

「それに、正義の味方はー女の子を大事にするもの、だろう?」

第4話 『虎VS…』

それに、正義の味方はー女の子を大事にするもの、だろう？」
カーツ、つと顔が熱くなるのがわかる。

な、なにこの人…お人好しにも程がある上に、天然!?天然なの!?

「あ、は、ははっ、女の子、ですか…」

あ、ヤバ。

なんだかドン引きしたみたいな声を返してしまった。

そうじゃない、そうじゃないけど。

直球過ぎて。

心臓がバクバク言ってる。

「ああ、祖父さ…親父の夢はね、正義の味方だったんだそうだ、志半ばに…夢は折れてしまったらしいけどね。」

「え、それってー」

「ああ、正義の味方はさ、年齢制限があるらしいんだよ、笑っちゃうだろ？」

あ、なんだ…てつきり死んでしまいました、って話かと思つた。

「それで、貴方は？」

「ああ、親父の夢は、俺が叶えてやるーなんて、ガキの口約束さ。」

苦笑いしながら、けれど。

ちつとも、無理だなんて思っていない。

そんな表情。

「ー純粹、なんですすね、えつ、と」

「ああ、悪いまだ名前も名乗って無かったな、俺はエミヤ、衛宮ー士郎だ。君よりは一つ年上、2年だが同じ穂群原学園生だ、よろしく。」

す、と自然に差し出された手をとる。

「このえー九重…朔弥です、よろしく、」

「ああ、君の願いとやらが叶うまで、な。」

「ハイ、よろしくお願いします、衛宮先輩ー…ん？」

願いが、叶うまで？

「ブツ、ク、ク…ブワハハハハッ！」

堪えきれない、と言った顔で。

真後ろで胡座をかいて時々ニヤニヤしていただけで大人しかったバーサーカーが吹き出した。

「い、いいい、今なんて言いましたか、先輩っ!？」

「え?だから、君の願いが叶うまで…?」

「な、なんでそうなるっ、ひっ、ひっヒーツヒツヒ、は、腹が痛え、ぼ、坊主テメエ、俺を笑い死にさせてえのかよ、ブハッ、ヒーツヒツヒヒヒ!」

でかい凶体（今は尻尾は無い）をゴロゴロと畳の上で転がしながら腹を抱えて笑うバーサーカー。

「む、なんだよ…困ってる人がいたら助けるのが道理だろう、第一聖杯とやらが誰かの手に渡るまで戦いが終わらないんだろ、だったら話は簡単だ。」

「ど、どうする気だよ、えっ?」

涙目でプギャー、とか言いそうな顔で指差すバーサーカー。

「その表情かおやめろ、あと指差すな。」

不機嫌そうに返し、答えを紡ぐ、士郎。

「幸い俺も程度は低いが魔術も使える、二人で協力したら早く片がつくし…死人だつて出さずに済むかもしれないだろう。」

呆れた。

開いた口が塞がらないとは正に今だ。

「そんな軽い理由で、命を懸ける気ですか…貴方…」

私だって、巻き込まれたようなものだし、助けは幾らでも欲しいとは言え。

ちよつと、この先輩は……大丈夫だろうか？

「女の子が困つてる、理由ならそれで充分だろう、それに自分の住む街で人死には避けたいしな。」

なつーま、またこの先輩は対処に困る言い回しを……

「あ、あう。」

ヤバイ。

おさまれ、動悸。

「ーヒ、ヒ……テムエ、真性の馬鹿か、なんの得にもならないだろうに……本気なら正気を疑うぜ……ある意味俺のお仲間だなあ、お前。」

どこか、揶揄するかのようで、その癖変に優しく。

バーサーカーは諭すように話す。

「ー本気さ。」

むす、つとした顔で返す衛宮先輩。

「ー遠からず死ぬぞ、テムエ？」

視線が怖い。

凄い目でバーサーカーが士郎を睨む。

「どう言う意味ー」

と、士郎が返すのとタイミングを同じく。

ピンポーン！

とインターフォンが鳴った。

「あ、もしかして…？悪い、二人ともこの部屋で待つてくれるか？」

会話を打ち切り、士郎が玄関へと歩いていく。

そうは言われても私もどうしたらよいかわからない状況で。

自然、何とは無しに困ってしまい、士郎が向かった玄関に足を向けていた。

「ああ、やっぱり桜か、おはよう。」

「はいーおはようございませす、先輩ー」

そんなやりとり、来客はー女の子？

しかもやけに可愛らしい声をした子だなあ…

「あの、先輩、？」

結局、考え無しに顔を出してしまい。

声の主、桜さんとやらと、ぱつちり目が合ってしまった、まる。

花が綻ぶ様な可愛らしい笑顔が一転、目尻には涙が溜まり。

「ど、どなた…です、か？」

プルプルとチワワみたいな震え方をしている。

「ー、あ?」

そこでようやく、自分がまるでー

エミヤ先輩と、そういう関係性だと誤解されかねない状況だと、悟る。

「つ、ち、違つ、違いますよ、え、つと桜さん!? 私は先輩とはそんな関係ではー」

桜さんの美しい紫紺の髪が、

ザワリと、脈打つかの様な錯覚を覚えた。

「先輩、の…ば、バカー!バカー!う、うわー!ーんつ、浮k、じゃないけど…裏切り者ー!ーっ!」

鞆が飛ぶ。

靴も飛んだ。

ついでに、どこから出したのか信楽焼の狸までが飛んできた。

「あ、危なつ、桜、危ないから!」

次に桜さんの豊満な身体が。

ぶるんぶるん揺らすところを揺らしながら、髪を振り乱してぐるぐるパンチ（子供がししそうなアレ）でエミヤ先輩の意外に厚い胸板をポクポクと叩いている。

…段々、彼女の顔が泣き顔からちよつと嬉しそうな顔になってるのは気のせいだろう

か？

あ、先輩に抱きついた。

…どさくさ紛れに。

「先輩、衛宮先輩はっ、無節操に女の子を連れ込むやらしい人じゃないですよね？ね？」
ぎゅむー、と抱きしめながら、至福つて顔が見え隠れする桜さん。

…この子。黒い。

「ーさ、さくらっ！は、離して、離してくれ、あ、あ、あたってる、いろいろまずいから、な、な!？」

困惑しながら、鼻の下が微妙に伸びてます、先輩……

ー男の人、って。

誤解を解くのに随分苦労した。

関係のまるで無いこの人に、下手な事も言えないし。

衛宮先輩には、今は霊体化したバーサーカーが勝手に姿をさらしてしまい、済し崩しに説明する羽目になったが、これ以上巻き添えを増やすわけにもいかない。

結局、私は先輩のお義父さん、衛宮切嗣の縁者であり、下宿先を探していたから格安でここを紹介されてきた、と言う嘘をつく羽目になった。

いや、実は嘘から出たなんとやら。

真実、私の父の縁故、とやらは：衛宮切嗣その人だったのだが。

実は、父は大雑把な人で。

冬木の街で、この住所に行き家主に「デイウオーカーの一件では世話になった、すまないが手を貸して欲しい」ただそう告げれば家主は大概の事はしてくるだろうから、もしも困る事があれば尋ねなさい、としか書いていなかった。

第一本人も本当にそんな事態になるとはあまり思わなかったのだろう。

住所が殴り書きされたメモが、緊急時には、と先ほどの言葉と一緒に書かれていただけ。

後からそれがわかったのは、鞆に忘れたメモの住所は、正にこの武家屋敷だったからだ。

家主である士郎はそんな事はさっぱりだそうだが。

曰く、切嗣の事だから：俺に伝えてなかっただけかもなあ、だとか。

父も父だが。

先輩のお義父さんもー大概大雑把だった様だ。

「お話はわかりました。」

やっと納得してくれたか…後は適当な理由をつけて明日にでも下宿先を探して…
「しかし！私はともかく！」

え、何なの？

この私は四天王の中では最弱、次なる刺客が、的なる物言いは？

「藤村先生は納得しないと思いますよ、先輩」

「あ、あく…藤姉か…」

苦い顔で呟く衛宮先輩。

やっぱり藤村さんって四天王？（違います

「藤村、つてもしかして英語の藤村大河先生の事ですか？」

「はい、先生は先輩のお義父さんの知り合いで…先輩、の保護者にあたる、と言うか…保護されている、と言いますか…あれ？」

「桜、確かに藤姉は保護者より保護されそうな感じだがそれ以上言ってやるな…」

「あ、あははー、まあお会いしたらわかりますよ、はい！」

と、そんなことを言っていた時だった。

ガラ、と。

庭に面した戸が開き…女性が眠そうな顔で上がりこんできた。

「しーろーうー、桜ちゃあんおはよふああく」

「藤姉：…だらしない顔で上がりこんでくるなよな…まったく、教師がみつともないぞ？」
などと返ししながら、衛宮先輩は茶碗に御飯をよそいだし、ごく自然とそれを藤村先生に差し出した。

「ん、ありがと。」

先生もまた、慣れた手つきでそれを受け取り、御飯とおかずを交互にぱくつき始めた。
「だってだってだって～お父さんがね、士郎のうちばかりに入り浸らないでたまには自宅で食べるとか言うのよ？ 私はね、士郎のお姉ちゃんなの、だから士郎のごはんは私のもの、お姉ちゃんのごはんを作るのは士郎のお仕事です、ね～☆」
なんて。

小首を傾げて言い始めた。

「先生：…それはちよつと違いますか？」

と、桜さんも困惑顔だ。

「そうだぞ、藤姉：…たまには自分でも作って雷河さんに手作りの朝ごはんとか振る舞ってみるよ、大喜びするんじゃないか？」

衛宮先輩は先輩で話がずれる。

「ん～こんな美味しいごはん、他で味わえないんだも～ん…ん、？」

と、箸が止まる。

視線がようやく、一人端の方でお茶を頂いていた私に向けられる。

「ホワーンツ!!」

絶叫。

「だ、誰っ、侵入者っ、間女!?!」

だ、誰が間女だ。

「ふ、藤姉落ち着け!」

「こっつ、こ、これが落ち着いていられますかー!?!し、士郎がジゴロにつ、不埒者
にいつつお姉ちゃん士郎をこんな風に育てた覚えありませんっ、て言うか誰、貴女ー
!!」

ガオー!

と大絶叫と言うか、咆哮する藤村先生。

「あ、九重朔弥です、先生…先日転入して…ご挨拶しましたが覚えておられませんか?」

「こっつ、この…え?」

なんか目に涙浮かべながら反芻する藤村先生。

「あつ、そっかそっか、なら安心ー」

「そうそう、身元ははつきりしてる!怪しくないぞ藤姉!」

ば、先輩の馬鹿!

それ、火に油——!?

「つて、身元が怪しくなくても大問題でしょうが——!?」

ガオー! ガオー!

とさらに大咆哮。

「まままま、まさか一線を超えちゃったりしてないでしょうね、ね!?」

肩をガクガク揺らされ、答えようにも答え辛い。

「ちよ、ま…:そんなことありません、ありませんからっ!?」

「藤姉落ち着け、その子はオヤジの知り合いの娘さんだ、落ち着けてー!?」

「そんな、誤魔化されないからねっ、私の目の丸い内は士郎を手籠めになんかささせないんだからっ、お姉ちゃん頑張るつて…:切嗣さんのっ!?」

ピタリ、と止まる大暴走。

後、目は「丸い」では無く、「黒い」内…:じゃないかな。

「ああ、そうだ。」

やっと止まった、とばかりにため息をつく衛宮先輩。

「切嗣さん、何処にいるの!? ねえっ、教えて、九重さんっ!?」

一転。

今度は凄く、真剣な眼差しで問いただされる。

「あ、ごめんなさい…ちょっとわからないんですけど…私の父が、たまたま知り合いだった、つてだけで…リアルタイムに連絡してるわけでは…つて、行方、わからないんですか?」

「あ、そ、そう…そうなんだ…ごめんね。」

明らかに落胆する藤村先生をみたら。

なんだか悪い気がしてきた。

「先輩、お義父さん、行方不明なんですか?」

「ああ、まあそうなるかなあ…もともとフラツといなくなって、半年位して帰るような事してたダメな大人だからなあ…」

「でも…もう2年だよ、士郎?」

「そうだなあ…俺が自立出来そうになったら、フラツといなくなることが増えて…何度もいなくなつては藤姉が泣いてたつけ…今回は確かに長い、けどな…あの切嗣が簡単にどうにかなるわけじゃないじゃないか。」

まさか。

先輩のお義父さんも…魔術師?

いや、先輩がそうなんだから不思議はないか。

なら、何らかの…「不慮の事故」に会う可能性は非常に高い。

「お役に立てず、すいません。」

「んくん、私の方こそ、怒鳴り散らしてごめんなさい、切嗣さんのお知り合いなら…仕方ないかなあ…」

「せ、先生っ、本気ですかっ!?!」

「ああ、もち二人だけとかダメのダメダメ。」

「え、でも先輩のお義父さんは居なくて…どうしたって、それは…」

いや、バーサーカー居るしね、本当はそこは心配無いんだけど。

言えないよねえ。

「任せて！私も今日からここのウチの子になる！」

「ー、は？」

あ、衛宮先輩が面白い顔してる。

「あ、なんなら桜ちゃんも一緒に泊まる？桜ちゃんなら大歓迎よっ、ガールズトークしましようガールズトーク！」

「藤姉……」

これはーどうしたものか。

『ゴメン、バーサーカー…ちよつと助けて…普通の格好で出てきてくれないかな?』

『あ?俺に何を期待してんだ、テメエ?』

バーサーカーだぞ、考えるのは苦手なんだよ、と念話が返ってくる。

『だって、あまりこの人達を近づけたら…巻き込みかねないよ。』

『ー保護者の真似事をすりゃいいのか。』

『え、う、うん!』

『チ、しかたねえマスターだな…細かいところはてめえで合わせな、俺は出て座ってるだけだからな。』

『あ、ありがとうバーサーカー!大好きっ!』

『ーーー』

『バーサーカー?』

『オルク、だ…便宜上そう呼べ。』

名前呼び…やっぱりツンデラ…

『しばくぞてメエ!』

『キヤー!キヤー!w』

昨夜と比べ、余裕が出たからか。

バーサーカーが実は怖く無い、とわかったからか、随分軽いノリでの念話が飛び交うありさまである。

「え、つと…は、は、はろー?」

どーん、といきなり襖を開いて出てきた浅黒い肌をした大巨人。

身長も、ガタイもそこいらのスポーツ選手よりも立派である、ビビらないほうがおかしい。

まあ、英語教師がそれで良いのかと思わなくは無いが。

「オルクだ、一応保護者、つて肩書きにはなってる、まあなんだ…さつきからあんたが叫んでたような心配はいらねえよ、このガキが朔弥に手えだすようなら…俺がしめとくから安心しろ。」

「だ、ダメ!ダメですつ、士郎を苛めたらダメのダメダメなのー、おもて出ろやこのピーーが!」

「好き勝手したいなら、私を倒してからにしなさいつ、おら、ピーーついてんのかこのピーー、かかってこい、バキューン!がつ!?!」

「…口汚いにも程があんだろ、姉ちゃん…」

真逆のバーサーカーが呆れる程のスラッシングが飛び出した。

先生…急に変な語彙力発揮しなくても…

竹刀を取り出し、振り回し始めた先生に、バーサーカー、相手にもしなないと思いきや、こんな事を言い始めた。

「好き勝手、ね…なら俺が勝てばそれで丸く収まるんだな？」

「は？が、ガタイがあるからって剣で私に勝てると思わないほうが良いわよっ、これでも腕には覚えがあるんですからね!？」

ガオー、とまた吼える藤村先生。

「んじゃ、あつちにあつた道場でやろうや。」

こうして、何故か藤村先生とバーサーカー…自称、オルクの対決が決まった。

…どうしてこうなった。

桜さん、バーサーカーにびびって黙ってしまっし、先輩も苦笑いしかしてない。もう一度言おう。

ど
う
し
て
こ
う
な
っ
た
。

第5話 『兆し』

「さあ、好きな獲物をとりなさい！」

バン、と指差す先には竹刀と木刀が幾つか立ってかけられており、その脇には掃除用のモップが転がしてある。

「あー、ならこれで良いぜ」

と、迷わずモップを掴むバーサーカー。

「は？」

持ち手もまともに無く、かつ、プラスチックの安物の柄だ。

竹刀が打ち当たればへし折れるだろう。

「さあ、どこからでも構わんぞ？」

片手にダラリと柄を持って構えもせずに向かい合う。

「な、舐めプ？舐めプなの!？」

などと、タイガーご立腹である。

「ち、チェストーツ！」

お約束の掛け声高らかに、大上段からの振り下ろし。

「は、緩い緩い。」

す、と半歩引いて頭を軽く振るように動かした、それだけ。

だが、先制の一撃どころか、返しの二撃目までも予測していたかの様に空を切る。

「なっ……?」

絶句する先生。

当たり前だ、バーサーカー、彼の真名はまだ聞いていないが……しかし、彼は英霊である。

過去、竜を、神を、打倒し、神代の魔法が飛び交う様な時代を生きてきたであろう英雄豪傑なのだ。

3、4、5、6、と先生の竹刀が空振りする回数も増え続け、段々と息が上がり始める。

時々、流石に後退しないと当たりそうなコースから振るわれるものだけ、モップの柄で、軽々と受け流す。

如何に藤村先生が鍛えていても。

彼からすれば兎戯に等しいのだろう。

「な、な、な、」

「藤姉、諦めろ、実力差がありすぎる。」

と、衛宮先輩が諭すように声をあげた。

「や、やだ…やだ…！」

と、いきなり駄々っ子の様に泣き始める先生。

「うわーん！どこの馬の骨かわからないBL野郎に士郎とられたーっ、士郎が、士郎のお尻が開発されちゃううっ!!」

「ちよっ、藤姉っ、なんでそうなるっ、無いからっありえないからっ!?最初は朔弥と二人がマズイって話だっただろうが、なんでオルクさんと俺をカップリングしてるんだっ!?」

「…なんだ、そっちがいいのか、テメエら？」

「駄目っ(です)っ！」

桜さんと先生がハモった。

桜さん…わかりやすいなあ…いつそ、可愛いくらいだ。

先輩は…鈍すぎる。

あんな直球で誑し込む癖に。

無自覚とか軽薄な男よりある意味タチが悪い。

「…なんだ、お前…弟がとられんのが寂しいのか？」

オルクさん、何言い始めるんですか？

「なら、俺が寂しくなくしてやろうか、今晚からでも。」

そう言つて、ゼーゼー肩で息をしている先生にす、と近づき。

先生の顎をクイ、つと指先であげた。

「え、ちよつ?」

先生が、反応するよりも素早く。

バーサーカーの唇が、藤村先生の唇を塞いでいた。

「つ、あ、や、え、ちよつ…」

わたわたともがく藤村先生が、段々脱力して…

くた、つとなつてへたり込んだ。

「どうだ、気持ちよかつたか?」

ペロリ、と舌舐めずりをしたバーサーカーは。

まるで子供が玩具を手にしたみたいな顔をしていた。

「キ、キス…キス…し、舌が、ぬろ、つて…なんか、お、奥まで絡んで…あ、あ、あ、」

藤村先生、オーバーヒートして真っ赤になつて放心状態だ。

「な、な、な、何してやがりますかっ、バーサーカーっ!!?」

あ、思わずクラス名で呼んでしまった…マズイ。

「お、す、わ、りっ!!」

お前は心底反省しろ、と強烈に念じた結果。

「な…何いつ!？」

ビターーン!、とバーサーカーが、床に顔からダイブした。

そしてそもそもと、正座の姿勢になる。

『て、テメエツ馬鹿か、馬鹿なのか?今令呪使いやがったなこの間抜けツ!』

『令呪…?』

なんか、手の甲の痣が一画消えているが…これか?

『ああ、そうだこのウスラ馬鹿がつ、令呪はな…サーヴァントを律する絶対命令権だ、3回しか無い、しかも使い様によつては奇跡さえ起す大魔術の結晶だぞ?!』

「先生に、謝りなさい、オルク。」

「ぬ…ぐ、なんで、謝らなきや…」

ひらひらと。

手の甲を見せつける様にバーサーカーに向けて振る。

「く、覚えてやがれテメエ…」

「謝り、なさい。」

「す、すまなかつた…な…」

「え?あ、い、いやあの…」

正気に戻りつつある先生だが、やはりまだ混乱中の様子。

「もうしねえよ、悪かった。」

バツが悪そうに胡座をかきなおし、頭を搔く。

「あ、いえ…ハイ。」

なんか。

先生の視線が妙に熱っぽいんだけど。

どうするのよコレ。

ー夕方方。

「先輩、先輩…藤村先生、どうですか？」

極力本人に聞こえない様に小声で耳打ち。

しかし、必要無かったかもしれない。

コトコトと、鍋が火にかけられた音が響き、サク、サク、とキャベツを刻む刃音が

ズミカルに聞こえる。

「駄目だな、もう今日は授業中まで魂抜けた感じだった。」

やっぱりか。

『バーサーカー…あんた何て事してくれたのよ…藤村先生完全に腑抜けちゃったじゃない』

結局、調べれば下宿先候補はここだったし、なし崩しにここに住めるみたいだからそのまま、今日は学校を終えてから夕食の支度を手伝っている、桜さんも一緒に。

『貴重な令呪でサーヴァントにお座りさせた馬鹿が何か言ってますねえ、いやあ、聞こえねえわ、なんにも。』

まだ根に持っていたのか、意外としつこいな…

『知らなかったんだもん、しかたないじゃない…むう。』

それに、なんか嫌だったし。

ジュワツ、とカツが揚がる油の泡だつ音。

「まあ、仕方ないさ…藤姉は切嗣にばかりかまってたから…未だに男に対して免疫薄いからなあ。」

なんであんな駄目な大人が持てるのか理解に苦しむ、とかなんとかつぶやきながらも手際よく調理は進む。

「先輩も大概鈍ちんだと思いますけどね…」

「ん？なんだって？」

「や、なんでもありませんよ〜」

桜さんの視線が痛いです。

「さて、盛り付けたら机に運んでくれるか？」

そう言いながら、カツをザクザクと美味しそうな音を立てて一口大にカットしていき。

「はあい。」

皿を持って、食卓に向かう途中にピ、とTVの電源が入る音がして、ニュースが流れ始めた。

「ー昨夜未明、このところ立て続けに起きているガス漏れ事故、4度目の騒ぎがありました。」

一部では老朽化したガス管が原因とも、手抜き工事が原因とも言われていますがハッキリした答えは出ておらずー

今回の被害は意識不明の重体が7人、軽症で、気分の悪さや吐き気を訴えた方が4人。いずれも命に別状はありませんー

そんな内容のニュースを聞きながら衛宮先輩が眉間にシワを寄せて画面を睨んでいた。

「桜、今夜は送るよーあと、明日からはしばらく…ウチには寄らないほうがいい。」

前半を聞いてにこやかな顔をした直後、後半の会話で一気に顔を曇らせる桜さん。

「嫌です。」

「え、桜…?」

あー、そりやそうだろうなあ…鈍ちんな先輩は解つてない…

危ないから遠ざけよう、つてのはわかるんだけどね…桜さんからしたらさっぱり理由がわからないだろうし…。

「私が邪魔ですか、いいませんか…?」

「いや、そうじゃないよ最近どうにも物騒だからさ…その、桜には危ない目にはあつてほしくないんだ。」

「先輩…私、ごめんなさい先輩の気持ちもわからずに…」

「いや、俺こそきちちんと説明すれば良かった、桜にはいつも助けてもらつてるのにな。」

ああ、なんか空気が甘い、主に桜さんの側だけ。

先輩の鈍ちん、朴念仁。

「なんだ朔弥、お前は行かなくていいのか?」

「…なんでよ?」

「いや?お前はああいうのがタイプだと思つてたんだがな、違うなら構わんが。」

あの小僧、よく似てやがる。

なんてつぶやきは、私の耳には届かなかつた。

夜の新都。

強い風が吹いている。

風はヒユウヒユウと風鳴りを響かせ、寒くなり始めた冬の街を凍えさせるには充分過ぎるほどに。

「…つまらないわ、サーヴァントは確かに全て召喚されたのよね？」

先に口を開いたのは少女。

年の頃は16歳〜18歳くらいか。

体格としては細身で、儂げな印象を受けるが、それなりに発育する場所は発育している、歳を考えればまだ発育途上、未恐ろしい将来性である、どこが、とは言及はしないが。

少女は、白い、白磁のような肌に、ルビーの様に美しい瞳、銀糸の様に輝く白銀の髪。清楚なワンピース姿で、まるで人形の様に可愛らしいその姿には似つかわしくないどころか冷たい声で従者らしき男性に話しかける。

「ああ、間違いない…教会からも打診を受けた上に…こちらの霊基盤にも反応があった。」

「…良いわ、セイバー。」

「なんだ、マスター、アインツベルン」

「その、家名だけで呼ぶのやめてよね…」

「そうだったな…すまない、イリヤ。」

ふ、と優しい表情になり男「ーセイバーはイリヤと呼ばれた少女を抱き寄せる。

「貴方はーキリツグの、かわりなんだから…私を寂しがらせたなら、ダメなの。」

どこか拗ねながらも甘える様に、男の胸に顔を埋める、少女「ーイリヤ。

「貴方が…バーサーカーで呼出せなくて良かった、なんて…こういう時は思ってしまう

…私、アインツベルン失格かもね。」

背中で束ねた長く、癖のある黒髪に、引き締まった体躯、仕立ての良いスーツに身を包まれたその身体は…細身に見えるその実、よく見れば2メートルを越す長身、丸太が如き太い手脚。

遅しい、と一言に片付けられない、神々が与えた、美しい身体がそこにはあった。

「本来ならー私はアーチャーの方が適正は高いのだがな…まあ、前回はイレギュラー続きだったと聞いている、アハト翁が最優のセイバークラスに拘るのも無理はなからう、私とてバーサーカーで呼び出されていたら会話もままならなかったかもしれないからな…バーサーカーで呼び出す案が廃案になったのは僥倖だったよ。」

バーサーカーで呼び出された場合、大概のサーヴァントは大幅な基礎能力向上の恩恵の引き換えに理性を奪われ、とんでもなく多量に魔力を食う、燃費の悪いハイオク車を

絶えず全開でエンジンを回し続ける様な無謀な状況になる。

過去、バーサーカーを呼び出したマスターは例外なく、魔力を食われ続けて自滅したほどだ。

「――最強の魔術師として「造られた」イリヤにはその制御も可能だとは言われていたが。」

「ブリテンの騎士王と――最強と目された魔術師殺しまで使った拳句、聖杯は手に入りませんでした、なんて結果――お爺様は納得出来なかつたんでしよう。」

そう続けた後、眼下を睥睨する様に見回して「――街の明かりを、まるで親の仇の様に睨みつけ、きゅ、つとセイバーの逞しい身体に腕を回す。」

「安心しろ――お前の望みは、私が叶えよう、必ず……お前は私が守り抜く。」

セイバーは、どこか悲しげに決意を語る。

「キリツグはもう、居ない……私にはセイバー、貴方だけ、なの。」

少女はそれには答えず、どこかすれ違った主従の会話はそこで止む。

聖杯戦争、二日目の夜はこうして、過ぎていった。

第6話 『絆／傷の名』

炎。

真っ赤に灼けた空が、今にも降ってきそう。

喉はカラカラに涸れて、声を出すたび痛みが走る。

助けて。

自分だけが助かって、それでいいの？

死にたくない。

無理だよ、だって君達はー

もう、死んでいるじゃないか。

灼けた空が照らし出す、真っ黒に炭化したヒトだった、者達。

中にはまだ、動いているものもあつたが：

太陽すら真っ黒に焦げ付いてしまったこの空の下では：生きている方が奇跡だった。

ああ、でもね、きつと僕はー遠からず君達の仲間になつてしまうんだ。

ああ、せめて：僕がかわりに、声を出さなきゃ。

「ああー苦しいなあー。」

夢は、そこで途切れた。

ーなんて、夢。

陰鬱にも程がある。

「おはよう凜、寝覚めは如何かね。」

「ー夢見が悪い、最悪。」

ふわり、とダージリンの良い香りが鼻腔をくすぐる。

目を覚ませ、と言う事か。

「おはよう、アーチャー…」

きつと今、私は酷い顔をしている。

サーヴァントとはいえ、異性に見せたい顔では無い。

「…顔、洗ってくる…」

「ああ。」

カチャカチャと、私が一息に飲み干した紅茶のカップを片付けるアーチャーを置き去りにして、バスルームへ向かう。

ああ、いつそのままシャワーも浴びようか。

と、考えてスルリと寝巻きを脱ぎ捨て、寝ぼけまなこで浴室へ。

熱めに設定したシャワーを頭から浴びて、意識を覚醒させる。

「少しは夢の残滓が吹っ切れる、と言う様に。」

「凜。」

突然、脱衣場からアーチャーの声。

「ひゃっ、な、なな、何よ?！」

思わず胸を掻き抱くようにして脱衣場のほうを見る。

磨りガラスだから見えはしないが、しかしシルエツトはわかるだろう。

「シャワーを浴びるなら着替えくらい持って行きたまえ、裸でうろつくつもりか、君は。」

「あ」

「…うかつ。」

今迄一人だったせいとそのあたりまったく警戒していなかった。

「着替え、置いておくぞ。」

脱衣カゴにパサリ、と衣服が置かれる音。

僅かに開いてカゴを見れば、制服一式が…下着も含めて

置かれていた。

「…ちよっ、アーチャーッ!!」

遠坂の屋敷に、賑やかな声が響く。

これまでなかった空気。

悪い気はしない。

「まったく…なんなのよあの駄サーヴァントツ…後で後悔するほど面倒な作業させてやるからっ…！」

はあつ、と息を吐き出しながら脱衣場に出て、着替えを乱暴につかみ、慌てて着替える。

髪を乾かし、戻る頃には――

食卓には朝食が並んでいた。

ルツコラとプロツコリーのサラダにスクランブルエッグ、トーストに紅茶。

どれも完璧な仕上がりである。

「――こんな材料あったっけ…」

「何、君が寝ている間に少しね、コンビニでも今はなかなか良い食材が揃うものだな、割高なただけが玉に瑕だが。」

「え…お金は？」

「財布を置いたままにするのはあまり感心しないで、凜？」

「――確かに…財布はリビングに置いたままにしたけど…だって、この屋敷に通常の侵

入者とかあり得ないし。

二重三重の魔術防御と結界、罫の宝庫なのだ。

侵入した時点で命の保証すらできない。

ーそもそも、侵入する前に人払いの結界に引つかかるから常人が侵入すること事態があり得ないのだが。

「勝手に使わないでよ…もう…。」

「そう思うなら食材くらいもう少し揃えておきたまえ。」

ああ、完全に毒気を抜かれてしまった。

許したわけではないが…まあ、先延ばしにしておくことにする。

椅子に腰掛け、サラダを一口。

「…むう、美味しい…。」

自家製のドレッシングだろうか、これは、梅？

刻んだ梅と、黒胡椒に、あっさりした和風ドレッシングが野菜にマッチして、美味だ。なんか悔しい。

私だって料理くらいできるのだ、その気になれば。

…特に中華なら負ける気はしない。

「アーチャー、今日帰りに買い物に寄るわ」

なんだ、やけに素直だな、なんて…今だけ言つてなさい、夜にはぎゃふんと言わせてやるんだから。

ー呑気なものである。

「さて…俺は学校に行くけど…九重はどうするんだ？」

先輩がそう、下駄箱から靴を出しながら聞いてきた。

「一応行きますよ、バーサーカーだつて霊体化して常にそばにいますからね。」

「霊体化か…便利なもんだなあ、サーヴァントつてのは。」

「…先輩、一応言つておきますけど…何か起きても手出しはしないほうが無難ですよ？」

あまりに呑気な先輩に、忠告。

「…確かに俺にできることは少ないだろうけど…もし九重が危なけりや、手は出す。」

ああ、この人やつぱりわかかってない…私はあの夜本気で、死にかけた。

魔術師ができるのは精々がサポートに過ぎない。

サーヴァントとはそれほど規格外の強さなのだ。

迂闊に手を出したが最後ー先輩は間違いなく、死ぬ。

「死にたい訳じゃないでしょう…私だつて助けはありがたいですけど…住まいだけでも

充分過ぎるくらいですから。」

「欲の無い奴だなあ、九重は。」

——先輩にだけは言われたくないです、それ。

半眼で呆れる内にいつの間にもやら通常の住宅街を抜け、商店街に差し掛かっていた。

「お、土郎じゃねえか…あれ、なんだよお前、桜ちゃんからのりかえやがったのか!？」

「ま、おばちゃん感心しないわあ…」

なごと。

商店街のおじちゃんおばちゃん方からいきなりデイスられ始める衛宮先輩。

「いや、まてまて皆つ、こいつは後輩で、しかも親父の知り合いの娘さんなんだよ!住むところを探してて、親父の縁故を頼ってうちにしばらく住むことになっただけだ!やましい事は何も無いから!」

「ど、同棲!？」

「桜ちゃんという通い妻だけじゃ足りねえつてのかい、うらやま…いや、けしからん!」
「きゃー!おばちゃん後30若かったらほつとかないのに!」

と、一気にまくしたてる先輩、囃し立てる商店街の方々。

火に油じゃないですか…。

そんな暖かくも馬鹿馬鹿しいやりとりをして、学園にたどりついた矢先。
濃密な魔力が——私達を出迎える。

「……っ、!?!」

「な、なんですコレ……!」

感じるだけで頭がおかしくなりそうな……甘く、危険な、蜜——例えるなら食虫植物が
虫をおびき寄せる匂いの様な——

「へえ、貴女が昨日の——」

背後からかかる声。

そして明らかに威嚇する様な……攻撃的な、魔力!?

この人、サーヴァントの、マスター!?

「はじめまして、外様の魔術師さん。」

「あ、え……遠坂……?」

振り返り、困惑顔の先輩。

いや、私も訳がわからない。

「おはよう、衛宮君——、まさか貴方までとは気がつかなかったわ。」

「貴女、真逆……」

「……そう警戒しないでもいいわ、昼間からやり合うつもりは無いし、聞いておきたい事があつたけど……その反応を見る限りあなたたちが仕掛けた訳じゃあ無いのね。」

「……仕掛けた、つてこの……なんていうんだ……校門くぐつた途端に感じた……むせ返りそうない匂い、か？」

「……そう、貴方はそう感じたの。」

まるで、食虫植物ね、と私と同じ感想を呟いた後視線が此方を向く。

「……さて、貴女……一体どこの派閥の何様かしら？」

「……派閥も何も……私はただの二流魔術師ですよ、遠坂さん。」

「……だが、何方かはマスターではある……そうだな？」

と、校門の陰から一人の男が姿を現す。

「アーチャー……迂闊に姿をさらさないでよ……」

「なんだ、アンター……」

先輩が向けられた視線に怒る様に言葉を返した、瞬間。

ボグー、と音を立てて衛宮先輩が体をくの字に曲げて咳き込んだ。

「が、グハツ……!？」

「アーチャー……!」

やり過ぎだ、と遠坂さんが嗜めるとアーチャーの手は止まる。

しかし、眼は依然として先輩を睨んだままで。

「こんな脆弱なガキがマスターとはな……」

咳き込む先輩を見下す様に告げる赤い人。

なんだろう。

ムカムカする。

きつとあれが遠坂さんのサーヴァントだとわかっていて尚。

昨夜のランサーみたいに恐怖は無い。

だが、それはきつと怒りのせいで。

「マスターは、衛宮先輩じゃない。」

先輩は、無関係なのにー……コイツツツー！

「表出ろや、このクソフェイカーが。」

実体化したバーサーカーが。

私より素早く喧嘩を買っていた。

校舎裏の林。

其処に私達は居た。

授業が開始される直前となれば人気は無い。

「…アーチャー、貴方が余計な事をしたからよ…どうするの、コレ…」

本来なら休戦を申し出て、この結界を張ったやつを締め上げるまでは互いに不干渉を提示するつもりだったのだが、台無しだ。

「フン、軽く撫でた程度だろう…マスターでも無いのに首をつつこんだあの小僧が迂闊なのだよ。」

「お喋りは、楽しいですか？ワタシシー怒っています、とつても、怒ってるんですよ？」
バーサーカーは無言で、しかし武装し、構える。

「やだ…槍…？」

赤い人、アーチャーのマスター、遠坂と言ったか、が驚きの声を上げる。

それはそうだ、ランサーはすでに昨日遭遇しているはずだから。

先ほどは頭に血が上って気がつかなかったが…この、今対峙する赤い人は昨夜、ランサーと対決していた英霊だ。

「テメエは何処で出会ってもいけすかねえ野郎だな…」

武装し、黒く捻じれた無数の突起に、怪獣みたいな脚で大地を踏みしめ、手にはあの朱槍を構える。

「君の様な粗暴な知り合いは居ないはずだがね…」

そう言いながら双剣を握るアーチャー。

「マスター、やるぞ?」

「…ええ、行きなさい…バースーカー!」

「■■■■□ツーーーーー!!?!!?」

咆哮が、音が時間差で聞こえるほどの速度。

バースーカーの巨体がアーチャーの瘦躯に迫る。

ガキイ!

双剣が槍の穂先を挟む様にして止める。

「何っ!?!」

だが。

止めた筈の槍が、穂先からさらに分かれる。

槍から槍が生えていた。

「ぬ、うあつ!?!」

上半身を後ろに全力で反らす事で辛うじて直撃を避けるアーチャー。

前髪が数本、ハラリと切り落とされる。

「何だ、その槍は…!?!」

解析ー構造、読めぬ。

材質……魔力を帯びた、何かの骨？

似た材質の何かを見た様な気はする、しかし……今までに見たどの器具にも該当しない。

恐らく素の状態から大きく、材質すら変質している？

「俺の槍が気になるか、だがそんな余裕があるのか、え？」

「さあ……怖じ、惑え！」

バーサーカーの全身から立ち昇る異様な気配。

ソレが空間を支配し、蹂躪する。

大地から、木々から。

仄暗い輝きが噴き出し、アーチャーだけでは無い、周り全てを飲み込んでいく。

スキル「精霊の狂騒」。

周囲の全ての敵を恐怖と錯乱に陥し入れ、精神干渉により対象の筋力、敏捷を著しく下げる広範囲精神干渉。

「ぬ、く……力が……抜ける、？」

「ほう、アーチャーの対魔力か……多少レジストした様だが……しかし、あちらはどうかかな？」

「な、何……これ……つぶ、震えが止まんない、嫌つ、あ、あ、あ!？」

アーチャーが斜め後ろを僅かに見やれば、己のマスターが両肩を抱き、過呼吸に陥っているのが目に見えた。

「き、貴様っ！」

「ねえ、アーチャー？今、どんな気持ち？」

突然、話しかけたのは朔弥。

「な、なに？」

「親しい人をいきなり苦しめられて…どんな気持ちか、そう聞いてるんです。」

「……そ、それは……」

「アー、チャー、謝罪…なさい…今のは明らかにこちらの、はあつ、不手際、でしょ、う。」

息も絶え絶えに、しかし非を認める遠坂さん。

しかし。

「つ、しかしな…こいつらはいずれ敵にまわる…それがわかって言っているのか、凜。」

頑固モノっ。

自分のマスターが非を認めているのにまだ食いさがるか、コイツ。

「アーチャー、これ以上、く、言う、…令呪を使う…らね？」

「…仕方あるまい…今回は凜に免じて矛を収めるとしよう…だが…」

まだ、何か言うつもりか、と少しムツとした瞬間。

パァン!!

林の中、乾いた音が響いた。

アーチャーの頬を遠坂さんが平手打ちにしたのだ。

「いい加減に、しろっ!」

涙目で、バーサーカーのスキルに侵されながらの一撃。

それもサーヴァント同士が、立ち会う中に踏み込んできて、だ。

ヒュウ、とバーサーカーが口笛を吹くのが聞こえた。

「————!」

泣き笑いの様にも見える複雑な表情をしたかと思うと、アーチャーはそのまま霊体化して消えた。

今の一瞬で、スキルの効果が、途切れた。

いや、バーサーカーが意図的に解除したのかもしれない。

少しむせ込んだ後、遠坂さんは私、いや：衛宮先輩に向き直り、頭を下げる。

「——悪かったわ、ウチの駄サーヴァントの非礼：許せとは言わないけど：今は置かせて欲しいの。」

未だに鳩尾を押さえ、声も出せない衛宮先輩に変わり私が答える。

「——いえ、遠坂先輩、それは私も同じですから：頭に血が上ってやり過ぎました、ごめ

んなさい。」

互いに深々と頭を下げる。

それを、バーサーカーはどうにも振り上げた拳を持って余したか、どうしろってんだ、と言う顔で見つめるのみであった。

第7話 『神性』

「ローマスターよ、儂は一体全体何時までこの様な茶番を繰り返せば良いのだ？」

赤髪を束ね、その身を包む装いもまた紅い。

眼光鋭く、その身体は鋼の如き逞しさと、内包する気力を感じさせる。

「そう慌てるな…ランサーよ」

黒いカソツクを纏い、その高い背丈は闇の中にあつてなお、存在感を示す。

男は地下室の明かりをつけ、背中を向けたままにこちらに話かける。

「慌てるなど言うがな…セイバー、アサシン、キャスターを覗いて他三騎は一度は手合わせしたがの…いい加減全力で戦わせて貰えんか？」

カソツクの男は、チェスの駒の様な物を地図上に配置し、動かす。

7つの駒、7騎のサーヴァントを模したピースが動かされ、穂群原学園の位置に、バーサーカー、アーチャー、そして、ライダーの駒が配置される。

カツ、と硬質な音を立ててガラステーブル上の地図上に駒が立つ。

「時がくれば嫌でもやり合うのだ。」

故に待て、とこれまで、幾度か繰り返した問答はやはり同じ結末を迎える。

「引き続き警戒はしておけ、なに…いずれはお前が楽しめる戦いもあるだろう。」

「ーフン、まどろっこしい事だ。」

「ー本当にごめんなさい、衛宮君、それに…」

「九重、朔弥ですよ、遠坂先輩。」

「ありがとう、九重さんーアーチャーが本当に失礼な事をしてしまったわね…」

「ですから、お互い様、でいいじゃないですか、それより今は学園の事を。」

頭を下げる凛に朔弥はそう、切り返す。

「ーそうね。」

考えこむ様にして、数瞬躊躇いを見せた後、凛は口を開く。

「今、学園に張られた結界は…ハッキリ言って放置できるものじゃないわ。」

「ーどんな、ゲホ、モノなんだよ?」

まだ僅かに咳き込みながら言葉を挟んだのは士郎。

「発動したらー中に捉えた人間を…溶かし、殺して…にじみ出た魂を吸い上げるー

外道の産物よ。」

「ーーッ!?!」

士郎の顔が怒りとも焦りともつかない表情に変わる。

「術式、壊せないんですか?」

「あまりに複雑すぎる…悔しいけど。サーヴァントの使う神代の魔術でしょうね…無理だったわ、昨晚試みたけれど僅かに遅延させるのが関の山。」

士郎の目が、お前は?、と朔弥に向く。

「…冬木のセカンドオーダーである遠坂先輩にできないなら私にはもつと無理、かな」

「セカンド、なんだって?」

士郎の言葉に、凜は顔を顰める。

「外様の彼女が知っていてなんでこの地に住んでる貴方が知らないのよ…貴方の師は一体何を教えていたのかしら…」

呆れ顔で凜が話すのも無理はない。

セカンドオーダーとは地域一帯を管理する者…つまりはこの地域の魔術師の元締め、と言える存在だからだ。

本来この地の魔術師ならば知っていて然るべき、住み始めた段階で挨拶くらいすべき相手だからだ。

反対に無断で住んでいるならばそれはそれとして尚更警戒対象として知っているべきである。

「お、オヤジは…切嗣は俺に魔術を教えるのは反対していたぐらだからなあ…本格的に教えを請う前に居なくなっちゃったし…まともに魔術師としての知識は教えられてないんだ。」

（呆れた…衛宮君のお父さん…一体何を考えて何を教えていたのかしら…まあ、今はそんな場合では無いけど…）

「そんな事より今は学園だ、どうしたらそんな危険なモノを取り除ける?」

「…一番確実なのは、仕掛けたサーヴァントか、そのマスターを…殺す事よ。」

「殺さ、なきや、駄目なんですか?」

質問していた士郎よりも先に聞き返したのは朔弥だ。

「駄目ね、だつてマスターを殺されたサーヴァントと、サーヴァントを失ったマスターが再契約して新たな敵になる、なんてことだつてあり得るんだから。」

「ハッ、ならサーヴァントを殺し尽くせばいい…決つて、斬り裂いて、蹂躪してやればいいだろう。」

「暴論ね…それが容易く出来るなら早々にやっているわ。」

「…弱い、弱いな、弱くから安易な手段に頼る…単純な力だけを言ってるんじゃない、心が弱い、決意が足りない…芯がない。」

「…言ってくれるわね、ならアンタはどれだけ強…」

ジャラララッ、ガキーン！

不意に振り抜いたバーサーカーの腕に、槍が瞬時に現れ、飛来した鎖を弾き、絡め取る。

その先端は巨大な釘状になっており、投擲して刺す武器と、言うよりそれは地面に杭打たれた鎖をそのまま、設置用の杭ごと投げつけたかのような凶悪なものだった、言うなれば釘剣と呼ぶべきか。

「そうだな、不意打ちを防いでやるくらいには力はあるぜ、え？」

嘲りを含む視線は、私の背後で霊体化を解いたアーチャーに向けられたものか。

「礼は言わんぞ…私でも充分間に合っていたからな。」

アーチャーは未だに不機嫌極まりない、しかしマスターである遠坂さんの危機に仕方なしに実体化し、武器を構えた様だ。

「驚きました…あれを止めますか…あなた。」

雑木林の木々の間から見えるのは紫。

美しくも怪しい紫色の髪が逆さに垂れていた。

「ーサーヴァント…ッ！」

妖艶な肢体、怪しげに光を照り返す紫髪。

樹木に逆さにぶら下がりながら釘剣の逆端を握りしめる、サーヴァントの姿がそこに

はあったー。ー。

—Half a year ago【半年前】

「ーキリツグが…養子を…？」

「ハイ、今代の聖杯戦争の事前情報収集にあたり得られた情報です…間違いはないかと。」

イリヤに仕える女性型ホムンクルス、セラが神妙な顔で…いや、普段から変わらぬ無表情で語る。

「私や…お母様を忘れて？」

「所詮は裏切り者…聖杯に手をかけながら、姿を見せる事も無くお嬢様を気にかけてもいないで10年間放置した輩です。」

「これが、その養子、衛宮士郎、だって。」

白の礼服に身を包んだ顔のつくりがまるで同じセラとは対照的にどこか気薄な気配を纏うホムンクルスが写真を取り出し、イリヤの前に差し出した。

「リズ…黙りなさい。」

「——いいわ……サーヴァントの召喚、今すぐ行いましょう……最高のサーヴァントを呼び寄せてみせましょう、お爺様の思惑に乗る気は無かつたけれど……潰して、やる……衛宮、士郎——！」

憎しみが、頭を支配する。

愛情が、憎悪に変わる。

愛しいと言う心は……一歩バランスを崩せば一転して対象を滅ぼすモノへと変わり果てる。

捨てられた。

キリツグは、私を、捨てた。

壊した。

あの人は……アインツベルンを裏切り、なおかつ私を……私を、捨てた！

幸せだったのに、お母様が帰らないのは仕方ない、決まっていた事だもの。

聖杯戦争が起きた時からわかっていたから、でも。

キリツグは——生きていながら私を迎えにこない。

その上、養子を？

様々な考えが浮かんでは、怒りに塗つぶされる。

無意識に指を噛みながら、地下室への階段を降りていく。

「……これが、聖遺物……」

赤い高級感のある布にくるまって、細長いものが安置された祭壇。

否、細長い、とは遠目に見ての話。

全体のシルエットとしては確かにスラリと長い：両・片手汎用のツーハンドソード。

しかし、その全長は優に3m

槍よりも長く、刃だけで2mを超える。

人が持つには巨大すぎる、剣であつた。

「リズ、セラ。」

「はい、お嬢様……準備は万全で御座います、後は魔力を注ぎ、呪をのせるだけ……」

「よろしい、ならば……始めましょう。」

時刻は、丁度月がのぼる頃合いだ。

魔力の循環も問題は無い。

「……素に、銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には大師、シュバインオーグ。

降り立つ風には壁を。

閉じよ閉じよ
四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ、
閉じよ閉じよ

閉じよ閉じよ
閉じよ閉じよ

身体中が、沸き立つ。

魔力回路が焼き切れそうな程、熱い。

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。」

「—————Anfang」

感じる。

すぐ側に——人智を超えた、神に連なる者が。

「—————告げる」

「—————告げる。」

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ！」

「誓いを此処に、我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ天秤の

守り手よ——!!」

視界が白に染まる。

閃光が奔り、目の前にある巨大な剣が、浮き上がり…、空中で静止する。ボワツ、つと噴き上がったのは真紅の炎。

炎は輝きを増し、剣の周りで渦巻いたかと思うと、やがて人の形を成した。神々に祝福されたその見事な肉体美。

均整のとれた芸術的な身体のライン。

隆々とした筋肉が、しかし無駄なくついている。

肩から、腰までは魔力を帯びた革鎧を纏い、手甲と足鎧をつけたその、姿。

眼前に横たえられた、巨大な剣に手を伸ばす。

まるで、喜びに打ち震えるかのように剣が啼いた。

キイイーン、と澄んだ音色が地下室に反響する。

柄にその指先が触れた途端。

炎が噴き上がり、かの者の身体を覆う。

「!?」

イリヤが驚き、目を見開きその様を見る。

「ー懐かしいな、変わらぬ様で何よりだ。」

炎はしかし、彼を焼き尽くすどころかその身体を優しく包み、挨拶だとばかりにじゃれつくだけであった。

巻き上がる髪は炎が照り返し、輝くばかり。

「サーヴァント、セイバー……■■■■、召喚に応じ参上したー。」

剣を手に、跪き、頭上に掲げる。

まるで臣下が王から騎士の叙勲を受ける様に。

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン……私が貴方のマスターよ、セイバー。」

セイバーはその言葉に、ただ黙って頷き、主となつた少女の言葉を待つ。

「流石は……■■■■最強の英霊ーなんと言う輝き、なんと言う……神気。」

生唾を飲む音が嫌に大きく耳に響く。

眼前で自らの主に跪き、剣を差し出す姿すら。

神々しいその威容。

「これならば……此度の聖杯戦争……お嬢様の勝ち……ね」

聖杯戦争開始の半年以上前。

聖杯のサポートすら無く……イリヤはサーヴァントを召喚してみせたのだ。

冬木ですら無く、遠くアインツベルン所縁の地にて。

「セイバー、これより貴方は我が剣、そして……私のー」

今代の聖杯戦争中最高峰の英霊は、最優のクラス、セイバーとして、限界した。

第8話『円環矛盾』

林の中、走り回りながら飛来する釘剣を躲す。

先ほどからあの女サーヴァントは…二対一の不利を悟ってか、サーヴァントでは無くマスターを狙いうちしてきた。

「っ、また!？」

ガキン!、とアーチャーの双剣が凜に迫った釘剣を弾き、即座に相手は飛び退いて、と似たような攻防を数合続けていた。

「ええい、しつこい奴…っ!」

アーチャーが苛立ちながらも相手を補足しようと辺りを探る。

しかし、早い。

「ランサーとは違うが…立体的な機動とは厄介なものだなっ…!」

「純粋な速さならランサーに分があるでしょうね…っ、でもこう飛び跳ねられちゃ…!」

「ち、俺の精霊の狂騒^{キスル}の効果範囲を見切りやがったか…範囲ギリギリから仕掛けてきやがるな…!」

迂闊にもスキルを見せてしまったのも悪かった、その効果範囲を相手に見せてしまっ

たのだから。

警戒した相手サーヴァントは先ほどから一定距離を保ちながらしか仕掛けてこないのだ。

「埒があかねえ、これでも喰らいやがれ！」

と、自分の宝具である槍をあつさり投擲するバーサーカー。

「!？」

これには流石に驚き、更に大袈裟に飛び退く相手サーヴァント。

(こいつ…あつさり槍を投げただと?)

アーチャーはそう、訝しむ。

しかしその答えは直ぐに出る事になる。

ズリュ、つという感じにバーサーカーの掌から槍が生えたのだ。

「!」

まるで体の一部を切り離して投げただけに見えた。

何せ槍は直ぐに取り出され、二本、三本、と次々に投擲されたからだ。

「く、なんとデタラメな!？」

紫の髪を振り乱しながら、奇妙なアイマスク姿の女サーヴァントは必死に回避行動をとり続ける。

「クハハハハ、そらそらそらつまだまだあるぞ、逃げろ、怯えろっ！」
段々とバーサーカーらしい、というか恐ろしいほどの笑みを浮かべ、高笑を続ける
バーサーカー。

「…分が悪い、か」

そう呟き、大きく距離を取るサーヴァント。

そこに、苛だち混じりの声が聞こえた。

「ちっ、何やってんのさ、ライダー？」

舌打ちを隠しもせず、罵りを上げるその声は。

「…し、シンジ？」

間桐慎二。

桜の兄で、衛宮士郎の同級生。

私に、散々ちよつかいを出してきたあのワカメが、そこに居たー。

なんだ、一体何が？

何故、慎二が、サーヴァントを…？

ライダー、そう呼んだ。

つまり、それはー

「…間桐くん…貴方がマスターだったなんてね…気がつかなかったわ、どうして？ 間桐の家系はもうー」

「魔術師として、枯れ落ちた、つて？ あのさ、知識はあるんだ…幾ら僕に魔力や回路が乏しかろうがさー方法は、あるんだよ遠坂。」

してやった、としたり顔で言い放つ慎二。

だが、待てよ。

おまえが、マスター、だったのなら。

「答えろ、慎二。」

「あ？ 衛宮？ なんだよなんだよ、おまえがマスターだったの？ 生意気だなあ…衛宮の癖にそおんな強そうなサーヴァント、従えてさあ…」

勘違いも甚だしい、が。

誰もわざわざ正すことはなかった。

「…答えろ、よ…この、結界は慎二、おまえが仕掛けたのか？」
聞きたくはない、だが聞かなきゃいけない。

「は？ ああ、そうだけど？」

あつさりど、ヤツはそう、答えた。

「し、慎二イイ!!」

激昂し、突撃する。

「あ、馬鹿、懲りなさいよあんたは！」

凜が慌てて宝石を構え、放つ。

「あゝっ、もうっ、勿体無いつ！」

切り札の寶石程ではないが、それなりに高価なそれを躊躇いながらも起動する。

「弾けろっ！」

投げ放たれたトルマリンから迸る電撃が視界を紫電で染め、奪う。

「穿て。」

バーサーカーの声に反応して、其処彼処に突き刺さっている槍から一斉に、刃が伸びた。

穂先の根元、横向きに左右三本ずつある刃が凄まじい勢いで。

偶然、その内の一束がライダーの肩を切り裂く。

「ぐっ…!?!」

「ちっ、本気で何してるんだよお前はあつ、もう、いい…一旦退いて…」

即座に慎二を抱え、校舎のある方へと飛び退くライダー。

「逃がすかよっ！」

バーサーカーと、士郎がまた懲りずに走り出した、その瞬間。

ズクン。

視界が一瞬ローブれた。

甘い匂いが増し、辺りに充満する。

「ぐっ……これ、はー！」

士郎が走り出した足を止め、口をおさえる。

「不利を悟って……ついに切り札をきつたと、そういう事か……」

アーチャーが眩き。

「あんの、ワカメ頭っ、なんて事を！」

凜が吠える。

「言ってる場合、かよっ先に行くぞ！」

士郎が、叫び、走り出す。

「フィジカルブリスト肉体強化・開始オン！」

それは、魔術の行使に他ならない。

呪文とか、掛け声みたいなそれはイメージを引き出し形にする為のものであり、なん

でもいい。

魔術師には別段代わり映えのない自身の肉体強化。

凜は、精々思っていたよりまともな魔術が使えるんだ、程度の感想。

朔弥は、あ、あれ良いなあ、自分は使えないし、程度の感想。

しかし、一人の男は違う。

驚愕に目を見開いていた。

(ば、馬鹿な——何故、あんな魔術を使える！)

有り得ない。

今、この時代の、この男が此れ程自然に魔術を使えるなどと。

そう、考えても見ろ、今回の円環^{クル}は、明らかにおかしいのだ。

彼女が居ない。

まるで知らないバーサーカーが居る。

何より、本来ならば彼女についての記憶以外は殆ど磨耗し、或いは聖杯が記憶を封じていたのかもしれないと、今ならば思い至る——が。

今回は余りにも、思い出せる事が多いのだ。

目の前で逃げたライダー。

彼女も覚えている。

真名や、マスターに関しては確かに記憶に欠落があり思い出せない。

しかし——姿形、それそのものは見た瞬間に思い出した。

どういう訳だか、彼女と自分がどこか近未来的な場所で笑い、語り合う姿まで見えた。

訳がわからない。

この、記憶は——何だ！

校舎へと走り込む土郎、遅れて続いていく凜、朔弥。

それに追隨しながら混乱する思考を兎に角今は、と隅に追いやり切り替える。

「……」

三人と二騎が足を止める。

生徒達が、廊下で、教室で倒れ伏していた。

生徒だけではない。

そこには……意識を半ば以上混濁しながらも生徒をどうにかしようとしている、藤村大

河の姿もあつた。

「あ、あれえ……土郎？」

「……藤、姉っ！」

「よかつたあ、大丈夫そ、うだね……」

安心してか、そのまま——パス、と土郎の胸に寄りかかり意識を手放す、大河。

大河をそつと横たえ、視線を前へと飛ばす。

「……慎二。」

「何だよ衛宮？」

廊下の突き当たりには、慎二が立っている。

その前には、サーヴァント、ライダー。

「最後だ、聖杯戦争なんかから手を引け、この物騒な結界を解除してー」

ズバツ、と黒い何かが士郎の頬を掠めた。

ツ、と赤い血が流れる。

「馬鹿なの？ やめるわけないじゃんか…それとも二対一だからって調子に乗ってるのか？」

スウ、と士郎の目が怒りに細くなつて。

「残念だ、本気で残念だよ慎二。」

「よせ。小僧ー貴様が魔術を使えるからと、サーヴァントに…」

アーチャーが制止し、自分達に任せろと言わんとして。

「よけいなお世話だ、あいつはさ…友達なんだよ、だからー俺がやらなきや、いけないんだよー^{トレイス}投影、^{オレン}開始！」

左手には肉厚の刃を持ったナイフ。

所謂軍用ナイフ、ファイティングナイフと呼ばれる物だ。

右には拳銃、回転式ーリボルバーと呼ばれるタイプの大口径の物だ。

ダンウエツソンモデルW12。

357マグナム弾を吐き出す、本来なら片手で扱うような代物では無い。

「ーっ、やっぱり刃物はまだしも拳銃の類は反動がきついな、クソ。」

軽く頭を振り、頭痛を振り払う土郎。

「な、ななな、なんだ今のっ、どこからそんな物騒なモノ取り出した!?!」

「ー問題ありません、慎二、あの様な現代兵器など我々サーヴアントには通用するわけ

がー」

ガオン!!?、ガキーン!!?!!?

「ーっ!?!」

「流石は、英霊…今のを止めるかよ。」

確かに、不意とはいえ彼女、ライダーは弾丸を止めた、いや…辛うじて弾いた。

何故そうしたのかと問われれば、悪寒がしたのだ。

何故だか、これは食らうわけにはいかない、とー。

弾いた弾が、彼女の髪を掠め、引きちぎっていた。

数本の紫髪が宙を舞う。

「ー何です、何なんですか貴方は。」

釘剣を構え、油断なく構えるライダー。

敵は二騎と、さらに一人。

自身に致命の一撃を与える可能性が増えたのだ。

もはや一瞬たりとも気は抜けない。

「な——！」

凜、そしてアーチャーは混乱の極みにあった。

有り得ない、今の士郎が使った魔術。

何もないところから武器が生成された。

更には弾丸の威力。

髪とはいえ、サーヴァントの身体に損傷を与える。

つまりそれは、無から生み出された概念礼装だということか。

「——出鱈目だ、貴様、一体——？」

アーチャーの驚きも今は士郎には関係がない、むしろ都合がいい。

慎二は、自分が止めるのだから。

「正義の味方——見習い、つてところか、な。」

ありえない、凜は目の前の光景が信じられず、繰り返し心中で呟く。

（投影？いえ、物資の創造魔術？

にしたってそれが概念を帯びているとかどんな奇跡よ——!?)

今にも叫び出したいくらいだ。

しかもあいつは。

マスターですらないのだから。

「ー不本意ではありませんが、使わせていただきましょう…いいですね？ 慎二？」

ライダーが、意を決した顔ー口元しかわからないが、をしてこちらを見据えた。ふ、と力みなく左手が上がり、眼帯を外した。

「これはーまずい、皆、奴の目を見るな！」

アーチャーが何かに気づいて、叫ぶ。

だが、遅かった。

ライダーの眼帯、自己封印・ブレイカー・ゴルゴーン暗黒神殿が外される。

現れたのは蛇眼。

見たものを石へと変える、魔の瞳。

「ーこいつは、石化の魔眼かよ！」

「や、やばっ足が！」

焦る凜、バーサーカー、アーチャー。

足が徐々に石へと変わっていく。

サーヴァントはまだマシだ、対魔力によってその侵攻は緩やかだから。

だが、凜と朔弥は見る間に石化が進む。

「うぐ!?!」

そしてそれは、士郎も同じく。

サーヴァント二騎がいる事から油断したのだ。

士郎以外の面々は完全に射程から逃れ損ねた。

士郎もまた、機敏に反応したものの片足が石化し始めていた。

「――衛宮先輩――頼みました。」

朔弥が、そう一言告げる。

朔弥の片手から、翠色の光が降り注ぐ。

イシスの雨。

彼女のもつ数少ない魔術の一つ、その効果は、あらゆる状態異常の回復。

そしてそれを最後に朔弥が一気に石化する。

魔術をオーバーロードさせ、すぐ隣の凛にかかる呪いを力技で強引に自身に集めたのだ。

「え、ちよつと!?!」

「――!」

士郎は唇を噛み締め、血を流し、直後に叫ぶ。

「ッ、アアッ――!」

ズガアアン!

けたたましい音を立て、弾丸が奔る。

起源弾。

衛宮切嗣、魔術師殺しが切り札とした魔を破壊する弾丸が放たれる。

「ぬ、うー!」

美貌を歪ませながらライダーが仰け反り、回避しようとするも、完全にはかわしきれずに額を掠める。

威力は殆ど通らない。

僅かに額の皮を削り、血を流した程度の。

サーヴァントにしてみれば数秒もかからず治癒する程度の傷が。

彼女を、毒に浸した。

「うーこれ、は…魔力の流れが!」

「お、おい!」

狼狽える慎二。

そして、ライダーは…

「うーうーッ」

声ならぬ叫びを上げながら、自らの喉を。

切り裂いた。

第9話 『瞳』

舞い散る血が、宙に陣を敷く。

描き出された魔方陣が、其処に何かを呼ぶ。

「なんだ、あれ……？」

「アー不味い、全員躲せえっ!!」

アーチャーが叫ぶ。

閃光、次いで轟音が遅れて響き渡る。

校舎の廊下を蹂躪したそれは、進路上の全てを薙ぎ倒さんと走る。

「ち、朔弥ツテメエは本当に手間あかけさせやがるな！」

素早く、石にされた朔弥と、ついでとばかりに横たえられていた大河を抱え、3階の窓から飛び退くバーサーカー。

凜はアーチャーが、士郎は躲せない。

躲せる様な位置にはいなかった。

「衛宮君アーッ!!」

アーチャーに抱えられたまま、凜が悲痛な叫びを上げる。

夕日が美しい校庭で、いつまでもいつまでも。

ひたすら愚直に、高跳びを続けていた姿。

挫ければいい、諦めたらいい。

無駄な努力なんかアーチャー見ていてアー

見ていて、なんだっただろう。

何故、今更あんな光景を思い出すのか。

割れたガラス片がキラキラと乱反射しながら地面に落ちて行く。

「う、そよねアーあんたが、あんなに諦めの悪い奴がそんな、嘘よね？」

アーチャーの懐から、着地と同時に抜け出し、校舎を見上げる。

なぜか、鼻の奥がツンとする。

痛い。

眼に涙が、溜まる。

「アーっ、痛くて、クソッ、無茶苦茶しやがってあの野郎ッ」

だから。

背後から聞こえた、その呑気な声が誰だ、なんて一瞬わからなかった。

見る間に凜の顔が、蒼白から健康的な肌色を通り越し、真っ赤になって行く。

ー耳まで。

「ーなんで生きてるのよこのスカタン!？」

ゴスツ!

と鈍い音を立てて、士郎の頭を殴打したのは握り込まれた凧の拳だった。

「は?、いや遠坂、な、なん…痛つ、痛い!」

涙目で士郎を小突き続ける凧。

あまりの事に呆然とするアーチャーとバーサーカー。

「なんだ、ありやあ?」

「私に聞くな…。」

どうにも疲れた顔で答えるアーチャー。

どうやらライダーの気配は無い。

逃げたか。

ダメージからか結界は既に解除されていた。

じき、体力あるものから目覚めるだろう。

廊下に大河以外がいなかったのは幸いだった。

もしも居たら今頃は微塵にされていたところだ。

後は凧が落ち着いてから考えるか、とアーチャーは自分もまた混乱する頭を抱え、振

る。

「本当になんなんだ、これは。」

アーチャー、心底から漏れ出た本音であった。

「…なんでさ…」

あの後。

監督役にあたる聖堂協会の神父、言峰綺礼に凜が連絡を取り、校舎の中の魔術的な証拠の隠滅後と同時進行で、生徒や藤姉は病院へ搬送された。

表向きは民間協力、という程だが実際には消防にも聖堂協会の息がかかった人物がいるのだろう。

素早い手際だった。

そして、何故かこんな状況になっている。

石化した九重を運び込み、解呪には敵サーヴァントを倒すのが一番早い、と結論が出たわけだが。

その後に何故か士郎へ凜の怒りの矛先が向いていた。

「当たり前でしょう、私は冬木の管理者なんだから、貴方みたいな魔術師を野放しには出来ないわよ。」

「いや、それはわかった、わかったけど…なんでそれで、俺が遠坂の弟子にならなきゃー」

「だって今貴方の師はいないでしょう、その上知識だって中途半端。」

「いや、俺これでも親父が残した課題はやってるしー自主鍛錬だって欠かして無いぞ？」

士郎の言い分に、凜はため息を吐きながら答える。

「あのねー貴方が魔術を発動する時…わざわざしなくても良いプロセスを踏んでるのよ、わかる？」

「いや、そうか？」

「そ、う、よー！」

「ずい、と顔を近づけながら凄まれ、何故か士郎は赤面しながら後退る。」

「いや、遠坂、近い近い！」

「ー初心か。」

「そう、ならやってみなさい簡単な魔術でいいから発動して見せて？」

顔を離れた凜も、こころなしか耳が赤い。

「ーなんなんだよ…」

ぶつくさ言いながらも集中する。

身体に魔力を通し、路を作る。

「それよっ!」

と、鋭い指摘の声が聞こえた。

「え、あ!」

集中が途切れ、魔力が霧散する。

「そんな無駄な事に命をかけてどうするのよ、貴方は。」

「は?」

きよとん、とまるで解らない士郎。

「ーっしっかりしてよね、貴方には嫌でも朔弥を元に戻すために戦力になってもらわなきやいけないんだから。」

「いや、魔術つてのは、死が本質なんだから? だから、危険で当たり前なんじゃー」

「士郎、貴方ね…毎回ーから魔術回路を…創ってるでしょう…?」

「ーっえ、駄目なのか?」

「はあ、当たり前よ…毎回毎回身体を作り変える様な真似して…負担が大きすぎる、制御に失敗したら死んだっておかしくないのよ?」

「や、だからさ…魔術つてのはー」

同じことを繰り返そうとすると、何故か凜の顔が強張って。

「これ、呑んで。」

そう言つて差し出された赤い何か。

「飴玉…?」

確かに、呑み込めと言われれば可能だろうが…

丸呑みと言われたら少しきついサイズだ。

「宝石よ。」

しれつと言われてしまった。

「はっ!?!」

腹壊すだろ、それ!

「大丈夫よ体内で貴方の魔力と同化して吸収されるはずだから。」

いや、だとしてもやはり抵抗はある。

異物を呑み込めと言われたわけだし。

「いいから、呑みなさい!」

ガ、と頬を挟まれて口を開けられ、そのまま口に捻じ込まれた。

「モガッ!?!」

死ぬ、宝石が喉に詰まって!

——本当にそうになったら、多分世界でも珍しい死に方だなあ…つていやだから!

「ぐ、は、っ…あ、あれ？」

意外にするりと胃に収まる宝石。

しかし、急激に視界がグラグラしだした。

「……!?」

毎日の鍛錬でたまに起こる…制御に失敗しかけた時のような感覚。

背骨の中心に灼けた鉄を差し込むような、綱渡りの作業。

それがズレて、肉が灼け、沸騰しかねない痛みが心を焼いていく。

「…、あ、が、あ…」

「え、ちよつと嘘、なんで逆に魔術回路が乱れて…」

士郎の身体が震え、その焦点が定まらなくなっていく。

「…ち、この小僧…今まで薄氷の上を歩くようなバランスで魔術を行使してやがったな…やっぱりこいつは俺のお仲間だなあ…もしサーヴァントになるようなことがあれば…バーサーカー適正があるんじゃないやあねえか？」

そう、冷酷なまでに批評を述べるバーサーカー。

「…このまま制御できなきやあ、死ぬぞ？」

「なん、で…魔術回路のオンとオフを切り替えられるように、つて…ただそれだけの…」

凜の顔が段々と焦りに囚われる。

「それだけデケエ爆弾抱えたままやってやがったのさ、この小僧は。」

「馬鹿じゃないの？ 勝手に首を突っ込んでおいてーそんな、危険抱えたままになんの得にもならないのに……でも、」

（何より許せないのは、それに気付きもしないでこいつを戦力だなんて、駒みたいに扱った私自身だ。）

「アーチャー、できたらバーサーカーも、暫く……こつち見ないで。」

凜の手が、士郎の震える身体を抱きしめて。

頬を染めながら近づけた唇が触れた。

「……………」

舌が絡み、二人の唾液が混じり合う。

数秒か、数十秒か。

凜にとっては長く。

士郎にとっては一瞬に過ぎた刹那。

凜の舌を通して注がれた魔力が、士郎の内で荒れ狂っていた魔力の激流を優しく絡め取り、その動きを正して行く。

やがて、士郎の視界は開け、其処には美しい一対の碧い宝石ブルーサファイアの様な。

凜の瞳があつた。

「ーと、遠…坂？」

つ、つと唾液が糸を引き、どこか茫洋として意思が感じられない、凜の赤く火照つた顔が離れていく。

いつしか震えは止まり、身体の痛みが和らいでいた。

数十秒程切ない表情のまま、肩で息をしていた凜が徐々に呼吸を戻していく。

「か、勘違いするんじゃないわよ…私の見立てが悪かったの、だからーあんたが危うく死にかけてた、そんなもの私のプライドが許さないの、それだけだからね？だから、助けたの！」

顔どころか手指の先まで桜色に染めて、凜は早口にまくしたてる。

（今のは、違うー治療、治療行為なんだから）

「小僧、その嬢ちゃんに感謝するんだな。」

「え、あ…そうか…俺、魔力の制御に？」

「ああ、嬢ちゃんが与えた石がきつかけじゃああるがよ…今嬢ちゃんがああしてなければ、遠くない未来に今より酷い状態になってー間違ひなく死んでただろうぜ。」

「ーそうか、ありがとう、遠坂。」

「いいわよ、あんまり危なっかしいから放っておけなかつただけなもの。」

凜は視線を外しながらも横目でチラチラと土郎を伺いながら、髪をクリクリと弄り回し、おちつかない。

「ーそんなこと言われたらますます：男としちや黙つてられないじゃないか：何でも言つてくれ、遠坂。」

「ーだから、気にしなくていいってば。」

「そうはいかない、責任つてもものがあるだろう。」

「は!?せきつ：?」

ゆでダコみたいに赤くなり、狼狽える凜。

「ーああ、遠坂に負担をかけちまった、それは俺が未熟だったから、その責任は自分が負うべきだからー」

当たり前、とばかりに見当外れな話をしだす土郎。

その頭を誰かがむんずと掴んだ。

「ーうちのマスターを自覚なくナチュラルに口説くのはやめてもらおうか。」

アーチャーは酷く爽やかな笑顔だが、その頬はひきつり、こめかみには青筋が浮かんでいた。

「え?、違つ何だお前、や、止めー痛ダダダダダ!?」

「来い!魔術が知りたいなら教えてやる!」

赤い弓兵が力づくで士郎を引きずっていく。

「あ、アーチャー!? 何言ってるのよ貴方は、ってちよつと待ちなさい、コラ!」

「ーぶ、クアツハハハ!!」

その様子を見ながら大笑いするバーサーカー。

：石になつた朔弥は、思つた。

(私ー忘れられてないよね? ね!? 何このラブコメ展開っ!?)

石にはなりながらも。

意思はあつたのである。

石だけに。

衛宮家から少し離れた民家の屋根。

月明かりに照らされ、長い影が伸びていた。

暗い雰囲気を纏うその一種異様な立ち姿。

檻樓を纏い、身体つきも判然としない。

ただ、異様に掠れた声、息が、漏れ出ていた。

「ーエッ ミャー」

確かに、その影は口にした。

えみや、と。

第10話『デイウォーカー』

「しつこいね、君も。」

くたびれたコートに啜え煙草。

ボサボサの黒髪に無精髭と、それだけなら実に清潔感の無い、ただの中年にしか聞かえない姿、しかし男の眼光は鋭く、立ち姿に隙は無い。

「しつこくもなろうが……貴様、我を散々に痛めつけておいて滅ぼすでも無く放置しよつてからに……舐めているのか!？」

金髪、碧眼に野生の獣じみた目をギラつかせ、男を睨むのは酷くアンバランスな美形だった。

その眼に似合わず華奢な身体、しかし牙は長く、身体からは魔力が嫌と言うほど垂れ流しである。

「ー僕としては切り札まで使って滅ぼせなかった方が驚きなんだけどね。」

呆れたように眩き、やれやれとポーズをとる。

「巫山戯るなつ、いつそ殺せえ!？」

叫びによじる彼の動作が妙に艶めかしい。

ああ、よく見れば彼ではない。
彼女、だ。

控えめだが胸はある様だし、身体も丸みを帯びていて……中学生位の少女に見えた。
見た目だけは。

「できたらやっていいる、僕としても吸血種——それもデiwオーカーにつけ狙われるのはさすがに疲れる。」

デiwオーカー。

陽を往く者。

吸血種にとって弱点であるはずのソレを軽く克服するほどの高位存在。

中には空想具現化、などという宝具に類する力を有している者までいるらしい。
死徒、中でもとりわけ古く強力なのが真祖。

目の前の美形——いや、少女は。

真祖でこそないが実に齡300を越す超越者である。

男、衛宮切嗣は以前、彼女と死闘を繰り広げた。

とある魔術師が、自分の子供をつけ狙われて彼に古い伝を頼って助けを求めてきたのだ。
だ。

ナタリア・カミンスキー。

彼、切嗣の師にあたる人物と魔術師、九重十歳は所謂、同級生、兼情報屋。

フリーランス、一匹狼だったナタリアに様々な情報を渡したり、物資を支援していたのが、彼や、その徒弟だった。

「九重氏も何故こんな面倒を…」

とはいえ、子供を殺そうなどと言う輩を放置もできない。

正直に言つて自分の身体は本調子から程遠い。

第四次聖杯戦争で受けた痛手は今尚彼を蝕んでいるのだから。

「君は、力に頼りすぎだ…それほどの魔力をただ垂れ流し、叩きつけることしか出来ていない、だから今の僕にすらあしらわれるのさ。」

淡々と、話しながら冷静に魔力と身体能力に任せた連撃を捌いていく。

「君、ではない！我が名は白金——明けの白金、イルマ・ヨグル・ソトホープだ、覚えておけ、雑草が！」

大層な二つ名だが、彼女自身はさほど強くない。

地力はともかく技術が無い。

故に、こうして怒らせておけば対処は容易だった。

罠にもかけやすい。

ほら、今みたいに。

「ーぬうあああ、あ?」

ピン、と何かが抜ける音。

仕掛けておいた聖水入りの手榴弾の安全ピンが抜けたのだ。

本来なら破片をばら撒き、中にある殺傷能力の高い金属片が飛び散るのだが、これは特注で、中には圧縮した水、聖水が仕込まれている。

金属でなく特殊な圧縮ビニールに入れた水が。

凄いい勢いで飛び散った水は弾丸さながらの勢いで彼女の全身を叩く。

「あ、あだ!?あ痛たたたたたっ!!」

白煙を上げながら床を転がるイルマ。

更には転がった先で網が飛び出し、イルマを吊りあげた。

切嗣は既に射程外に退避済みである。

「な、なんだこれー!?」

ジタバタもがくが、中々切れない。

聖銀を編み込んだ特注である。

「さて、これで終わりにしてくれないかな…僕には君を滅ぼす手段が無い、しかし君は僕には勝てないーこんな泥仕合はもうやめて欲しい。」

「んぎゃん…ー」

自分の服を噛んで悔しがるイルマ。

いや、シャツが捲れている、見えるからよしなさい、とは切嗣は言わなかった。

…指摘したらしたで面倒そうだからだ。

「それじゃあ、僕は行くよ、君も僕みたいな死に損ないにこれ以上拘らないほうが良い。」
そんな屈辱の記憶も…もう、随分と昔の事に思えた。

「まず、貴様の間違いを一つ正しておこう。」

頭を鷲掴みにされ、引き摺られながら連れてこられた中庭で、俺は今アーチャーから魔術の講義を受けていた。

「間違い？魔術回路のスイッチって話ならさつき…」

ギロリと睨まれた。

流石にサーヴァントに本気で睨まれたら怖い。

「そうではない…魔術には起源と言うものがあるのは知っているか？」

「あー、切嗣がそんな話をしてくれた事はあったなあ…俺の起源は、「剣」だとか？」

「そこまでわかっていながら何故貴様は先の戦闘で銃などを投影したのだー馬鹿か。」

「あれくらいしかサーヴァントに通じそうなものがなかったんだよ…銃の投影が負担がデカイこと位わかってたさ。」

「戯け、まずそこから間違いだというのだ。」

「は？」

「貴様に出来る事は何だ。」

「出来る事？」

「そうだ、貴様はあれやこれやと器用にこなせる様な人間でもあるまい？」

「――決めつけられるのはいい気分はしないけど……まあ間違っちゃいない、かな。」

「そうだ、不器用なお前が出来る事など限られている、相手が人外、それも英霊ならばなおのことだ。」

ドヤ顔しやがって……どうにもこいつは虫が好かない。

「――故に、勝とうと思うな、最善を尽くせ、己の中の最強をイメージしろ。」

「イメージ……」

「そうだ、貴様に出来るのは魔術を競う事でも、白兵戦を挑んで無様に切り捨てられる事でもない、勝てないならば――勝てるモノを幻想しろ――私が教えられるのはそこまでだ、後は我々サーヴァントの戦いを見届け、糧にしろ。」

「――お前さ、ただいけ好かない奴じゃあなかつたんだな、いけ好かないお人好しだ。」
などと。

いつの間にか口走った自分に驚きだ。

「アーファン、いけ好かないのは私も同じだ、戯けが。」

今夜の講義はこれまで、なんて掛け声も起立、礼！も無いが、二人して牽制する様に苦笑いしてどちらともなく屋敷に戻ろうとした、その時。

けたたましい警報アー魔術的な侵入者への警報が働き、脳裏に響き渡った。

この場合、士郎に認識された味方アー

凜、朔弥に士郎、サーヴァント二人をを入れた5名に、だ。

「アー侵入者？」

士郎、アーチャーの声かハモった瞬間であった。

「やっぱり、簡単には行かないかアー」

想定より早い、が：恐らく再度ワカメーいや、ライダー陣営が仕掛けてきたか、もしくは新手のサーヴァントか。

「朔弥、もう少しだけ我慢しててね：ちゃんと元に戻してあげるから。」

石になった朔弥に語りかけてから、凜は中庭に面した窓を開けて、廊下に姿をさらす。

「アーチャー!!」

声と同時に、戻ったアーチャーが霊体化を解き、傍に出現した。

「やかましいな、この音アーはやいとこネズミを仕留めるとしようや、なあ？」

バーサーカーは好戦的な笑みを浮かべ、そんな眩きを発した。「そうだな、それには同意しよう…来たぞ。」

塀の上から、中庭にドズン、と重い音を立てて着地したそれは、獣じみていた。身の丈は高く、2.6m程か。

吐く息は生臭く、全身は筋肉の塊の様な姿。

一枚の檻褸を羽織り、下は獣毛に覆われ、足先は異様に長い爪が地面をえぐる様に固定している。

「サーヴァント、では無いな…これは…死徒か。」
死徒。

中でも低級なゾンビ、レッサーバンパイア。

その類か、と見当を付けてアーチャーは頭の中で対策を練り始める。

「ふむ、高位の魔術師か…もしくはキャスターの使い魔か？」
コキコキと肩を鳴らしながら言うのはバーサーカー。

「なんにせよ、敵には違い無いわけね。」

凜の声が、開戦の合図だった。

「は、違い…無えな！」

ブオン、と空を切り月明かりの下紅い魔槍が閃いた。

それを受け流そうとした死徒だが、力の差は歴然。

刃こそ逸らしたが直ぐに力負けしてよろめいた。

「ぐ、えミヤ…キリツグウ！」

生臭く息を吐き出しながら発した言葉。

「親父の名前…？」

士郎が疑問を抱き、躊躇するが周りは違う。

アーチャーは既に再生能力を持つ死徒を滅ぼすのに適した武器を取り出していた。

士郎に聞こえない程度の小声で投影を行って。

「ハルペー…不死の怪物の首を刈り取る不死殺しー受けるがいいー」

ハルペーは緑の光に変換され、アーチャーの持つ弓につがえられた。

即座に射られたそれが目の前の異形を貫きかけた、が。

「私のお人形を壊さないでくれないかしら…守護者のクソ野郎様？」

指二本でそれを止めたのは。

ふわりと舞い降りた、ゴスロリ風のやけに露出の多い衣装に身を包んだ、金糸の様な

髪に、美しい碧眼の美少女だった。

「ー何者。」

アーチャーの声が警戒を強めている。

バーサーカーすら今は黙して様子を見ている。

「私？私は白金、白金プラチナム・ドーンの夜明け……イルマ・ヨグル・ソトホープ様よ！崇め奉れ、雑草どもー！」

「ー頭大丈夫かしら、あの娘。」

思わず呟いたのは凜。

いや、無理からぬ話ではある。

見た目中学生女子。（圧倒的な美少女ではあるが、やはり外見は中学生。）

それが、崇め奉れとか言ってるのだ。

しかも露出多めのコスプレスタイルで。

「ーとりあえず死んどけや。」

そう言いながら恐ろしい速度で踏み込んだバーサーカーの槍が少女を捉えた。

ギヤリン！

指二本で挟んでいたハルペーを逆手に持ち直し、槍を止める少女ーイルマ。

対してバーサーカーは笑みを深め、槍をさらに振り回し、突き出した。

「ハ！面白えな、テメエー！」

嬉々としたー或いは鬼々とした表情で槍を振るう。

速度は秒毎に上がり、今や凜の目には捉えきれなくなっていた。

「面白え、が…崇め奉れだど？…俺は王だ、王を前にその不遜…万死に値するな、ええ？」

そうだ…俺を使って良いのは、好きに発言を許すのは…三人だけだ。

女王、メイヴ…俺を生み出した始まり。

そして。

絶望を乗り越えて俺を打破した双子…あの二人だけだ。

一直線に槍を突き入れ、正面から挑む。

「死などとうに乗り越えておるわ、しゃしゃるなよ若僧が…！」

イルマが空いた方の掌に魔力を集める。

ほの紅く輝くそれは圧縮された破壊エネルギー。

「弾け飛べ…雑草が!!」

「喰らうかよ、マヌケ。」

バーサーカーはあたら不自然なまでにその進行方向を捻じ曲げた。

「うわ、尻尾で軌道修正とか…」

呆気にとられた凜。

隣ではアーチャーもまた毒気を抜かれた様にしてバーサーカーの動きを見ていた。

いや、むしろいずれ敵に回る可能性が高い彼を見て、共倒れば良いとか考えてる顔だ、あれは。

「ち、見かけの割に器用な奴じゃな！」

イルマはそう毒づき、魔力の塊を投げつける。

イルマの手を離れたそれは、最初は塊のままに飛んでいく、がやがて制御を離れたためかバラバラになり、礫の様にバーサーカーの周りに降り注ぐ。

「は、残念ながら俺に飛び道具は通じないぜ？」

矢避けの加護。

一定以下の威力の飛び道具を逸らし、外してしまうバーサーカーのもつスキルの一つ。

そのまま、イルマに再度突きかかるが、そこに先ほどの死徒が横合いから殴りかかる。

「ガウツ！」

「ち、そんな雑魚くらいおさえとけ弓兵っ！」

毒づくバーサーカー、しかしアーチャーは。

「貴様一人では足らなかつたかね、いやそれは失礼したー買い被りすぎだったか。」

「…テメエ、覚えとけよこの野郎…良いだろう、そこまで言うなら俺の力ーしかと目に焼きつけろっ！」

叫び、月明かりを背に飛び上がるバーサーカー。

「全種解放ー…」

禍々しい気配がバーサーカーを包み、フードは硬質化して行く。

「ち、ちよつとまで、まさか、宝具!？」

「加減は無しだー」

体内から何かが飛び出そうとする感覚。

力を振るうのは、いつそ快感ですらある。

「おい、待てて…クソ!」

さらに魔力は高まりー

ズガアーン!!

銃声が、それを遮った。

「待てて、言ってるだろっ!」

魔力は霧散し、硬質化しかけていたフードは柔らかな質感を取り戻し、今にもバーサーカーの体外にせり出そうとしていたモノも再び体内に戻っていた。

「ーなんのつもりだ、小僧?」

バーサーカーの眼が、怒りに、濁る。

「ーそいつらには聞きたいことが山ほどあるんだ、それにー直ぐに殺す殺すと物騒

な事を言うなよな。」

「自分から死にてえのか、ガキ。」

こめかみに向けて放たれた弾丸を片手で受け止め、僅かに痛みを感じ、しかめ面で睨むバーサーカー。

「そんなわけないだろ、だから聞きたいことがー」

「い、今のっ！…今のは起源弾か!? そ、そうだろっああ、やっとだ、やっと会うたな、エミヤーキリツグ !!」

唐突に。

花がほころぶ様などびきりの笑顔で、少女、イルマは。

士郎に抱きついていた。

それはもう、ぎゆう、と。

もう、目にも止まらぬ速度でもって、迅速に、力強く。

「え、何、は?」

驚く士郎、しかし。

「な、ななななっー!?!」

何故か。

一番取り乱したのは凜だった。

第11話 『見上げる空は』

「先程はお見苦しい姿をお見せ致しまして、大変失礼致しました。」

「……ええと、誰、コレ？」

思わず半眼になる凜。

いや、無理はない。

何せ目の前でやたら丁寧な挨拶をしているのは先程の「死徒」なのだから。

「や、違うとか言うレベルじゃないですよね……体格違いすぎないかあんだ!？」

ビシッ!つと華麗なツツコミを入れたのは土郎である。

「お恥ずかしい、あれは戦闘時の姿でして……不細工になるのであまりあの姿はお見せしたくはありませんなあ……普段はこちらの姿でイルマお嬢様の付き人しております、イゴールと申します、以後、お見知りおきを、キリツグ・エミヤ様。」

物腰柔らかに、そう締めくくったのは年の頃にして50代前半と言った姿の初老の紳士。

「どうやっても、先に見た巨体の死徒には見えない。」

「あ、いやだからですね……俺は切嗣じゃあ無くて……土郎、衛宮土郎なんですって。」

「なぜじゃ、起源弾を使いこなすのはキリツグだけじゃろう、何せあれはお前の身体の一部から出来た弾丸じゃからしてー」

何でそんなことがわかるんだ、こいつ。

「は、まったく厄介な弾丸だぜ…まともに食らえばサーヴァントだつて効果無しとはいかぬえだろうからなありゃあ。」

などと、先程軽々と直撃を避けた張本人、バーサーカーがシャアシャアと言っている。

「うむ、儂もアレに初めて貫かれた日は…足腰が立たなくなるほどであったぞ…キリツグの身体の一部に無理やりに貫かれたあの日…儂は生涯忘れ得ぬであろうな…」

ー違うのはわかるんだが、その言い回しはどうなんだ。

「ーあれは複製品だ、本来の持ち主はここには居らんよ…魔術師殺しになんの用事かは知らんがね…こちらは取り込み中だ、人違いが分かったら早々に帰りましたまえ。」

お前はお前でなんでそう刺々しいんだよ、アーチャー。

「ーそうか、人違い、か…しかし良く似ておるなー確かによく見れば姿形は似ておらぬが…あり方が、魂の色とでも言おうか。」

イルマは一人、ウムウムと頷いている。

それをお嬢様、良うございましたなあ、なんてイゴールが相槌をうつっていた。

マイペースすぎるだろ、お前ら。

「ーて、言うかね…どうしてあんたら寛いでるのよ…土郎、貴方も中に入れるんじゃないわよ…」

なんでか遠坂がイライラしてる。

「ー兎に角、貴女に敵意が無いなら本気で帰ってくれないかしら…こちとらライダーは探さなきゃいけないし、忙しいのよ…本当。」

「ふむーイゴール、どうやら儂らはタイミングの悪い時に来てしもうたようだな…キリツグが戦っているかと思うて駆けつけてみれば…なぜか歓迎されてはおらんようじゃし、帰るかや。」

「左様で、それでは…皆様お騒がせ致しましたがこれにて。」

そう言つてイゴールはイルマを抱き抱え、そのまま玄関から退室していった。

「ーあつさり帰ったわね…何だったのかしら…はあ、想定外の事態が多すぎて頭がどうにかなりそうだわ…今日はもう休みましようか。」

「ーそうだな、九重には悪いが…いい加減限界だ、今はそのほうがいい、かもな…」

その時、俺は気付くべきだった。

あまりに自然に言われて。

遠坂もじゃあ、また。

なんて言つて帰つたのかと、そう思つていたので。

朝。

朝がきた。

日差しが優しく僅かに昇り始めた。

徹底的なまでに朝である。

いつもの起床時より少しだけ早いくらい。

昨夜はさすがに疲れた。

遠坂が帰り、流石に九重には悪いがこのままにもできないからと、バーサーカー、オルクと一緒に九重を土蔵に運び、布をかけて隠した。

バー石化、と言つても妙に生暖かいとか、その、ちよつと柔らかいとか思つたのは内緒である。

確かに石にはなつていたが、多分あれは表面だけだ。

身体活動は停止、と言うか仮死状態の様なものらしいとバーサーカーから聞いた。

ただ、長く続くと冗談抜きに完全に石になる可能性もあるらしい。

停滞のルーンとやらをバーサーカーが施していたので暫くは大丈夫だそうだが。

さて、それはそれで問題なのだが――

目下、更に大問題が発生していた。

昨夜は確かに、一人で自室に入って寝たはずだ。しかし。

何故か——人肌の温もりが背中にしがみついているのを感じた。

おかしい。

というか、俺以外にいるのはパーサーカーだけじゃ無いか。

まさか、まさか、な？

『うわ——ん！どこの馬の骨かわからないBL野郎に士郎とられた——つ、士郎が、士郎のお尻が開発されちゃうううっ!!』

などと言う。

物騒極まりない藤姉の台詞が脳内にリフレインする。

「——お、俺にそんな趣味はな——い？」

ガバ、と意を決して体の向きを変えた視界に入ってきたのは。

美しい金髪に、真っ白な肌。

薄いネグリジェしか纏わぬ姿の：イルマが抱きついて寝息を立てていた。

「——なんでさ。」

と、現実から逃避しかけたその時。

襖が開いた。

勢い良く。

スパーン！、と。

そして、そこには。

まるで幽鬼の様な顔でふらつく…

「と、遠さ、か…？」

——凜の姿がありました。

「——むにゃ…ト…レ…何処だっけ…」

なんだか呟いていた遠坂が。

足元も見ずに歩み寄り——

「あ」

つまづいて、こけた。

ビターン！

と音が出そうな倒れ方で、遠坂が俺とイルマの上に覆い被さる、と言うか。

勢いよく下に敷く感じに倒れてきたのだ。

いや、いつそボディプレスだった。

「めぎゆう!?!」

イルマの悲鳴だ……ちょっと可愛い。

「……いい、いったく……何だつてこんなところにつまづく様なモノ、が……？」

「……お、おはよう……遠坂……？」

なんでお前からここに居るんだ、と話をしようと手を挙げたのだが。

俺の上には今、イルマが抱きついた状態でその上に倒れてきた遠坂が、腕立て伏せするかの様な姿勢でその下に俺達を組み敷いた格好でいるわけで。

フニユリ、と。

なんだか極上のマシユマロに触れた様な……いや、しかしこの温もりはなんだろう。

なんて考える暇は無くて……。

一際甲高い悲鳴と、激しい平手打ちの音が響き渡るのだった。

改めて言いたい。

「……なんでさっ!?!」

「……吸血種に、2騎のサーヴァント……衛宮士郎……どうにも渾然としていてわかりづらい状況ね一度、確かめる必要があるかしら。」

「何が問題だと言うのだ、イリヤ。」

厳しい表情で黙っていたセイバーが薄く笑いながらそう問いかける。

「大問題よ、彼がマスターかどうか今一わからないもの。」

ふん、と可愛らしく鼻を鳴らして言うイリヤ。

「ーよくわからないが…その男が憎いのだろうか？」

ならば、やる事は変わらないでは無いか、とセイバーは首をかしげる。

「変わるわ、だって…私はアインツベルンだからー確かに彼は憎いわ…でもね、私怨だけで誰かを殺すほどに私は傲慢じゃあ無い。」

「ー殺したいならば、殺せばいい、と…神々ならば言うだろうな…人であつたとしても…これは戦争なのだと言張して、そうする者が殆どだろうーだが、私はイリヤのその姿勢は嫌いでは無いよ、好ましく思う。」

「ーりがと。」

小さく、常人なら聞こえない程度の呟き。

だが、彼はサーヴァントだ、聞こえていないはずは無い。

しかし、彼がそれに答えることは無かつた。

アインツベルンの拠点、城とも呼べる豪華な建造物は冬木の外れ、深い森の只中にあつた。

何代か前のアインツベルンが城ごとこの地に移しかえたのだ。

なんとも桁外れにスケールの大きな話である。

その一室、尖塔の一番上の部屋で二人は月を見ていた。
大きな赤い月。

血のような夜の赫光。

緋色に輝く愛剣の刀身を磨きながらセイバーは呟いた。

「ーああ、マスターが一人……脱落したか姿をくらましたな。」

視線の先には、霊基盤が仄かな光を放ち鎮座している。

幾つも輝く光点は、サーヴァントとマスターを示す。

そのうち一つが、光をスウ、と消していく。

マスターを表す小さな光が一つ、だ。

「そろそろ様子見にも飽いた、な。」

ポツリとセイバーが呟き、イリヤが仕方ないわね、と答える。

「近々、軽く仕掛けましょう……でも彼は殺しちゃだめだからね、セイバー?」

「ああ、手足の腱を斬る位に留めておこう。」

できるだけそれもよして、と言われたが彼は答えない。

どこか嬉しそうに表情が変わった様な気がして、セイバーの顔を覗き見る、と。

そこには武人然とした厳しい表情が、あるだけだった。

「――さて、説明して貰いましょうか、士郎?」

目の前に、仁王立で構えるのは藤村大河、教師、そして姉の様な存在。

つい先日、ライダーの仕掛けた結界にやられて昏倒していた筈なのだが。

見舞いにと病院に向かおうとしたら回復して帰って来たと連絡があった。

…どれだけタフなんだよ藤姉…いや、元気で安心したけどさ。

「先輩は一度…ロープレスバンジーでもすればいいと思います。」

とても可愛らしく、にこやかな笑顔でとんでもないことを言われた。

――桜である。

桜はあの時偶々家の用事で遅れてきた事が幸いし、難を逃れていたらしい。

「さ、桜…ロープレスだと死んでしまうんじゃないかな…」

「――なんで、一晩で、女の子が2人も増えてるのっ!」

「そうです!しかも遠坂先輩がいるじゃないですかっ!」

ガオー!、と昨日に続き吼えるタイガー。

桜まで便乗して叫んでいる。

「や、あ、えつと…それはだな…」

やばい、うまい言い訳が出てこない。

「藤村先生、――彼を責めないであげてください…衛宮君はウチが急な修繕で水周りも

空調も効かなくなったと聞いてそれならうちに來たら良い…幸い部屋は貸すほど空いているからーと手を差し伸べてくれたんです。」

「や、遠坂さん！あのね、貴女もだめだからねっ、年頃の男女が一つ屋根の下とか絶対にだめっ、何か起きてからじゃ遅いんだからっ！」

「ー何か、とは？」

「え？あ、や…それはそのう…だつてほら…男女が一つ屋根の下なんて…間違いが起るかもしれないでしょ!？」

「ー衛宮君、貴方先生にあまり信用して貰つてないの？」

なんて事を此方にふつてくる遠坂。

「え？や、どうなんだろ…なあ、藤姉？」

「え?!いい、いやそれは信用してるよ?してるわよっ、士郎が間違いなんか起こすはずないじゃないっ、お姉ちゃんは士郎を間違いを起こす様に育てた覚えはありませんっ!」

焦りながらもそう口にしたのがー決着だった。

「そうですか、なら問題無いじゃないですか、ねえ?オルクさん？」

と、そこでバーサーカーをダシにする。

「ああ?ーいいんじゃないの？」

と、やる気なくチラ、と大河を見た途端。

「ーは、はわわわっ！」

なんて汗を流し始める藤姉。

「ーう、うううう！」

顔を真っ赤にして、涙目で唸っている、

どうやらまだ道場での一件は尾を引いているらしい。

「遠坂先輩ーずるいです…」

桜もまた、そこには口を挟めずに恨めしげに目を向けただけに終わる。

「まあまあ、皆さん…私もオルク様もおりますし何も女性の中に男がー人とはなりませんから大丈夫でございます、そこは私が責任を持ちましょうぞ。」

「ーお願い、します。」

不承不承ではあるが、イゴールさんの言葉に桜と藤姉が頭を下げた。

そんなこんなで少々ギスギスしてはいたもののー遠坂の話術とバーサーカーとイゴールさんの存在でなんとか切り抜けることには成功した。

しただが。

何故か俺の隣りにちよこん、と可愛らしく座るイルマに対して鋭い視線が向け続けられていた…って何で遠坂まで。

「…このロリコン…」

何だか遠坂が俺にだけ聞こえる距離でそんな事を呟いてきた、誤解だ！

「ほっほっほっ、イルマ様、大人気ですな？」

いや、イゴールさん…多分違うと思いますよ。

「儂は可愛いからな！」

…お前は空気読めよ、頼むから。

ワイワイガヤガヤ、騒々しいくらいの食卓…久しぶりだな、こんなの。

切嗣と、雷我のじいさん、藤村組の若い集や藤姉。

たまに揃う時はこんな感じだったっけ。

「たまには、いいか。」

無意識に口が笑みを作る。

今だけは煩わしい事を考えないですみそうだ。

喧騒は、学校に出掛ける間際まで続いた。

—————

夕方。

屋上に集まった俺と遠坂は慎二がどこに逃げたかを考えていた。

桜にそれとなく聞いたが、あの日以来家にも帰っては居ないらしい。

…桜も辛そうに顔を伏せていた。

早く、なんとかしないとな…

あのバカを見つけてぶん殴つてでも考えを改めさせなきゃいけない。

「間桐君がどこにいるかーいだけど…霊脈に近い場所に隠れている可能性が高いわ、なにせあれだけ魔力を使い潰したのだから…彼の魔力容量では回復はおぼつかないはず…結界での回収も不発に終わったし、ね。」

「霊脈か…具体的には何処なんだ？」

「強い霊脈となれば限られてくる…一つは、教会。」

「ー教会か…そういや一度顔を見せに行く方が良いんだつたか。」

「ええ、貴方は参加者では無いから厳密には…バーサーカーと九重さんが、ね。」

「なるほど。」

「今はまだそれを考えなくても除外して良いわ。」

「なんでだ？」

「あそこはね、監督役である聖堂教会の、この場合は綺礼のやつーがいるだけじゃ無い、脱落したマスターを保護する場でもあるの。」

「ああ…慎二は…それを知ってたらまずいかないな…」

あいつの性格なら負けてもいないのにそんな場所にはまず行かないだろう。

「そういう事よ、後はお山ー柳洞寺ね。」

「一成のウチじゃないか…：そうか、あそこ霊脈だったのか…」

「それと、ウチ…：遠坂の屋敷、ね。」

まあ、流石にここは無いですよ、と続ける遠坂。

「後は、新都の…：中央公園。」

彼処かー彼処は正直な話いい思いでは無い。

できたら近づきたくは無、な。

そう、彼処は10年前に起きた大災害の中心だった場所だ。

それを知っていれば近づきたいと思う人間は少ないだろう。

なにせ、どういう訳かあの焼け跡にはろくに草木も育たない。

その上、なぜか息がつかると言うか…：居づらいのだ。

「お寺はまず無いでしょうねー人目がありすぎるもの、消去法でいけば、多分新都の方が可能性が高いと思うわ。」

「そうか、なら急ぐか…：幸い授業もしばらくは無いつて話だったしな。」

そう、ある意味では幸いだったが…：あの集団昏倒事件のせいで今日はほとんどの生徒が欠席。

その為行われた会議の結果、今日を境に暫くは休校となったのだ。

「そうね、行きましょう。」

遠坂が先行し、俺たちはそのまま新都へと足早に、学校を後にした。

ビル風が、甲高い音を立てて吹き抜ける。

まるで過去が追い縋る様に。

彼女は一人。

「…来たようですね…どうします、慎二?」

「は、魔力は回復したんだよなライダー。」

「そうですね、完全ではありませんが全力戦闘をしたとしても…:宝具を乱用でもしない限りは明日までも戦えます。」

ビル群の一角、その屋上フェンス越しにこちらを見下ろす偽りの主^{マスター}を見上げる。

彼女ーライダーは今、重力すら無視して壁面に直立していた。

直角に聳えるビルの壁面にだ。

風の音が煩いくらいだが、サーヴァントである彼女の耳には残念ながら慎二の音が聞こえていた。

「そうか、なら…:やれ…:衛宮のサーヴァントだ、あのいけ好かない槍使いから先に仕留めろっ、いいな!」

「いいでしょう。」

やはり解っていない。

正面から遣り合おうとすれば私は敗れるだろう。

あの槍使いは、不味い。

あまりに強い膂力とあの槍。

不吉極まりない、あの力は私の内に居るモノに近しい力だ。

その上相手はサーヴァントが2騎居るのだ。

これでただ無策に勝てると思う方がどうかしている。

だが、ただやられるつもりは無い。

正面から、やりあわなければよいのだから。

見上げる空は赤い。

くれなずむ夕日：彼女にすれば血を連想するその色は身体を火照らせ、昂ぶらせる。

しかしそんな事は知りもせず。

獲物の気配は：徐々に近づいていたー。

第12話『神話』

「私とアーチャーは外れの方からまわるから、貴方達は中心部からお願い、見つけたらーそうね、空に向けて目印を飛ばすわ。」

「わかった、遠坂、気をつけてな。」

「…貴方こそマスターでもない半人前なんだからあまり無理はしない事ね。」

「…ツン、とかいう奴か？アレ。」

マスターを助ける為だから、とついできたバーサーカーが凜を指差しながらニヤニヤとしている。

「るっさいわね!!? 貴方のマスターを助けに来てるんでしようがっ真面目にやんなさいよ！」

ー遠坂つて…こつちが地、なんだろうなあ…

優等生然とした学校での姿が聖杯戦争に関わりを持つてからこつち、ガラガラと崩れ続けている。

実は少なからず憧れめいたものを抱いていた士郎だったが、それも今はもうどうでも良い。

むしろ今の方が好ましいと思える程度には自分も慣れてきたなあとか考えていた。

「まあまあ、遠坂、悠長にしてもいられないだろ、早いところ慎二を見つけないとな。」
そう前置き、凜の肩をポンと押し出す。

「わかってるわよ、もう。」

膨れ面で文句を言いながらも歩き出す凜も何処か憎めないし、可愛らしくさえ思える。

「じゃあ、お互い気をつけて行こう。」

ふん、と言う凜の態度と無言のままのアーチャーの気配を感じつつ、一行は互いに反対に向けて歩き出す。

サーヴァント2騎は霊体化し、夜闇を歩き出した3つの影……今度こそ互いが本気の、「戦争」が始まろうとしていた。

—————

「慎二よ。」

しわがれた声。

人をねめつけるような視線、君が悪いくらいの矮躯に、細い手足。手には櫂の杖を持ち、頭は肥大化し、禿げ上がっている。

それこそどこかのアニメに出てくる妖怪の総大将のようなその姿。

「なんだよ、爺さん。」

恐ろしい人物である、これが血縁者でなければこんな口を聞いただけで今頃は魔蟲の餌にされているだろう。

「なに、可愛い孫に力を貸してやろうと思うてなあ……此度の聖杯戦争に儂は手出しするつもりは無かったのじゃがな……おぬしが実に真剣に魔術師として参加をしたいと言う、嬉しい限りではないか。」

迂遠な言い回し。

——胡散臭いね、この蟲爺が……

慎二は心中ではそう考えながらも、顔には笑顔を浮かべ、答えていた。

「へえ！そりゃあ助かる、嬉しいね。」

「そうじゃろう、そうじゃろう。」

そう言いながら祖父が取り出したのは黒い、何かの欠片だった。

「これはな、とある絶大な力を秘めた聖遺物の欠片よ……使い方次第で令呪以上にサーヴァントを強化できる……使うが良い。」

ほっほ、と機嫌良くそれを手渡され、掌に乗ったそれを見つめる。

もとは金色だったのか、所々に金箔が剥がれかけたように光る部分があった。

——もつとも、実際には黒い方が貼り付いている、と言う方が正しいかもしれない。

濃い煤のように金色を燻ませたソレは。

まるで乾いた泥の様にも見えた。

「ー有難く貰っておくさ、僕は何であれ使いこなしてみせるとも…そして魔術師として大成してやるよ、爺さん。」

そんなやりとりから数日。

真逆こんなにも早く切り札を切る羽目になろうとは。

ライダーには知らせないまま、慎二はそれを握りしめ、魔力をそこから引き出していった。

望むほどに力が流れ込みー慎二を通してそれを受けたライダーもまた身体の奥底から湧き上がるような力を感じていた。

（おかしいですねー慎二は此れ程の魔力を持っていなかったのでは…？）

疑問は尽きない、がー

力があるに越したことはないだろうとライダーは一旦その思考を停止する。

「仕掛けますーまずは、槍使いっ！」

上空から魔力を放ち、エコーの様にかえってきたそれを頼りに正確に位置を確認する。

ジャッ!

鋭い音を立て、夜気を切り裂き釘剣が飛ぶ。

「ー坊主っ、上だっ避けるー!」

バーサーカーの声に慌てて飛び退く。

バカア!、と石畳が割れて飛び散る。

「あ、危ねえっ!?!」

一瞬遅れていたら自分は頭からあれに貫かれていただろう。

「ーは、一対一なら勝てると思っただか?」

ググッ、と下肢に力を込めて：跳んだ。

同時に光を放ち、手足に棘が生え、尾が生えた。

フードは端がはためくが、貼り付いた様に耳や後頭部を覆ったままだ。

手には紅い槍。

瞬く間にビルの壁を馳け、高度が上がって行く。

そこに四方から釘剣が飛ぶ。

高速で壁面を移動しながらライダーが放って来ているのだ。

「ハハハハハッ緩い緩い緩いッ!!」

片手で槍を回転させて軽々とそれらを弾き続ける。

「やはり、この程度では足りませんかーならばッ!」

校舎でしたのと同じ様に、ライダーが己の武器で己自身を切り裂く。

血が舞い、舞い飛ぶそれが高速で飛び回りながらも彼女の周りで陣を為した。

「己が血を媒介にした召喚かー!」

光とともに現れたのは、3体。

人面鳥翼ー女の顔をした化鳥。

「ハルピユイアーギリシャ神話の魔物だと?」

ケケーツ、と甲高い叫びをあげて飛びかかるハルピユイア達。

その爪は鋭く、かわしたバーサーカーの下に見えていたコンクリートの壁面を豆腐の

如く抉りとる。

「は、数撃ちや当る、か?」

「彼女達を下等なハルピユイアと侮るなら、貴方は直ぐに死を迎える事でしょう…: 槍使

いッ!」

更に釘剣が飛び、三羽のハルピユイアが交互に襲いかかる。

「ふー高所での戦いは苦手と見える、先の怪力ぶりが見る影もありませんね!」

口を三日月型に歪め、笑う。

「ー調子に乗ってんじやねえぞ」

ざわり、と周囲の気温が一気に下がる。

スキル「精霊の狂騒」。

暗い光がハルピユイア達を絡め取り、その動きが鈍くなる。

「墮ちろ。」

投擲された槍がハルピユイアの一羽を捉え、胴を串刺しにする。

直ぐに落下を始めたハルピユイアは姿を遠くしー光と消えた。

「ーオキユペター！」

噎れた、しかし確かな言葉が残る二羽から紡がれる。

オキユペター、ギリシヤ神話にあるハルピユイアの三姉妹ー。

「は、なるほど…名前ネムつきムか、この俺相手に長く持つはずだな、つとー」

残る二羽の挟撃を器用に壁面を走り続けながら宙返りして避ける。

「ひゃつ、ハー！」

楽しげに、笑いながら、バーサーカーは飛び、投げ、ライダーの投擲を弾き、突き返す。

「ギャギャ、ーアエロー、やれー！」

黒色の羽根を広げたハルピユイアが翼から黒い砂埃を起こして放つ。

それは広がり、バーサーカーの視界を塞ぎ――

「キャハハハッ……ケライノー、オキユペターの仇は私が！」

緑の羽根を広げたハルピユイアからは疾風が。

それは暴威と化してバーサーカーに殺到した。

「カツ、前に言わなかったか――俺に……ああ、お前らにじゃあなかつたな……俺にはな、飛び道具は効果ねえ、んだ、よっ！」

風はバーサーカーの目前で霧散し、その暴威は届かず。

逆手に放った2本目の槍がアエローを貫いた。

貫かれたはなからアエローの身体は光の粒子と化して飛散し、槍もまた空中で光に分解される――バーサーカーが槍を消したのだ。

「ギャ!？」

次の瞬間にはバーサーカーの手には槍が握られ、ケライノーを頭と脇腹から切り裂き4つに寸断した。

「――まだ、終わりではありませんん！」

先のハルピユイアとの戦闘時の隙をつき、さらなる陣が空中に無数に華開く。

赤々と血色に輝くそれらから無数に有翼の魔獣が現れる。

殆どは一斉にバーサーカーに殺到するが、一部は地上ー士郎へと向かっていく。「数で押す、かー悪くないなあ…相手が俺でなければだが、な！」

バーサーカーもまた、ライダーの召喚の隙をつき魔力を高めていた。身体をー、一つの発射台に見立て。

限界まで引き絞った腕の力をー解き、放つ！

「抉^ゲり穿^イつーーー、

士郎達と別れてから半時、アーチャーが空に異変を察知する。

「凜っ！小僧とバーサーカーの側が当たりの様だ、戦闘を確認したー！」

凜からはビルの谷間に時折チカチカと小さな光が見えただけ。

しかしアーチャーの鷹の目は激しい空中戦を捉えていた。

「アーチャー、急ぐわっ抱えて！」

「了解した、しかとつかまれ、凜！」

凜を抱え、アーチャーは疾駆する。

夜の街とはいえ人目が皆無とは行かない。

しかし事は急を要する。

後の事は後の事だ、人目は少ないし何とでもなるだろう。

…この後、流石に誰が目撃したかもわからず、聖堂教会の…主に綺礼が主体の情報操作で、「ビルの谷間を飛ぶ赤マント」と言う奇妙な都市伝説…、噂が流れるのは、別の話である。

………………

足場を確保。

ペランダに尾を差し入れ、金属柵に巻きつけて身体を固定…

壁面にめり込んだ恐竜じみた爪先がミシミシと音を立てる。

半身を限界まで反らし。

「数で押す、か…悪くないなあ…相手が俺でなければだが、な！」

腕の筋繊維がブチブチと音を鳴らして千切れ、その端から再生を繰り返す。

「^ゲ振り穿^イつ…^ホ塵殺^ルの槍^ク ツ!!!」

放たれた槍は光条と化し、無数に分裂し…飛び交う魔物達の心臓めがけて飛んでいく。

「ゲイ…ボルク…そうか、貴様は…」

ライダーは咄嗟に身を振る、が…回避は不可能だった。

何せ光は…躲したライダーの心臓へと、一度通り過ぎた後にありえない角度に反転。

急降下して再びライダーへ迫る。

「アイルランドの光の、神子…かつ!!」

再度回避を試み、ビルを駆け上がり、屋上へと到達し、地に足をつけた瞬間。

ドズ、つと重い音を出して槍の穂先がライダーの豊満な胸に吸い込まれるように収まり、背中から突き抜けた。

背後では魔物達にも槍が雨霰と降り注ぎ、逃げ回る魔物達を執拗に追尾しその心臓を正確に貫いた。

バラバラと落下しながら粒子となつて消えていく。

「は、違うな…光はとうに失せた、今の俺はコンホヴァルの糞野郎より尚悪意に満ちた、狂った王だ。」

答えながらバーサーカーもまた屋上へと降り立つ。

「く、くく…そうか、貴方は私と同じく反転した存在か…しかし、如何に否定しようと貴方は貴方だ…クー・フリーンには違いある、まい…グ、ハッ!」

大量の血反吐を吐き散らしながらライダーが身悶える。

「素直に終われよ、メドゥーサ。」

「いつから、気づい、て?」

息も絶え絶えに問うライダー…メドゥーサ。

辛うじてフェンスにへばりついてはいる、がいつ力尽きて倒れてもおかしくは無い。

「最初から。」

つまらないと槍を肩に担ぐ様にメドゥーサを見下ろすバーサーカー……クー・フリーン・オルタ。

「諦め、られる、くらいであれば——誰……が……召喚に応、じ、ましよ……か……貴方は違うと？」

苦しげに胸に突き立つ槍に手をかけながら問うライダー。

「望みなどはなから終わっている」

「馬鹿な！」

ごぼり、と血を吐き出しながら叫ぶ。

「願いますら無く——？ 認め、ません！」

ぶわ、と。

真つ暗な影が伸びた。

給水塔の影から伸びたそれはライダーを一瞬で包み込む。

「——なんだ、こいつは？」

膨れ上がった影は、人の形を失い崩れていく。

下半身は肥大化し、長く強靱な蛇体となり、上半身は所々鱗に覆われてはいたが美しいままに、顔は巨大な単眼と、長く不揃いな牙を生やした口、髪はその一本一本が蛇と

なる。

「ひ、ひいいいっ!？」

給水塔の影から這う様に転がり出てきたのは慎二だった。

自らのサーヴァントの変貌に驚いたのだろう。

確かに見ただけでも恐怖を感じておかしくは無い、あれは人にとって害悪だ。

ひたすらに邪悪でしかない。

「ーゴルゴーンの怪物……か。」

その答えに行き着き、嘆息しながら槍を構える。

彼にとつても思うところが有るのだ。

怪物、邪悪。

それは彼自身の成れの果てにもなり得ることだから。

「せめてもの情けだその姿、1秒でも早くこの世から消してやるー」

初めてバーサーカーの顔から笑みが、消えた。

第13話『別離／醒』

「マスターが？」

「ああ、お前を呼んでんだよ、早く行けや。」

「ー、、、、」

「何だ、何を鳩が豆鉄砲喰らったみてえな顔してやがる？」

「ああ、申し訳ありません…：貴方の口からその様な雑事が出てくるとは思いませんでした。」

「ーお前、俺をなんだと…」

「バーサーカーでは？」

「ーいや、まあ…：違わねえがよ…」

暖かな記憶、ここで無いどこか、遠い、遠い記憶が流れ込む。

ドオン、と揺るがす音がした。

変貌前と比べて体躯が3倍、いや4倍には膨れ上がったライダー、メデューサを見上げ、バーサーカー…：クー・フリーン・オルタはその眼に怒りを浮かべる。

「……この馬鹿の差し金だ……英霊を使い潰す様な真似を……」
許されると思うな、と。

今は回想もできない奥底にある記憶が瞬きの間に不快感を臉に焼き付ける。

映るのは、己が槍に霊核を貫かれた自らの姿。

……幻、というにはやけにリアルなそれは。

恐らくは実際に辿った末路の一つなのだろう。

八方から襲い来る蛇に対し、両手に槍を構え、二槍を振り回し引き裂いていく。

「JyAaAaAaAaAaAaAaAaAaAaAaAaAa!!」

言葉すらまともに発することも無くなったその巨軀がビルを揺らしながら尾を打ち、

髪の毛が変じた無数の蛇をけしかける。

「無様だなあ……メデューサー……」

頭をよぎるのはこちらに召喚されてから見たわけでは無い、背の高い眼鏡をかけた美

女の姿。

「……良い女は皆、俺の前から死んで消えやがる……だが、良い女が醜く変わるのも見過ご

せねえな……」

槍に引き千切られた蛇は紫色の体液を撒き散らしながら屋上のコンクリートに落ち、

白煙を上げて消滅して行く。

面倒だが、削る。

そして1秒でも早く、靈核を砕いてやるー

そう独りごち迫る殺意を槍で、肘で、膝で、爪で切り裂き打ち捨てていく。

そこにー

異物が紛れ込んだ。

「バーサーカー！無事かつ!？」

衛宮士郎。

特大の馬鹿が、馬鹿面下げてやってきた。

「ーお前、馬鹿かつ、いや大馬鹿だ!」

思わず叫び、同時に士郎へと迫る蛇を切り裂き阻む。

「馬鹿とはなんだよ!」

士郎もまた、獲物を構えていた。

それは、黒白こくびやく。

迫る蛇がバーサーカーが一瞬目を離れた隙に士郎を襲う。

が、それは士郎の両手に構えられた刃に阻まれた。

振り抜くは黒刃、返すは白刃。

交差した鋼が交わる位置に、再び黒が停止する。

「――銃剣^{ソイドバレル} 展開――弾倉^{カートリッジ} セット――」
 「是・切り嗣^{ナインバレル・ブレードファンク} ぐ銃刃――、」

黒い銃身、銃口の下に見えるのは刃。

肉厚で、折れず、曲がらず、刃毀れしない、そんな概念を詰め込まれ成型された不屈の刃。

白い銃身、銃口の下に備わるは刃。

細身で、しかしその刃は触れたものを両断する為にあるかの様な――鋭利な、片刃。

日本刀にも似たそれはしなやかで、かつ鋭い。

「――射出^{フル、ファイア}、開始!!」

息が切れた。

これだけの高層ビルを駆け上がった代償だ。

しかし、精神は冴え渡り今までにない程の高揚を見せる。

目前の脅威――平和を脅かすモノ。

今ならば。

魔術回路がすんなりと繋がる、廻る。

軽い。

ギアが一気にトップまであがる感触。

「バーサーカー！無事かっ!？」

アーチャーが教えてくれた。

不器用な男の、精一杯の助言。

彼は言った、お前の中の最強をイメージしろ、と。

『ー故に、勝とうと思うな、最善を尽くせ、己の中の最強をイメージしろ。』

あの言葉と。

凜の、献身がー

衛宮士郎の中の常識を超えて力を生み出した。

何故かバーサーカーから馬鹿呼ばわりされた。

馬鹿とはなんだ、と返しながらも身体は熱を持ち、魔術回路が励起し、駆動する。

己が最強のイメージ。

それは、幼き日の壊れかけた自分を繋ぎ止めてくれた憧れの人。

その、孤独な背中。

何故だろう。

その背がー赤い誰かと。

重なって見えた。

俺に銃はあわないと。

暗にアーチャーが論してくれたのは分かった。

分かり過ぎた。

だが、剣の延長であるのならば？

銃であり、剣。

その両の腕かいなの先に顕現するのは銃にして剣。

2丁2刃の銃剣が銃口をアー目の前の脅威アー

メデューサへと、向けていた。

「アー銃剣ソードパレル 展開アー弾倉カートリッジセットアー」

その笑顔が、あまりに嬉しそうだつたから、憧れた。

「是ナインパレル・ブレードファンク・切り嗣グ銃刃アー、」

夢を語るその顔がアーあまりにも悲しいから、俺が叶えると、約束した。

そうだ。

俺の中にイメージがあるなら、それは俺が憧れた正義の味方の。

切嗣の力に他ならない。

「アー射出フル、開始フアイア !!」

人を脅かす、人知の埒外の邪悪がいるのなら。

それは、滅ぼされなければならない。

「喰ら、ええええーっ!!」

放たれた弾丸は刃。

放たれては再生する刃は時間差で撃ち出された白と、黒。

白は切り裂く。

進路上の全てに対して、切り裂く事を強くイメージした、起源弾の切つて、嗣ぐ、の「切る」イメージを内包した魔刃にして魔弾。

黒は、袂り、再生を阻む。

「嗣ぐ」イメージを内包し、無差別に振りまく魔弾にして魔刃。

白はメデューサの尾を深々と切り裂いた。

紫色の血が吹き上がり、その次の瞬間には傷が再生していく。

黒は偶々、バーサーカーが切り裂いた傷口に吸い込まれー
傷口から壊死を広げていく。

「GiiyAaaAaaAaaAaaAaaAa!?!」

身悶えするメドゥーサ、いや。

ゴルゴーンの怪物。

「は、小僧ーやるじゃねえか。」

褒美だ、と。

その口が無音に紡ぐ。

次の瞬間、瀑布の様な槍の連打がメドゥーサに殺到した。

「G A a A a A a A a a u A A A A A a A a !?」

見る間に削りとられて肉片を撒き散らし、血を霧と噴き出しー

徐々にその動きを鈍らせていく。

その巨軀の奥底。

メデューサの蛇体の中心、人で言うなら胎盤にあたるあたりに光が見えた。

霊核だ。

体組織の大半を削り殺され、再生をしようと魔力が渦巻いている。

「く、そ再生が早いー」

「これで足らねえって言うのか?」

二人が並んで呟いたのは同種の感想。

即ち、このままでは目の前の脅威を排せ無い。

「ーアイルランドの大英雄ともあろう者が、いささか情けなくは無いか。」

そこに。

響く声はーアーチャーでは無い。

低く、厳かに。

屋上のコンクリートの上に着地したのは。

仕立ての良いスーツに身を包んだ：長身の男。

長い癖毛が後手に撫でつけられ、額が出てその目がよく見えた。

端正な顔立ち、引き締まった肉体美。

その体積に反してあまりにバランスのとれた体つきがその身体をむしろ小さく印象づける。

近づいてみれば逆にその大きさに驚くほどだ。

また、その首に手を回して白磁の様な肌、紅玉の様な瞳をした女性が抱きついている。

「ありがとうセイバー、降りるわ。」

ス、と大事そうに地面に足をつくまでまるで壊れ物を扱うように繊細な動作で扱われ、降りた女性は。

「ー初めまして、ライダー、バーサーカー…いえ、クー・フリーン。」

ライダーの単眼がギロ、とセイバーとその女性に向けられる。

身体はすでに7割を再生し終えて。

「そして…会いたかったわシロウ・エミヤ」

「ー君は、誰だー、」

「何故名前を、かしら？」

「簡単な話ね…キリツグは元気？」

「…そうか、義父の…いや、ごめん分からないんだ、俺も切嗣が今どうしてるのか。」

「愚図は嫌いよ…セイバーを伴い現れた時点で私が敵だとわからないかしら…」

「テメエ、誰だ？敵だつてえのは嫌と言うほどわかりきつちやいるがな…一方的に悟つ

た物言いをされるのは気分が悪いな、え？」

バーサーカーの言葉にセイバーが僅かに動き、女性の前に出た。

「良いわセイバー、そうね…せめて名乗るのが礼節と言うものだったわ。」

そう前置き、セイバーの横に並んだ後、答える。

「我が名はイリヤ…イリヤスフィール・フォン・アインツベルン…、こう名乗れば解るかしら？」

そう名乗り、何故かその視線は斜め前のビルに一度向けられ、その後また士郎達へと戻る。

「アインツベルン…なるほど…御三家の一つ…か。」

「ふふ、そうよ…^{バーサーカー}狂戦士のわりに物知りじゃない貴方。」

「御三家？」

「始まりの御三家…この聖杯戦争をおつ始めた魔術の大家の一つ…マキリ、遠坂、そして

錬金術の大家アインツベルン。」

「そう、その通り……そして此度の勝者の名となるわ。」

女性が手を挙げると、セイバーが動いた。

再び前に出、手を翳す。

そこに紅蓮の炎が現れ、形を成す。

「セイバー、焼き尽くしなさい。」

「承知した。」

構えたそれは――赤々と輝く長く、巨大な剣。

灼熱を纏う刀身は美しく、畏れを感じさせる、まさに神々を前にしたかの様な。

「な、なんだあの剣――構造どころか材質すら視えない?」

士郎の眼は、解析を得意とする。

事にそれが剣であるなら尚更に、だ。

現に今両手に持っている銃剣もまた、アーチャーの使う双剣を視て着想を得、作り上

げた礼装だ。

「神が鍛えし我が御剣――とくと味わえ。」

一振り。

空気が灼け、メドゥーサの身体に斜めに切り込みが奔る。

二振り。

交差した剣閃が、炎を吹き上げる。

「ギッ…!?!」

痛みからか、メドゥーサの牙の隙間から、僅かにまだ人型をしていた時の声に近い呻きが漏れた。

「――終わりだ、怪物バゲモノ。――燃え尽きろ。」

「S y g y A a A a A a A a A a A a A a A a A a A a A a A a A a A a A a!?!」

「焰気解放――灰と成せ。」

ゴア、と。

空気をその熱波が上空へと巻き上げ、メドゥーサの巨軀が火柱に包まれる。

「――な、なんて威力だ…炎の、剣?」

士郎の驚きも無理はない。

あれ程に苦労したメドゥーサの再生を簡単に上回り、焼いていくその威力。

火柱は赤から青、白へと色を変える。

どんどんと高温になっているのだ。

「――ちっ」

バーサーカーが吐き棄てる様にそれを見る。

やがて声どころか影すら残さず。

メドゥーサのその巨軀が燃え尽き、消えた。

「さて、次はどちらだ？」

不敵に笑みを浮かべたセイバーの剣先が。

二人に、突きつけられた。

ビルからビルへ、跳ねるように移動していた赤い影が止まる。

「アーチャー？」

凜が何事かと問えば。

「アーライダーが、消滅した。」

唐突な一言。

「えっ？」

「先ほどライダーが異様な姿に変貌してバーサーカーと、それにあの小僧を交えて戦闘を続けていた様だが：横合いから入ってきたサーヴァントが一瞬にしてライダーを：」

話す声が硬い。

当然だろう、あの暴力の塊の様なバーサーカーから獲物を一瞬にして奪ったと言うのだから。

「ー相手はバーサーカー以上に？」

「ああマズイなあれは、規格外過ぎる。」

「ー気づかれていると思う？」

「この距離、加えて相手はおそらくセイバー…普通ならば気づかれてはいまいがー」

保証は出来ない、とアーチャーは言う。

「…それでもこのまま無策で近づくよりマシ、でしょう？」

「ああ、そうだな…奇襲を仕掛ける。」

そう言うや取り出した黒塗りの洋弓。

「ー貴方がアーチャーらしい戦い方をするのつてもしかなくても初めてじゃない？」

クス、と笑いながら凜が語る。

「ふ、よく見ておけ…君が如何に優秀なサーヴァントを引き当てたかを、な？」

そんな軽口を最後にアーチャーの眼は獲物を見定める。

「I am the bone of my sword…」

詠唱。

同時、その手には剣が顕現した。

それは光に変換され、光の矢へと変わる。

「――射抜け――偽カラドボルグ・螺旋劍II――!!」

光が見えた。

暖かで、優しい光が。

薄桃色の桜の花弁が舞い散り、その中で自分は誰かに膝枕をされている。

「綺麗ですね――サクラ。」

そう、舞い散るのは桜の花だ。

「……ライダー?」

「お別れ、です――願わくばもう少しアナタを見ていたかったです……怪物に堕ちて
 までああも一方的にやられようとは……屈辱です……が、不思議に悪い気はしないのは何故
 でしょうね。」

或いはそれは。

偽りの王が見せた不器用な優怒しきリのせいであろうか。

膝の上の誰かさんは、面食らった顔で固まっている、かと思えば。

火がついた様に叫び始めた。

「お別れ? おい、巫山戯るなよ、巫山戯る……巫山戯るなよつ、じゃあ僕はどうなるんだ、

「この愚図っ！」

「慎二——貴方は捻くれてはいますが……存外優しい男です、できるなら……この花吹雪の
様にか弱く、儂い——貴方の妹を……」

「なんだよつ、お前結局桜が大事なだけかつ、僕は、僕なんかどうでもいいんだよな、分
かつてたさ、ああ！分かつていたとも！」

「——最後まで我儘ですね、貴方は。」

「なんだよつ、お前が——」

ふわ、と。

身体が持ち上げられて。

ライダーの胸に掻き懐かれた。

「本当は、誰かに甘えたかったのでしょうか？」

「なつ、違うっ僕は——僕なんか、」

私は——最後に救われたのかもしれない。

まさか、姉二人以外にこんな私の死を悼んでくれる人が……二人も居るのだから。

「慎二——今は貴方がマスターです、だから……桜にも伝えて下さい。」

私が、消えてしまうことを。

貴方と、貴女を置いていく不甲斐なさを。

「叶うなら、あなたがたを二人とも長く長く、見守りたかったー聖杯を得たら受肉して、桜と、慎二と、三人で河原を歩くんです。」

「お前、何をー」

「擬似的とはいえ、マスター…貴方の記憶を見たのを許してくださいね…嫌いでしたよ、貴方の事は…でも、貴方がどうして魔術師たろうとしていたのかー視て、しまいましたから。」

「勝手な、事を言ってるじゃ、ない、よ…」

声が、涙に咽ぶ。

「ふふ…嫌いでしたよ、嫌い、でした。」

幼い桜と慎二。

幼くして養子にされた桜。

それは自分が才能を持たなかったから。

だからこんなにも華奢で、愛らしい女の子が。

人の道を外れた外法に染められてしまった。

嫌だ、嫌だ、自分が嫌だ。

こんなにも頑張ってるのに認められない。

どんなに足掻いても、桜に敵わない。

桜を魔術から救いたいのに、桜の才能を超えなければ桜は救われ無い。死んだ様な目で、蟲蔵の地下に横たわる少女の姿を幻視する。

「勝手に、見るな——この、デカ女！」

「…その言葉を言った人間は今まで例外なく引き裂いてきましたが…喜びなさい慎二——貴方が一人目の生存者ですよ。」

そんな馬鹿な言葉を紡ぎながら、ライダーは慎二を抱き寄せ、頬に唇を落とす。

「女神の祝福、ですよ…せめて貴方が生き延びられる様に——」

「女神？お前、馬鹿も鏡を見てから言えよ？」

辛辣な言葉はしかし、涙でぐしゃぐしゃの顔ではまるで意味が無い。

「貴方こそ、自分の表情…見てみなさい慎二。」

そう言つて、顔を近づけ、瞳を見つめられた。

ライダーの瞳越しに映る自分は、それは酷い顔をしていた。

「さあ今度こそ…お別れです、さようなら、慎二——桜を大事にしてくださいね。」

「お、おい、待てよ！」

手を伸ばす。

届け！届け！届け！

ライダーの姿が消えていく。

伸ばした手は空を切り、頬の熱だけが残った。

「ああ、どうして自分の手はいつも届かないのだろう。」

夢は其処で終わり。

恐怖に駆られて逃げた先――

転げ落ちた階段の踊り場の鉄臭い匂いで目が覚めた。

瞬間、空気が振動した。

焼けた風が吹いて。

階段通路を熱気が満たした。

傍には燃え落ちた本が一冊だけ。

「――なんだよ、夢は、終わったはずじゃないのかよ――」

あんな恥ずかしい真似しやがって、あんな事を自覚させておいて……

「――自分一人、居なくなるなよ……デカ女。」

塩辛い味が、鼻の奥まで満たしている気がした。

第14話 『夜空の華』

「キリツグー どうして私を迎えに来なかったの？ どうしてー 私は独りきりになってしまったの？」

冬の林、アインツベルンの森の深く。

少女、イリヤスフィールは一人呟いていた。

いや、正確には二人。

召喚に成功したセイバーが傍にただ、イリヤを雪から守る様に風上に立っている。

「イリヤスフィール、お前は何を望む？」

「ん、セイバー……？」

「聖杯を手にしたその時ー何を望む。」

「わからない。」

「私はきつと何も願うことはできない、だって聖杯が起動する、つて事は私が私でなくなるって事だもの……多分お爺様……アハト翁は第三魔法を完成させたいんでしょね。」

息は白く、彼女が生きているのだと目に映して伝える様で。

「生きたいとは思えない、か？」

何故、自分は己がマスターにこの様に問いかけるのか？

「…理由が無いわ。」

伏せられたその顔は悲しみに満ちている。

「ならば、せめてそれまでに叶えたい願いは無いのか？」

心に刺さった棘が、喉元を切り裂く様な不快な気持ちを感じさせる。

「…そう、ね…なら、セイバー？」

悪戯を思いついた様な顔は悲しむよりは彼女に似合うと、そんな益体も無い思いがよぎり。

「なんだ。」

自然、なんだって聞いてやろうでは無いかと考えていた。

「私の、お義父様とうさまになつてくれる？」

なんだって、聞いてやろう。

だがーそれは、その…良いのか？

「その、なんだ…本気か？」

些か困惑した私にイリヤスフィールは満足したとばかりに嬉しそうに鼻を鳴らし、胸を張る。

歳の割にたわわに実っている双丘はふるりと揺れて存在を主張している。

「嫌、かしら？」

上目遣いに見上げる澄んだ瞳。

赤い宝石の様なそれに見つめられて頷かない男は、男色家か、よほどの人嫌い意外無
いだろう。

いや、イリヤスフィールを異性としてみるかと言われれば違うのだが。

ー言うなれば、まるで我が子に抱く愛情に近い。

「嫌ではない。」

「なら、決まりねー！今日からセイバーは私のお義父様とうさまねー！」

初めて見た彼女の心からの笑みは。

冬に咲く季節外れの向日葵の様で。

ただ他者を破壊するだけの英雄ぼけものは。

この時、一人の父親になった。

「そうか、ならばイリヤは私が守り通してみせようー例えイリヤがイリヤでなくなろ
うと、私が存在する限り、少しでも長く。」

「ふふ、大英雄の癖にーなんてそんなに控えめなのかしら、変なバーサーカーね。」

「ーイリヤ、私はセイバーだが？」

「ーあ、そうね最初はバーサーカーで呼ぶ予定だったから間違えちゃった。」

「そうか。」

「……何時しか雪は止み…暖かな陽が雲間から差し込んでいた。

「……射抜け……偽カ・螺旋劍ラ……!!」

夜の空を裂き、螺旋が飛ぶ。

光の螺旋は空気を巻き込み、帯電する程の勢いで、空間を捻りながら突き進んだ。冗談抜きに今のアーチャーの一撃としては最大の火力。

切り札の一枚と言える一撃だ。

「……、イリヤツ伏せろ!」

セイバーの剣先が二人から離れ、背後へと降り抜かれた。

ガキイイツ!!!

激しく火花を撒き散らし、鋼が鋼を削る音が暫く聞こえて。

やがて、矢が爆発した。

「……ぬ、宝具をつ、使い捨てるかつ!」

完全な不意打ちに反応したセイバーも大概だが、しかしその矢は更に上を行った。

止めたと思ったら、爆発したのだ。

強烈な魔力を撒き散らし、セイバーの上半身を光が包んだ。

プロウケン・ファンタズム

壊れた幻想　　「……器具が持つ魔力を暴走させ、臨界点で爆破する荒技だ。」

「……す、すげえ……今のはアーチャー、か？」

士郎は驚きを隠さない。

いや、隠せないのか。

「……上半身が……」

セイバーの上半身は剣を握る右肩あたりをかるうじて繋げる形で……消し飛んでいた。

左肩から左脇腹、頭は無くなり、生きているとは思えないその姿。

だが。

「お、おいおいおい……嘘だろう……不死身かコイツー？」

バーサーカーの言葉は当然と言えた。

如何なサーヴァントと言えど、霊核を破壊されれば消滅は免れない。

頭と心臓の両方が吹き飛んでそれが無事とは思えないし、例え霊核だけ無事であったとしても致命傷、生きている方が不可思議だ。

だが、セイバーの身体は、動いた。

剣から吹き上がる炎がセイバーの身体を包んだかと思うと、一瞬にして再生を果たしたのだ。

「……ふう、真逆道具を爆破するなどとは考えなかったな……流石に驚いたぞ。」

仕立ての良いスーツこそ吹き飛んだものの。

セイバーは平然とそこに立っていた。

上半身半裸になった姿はむしろ芸術家が裸足で逃げ出すか、セメントで固めてコンクールに出品したくなるような均整の取れた黄金比。

無用な色気すら振りまく姿だった。

「――セイバー、武装なさい。」

僅かに頬を赤らめ、イリヤスフィールが呟いた。

「――む、そうか半裸ではいかな。」

と、言うや彼は淡い光を纏い、瞬間それは神々しく艶めかしい色合いをした革鎧……というよりは現代風にデザインをアレンジしたのだろうか？――が、召喚時と違い、レザージャケットに近いモノと化して彼の肉体を鎧う。

手足には頑強そうな鋼の手甲と具足。

それは――獅子の毛皮だった。

一頭の獅子の皮をそのまま身に纏う姿と言うなら、その形だけならば原始的である。

が、今もって姿は現在進行で変わりつつあり、脈動する息吹すら感じられ、首元には鬘を使った飾りがふわふわと気持ちよさそうに揺れている。

半ば生きたまま彼を包むその獅子皮はただの獣ではあるまい。

靈獸、神獸の類ではないだろうか。

「さて、一度とは言え私を殺すか——此度のアーチャーはなかなか稀有な力を持つているとみえる！」

「——油断がすぎるんじゃない、セイバー？」

イリヤはどこか不機嫌に、頬を膨らませる、まだ赤い顔のまま。

「——いいや、私は本気で迎え撃つたんだがな……まさか弾く寸前に爆破されるとは予想外だった……二度は無い、がな。」

不敵な笑み。

絶対の自信を湛えたそれは怖気さえ誘う。

「——な、なんなんだサーヴァントつてのはどいつもこいつも規格外すぎる……」

士郎が慄くのも無理からぬこと。

むしろ恐怖に震えないだけ彼は胆力があると言える。

「は、ありやあその中でもとびきり拔きん出てやがるぜ。」

バーサーカーさえこんなことを言うならば、正に目の前の相手は、大英雄バケモノなのだろう。

「小僧、逃げるぞ……正直あれを殺しきれぬ気がしねえ……」

小声で士郎へ話しかけるバーサーカー。

そう、マスター不在の現状であれば抗し得まい、令呪のサポートがあれば…或いは「逃がしてもらえるなんて…考えてる?」

イリヤからの死刑宣告。

「――退路は…用意するんじゃない、作り出すモノ、なんだよ!お嬢ちゃん!!」
スキルー「精霊の狂騒」。

バーサーカーから放たれた邪気がセイバーを絡め取る様に蠢く、が。

「――む、鬱陶しいな。」

効いてはいる様だが…正直大した事は無さそうだった。

「ち、セイバーの対魔力かよ…」

だが、防がれる事は想定内。

バーサーカーが槍を構え、隙を伺う中に再びそれは飛来した。

アーチャーの第二射だ。

「――む!」

流星に今度は至近距離で弾こうとはせずにセイバーは斬撃を振り抜き、その剣圧を飛ばして矢を斬り裂いた。

恐ろしい威力と精密さ。

それは確かな技術の現れだ。

夜のビル群の合間に、火の華が咲いた。

炎劍の輝きと、飛来する矢の輝き。

二つが夜空を艶やかに染め上げる。

「喰らいな！」

槍を矢継ぎ早に投擲し、伸ばした棘が壁のごとく彼らを阻む。

「ーええい、鬱陶しいと言うにー！」

流石に飛来した螺旋劍に対処しながらバーサーカーと士郎へ構う暇は無い様だ。

「おら、今のうちに逃げるぞ小僧！」

「は、あ、あー、わかった！」

一瞬とまどうも士郎は即座に踵を返す。

「ええい、次から次へとーならば……！」

セイバーの手にした劍が炎を吹き上げ、消えるーそれは即座に形を変え、巨大な弓へと姿を変えた。

「ふふつ、やっちゃえーセイバー！」

嬉しそうな顔でイリヤが呟くと同時。

九つの射線が夜闇を裂いた。

*****ー……

「ーえ、何あれ!？」

アーチャーが矢を射かけ続けていると、凜が慌てた声を上げた。

「真逆…奴はセイバーでは無いのかっ!？」

風を切って飛来する九つの矢。

その矢は一つ一つが巨大で、かつ、鋭い。

全てに狙いをつけて射ち落す暇は無い…そう判断したアーチャーはその手に剣を、
本同時に投影する。 3

「I am the bone of my sword…全てを射抜けー
フルンディング
赤原獵犬!!」

ジャツ!!

まるで赤い光線のように三条の矢が空を裂き、飛んだ。

それはありえない軌跡を作り、セイバーが射った矢を次々と破壊する。
が、さらに飛来した新たな矢が赤い獵兵を射落とす。

「何というデータラメな…凜、引くぞー!」

矢は、最初に射られた矢を追い越す速度で迫り、追尾して動くこちらの魔弾を予測して破壊して見せたのだ。

更に彼方は1射につき9本の矢を射かけてくる。

こちらは、あの矢を落とすだけの威力となれば3本が限度にもかかわらず。

その三射で9本を射落としても、更にあちらは9本を射かけてくるアーイずれはこちらの手が押し負けるのは目に見えている。

「アー口惜しくはあるが、あれは真正正銘バケモノか……？」

凜を小脇に抱え、ビルを躊躇なく飛び降りる。

幸いなのは彼がアーチャークラスでないからか、矢の狙いはやや大味な事か。

おそらくは半ば直感で射かけているのだろう。

此方の正確な位置は見えてはいまい。

だが、先ほどから狙いは徐々に正確さを増している。

と、なれば止まるのは危険以外の何物でも無い。

案の定、矢は意趣返しとばかりに次々と射かけられ、飛び退くアーチャーと凜へ殺到する。

急所を射抜くほど正確な射で無いにせよ、あの矢を受ければかすただけでも大事だろう。

すう、と息を吸い込みアー新たに前方に投影。

「アー熾天覆う七つの円環 !!」

光の花が咲いた。

赤紫色をした7枚の花弁を展開する美しき盾。

それは確かな堅固さを持って、殺到した矢を全て防ぎきる。

花弁には傷一つつかず、矢は弾かれていく。

やがてアーチャーと凜は地上へと到達、矢弾はようやく止んでいた。

都合の良い事に都心部には珍しく、淡く霧が出てきていた。

矢の狙いが甘くなったのはこれもあつたのかもしれない。

「……はっ……」

ごっそりと魔力がもつていかれた。

凜は身体が重くなるのを感じ、アーチャーを見る。

次々と展開された多彩な矢弾、最後には……アイアス、そう言っていた。

アイアスと言えば……ギリシャ神話、トロイア戦争における大英雄が要した盾の筈だ

が……彼は近代の英雄では無いかとあのランサーも言っていたでは無いか。

「アーチャー、貴方……本気で何者？」

「……言っただろう、君の不完全な召喚で記憶が定かでは無いと……全く、もう忘れるとは君は記憶力が無いのかね？」

などと、自称記憶喪失に言われてしまった。

「何ですって!?!」

思えばこんな悪態も、彼の口八丁だったのだらうとアー後に私は後悔したものだ。今この時には気付けなかった、その事実には。

私たちは、なんとか逃げ切った事に、只々安堵していたのだから。

【衛宮邸】

命からがら逃げおおせた俺たちはようやく人心地ついていた。

「アー情けないのう、貴様ら。」

霧が形を変え、一人の少女へと変貌する。

「アーイルマ?」

「そうーイルマ・ヨグ・ソトホープ様よ!」

えへん、と胸を反らすアーが、膨らみはほとんど無い。

「貴女…私、邪魔だつて言わなかったかしら?」

凜があからさまに嫌な顔でイルマを睨む。

「は、我が魔霧が無ければ貫かれていたかも知れんというにアー恩知らずな女子よの。」

「魔霧アーそうか、あの不自然な霧は…」

アーチャーは気づいていたのか得心がいったと言う顔で呟く。

「そうか、イルマが助けてくれたんだな、ありがとう。」

士郎は士郎で素直に礼を述べる。

「……まあ、どうだつて構わねえが……今なら朔弥を解呪できるはずだ、行くぜ。」

バーサーカーはバーサーカーでスタスタと土蔵へと歩いていく。

その過程で武装は解かれ、ラフなジーンズにシャツと言う格好になっていた。

「ま、待てよ！俺も……」

「……まあ、朔弥を元に戻すこと自体は賛成よ……行きましようアーチャー。」

「ああ。」

士郎が土蔵の鉄扉を開き、奥まった位置に布をかけられた朔弥の石像へと案内する。

そこへ、バーサーカーが手を触れ……朔弥の心臓の辺りに手を置いた。

「……ユル……」

言葉と共に、バーサーカーがアルファベットのZを鏡写しにした様な文字を描く。

ユル、再生と復活の象徴とされるルーン文字。

「こいつも……本気でバーサーカー……？魔術まで操るとか反則よね……」

と、凜は複雑な顔だ。

やがて輝きは薄れ、朔弥の表面を覆う石が剥がれ落ちて行く。

パラパラと石粉が散り、朔弥の目がうつすらと開く。

「ん……バーサー、カー……あれ、それに……エミ、ヤン……？」

寝ぼけまなこでそう言つて頭を振る。

ようやくの石化からの復活。

ライダーが倒れた事で石化の進行そのものは止まりはしたが、それまでに石になった部分——主に無機物はどうにもならなかつた。

肉体は今のルーン文字により復活した、したのだが。

「——あれ？なんか……寒……い、？」

スースーする。

なんでか、まるで地肌を直に冬の空気が撫でている様な——？

目の前には、何故か目を反らす士郎、アーチャー。

あ、つて顔で固まる凜が居て、じー、っと見つめてくるゴスロリ少女。

そして。

堂々たる態度で両腕を組んでこちらを見る、バーサーカーの姿があつた。

「よう、マスター……なかなか色っぽいぜ？」

つ、と自分の身体に視線を落とす、と。

…一部は、衣服が石になったまままで僅かに残り隠れはするものの。

ほぼ、全裸。

そう、石化した服は、先ほど。

全て石の破片や粉になって落ちたのだ。

「び……ピャーッ
!!??」

バシイン!!

と、バーサーカーの頬を渾身の力でひっぱたく音が響いたのだった。

第15話 『テメロツソ・エル・ドラゴ』

暗く、広い空洞の中。

二人の人物が向かい合つて睨み合いを続けている。

「ーこれはこれは……なんとも皮肉な話だな、ん？ 聖女様。」

「嫌味ですか、アベンジャー？」

「ああそうだ、復讐こそ我が有り様よ。」

「ここには復讐する対象も有りはしないでしょうに。」

「此処どころか、そも復讐そのものが終わりを告げているー最早私が現界する事はありえないと思つていたがな……世界は私を眠らせてはくれんらしい、お前もそうだろう？」

「ー私は裁定者、ルーラーとして喚ばれたみたいですね……しかしこの冬木の地において私が呼ばれること自体がイレギュラーな筈ですが……何者かの思惑……でしょうか？」

「ーいや？ どうやら理由はこれの様だな？」

暗闇の中、地面に描かれた方陣が淡い光を放つ。

ボウ、と明かりを灯したそれは7つの輝きを作り出す。

既に灯されていた9つの輝きに加えて、7。

中心に、白く清らかな輝きと、濁った青白い炎じみた輝き。

加えて、円周に均等に配置された14の輝き、うち一つは既に輝きを失っている。

合計16騎分の輝き——。

「——新たな英霊召喚が始まると——？」

……この事態こそが本来あり得ざる第三者の介入を仄めかしている様にしか思えない、
が……。

「だからこそ裁定者たる貴様が——そしてその抑止力として俺が呼ばれたのだらうよ、
私情を挟まず、役目を果たせと聖杯が言っている。」

「聖杯——それ自体に意思がある？」

「此度は、その様だな？」

「——貴方とて……彼女には縁も情もあるでしょうに……」

「ふん、これで潰れてしまうならアレは俺たちを導いた彼奴ら二人の片割れでは断じて
なかるうよ、そんなものは姿形が似ただけの泥人形の様なモノだ。」

「相変わらず辛辣ですね、口だけは。」

「ハ、好きに言っている、絶望こそ人生のスパイスよ……それを乗り越えてこそその復讐だ。」
待て——しかして希望せよ。

口に出しはせずとも彼がそれを言いたそうにしているのが彼女、ルーラーにはわかりやすいほどに分かった。

——もつとも、それを聞くものはルーラーだけではあつたが。

方陣の内側、光を失っている箇所のだ度逆側の光が一際強く輝き出す。

それを見下ろしながらルーラーは呟く。

「全く、縁と言うのは簡単には無くならないのですね——こんな形で無ければもつと歓迎したいところですよ……ねえ——？」

空洞の中心、方陣のさらに真ん中。

そこには巨大な岩塊がまるで腕の様な形で屹立している。

その手のひらに当たる場所には、深緑色の結晶が鎮座している。

その結晶の中には一つの影。

ルーラーが呟いた名は、洞穴を吹き抜けた痛いほど冷たい風に搔き、消された。

カチャカチャ……静かな室内に食事を摂る箸の音だけが響く。

見れば朔弥は妙に居心地が悪そうに、ソワソワとしているし、大河は居ない、桜は居

たがーこちらも何処か沈んでいる。

兄、慎二が行方知れずになり2日、それを相談しに現われた桜に、昨晚士郎がウチに泊まって行け、と言ったのだ。

ー聖杯戦争に否応なしに関わってしまったとはいえ、士郎は慎二が何故行方知れずになってしまったかを話そうにも話せないと言う負い目があったからだ。

凜もまた、難しい顔はしたが反対はしなかった。

朔弥はー昨晚の出来事に頭がパンク寸前であり、且つ家主と、セカンドオーナーたる遠坂がそう判断したのだから、と考えを放棄していた。

ー桜、慎二の事は心配するな…俺が必ず探し出して…今回ばかりはぶん殴ってでもお前に謝らせてやるからな。」

ーふふ、先輩、珍しいですね先輩がそんな過激な事を言うなんて。」

少し困ったな、と言う表情ながらもどこか嬉しい、と言う顔の桜。

ー時と場合によるさ、今度ばかりは問答無用にあの馬鹿が悪い。桜がどれだけ自分を心配してるかーあいつだってわからなくは無いだろうにさ。」

……それ、貴方が言うの？とは凜の表情だ。

その後は妙に静かな食事を終え、一同は一旦は各々に割り振られた、或いは勝手に居ついた部屋へ戻って行った。

士郎は普段から使っている驚く程に私物少ない和室、桜は応接間近くの部屋を、凜は離れの一番上等な客室にベッドまで持ち込んでいた。

そしてイルマと、その執事であるイゴールは地下室――あつたんだな、そんなもの――を探り当てるやそこへと陣取った。

どうやら切嗣、義父が武器の保管場所にしていたらしいのだが……土蔵の床下にまさかあんな階段が隠されていようとは。

と言うか、今迄修練場にしていながらまるで気がつかなかった……大間抜けか、俺は。

……凜曰くちよつとした魔術工房並み、だとか。

半端な魔術師なはずの義父がよくもこれだけのものを作っていたものだ。

桜が居室に入っていくのを確認し、一同はそつと足音を殺して地下室へと集まる。

「……な、何これ……世界中の外法、外道の知識のオンパレードじゃない……あ、いや違う……全てそれと対になる様な記述が……セットに？」

そこには魔導書の山。

有名なモノから言うならば――無名司祭書、金枝篇、ネクロノミコン迄が其処にあつた。

無論、原典なはずは無くすべからく写本や不完全なものばかりではあつたが……

それに連なる様に対抗手段もまた並べて保管されている。

例えば海魔召喚の頁の端には、添え書きされた、海魔や古き者を退ける古き印、一片の欠けた五芒星^エの記述があった。

「ふふ、キリツグらしいな…彼奴は常に人類に害成す存在や事象を廃絶する方法を求めていたと見える。」

イルマが呟き、イゴールが頷いている。

は、はは。

確かにオヤジらしいな…全く、正義の味方は年齢制限があるんじゃないのかよ

…

まるつきり諦めてないじゃないか。

恒久的な世界平和。

それをクソ真面目に現実に変えようと。

足掻いて足掻いて足掻き抜いて。

「…はあ、俺が必死になつて追いつこうとしてるのにな…」

「衛宮君…貴方のお義父さんつて…何者なのよ…?」

まさに開いた口が塞がらないと言った凜。

「いや、それは俺が聞きたいよ本当。」

「何よそれ。…この蔵書、時計塔だつてこんな封印指定一歩手前な魔導書の写本とか

そうそう無いわよ？それが、こんなに沢山……」

「ふん、あやつ……やはりわしを謀っておつたな……吸血種を滅する方法まであるでは無いか、知っていてわしを何度も見逃す等、屈辱じやのう……。」

などと言う言葉とは裏腹、イルマの顔はどこか嬉しそうだった。

「遠坂は知らなかつたつけなあ……俺のオヤジは……正義の味方で、魔法使いなんだよ、正義の味方は年齢制限で廃業だなんて言つてたけどな。」

「……何言つてるかさっぱりなんだけど……」

魔法使いと言えば魔術の深奥にたどり着いたほんの一握りの偉人に冠せられる称号だが、この場合は違う意味だろう、間違いない。

「……魔術師殺し、そう言えば遠坂さんにもわかるんじゃないかな？」

とは、今しがた階段を降りてきた朔弥の台詞。

「まさか、第四次聖杯戦争でお父様と敵対した、アインツベルンの傭兵……!？」

「なんだ、オヤジの奴そんな事もしてたのか。」

呆れたな、と言う顔の土郎。

「私の父さん、九重十蔵と縁があつたから多少は聞いているけど……偏屈な変わり者だつたみたいね……昔、私を狙つた吸血種を追い払つてくれたのも、子供を狙うなんて許し難い、つてだけで必要経費以外は報酬もろくに取らなかつたそうよ。」

「――あ、なんじやお主あの時の双子の片割れかく道理でどうにも魔力に覚えがあると
思ってたわい。」

「はっ?」

士郎と朔弥の声が、ハモった。

「――再契約、だつて?」

「そうだ、マキリの末裔よ――貴様が望むというなら力を貸してやろう。」

聖堂教会支部、冬木教会。

煌びやかなステンドグラスから差し込む光が、三人の男の顔を仄かに照らし出してい
る。

「あんた――何を言ってる?」

先の戦いでライダー……メドゥーサを失った慎二は、逃げ込んだ先で思わぬ話を振られ
ていた。

「ふ、少年……疑うのも無理からぬ話、少し解りやすく話してやろう。」

と、話すのは聖堂教会の法衣、カソックを首までぴったりと締めたお堅い格好の神父。
しかし、その目は一切笑っていない。

寧ろ底なしの暗闇を覗いてしまった様な不気味さが見えて。

「――信じられるかよ、あんた：監督役が個々の勢力に肩入れしていいのかよ？」

「私は最早聖杯等必要としていなくてね：何より君個人に興味がある、なんなら聖杯は君一人で使うといい、我々には聖杯そのものは必要無いのでね。」

「――今の貴様にはわれが手を出す価値と意味があると言う事よ、王の誘いぞ？ 光栄であろうが。」

礼拝堂のイスに座る金髪紅眼の美丈夫はニヤニヤと笑みを浮かべながら手を差し出す様にして慎二を見ている。

「――王…ね、あんた相当強力な英霊なんだな。」

「――ああ、そうさな…オレ一人で他全ての英霊を相手にしても良い程度にはな？」

「そうかよ、しかし都合が良すぎてかえって信じられないんだけど？」

「…：フ、君は知らないのだったな、私はね、第四次聖杯戦争の参加者だったのだよ。」

「――何…だつて？」

「く、くくつ…：なあ、慎二、よ選択肢は無いのではないか？」

「――そうだな…：確かにこのまま終われない…：考えても…」

慎二が渋々ながら、しかしこのチャンス逃すまいと答えを決めかけたその時。

ガシャーーン!!

ガアン！タタン、チュインツ！

ステンドグラスを貫き、数発の銃声がそれを遮った。

「ー待ちな、シンジ…アンタまた間違えて死ぬ気かい…？」

そこに華麗に降り立つのは女。

パイレーツハットに、ジャケットを羽織りー両手に銃を携えた女海賊。

はち切れんばかりの胸をジャケットに無理矢理収め、2丁拳銃を構えるその姿。

「ーアンタのサーヴァントは…アタシ以外にやつとまらないだろう？」

フランシス・ドレイク。

史実上は男性ではあるが、今は女。

太陽を落した女ー。

テメロツソ・エル・ドラゴがそこに立っていた。

「アタシと組めば、儲けは折半ー契約、報酬、分前半分。これ以上信用できる主従関係はそうないだろう？」

男よりも男前な姉御肌。

それが彼女、フランシス・ドレイクの生き様である。

「ーなんだ貴様は…疾く失せよ、不敬であろう!!」

機嫌を損ねた男の背後から、金色の波紋が浮かび上がり…一斉に刃が射出される。

片刃、諸刃、直刀、槍に斧、果ては鎌やチャクラムに至る古今東西あらゆる武器が女

に迫る。

「ハッ！いきなりご挨拶じゃあないか、英雄王！」

流麗な銃捌きで打ち出された弾丸が、武器の射線を逸らし、礼拝堂のイスや地面を扶ける。

さらに空中で宙返りをする様にして残り回避すると、今度はお返しとばかりに銃弾が英雄王と呼ばれた美丈夫に迫る。

「――ネズミがつ、凶に乗るな!!」

展開されたのは盾。

名もなき、とある宝具の原典の一つ。

虹色に輝くその盾は、円周から内円にかけて街を、空を、世界を孕んでいた。

弾丸は微風程にも威力を発揮できずに盾に阻まれた。

「――概念による世界断絶か――最強とも言える防御だね……だが、緩い。」

「――要は、気合いの問題、さあ！」

今度は、先とは比べ物にならぬ魔力が込められた二発の銃弾。

「ハッ、無駄だ雑種――この盾は少々魔力を込めたところで……なに!?!」

バキーン!

一撃目であっさり盾は砕け。

二発目の弾丸が男に向かう。

「つ、ぬうあ!」

咄嗟に手を出し、弾丸は瞬時に武装した彼の金の手甲に弾かれた。

「――我が鎧に傷を…?」

「――なんだい、気に入らないかい?」

「楽に死ねると思うなよ――この売女が!」

「はっ、この代償――高くつくよ?」

視線が交わり、正に命のやり取りが――始ま…

「けどまあ、今は三十六計逃げるが、勝ちつ――てね!」

――無かった。

ドオン!!

何もない宙空から響く轟音。

同時、巨大な鉄球――カルバリン砲の砲弾が男等を狙い撃つ。

「ぬ!」

盾が砕かれていたのもあつてか、今度は大きく飛び退いて避ける。

礼拝堂のイスと地面を先ほど以上に砕き抉り、もうもうと土煙りを上げた一撃は、あたり一面の視界を遮り――。

開けた時には、慎二と女の姿は無かった。

「……っ!!」

顔を真っ赤にして歯を剥く金髪紅眼の男。

対して綺礼は、さも可笑しいといった風に。

「く、王よ……中々思う通りには行かぬものですかあ?」

先程の寸劇を続ける様な嫌に丁寧な口調のまま、英雄王に声をかける。

「く、黙れ綺礼、死にたいか貴様っ!」

「クク……楽しめ、と言ったのはおまえだろう、ギルガメッシュ。」

ドガ、とイスの残骸を踏み砕く音が、響いた。

第16話『封印指定執行者』

「ありえないわ…何なのこれは…」

大聖杯がある大空洞にほど近い、円蔵山中腹にある柳洞寺。

その境内で一人の女サーヴァントが立ち尽くしていた。

紫のフードを目深に被り、手には水晶球を持つ立ち姿。

足元には術式の施された円陣が描かれており、今尚仄かに光を発している。

何某かの儀式の片手間に何かを探っていた様だ。

「…どうした、キヤスター？」

彼女こそは「魔術師」のサーヴァント。

コルキスの魔女…メデア。

そのキヤスターに声をかけたのは現在のマスター、葛木宗一郎。

士郎や凜も通う穂群原学園の教師であり、数奇な運命から一度はマスターを失ったキヤスターと契約を交わした魔術師では無い男。

「宗一郎様…聖杯が蠢動しています…まだ戦いは序盤だと言うのに、何故…？」

「さてな、魔術師でない私には検討もつかないがー敵を倒す、どうあれそれで方が付くのだらう？」

「ー確かに…誰がいかな小細工を弄したところで聖杯そのものさえ押さえてしまえば他に意味は無いー」

「そら、ならば勝てばいい。」

「本当に貴方は不思議なマスターですこと…何の根拠もないそんな言葉を信じてしまいたくありません。」

ふふ、と柄にもなく笑みをこぼし。

キャスターは再び作業に戻る。

強く、強く、強くなる為にー

「さて、シンジ。」

「ーお前、馴れ馴れしいんだよ…！」

街の外れ、10年前の大災害の余波で崩れかけたスポーツジム跡。

その一室ー埃に塗れた椅子を払い、胡座をかいて座る女。

「そう邪険にしなさんな、あんたは私を知らないだらうがねー私は、あんたを知ってる。」

そう、間桐慎二。

私はこいつを知っている、いやーこいつと同じ名と姿をした無垢な魂を知っている。

だからだろうか。

マスターも無く、ささやかな魔力だけを与えられて現界したその耳朵に聞こえた声は。

聞き慣れた、あの子供じみた、すぐヒステリックに叫び散らす馬鹿に。

とてもとても似ていたから。

「はあ？真逆とは思うがお前、爺の差し金か？」

「爺…ああマキリ・ゾオルケンか、違うね、聞いただけではあるがあんな奇人変人大賞にかかずらわる気はさらっさら無いね。」

「奇人変じ…ぶっ！」

あのマキリ・ゾオルケンに奇人変人とは痛快極まりない。

恐ろしく、決して逆らえない存在だと思っていたあの化け物を随分と面白可笑しく言ってくれる。

「ふ、まあ聞きなよ…あたしはあんたじゃないあんたを知っている、平行世界と言えぱいのかね…あんたはそこじゃ、あたしのマスターだったのさ、シンジ。」

「僕が？たいした魔力も魔術回路も無い凡人の僕がか？」

「――そうさ、その聖杯戦争じゃあManaやオドは必要無かった、ただ度胸と才覚があればマスター足り得たのさ。」

「だから僕を選ぶのか、でも生憎僕には魔術回路はないし――疑臣の書も焼けちゃまった……この世界じゃあ令呪すら無い僕と再契約なんて土台不可能だ、他を当たれよ。」

「大丈夫さ――魔力、令呪に關してなら心配無いね……なんせ――」

そう言つてドレイクは慎二の手を取り、自らの胸元に引き寄せた。

「は、ちよ、な、何？」

暖かく柔らかな柔肉の感触に慌てる慎二。

だが、次の瞬間その表情が固まった。

「――こ、コレ――」

引き抜かれた自身の手に感じる莫大な魔力。

そして、慎二の手のひらに具現したその形は。

金色の盃――それは、まるで。

「なんだこれ……まるで聖杯みたいな形しやがって……しかも尋常じゃない魔力っ!？」

「ああ、あたしが受け継いだお宝――聖杯、ホーリーグレイル・オブ・オケアノスさ。」

「は、は――!？」

ジムの中、慎二の絶叫が響き渡った。

「当たり前である、こんなことを聞いたら間違いない。無く全聖杯戦争関係者が白目を剥くだろう。」

「――、な、なんで最初から聖杯戦争の勝利者の景品持つてるんだ、お前ええっ!？」

「ハハッ、なんでだろうねえ？」

「な、あ、ええ〜〜??？」

「く、ハハッ、ハッハハ、ひー可笑しい：ああ、言っておくがこいつは願望機としての性能は失ってるからね？」

「な、あ、あ、え??？」

「最早慎二の理解をはるかに超えた事態に、口も頭も追いつかず、ただただ驚くしかない。」

「――こいつはね、最早聖杯を巡るだけの争いじゃあ無くなってるのさ。」

「お、おまつ、おまつ…ええ」

「――ああ、そういやあまだ名乗って無かったねえ：悪い悪いシンジだと思っただらついで、ね。」

「い、いやそうじゃな…」

「――私はフランシス・ドレイク…史実じゃあ男扱いされちゃいるけどね事実はこんな

もんさ：絶世の美女が海賊ーどうだい、痺れるだろう？」

パチン、とウインクして悪戯つぼく笑うその顔は、まるで子供みたいな心底満足気な笑み。

強さの中に純粹さを併せ持った、世界史上、二番目に世界を一周した人物は。

本当に子供の様な一面を要していると見える。

「ーさて、そろそろ馴染んだかい？」

「あ、えっ？」

一瞬見惚れていた慎二が腑抜けた声を出し、自らの手の甲を見つめると。

そこには帆船を模した形状の令呪が三画。

青い刺青の様に現われてーいた。

「ー全く、魔術協ちやく会かいも何を考えているのか：此処までの事態を静観せよとは：理解

に苦しむ。」

パリツとノリがかかった仕立ての良い、それでいて運動を前提に仕立て上げられたスーツに身を包んだ、短く切り揃えたショートカット、手にはレザーグローブをし傍らには大きなバッグを置いた男装の麗人ー、と言うよりは動きやすい格好を追い求めた結果として男装の様になっただけなのだ。

バゼット・フラガ・マクレミッツ。

魔術協会の虎の子である切り札ジョーカー、「封印指定執行者」。

通常の魔術師には捕縛、或いは殺害が不可能な封印指定を受けた異能者、実力者を抹殺、無力化するために存在する所謂掃除屋スイーパー。

中でも彼女は突出した実力をもつ最終兵器。

そんな彼女を投入しながら下された命令は沙汰あるまでの待機。

「解せぬ、と言う顔だねえ…レディがその様な顔をするものではないよ、バゼット。」

無意識に颯め面をしていたバゼットの前に長い金髪をふあさ、つとなびかせて歩み寄るのは、ランサー、フィン・マックール。

フィオナ騎士団の長にして「美しい金髪フィン」の名を持つ、神殺しの大英雄。

その槍は堕ちたる神霊をも屠ったと言われ、クー・フリーンからすれば同じくケルトに連なる同郷人ー言うなれば後輩にあたる人物。

「ランサー…私としては貴方が召喚された事態がそもそも解せないのです…全サーヴァントは召喚されて私は出遅れた筈だったーそこへマスター不在の貴方がふらりと現れて…」

『宜しければ私と契約してくれませんか、お嬢さん?』と来た。

「私としても僥倖だった、ルーンを扱い…まさか現代まで我が時代の神秘を受け継ぐ者

とー何よりこの様に美しいマスターと巡り会えたのだからね！」

ランサー曰く、自分の他にも六騎の英霊が僅かな魔力とリミッターが外れたスペックを持つて召喚されたと言う。

自分がそうであり、また状況や召喚された際の周囲の魔力密度からもまず間違いが無いと。

如何なる手段でその様な情報を得たかと問えば。

「今知ったのだよ。」

と何故か親指を口に咥えて答えを返された。

とー後から聞いた話では彼の親指にはかつて師であるフィンガスに教えられ、焼いて食べようとした智慧の鮭「フィンタン」の脂が跳ねてかかった際に熱さのあまり口に含んだとーが染み込んでおり、それは舐める事で彼の中の知識を元に、その思考速度を跳ね上げ、更には周囲の情報を知識として感じ取り、演算し、予測する…恐るべき智慧の宝具なのだ。

(赤ん坊の指しゃぶりみたいだ、などと空気を読まずに茶々を入れては…いけませんよね…しかし、気になる……。)

「とーともあれ、貴方は伝承通りに智慧に溢れた御仁である様だ。」

とりあえず褒めておこう、実際には憧れのフィオナ騎士団の長たる人物がこうも軽薄

だとは想像すらしなかったが。

いや、しかし女難で身を滅ぼし騎士団を瓦解させるきっかけになっていた筈だしあながち間違いでも無いのだろうか。

「はっはっはっ、そうであろうとも！いつ、如何なる時も輝いてしまうのが私と言う男だからな！」

この軽いノリが無ければ文句なしに強く美しい英霊なのだが。

「――兎に角情報だけでも探らねばなりませんからね…脚を使うしか無いでしょう、使魔だけではいささか不安だ。」

「――さて、残念だねバゼット…静観せよ、と言う話だがどうやら静かに潜ませてはくれない様だよ？」

――指、離そうか大英雄、と…そうでは無い。

「どう言う事です、ランサー？」

「うん、お客さんの様だよ。」

スウ、と立ち上がると手を翳すフィン。

その手には光と共に槍が現れる。

その刃は諸刃、柄には紫の蔦が絡まる意匠が施されている。

無敗マク・フェイルインの紫韃草。

彼の持つ伝承の結晶、神霊殺しの無敗の槍が顕現する。

バゼットはその槍を見た途端に引き込まれる様な感覚を覚え、アタマを振る。

「ーあまり見つめない方がいいよ？」

神霊の祟りが怖いからね、などと冗談とも本気ともつかない台詞を吐くランサー。

槍から感じられたのは途方も無い殺気。

窓から吹き込む風が、彼等が待機していたマンシヨンの一室に生温い感触を持ち込む。

冬だと言うのに、だ。

「カハア……」

窓枠に手をかけ、顔をのぞかせたのはー。

短く刈りそろえられた灰褐色の髪、爛々と輝く両の眼をこちらに向ける、金の肩当、同

じく金の手甲、赤いマントを羽織りサンダルを履いた男。

「ーその理性が蒸発した眼ーバーサーカーか……こんな狭い場所で狂戦士の相手とは

また、骨が折れるな。」

軽口を叩きながら隙の無い所作で槍を構え、腰を落とす。

「ー敵、ハー殺す、コロスコロス、ロー、敵、コロスコロスコロス、殺スウ!!」

両手を広げ、羽撃くようなポーズから、獣じみた動きで飛び掛かる男、バーサーカー。

「ーは、私と素手で渡り合う気かね、流石バーサーカー…頭が沸騰しているんじゃないかね、そらっ！」

飛び掛かるバーサーカーに対しランサーの容赦ない槍捌きが襲う。

怒涛の突きに怯む何処か、更に距離を詰め、体中を傷だらけにしながらも全て直撃を避けたバーサーカーは信じられない行動に出た。

「顔がーがら空きだぞー！」

突き入れられた槍の穂先をー

ガチン!!

歯で、噛み付いて止めたのだ。

「な、何い!？」

慌てたランサーの隙を突き、刃を顔ごと振って逸らすと一瞬にして懐に潜り込む。

ズドン!

鈍い音と共にバーサーカーの膝がランサーの鳩尾にめり込んだ。

「ガハッ!？」

血反吐を吐き散らしながら一瞬間に浮いた後、バーサーカーの拳が更に追い打ちをかける。

嵐のような拳打がフィンの美しい顔を捉えた。

「ーッ！」

たたらを踏み、しかし踏みとどまると槍を引き戻し、バーサーカーへと怒りを向ける。「やって、くれたなつ畜夫めがっ!!」

槍を構えたかと思えば、次の瞬間にはまるで針のような無数の煌めきがバーサーカーに降り注ぐ。

無敗の紫靱草マク・ア・ルインに秘められた権能の一つ、水の魔針。

本来の宝具開帳の数万分の一の力ではあるが、水の勢いは分厚いコンクリートにも穴を穿つ程だ。

「ーガアア!!」

身体に無数に刺さる水の針に怯んだバーサーカー。

そこを見逃すバゼットバゼットでは無かった。

「二対一ではありませんよ、サーヴァント!」

肉体強化の魔術により瞬間的にはサーヴァントにも迫る速度でロケット砲の様に飛び出し、その拳がバーサーカーの鳩尾を捉えた。

たまらず吹き飛ばされ、壁に激突してめり込むバーサーカー。

「ーランサーの痛み…お返ししましたよ。」

硬化のルーンが施されたレザークロップによる近接打撃。

更にはルーンによる肉体強化、本人の類稀なる戦闘技能。

それらを持ってして彼女は真にサーヴァント並みの戦闘技能を有している。

それが魔術協会のジョーカー、封印指定執行者ーバゼット・フラガ・マクレミツツ。

「おいおい、私の立場が無いではないか」

苦笑いのランサー。

それはそうだろうまさか英霊、しかもバーサーカーと殴り合える人間がいようとは。

「まるで戦女神ヴァルキユリア。だな君は。」

「はしたないと思えますか、ランサー?」

「いや? 最高の女性だよ、君は!」

笑顔で槍を構え直し、バゼットと並ぶランサー。

唸り声を上げて立ち上がるバーサーカーを、二人の視線が、射抜いた。

F a t e / a l t e r n a t i v e m a t e r i a l

② + ③

冬木の虎「ーりさて、あまりにもセイバーが化け物な件について。」

炬利ブルマ「私のセイバー、最強！」

バサニキ「いや、ありや最早反則だろう…元々チートだがよお、やり過ぎ感しかしねえ。」

虎「ーり、、」

ブルマ「あれ？師匠？しーりしょー？」

バサニキ「固まりやがったな。」

ブルマ「まあ、トラウトって奴？」

朔弥「いや、サーモンじゃないんだから…」

ブルマ「あつ！本編では石になったままだった役立たずなお色気担当主人公なお姉ちゃん！」

朔弥「ぐ、ぐふっ！（吐血）」

バサニキ「挟ってやるなよ…」

朔弥「あ、あんたが言うか!?(真っ赤)」

ブルマ「まあまあ、とりあえず今日は誰を紹介してくれるのかしら?」

朔弥「ーこの色狂いよ、色狂い。」

バサニキ「俺はそこは正常だ、バーサーカーだがな。」

ブルマ&朔弥「ーじとー。」

バサニキ「さて、俺のステータスだがー」

朔弥「逃げたな…まあいいや、うん、こいつ、オルク事バーサーカー…クー・フリー・リンオルタですが、本来のクー・フリー・リンのバーサーカー化とも違う存在です、何しろFGOに於ける一種のボスキャラであり、聖杯の力を初めから取り込んで生まれたのがこのー本来のバーサーカーなクー・フリー・リンを遥かに上回るスペックをもつオルタだから。」

ブルマ「…聖杯の力を使って…じゃあ何のために彼は聖杯戦争なんかに?」

バサニキ「ー腐れ縁だ。」

朔弥「だ、そうです(苦笑)」

朔弥「因みに…ウイキペディア先生によれば、ライダークラスとおぼしき伝承通りの姿ならバーサーカーより酷いかもしれない。」

バサニキ「正直この姿で現界したのは幸運だな、ライダークラス(?)できたら街中

を歩けないところだ。」

ブルマ「どれどれ？（水晶球を取り出し、覗き込む。）」

朔弥「ん？どうしたの？」

ブルマ「（ガクガクブルブル）」

バサニキ「あー、見ちまったか。」

灰色と黒色の二頭の馬が引くチャリオット、戦装いの無骨なソレに乗るのは、髪は百本の宝石の糸で飾られ、胸には百個の金のブローチで煌びやかに飾り立てているが、その身は激しく痙攣し、額からは光線を発して顎は人の頭ほどに膨れ上がり、両目の間には七つの瞳が生じ、片方の目は頭の内側に入り、もう片方は外側へ飛び出している。

手足の指は七本に増え、両頬には黄・緑・赤・青の筋が斑らに浮かび上がる、その鬼相。

電流のように逆立った髪は先端に向かうほど赤く変色し、そこから血が滴る——ブルマ「では、ここからはデータになります。」

バサニキ「…現実から目を背けやがった…。」

朔弥「……もうクトゥルフの神話生物や邪神並みに性質が悪い…」

クラス：バーサーカー

真名：クー・フリーン（オルタ）

出典：ケルト神話・Fate/Grand Order

地域：欧州／北米大陸（第五特異点）

属性：混沌・悪 性別：男性

イメージカラー：黒／赤

マスター：九重朔弥

【外見】

*未再臨時の初期装備姿です。

ー牙の様にずらりと並ぶ尖った歯。

半月の様に歪めた口元を隠しもせず、眼前の敵を見据える、漆黒の立ち姿。

フードに半ば隠れた顔は野性味あふれ、両耳には長い水晶の様なイヤリング。

両脚は黒い、まるで捻れた角の様な見える無数の棘に覆われた生物じみた装甲に鎧われている。

腰から伸びるのは：尻尾???

まるで巨大な百足にも見える尻尾がゆらゆらと揺れていたー。（本編プロローグよ

り抜粋）

【能力値】

筋力：A＋

耐久：B＋＋

敏捷：A＋＋

魔力：C＋

幸運：D

【クラススキル】

○狂化：E X

如何に理性が失われているか。

バーサーカー特有のスキルで理性と引き換えに絶大なステータス強化を得る。

ー言語や理解力と言った意味であればC相当だが、狂い方も人それぞれと言う事かー彼が狂っているのはもつと根幹的な部分である。

【スキル】

○精霊の狂騒：A

クー・フリーンの唸り声は、地に眠る精霊たちを目覚めさせ、敵軍の兵士たちの精神を砕く、精神系の干渉。

敵陣全員の筋力と敏捷のパラメーターが一時的にランクダウンする。

今作品に於いては敵の精神に干渉する事で恐怖を呼び起こし一時的な自律神経失調

を引き起こすスキル。

○矢避けの加護：C

クーフーリンが生まれつき持つ飛び道具に対する防御スキル。

例えば宝具でも投擲タイプであるなら、使い手を視界に納めた状態であれば該当する加護のスキルレベルを上回らない限り彼に対しては通じない。

ただし超遠距離からの直接攻撃、および広範囲の全体攻撃は該当せず、またバーサーカーでの限界か或いはオルタ化の影響からかランクが1ランクダウンしている。

○戦闘続行：A

往生際が悪い。

瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

仮に致命傷―霊核を砕かれようとも暫くの間は限界し、行動が可能。

また、このスキルのランクが高いのはルーン魔術をほぼ自己再生に回している事も一つの理由である。

○神性：C

如何に神に近い存在であるか。

半神半人である彼は太陽神ルーを父に持ち、色濃く神の血を引いているが、オルタ化した事でランクダウンしている。

通常攻撃に追加ダメージを付与し、またスキルランク以下の魔性に対して物理・心理的に有利に戦える。

○聖杯再臨：E X

聖杯をその身に取り込み、力に変換する偉業。

遠き約束の地にて交わされた絆は、その身に5つの聖杯を同化せしめた。

その為本来以上にステータス増加が発生している、幸運を除く全てに+補正が一つ加えられている。

また、それ以上の何かも秘めている様だが、現状は封印されている。

【宝具】

○抉り穿つ塵殺の槍

ランク：B++

種別：対軍宝具

レンジ：5～50

最大捕捉：100人

クー・フリーンが師匠スカサハから授かった魔槍、ゲイ・ボルク。

クー・フリーン本来の宝具。

自らの肉体の崩壊すら辞さないほどの限界を超えた全力投擲で放たれる、魔槍ホーム

ングミサイル。

本編ではライダーの召喚したギリシヤの魔物群をその投擲で塵殺した。

ランサー時よりも威力と有効範囲が上昇している。敵陣全体に対する即死効果があり、即死にならない場合でも大ダメージを与える。

ルーン魔術によつて崩壊する肉体を再生させながら投擲しているため、本人がダメージを受けることはないが、途方もない苦痛を受ける。

また、因果逆転の呪詛も秘めており、「心臓（霊核？）を貫く」と言う結果を手繰り寄せる為に望外の幸運値か、加護、呪詛を弾く耐性を持たない限り一度放たれた槍が心臓を外す事はない。

○噛み砕く死牙の獣

ランク：A

種別：対人宝具（自身）

レンジ：—

最大捕捉：1人

由来：魔槍ゲイ・ボルクの素材となった紅の海獣クリードの骨で出来た甲冑。

クー・フリーリン・オルタに付与される宝具。

荒れ狂う狂王の怒りがゲイ・ボルクの素材となった紅海海獣クリードの骨格を具象

化、甲冑と化して纏う、攻撃型の骨アーマー。

この鎧を装着すると耐久がランクアップ、筋力をEXにランクアップさせる反面、「挟り穿つ塵殺の槍」の発動が不可能となってしまう。

鎧の爪で敵を連続で切りつけた後、力を溜め、爪を敵に突き刺し、爪を起点に無数の細かい棘が伸び、敵を体内から引き裂く。

F G O第五特異点での師弟対決においては、影の国でスカサハに与えられたものではない為スカサハもその存在を知らず、対応出来なかった。

バサニキ「因みに補足するなら俺の視力はアーチャークラスには及ばないものの、数十メートル先で広げた絵本の絵柄からウォー〇ーを探せる位には良好だ。」

ブルマ「ー成る程、つまりこの残念系影薄主人公なお姉ちゃんの裸体を余す事なく記憶しておけるくらいには目が良いと。」

バサニキ「ああ、なんだか本編で結局そこに触れなかったから触れておけとかなんとか聖杯から電波が来た。」

朔弥「それ聖杯じゃねえ！性挿だよつ、セクハラダメ、絶対!?(指先まで真っ赤)」
バサニキ「因みに朔弥の内腿には際どい位置にハートに似た痣がある。」

朔弥「ヤメローーッだ、誰も得しないから、そんな情報うわああああああん!？」

虎「泣くな少女よ…耐えろ、今は耐えるんだ…」

朔弥「ついていつ復活した!や、やめっ、ちよ、確かめなくていいからっ、スカートめくるなっ!」

虎「…うわ、肌綺麗ね貴女…痣もなんとなく薄ピンクに見えて可愛い…でも場所が場所だけにちよつと変な気持ちになるわね、私ノンケの筈だけど…(ゴクリ)」

朔弥「ちよつと、や、ひゃあん!」

ブルマ「…師匠…セクハラは…その…//////」

バサニキ「…俺も触れていいか?」

朔弥「だ、だだだだ、駄目っ、絶対駄目え!」

虎「くつくつ、ここか!ここがええのんか!」

朔弥「け、ケダモノー!」

ー終わる!

以下、material③。

※第16話「封印指定執行者」を読み返すタイガー。

虎「ど、どどっ、どう言う事だっばよ!」

ブルマ「落ち着け、ししよー」。

虎「だだだ、だつて弟子一号よ！サーヴァントが！サーヴァントがひー、ふー、みー、よー…い、いっぱい!？」

ブルマ「あー、本編では大変な事態になってますねー、確かに。」

ぐだ男「はい、確かに大変な事態になってますねー。」

虎「誰、彼、ホワイ??」

ブルマ「おい英語教師…」

ぐだ男「あ、初めまして、妹がお世話になっていきます、朔弥の兄で九狼と申します。」

虎「え、あ、これはこれはご丁寧に…こちらこそ宜しくお願い…つてえー!？」

ブルマ「師匠がマスオさんみたいな顔に…」

ぐだ男「面白い人だなあ。」

虎「そ、そんなことあいんだよ!」

ブルマ「その心は?」

虎「データを公開せねばならぬ!」

マシユ「まあ、それがお仕事ですしね。」

虎「うわつ、またもや誰方!？」

マシユ「あ、初めまして九狼先輩のサーヴァントで、シールドーのマシユです。」

虎「ねえ、ここに出るのつて本編で出番が少ないとかそういう人とデータ公開される

鯖くらいじゃあないの？」

マシユ「そうなんですか？」

九狼「メタい発言をしないでくださいw」

ブルマ「まさか：そのおっ、で私の人気を奪う気ね!？」

虎「な、何だつてー!!」

九狼「まあ、もしかしたら僕らにも出番あるのかな、FGOの人理焼却が起こってなくても僕らは世界のどこかにはいるんだろうしね？」

マシユ「ー私は、どうでしょうか：」

ブルマ「なんだか話が重い方向に行きそうだから、サクサクツとサーヴァント紹介!」

虎「ハイハイ、今日のサーヴァントはコレ!」

アーチャー「呼んだかね？」

虎「はい、呼びましたよー今回まじで良いとこ少ない紅茶さん。」

紅茶「ー喧嘩を売っているのかね、君は」

ブルマ「まあまあ、とりあえず行きますよ。」

*ここからはデータになります。

クラス：アーチャー

真名：現在不明

出典：F a t e / s t a y n i g h t

地域：日本

属性：中立・中庸 性別：男性

イメージカラー：赤

マスター：遠坂 凛

【外見・特徴】

*F G Oにおける最終再臨時の装備です。

赤い外套、短い白髪を逆立てた髪型。

鍛え上げられた無駄のない肉体、猛禽の如き眼光を持つ男、自称召喚不備による記憶喪失。

周りが化け物揃いのために目立たないがその実力は純粋な人が上り詰めた形としては類い稀な力を有している。

黒と白、二刀、干将・莫耶を操る白兵戦を得意とするアーチャーとしては異質なスタイル。

しかしもちろん、時には黒い洋弓を用いた遠距離戦もこなす。

今作品ではセイバーに不意の一撃でとは言え致命傷を負わせている。

ーまあ、一瞬で再生されてしまったが。

性格は基本的に気障で皮肉屋な現実主義者。それでいて、お人好しと言う絵に描いたような善人で、ツンデレ。

【能力値】

筋力：D

耐久：C

敏捷：C

魔力：B

幸運：E

【クラススキル】

○対魔力 D

魔術への耐性。一工程の魔術なら無効化できる、魔力避けのアミュレット程度のもの。

○単独行動 B

マスター不在・魔力供給なしでも長時間現界していられる能力。マスターを失っても2日は現界可能。

○千里眼 C

「鷹の目」とも呼ばれる視覚能力。例え高速で移動する相手でも4km以内の距離なら正確に狙撃できる。

stay night本編でアーチャーは数キロ先の鉄橋脇の歩道、そのタイルを目視して数を数えられると豪語していたが、事実その通りの様である。

〔スキル〕

○魔術 C―

基礎的な魔術を一通り修得している。

○心眼（真） B

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す。

○投影魔術 A

イミテーション・エア。

道具をイメージで数分だけ複製する魔術。

干将・莫耶もこのスキルで生み出した複製品、投影する対象が『剣』カテゴリの時のみ、ランクは飛躍的に跳ね上がる。

この何度でも複製できる、と言うスキルの特性からアーチャーは投影した道具を使い捨てる形で矢として放ち魔力を暴走、自壊させる事で対象を爆発に巻き込むと言う技を

持^{??}。
ブローケン・ファンタズム
 (壊れた幻想)

【宝具】

アーチャーの有する唯一彼自身が持つ宝具。

魔術の一種であり、彼自身の象徴。

彼が扱う古今東西様々な宝具はこの宝具より零れ落ちる雫の様な物である。

現実に生きていたなら封印指定間違いなしの大禁呪。

【投影宝具】

*アーチャーの真なる宝具の効果により生み出される複製宝具群。

複製宝具は真打と比べてランク下がる。

但し、改良を加えたものに関してはその限りではない。

○偽・螺旋剣
カロード・ボルグ II

ランク：不明(凛の見立てではA)

捻れた刀身を持つ片手剣。

偽、の名が示す様に本来の形とは異なり、アーチャーによる改変が成された人造宝具。

彼は幾度でもコレを取り出せる様で、弓に矢として番え、放つ。

彼が使い捨てる宝具の中でも高威力の逸品で、空間を捻じ切りながら突き進み、
ブローケン・ファンタズム
 壊れた幻想により魔力をオーバーロードさせ自壊することでセイバーの上半身を半
 ば以上吹き飛ばした。

本来の姿は虹の様な剣光を螺旋状に伸ばし、纏う異形の大剣。

虹霓剣、螺旋虹霓剣とも呼ばれ、ケルトは赤枝騎士団の英雄フェルグス・マック・ロ
 イの所有する魔剣である。

その威力は絶大で、「振り抜いたその剣光によって丘を三つに切り裂いた」と言う逸話
 が伝えられている。

また、本来のカラド・ボルグは彼の有名なアーサー王と円卓の騎士に登場する太陽の
 騎士ガウエインが持つ神造兵装、エクスカリバー・ガラティーン
 転輪する太陽の剣の原型とも言われる。

偽・螺旋剣のランクは不明だが、ゴッドハンド
 staynigh t本編にてバーサーカーのランク

B以下の攻撃を無効化する効果を持つ十二の試練ゴッドハンドに防がれている事からB以下と予
 測されるが、原典である螺旋剣がランクA＋～A＋十である事からもその際に真名解放
 を伴っていないかと思われ、今作品に於いて真名解放し暴走自壊した際の威力はB＋
 ～A程度ではないかと予測できる。

○赤原フルンデインツク猫犬

ランク：B

種別：魔剣／魔弾

北欧における英雄、ベオウルフが所持していた魔剣、魔弾として放てば射手が健在かつ狙い続ける限り、標的を襲い続ける効果を持つ。

今作では約4km先のビルから直感頼りに放たれたセイバーの一射九矢の連射に對抗して繰り出された。

驚異的な追尾能力と速度で三倍の数の矢を破壊し尽くしたが、更に追い討ちに放たれた九矢に貫かれて消えた。

『Fate/hollow ataraxia』においては冬木新都のセンタービルから冬木大橋へ、弓につがえて放ち、魔弾として使用した剣。

一度射出されると射手が健在な限り弾かれようとも標的を追尾し続けるため、作中では40秒かけてチャージして放たれた弾はセイバー（アルトリア）でさえその状況では射手を仕留めるしか対抗手段はなく、士郎は令呪を使用してセイバーをセンタービルへと跳躍させた。

矢を放つてからアーチャーがセイバーに致命傷を負わせられてしまうまでにかかったのが「2秒弱」とされ、その間にセンタービルから大橋までが約4キロの距離であり、そこにいる標的に到達して再び襲いかかるうする所までいっていたことと、小節の詠唱時間1秒との設定から、魔弾の速度は音速の6倍程になる。

本来の姿は一对二本の諸刃の剣を鎖で繋いだものだが、剣として使用した場合の能力はエミヤ、本来の持ち主であるベオウルフの場合も共に描写されていない。

○熾ロ!天イ!覆ア!うス!七つの円環

ランク：不明（B+の投擲武器をほぼ防ぐ）

種別：結界宝具

ギリシャの英雄アイアスの盾。

アーチャーが唯一得意とする防御用装備。彼の用いる投影の中でも最高の防御力を持つ。投擲武器や、使い手から離れた武器に対して無敵という概念を持つ概念武装。光で出来た七枚の花弁が展開し、一枚一枚が古の城壁と同等の防御力を持つ。また花弁に魔力を注ぎ込むことによって防御力の底上げもできる模様。

九狼「わー、流石SNの主人公格：中々にオーバースペックですね」

紅茶「いや、私は基礎能力が低いのでね、スキルや宝具を使い分けてようやく他の強豪と並べると言ったところだ。」

虎「器用貧乏とも言う。」

紅茶「ぬぐ、何気に失礼だな貴女は……」

ブルマ「ふーん、しかし本当に貴方何者？」

九狼「ああ、イリヤちゃんは本編参加者だからそのあたり知らないんだねえ…」

虎「ーっなんか、誰かに似てるんだよね。」

ブルマ「ん？どゆこと?？」

九狼「まあ、大半の読者の皆さんは知っている事実だけど…まあ、一応黙っておきま
すね。」

紅茶「ーっ助かる。」

虎「ーっあれ？もしかして貴方って…」

九狼「ハイ、では今回はこの辺で！」

紅茶「うむ！さらばだ！」

虎「え、ちよっ勝手に締めるな!？」

マシユ「シーユアゲーン、です！」

第17話『雷霆』

「――慎二、あれはマズイ……気づかれる前に逃げるよ。」

「おいおい、あれだけ自信満々だった癖に何言ってるんだよお前……」

「――そうじゃない、格が違いすぎるんだよ……あれは最早サーヴァントであってサーヴァントですら無い……神靈クラスの化け物だ。」

目の前に立つのは二人の巨人。

その傍らにはそれぞれ愛らしい少女が見えた。

方や、灰褐色の肌に癖の強い髪を撫でつけ、束ねた巨人と美しい銀の髪に紅眼を持つ美少女。

慎二にすればライダー（メドゥーサ）の仇。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとセイバーのサーヴァントだ。

方や、紫がかかった薄桃色のショートカットにオーバルフレームの眼鏡に白衣と黒いシャツ、ネクタイと養護教諭――所謂保健室の様な服装の女性。

その前に立つのは、豪胆な表情、やたら立派な髭を生やした初老の男性。

その体軀はゆうに190cmはあるだろうか。

灰褐色の巨人——セイバーと比べれば低いものの肉体の厚みはセイバー以上。

重厚な黒い鎧に身を包み、両腕を組んだままにあのセイバーを——格下を見る様にして睥睨している。

「——久しいな……一応はセイバーと呼んでおこうかろう?」

「——何故貴方が……貴方ほどの方がサーヴァントとして召喚に応じただと……冗談では無い、イレギュラーにも程がある……!!」

「——セイバー、何なのアイツ……失礼極まりない奴だけど……とんでもない魔力を感じる……それこそ、サーヴァントなら7騎全てを束ねても及ばない位の——」

「——力だけは有り余るが、中身は唯の好色家だ……イリヤ、決して奴に近づいてはならん、孕まされるぞ。」

「——は、はらっ……なっ?!」

生真面目なセイバーがなんともとんでもない発言をした事と内容に狼狽え、赤面するイリヤスフィール。

「——アインツベルン、でよろしいのですよね……私としては早く決着をつけてしまいたいんです……正直聖杯戦争を早期に決着させる為とは言え……この様な方と絶えず一緒にいるのは耐え難い苦痛ですので……大人しく脱落して貰えませんか?」

「——貴女、私とセイバーを舐めてる?」

イリヤの表情が苛立ちを含んだモノから、鋭く殺意の込められたモノに変わった。

「……セイバー、勝てるわよね？」

「主命とあらば、如何なるものであれ打倒して見せよう。」

セイバーがその手に、ライダーを引き裂いた炎剣を顕現させる。

「……プライド、ですか……プライドで死んでは余りに割が合わないのではありませんか？」

「左様、確かにワシに勝てるとすれば……お前と……後は古代ウルクの王くらいか、だがそれとて極小の可能性に過ぎまい？」

髭を撫でながらさも当然だとばかりに言い放ち、ようやくの事で構えをとる男。

しかし、その手には何も無い、無手だ。

「……アーチャー、こうなつては仕方ありません、やりますよ？」

「承知した、褒美はそなたの胸を一晩貸し切りにしてくればそれで良いぞ？」

「……いい加減に本気で怒りますよ？」

翳した彼女の手の甲には令呪。

青い、雷を模した形の刺青にも似た令呪が見えた。

いい加減にしないと令呪で命じるぞ、と言う脅しだろうか。

「ふあつ、はっははは、良い良いそれでこそ落とす甲斐がある！」

あつさり拒否されるが、へこたれもせず豪快に笑うアーチャー。

「待たせたな、では旧交を温め合うとしようか、セイバーツ!!」

バツ、と広げた両腕から、掌にかけて青白い光が迸る。

「――雷霆よ、穿て!!」

それは、雷光だった。

一瞬にしてセイバーへと到達した稲妻。

それはセイバーの対魔力により半ばが弾かれるが…残り半分はそれを貫きセイバーへと届く。

「ぬぐつ、相変わらずの威力…分霊としての現界でコレか!」

「どうしたセイバー、友が打った剣が泣くぞ!」

更に追い討ちをかけるかのような轟雷がセイバーに迫る。

「抜かせつその母の――己が妻の蛮行を野放しにした貴方だけに言われたくないわっ!!」

「ハ、アレの思考は異常であるからなつ…我が子ながらハピストスは哀れであつたわ!」

「――己が妻の手綱を握っておれば、そもそもあちこちの女に貴方がうつつを抜かしておらねば良かっただけの話であろうが!」

怒気を孕んだ剣閃が雷を払う。

その刃の煌めきは一瞬にして9つの斬撃を生じさせ、雷と相殺した3つを除く6つの煌めきがアーチャーを襲う。

「くわははは、効かぬなあ!」

アーチャーが胸を逸らすような動作をしただけで、黒い鎧から溢れた闇が斬撃を霧散させる。

「……」

知らず、唾を飲み込む音がした。

余りに苛烈なその一撃、それがまるで前戯に過ぎないのがアーチャーの、セイバーの表情からわかるからだ。

《……なんなんだありやあ……おかしいだろう、あいつらどっちも!》

流星に声には出さず、念話でライダーに怒鳴る。

《だから言っただろ……ありや化け物だよ、できれば相討ちしてくれれば一番良いんだが……そうはいきそうにないね。》

何故自分達はこんな風にコソコソと覗き見をしているのか。

それは少しだけ時間を遡る――

「――ライダー……お前さあ……なんで絡みついてくるわけ？」

街中を歩いて、標的を探そうかとしていた慎二に、ライダーは何故か腕を絡め、ぴつたりと寄り添い、歩いていた。

慎二の顔は少しだけ赤い。

美女に腕を絡められているのは悪くないが……今はそんな気分にはなれない。

ただ、相手を探すだけなら簡単だ。

衛宮の家へ行けばいい、そこにはあのいけ好かないバーサーカーが居るだろう。

しかし、今の自分の怨敵はセイバーだ。

ライダーを……メドゥーサを斬り裂き、焼き殺したあのサーヴァントを。

「いいじゃないか、張り詰め過ぎても良い事なんかないよ？ 少しはあんたも余裕を持ちなよ……と、ありやあなんだい？」

ドレイクが指差したのは新都の大通りに面したフードコートにある幾つかの軽食屋台の一つだった。

「あ？ ジャガペだろ……新ジャガ―芋を丸ごと素揚げして胡椒をまぶしただけの貧乏くさい料理じゃないか……何、食いたいわけ？」

「こ、胡椒つ？ とんでもない贅沢じゃないか……何処が貧乏くさいものか！」

――ああ、そう言えば彼女が生きていた時代には胡椒は金と同等の価値があったん

だったか。

「はふ、はふ、ほっふ、ほふっ！」

熱そうに、しかし心底嬉しそうに揚げたての、串に刺した芋を頬張る。

大粒の黒胡椒が美味いか目の端には涙が泛かんでいた。

「そんなに美味しいか？」

差し向かいにフードコートに座り、何本もの串を頬張るライダー。

ジャガイモとジャガイモの間にはベーコンが挟まれていて、肉汁が溢れ、艶めかしい唇に脂がツヤを出して：彼女の顔を見るに心底美味そうである。

「美味しいさ！新鮮な野菜、肉汁溢れるベーコン：惜しみない香辛料：ああ、楽園はここにあったのか：。」

「は、大げさな。」

いつの間にかライダー、フランスス・ドレイクのペースに巻き込まれ、いつしか慎二も笑っていた。

「おや、笑ったね？」

手についた胡椒と脂をペロリと舐め、視線を向けてくる。

「ーな、なんだよ悪いか？」

「いいや、大いに結構だね、えらいえらい。」

と、いきなり慎二の頭を撫で回すライダー。

「ちよ、やめろ馬鹿！」

少々照れながら、悪態を吐く慎二を更に嬉しそうに撫で回し、ヘッドロックする。

「いいじゃないか、減るもんじゃないだろう、ウリウリ！」

いつの間にか撫で回していた手はグーになり、頭をグリグリと攻めたてている。

「ちよ、痛、いたたたたっ!？」

そうこうしていると、周りの人の視線が段々集まり始める。

野性味あふれる美女と、黙っていさえすればそこそこ顔もいい少年。

周りからはどう映るのか。

「ーば、目立つからやめろ、恥ずかしい！」

「あはは、初心だねえ…ん？」

「なんだよ？」

笑顔が一転、厳しい顔つきになって一点を凝視する。

「慎二ーちよつと来な。」

と、いきなり首根っこをつかまれて引きずられる。

「ーは？何を、おい!？」

ズルズルと引きずられた先で、物陰に身を潜める二人。
ライダーの視線の先には、一人の女性。

薄桃色の髪に、憂いを帯びた表情。

年の頃は20代半ばか、前半。

オーバルフレームのー横長の眼鏡をかけ、手元の文庫本に視線を落としている。

赤いネクタイに白衣を羽織った格好はどこかアンバランスではあるが…なぜかそれが似合うと言うか、不思議な魅力を持っている。

ー大人びてる癖にあどけない表情。

ライダーも美女と言えるが、その女の子はまた、違う。

「…生きて、生き延びていたとはね…此処で出会うのも因果つて奴か…。」

「知り合いか?」

「ーああ、あちらは私を覚えているか怪しいけどね…。」

少し悲しそうな顔で答えるライダー。

「らしくない顔しやがって…調子狂うんだよな、全く…。」

「は、慎二の癖に生意気な。」

「で?どうするんだよ?」

「尾行、しとこうか…まずは情報だ。」

こうして僕らは、その女性を尾行する事にしたのだ。ーあんな化け物に出くわすとは思っても、せずに。

「ーはあ、遅いですよアーチャー。」

待ちくたびれたとばかりに溜息を吐く。

（ふははは、まあ良からうて……まぐわいはわしの力を高めてもくれるのだからな、何よりわしの子種を賜るおなご共は幸せじゃぞ、神の子を宿すのだからな！）

このサーヴァント、事もあろうに街中で女性をナンパした挙句ホテルへしけこんでいたのだ。

一般人と性行為に及んだ程度で大した魔力にはならないだろうに、大体サーヴァントが子種を残すとか多分不可能だと思いが……確信は無いが……できるのか？

（いやしかし、最近の世の中は便利じゃの、あの様な趣向を凝らしたまぐわいの場があるのだから……らぶ、ほ……とか言ったか。）

「ーこのセクハラゴッド……何故でしょう、なんだか今凄くイライラします……」

（なんじゃ、生理か？）

「ー違います……殴りますよ？……兎に角行きましよう……先方が指定してきた場所に行かなければ。」

こめかみを押さえてイライラしながら立ち上がり、文庫本を閉じる。そのまま文庫本を近くの屑籠に投げ入れると、足早に歩を進める。

(ふん、敵なぞ待たせて苛立たせておけば良いモノを……律儀な事だな。)
アーチャーの眩きは、誰に聞かれる事もなく。

彼らと、尾行する慎二とライダーは新都の外れへと向かうのだった。

時は更に遡る。

慎二達が女性を尾行するもう少し前。

新都外れの廃区画のスポーツセンター周辺。

「ランサー、追いますよー！」

「委細承知！」

隙を突き、壁際に追い詰めたバーサーカー。

しかしトドメを刺そうと近寄った所で思わぬ事態が起こる。

窓から差し込んだ夕日が偶然にも反射し、一瞬だけ視界を奪われた。

その一瞬、一瞬で十分だったのだろう。

相手はひび割れた壁を蹴り碎き、外へと逃げ出したのだ。

「逃がさんよー！」

再び水の魔針がバーサーカーに殺到するも、今度は素早く横に飛んで躲された。

「おのれ、ちよこまかと……!」

こうも距離を置かれてはランサーもバゼットも攻撃手段が乏しい。

夕暮れに染まり、薄暗くなり始めた人のいない廃墟の街並みの屋根を飛び回り、追走劇は続いた。

やがて再開発が遅れている廃区画から出て、新都の外れへと場が移る。

そこはかつての聖杯降臨の場——10年前の惨劇の中心、未だ犠牲者の怨念が色濃く漂う場所。

冬木中央公園の只中であつた。

そこに漂う空気、マナ、全てが異常なこの場所で。

バゼットとランサーは着地と同時に顔を顰める。

「これはっ…前回の聖杯降臨の地と聞いていました…マナが濃いかそんな話で済むレベルでは——」

「躲せ、マスター!!」

目の前のバーサーカーとは明らかに異なる方向からの遠距離攻撃。

「むっ、何奴!?!」

慌ててとびのいた先には、一人の男。

その手には、銃。

肉体強化を施していなければ反応できないタイミングだっただろう。

「参ったね…まさか躲されるとは…」

黒いコートを羽織り、目深にフードを被った男は呟く。

顔はいまいち、逆光で確認できない。

薄暗くなり始めた空に、街灯の光。

明らかにそれら視界を覆うタイミングも計算しつくしての狙撃。

しかし男の誤算はバゼットの身体能力を見誤っていた事だろう。

「封印指定執行者ロー…これほどとはね。」

く、つと皮肉気な自嘲の声、次いで紡がれた言葉は命令だった。

「バーサーカー、宝具の開帳を認めるローお前の護る国の為だ、放て。」

「ロー貴様がこいつのマスターか…!!」

「ローアー、ローマ、ローマに…映えあれ…ローマに仇なす者、脅かす者を捕らえよロー

月よ、蒼き輝きよロー！」

今までろくに言葉を発しなかったバーサーカーが発した言葉は。

「…あああつぎいいいいっ!!?」

叫び、天を仰ぐ瞳が恍惚と開かれる。

「女神よ……おお……女神が見える……!」

結局は意味不明な言葉。

だが。

その言葉とともに天が翳った。

夕闇が更に暗闇を増し、天空に星が現れる。

そして、中天に輝くのは月。

ここ数日の赤い輝きでは無い、狂おしい程に美しい蒼き輝き。

「ーさせるか……マスター、放つぞ!」

「ーやむを得ません、許可します!」

ランサーの周りにも魔力が渦巻き、水が踊るように流れ出る。

『我が心をー』
フルクテイクルス

『無敗のー』
マククア

天から光が降り注ぎ、ランサーの槍に集まった水は形を成しー

『喰らえ、月の光!!』
デイアーナ

『紫鞞草 ツ!!』
ルイン

そう、水は形を成しー、崩れた。

「な、何いつ!」

光が溢れ、更に視界が塞がれる。

「ーくっ!？」

身体から力が抜ける。

「ー馬鹿な…私の切り札まで効果をなさないー?」

バゼットもまた、呆然と拳に「何か」を握りしめて呟く。

バーサーカーと、男の気配は既に無くなっていた。

慎二とライダーは先ほどから物陰に潜み、ひたすら息を殺していた。

元来魔力の無い慎二と、魔力を抑え、半霊体化したライダー。

派手な行動や物音さえ立てなければ気づかれはしない。

そんな中で、彼らは冒頭の状況に出くわした。

二人の少女と、二騎のサーヴァント。

睨みあう両陣営。

「ー貴方達…果たし状じみた呼び出しをしておいて随分と時間にルーズな事ね?」

手にした紙切れ…今朝のうちに大鷲の足に括り付けて届けられた鳥文をヒラヒラ揺らし、苛立ちを隠そうともしない銀髪の少女…イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

「此方のサーヴァントがどうにも我儘で……どうにかして貰えたら助かるのだけれど。」

それに対して不遜なほどの態度で、冷めた口調で返す女。

「何じや、マスターが相手をしてくれるならばあの様な真似をせんでも良いのじやぞ？」

「――絶、対、に、い、や、で、す――！」

何か凄く嫌そうだった。

主従関係が上手くいってないのだろうか。

「巫山戯ているなら帰るわよ？」

イリヤスフィールは更に苛立ちながら問う。

「――失礼、要件は二つ……同盟を組まないかという話と……」

「同盟？この文面で？やっぱり巫山戯てるの？」

投げ渡された文は器用にイリヤスフィールから、女の手収まる。

何らかの魔術かもしれない。

「なになに……はいけい、旧交暖まる再開を期待している……ついては貴様のマスター共々軍門に降れ……何、悪いようにはしない聖杯とやらも望むならくれて、や、る――？」

文を読み進めるに従い、眼鏡の女マスターの表情が怒りに染まってゆく。

「――アーチャー……貴方言つたわよね……セイバーは親交があつた英霊だから、説得のため文を書く、つて？」

「おうよ、どうだなかなかきちんとへり下る文面であろう、相手にもきちんとメリツトを説明してー」

「貴方はお馬鹿さんですか！差出人の名前も無く、この内容で誰が話を聞くものですかつ、ここに來ただけ奇跡みたいなものじゃないですか!？」

髭面の大男の胸ぐらーマントの端を掴みあげて怒鳴る姿は失礼だがちよつと可愛らしい。

涙目で怒るあたり結構苦勞人なのかも。

「ーまあ、そう怒るな駄目なら一度叩きのめしてから従わせたらよかろう?」

「ー文面でなんとなく嫌な予感はしていたのだ…しかしまさか…」

セイバーが、ひたすら嫌そうな顔で返す。

ライダーは焦りを覚えていた。

尾行してきたは良いが、目の前の二人は明らかに自分一人の手には負えない。

聖杯の恩恵を受けた今ですらあの二騎のうちどちらか片方すら相手にするには難しいだろう。

自らの内に残った聖杯の残滓が、二騎のサーヴァント、セイバーとアーチャーの強さを肌が泡立つほどに伝えてくる。

このままでは気づかれずに離脱するのさえ難しい。

「……久しいな……一応はセイバーと呼んでおこうかのう？」

「……何故貴方が……貴方ほどの方がサーヴァントとして召喚に応じただと……冗談では無い、イレギュラーにも程がある……!!」

そうこう考える内に、二騎の争いが始まってしまった。

轟雷が、斬撃が、破壊の嵐が吹き荒れて公園の枯れかけた樹々をなぎ倒していく。

まさに神話の体現の如き争いの前に、身動きが取れない。

だが、救いは思わぬ所からもたらされた。

……空だ。

「……ぬっ、う!?!」

「ぐ!?!」

先ほどからの激しさが嘘の様に、唐突に動きを止めた二騎。

一瞬にして空が翳り……あたり一面に蒼い輝きが降り注ぐ。

「……なんだ、月が、蒼く……?」

「今だ……逃げるよ慎二!」

セイバーも、アーチャーも。

身体のカ……魔力を掻き乱すこの光に晒され、動きを止めた。

ライダーにも当然不調はあったが……そこは火事場のなんとやらだ。

「ぐえっ!？」

首をつかまれ、息が詰まって妙な声を出した慎二を連れて全力で離脱する。

「……なんじゃ……月の力……だと?」

アーチャーは呟く。

「力を掻き乱される……不快な光だ。」

セイバーも顔を顰め。

「ふん、卿が冷めたわ……改めてまた会おうぞ。」

雷が地面を叩いたかと思えば。

其処には二頭の神牛に引かれた古風な戦車が顕現していた。

「……それは……真逆、ゴルディアスホイール神威の車輪!？」

「ほう、なかなか博識だな?」

「第四次……前回の聖杯戦争のライダー……イスカンダルが使っていた宝具……貴方は、征服王なの?」

「ふ、あの様な盗人と一緒にするでないわ、本来ならばコレはわしに捧げられた供物故にな」

「……まさか、まさか?」

「……ああ、イリヤ……アレはその真逆……ギリシャの大神……雷の神、主神……ゼウスだ。」

稲光りが轟き、視界を覆う。

月夜も雲に覆われー大粒の雨が地を、樹々をー強かに打ちすすめる音が、響きわたった。

F a t e / a l t e r n a t i v e m a t e r i a l

④

ぐだ子「出番よこせ…」

ブルマ「は！お色気担当のお姉ちゃんがやさぐれている…！」

ぐだ子「お色気言うな!？」

虎「出番…私なんかほとんど無いから最近このデータ集でしか喋ってないんだけど!？」

ブルマ「しかも話の根幹にはまず関われないって言うね、もうね（笑）」

虎「わ、私をタイガーと呼ぶなあああ!？」

ぐだ子・ブルマ「呼んでないし!？」

白衣の女性「ーはい、とりあえず解説にうつりますね。」

虎・ブル・ぐだ子「誰だ（よ）っ!？」

白衣「ーさて、どうにも混乱を極めてきた本編ですが。」

虎「さらつとスルーしやがった…」

白衣「まず、本来ならあり得ない現象が幾つか起こっています。」

ブルマ「どんな？」

白衣「これは確認に過ぎませんが……エクストラクラスの二人を合わせて16騎ものサーヴァントが召喚、それらが前半に召喚されたサーヴァントの令呪は赤、後半に召喚されたサーヴァントの令呪は青の令呪に分かれている事。」

ブルマ「本当だ、貴女は青の……私のは赤いのね（脱ぎやつ）」

士郎「ちよ、イリヤ！お腹出しちゃだめ！なんていうか目の毒……」

ぐだ／虎／桜「「じと……」」

士郎「な、なんでさっ!？」

白衣「……それから（無視）、貴女……イリヤスフィールさん、貴女は本来ならば聖杯の器……小聖杯として調整されたホムンクルスであるが故に身体は成長しない筈でした。」

ブルマ「ふふふ、確かに今回の私はお兄ちゃんやその他のフアンの方々の為、こんなにおつきくなりました！（胸を反らす）」

虎「……貴女達なんで揃いも揃って……（自分と見比べて）って言うか今回は大人バードジョンにブルマなんだ……犯罪臭しかしい……本当に……（もう一度見比べて）」

髭の人「ふあははは！そりゃあワシにもまら」

白衣「黙れセクハラゴッド!!」

髭「ぶべらっ!」

虎「うわあ…なんか丸くてごつい鈍器で…」

ブルマ「凄く…大きいです…(物理)」

白衣「うちの駄サーヴァントが大変失礼しました…(血糊フキフキ)」

ぐだ子「美少女マスターは見た!ドキツ血痕だらけの最高神!原因はセクハラ!?!提供は信頼と安心のアーネンエルベでお送りします?」

虎「いや、どこの深夜番組よ…あと若干市原悦子混じってるから。」

髭「ワシ、最高神なんじゃけど…扱い酷くね?」

紅茶「…神か、神ね…仕置きをするのは構わないが…別に、うっかり殺してしまってもかまわんのだろう?(満面の笑み)」

ぐだ子「ちよ、紅茶さん落ち着いて!なんか神殺しの武器を並べないで!」

紅茶「…凜に手出ししたら殺す、座に戻る前に108回殺す。」

髭「あ?ワシ貧乳には…」

紅茶「アンリミテッドブレイドワー」

ぐだ子「まてまてまて、本編でもまだ出してない宝具をこんな舞台裏で使わないで!?!」

虎「ぎゃー!?!刃物!刃物お?大量の長物やヤツパがあ!?!」

*ヤツパ||893用語、主に短刀を意味する。

ブルマ「師匠…やはりそっちの人なんですわね」

白衣「…とりあえず、アーチャーのデータを紹介します。」

ぐだ子「この子、ぶれないなあ…」

白衣（…これでも大分変わったんですけどね…）

ぐだ子「…ん？」

白衣「なんでもありません、ではここからはデータになります。」

クラス：アーチャー

真名：ゼウス（ユピテル、ジュピターとも）

出典：ギリシャ神話

地域：ギリシャ地方／オリュンポス

属性：混沌・中庸 性別：男性

イメーヅカラー：白

マスター：???

【外見・特徴】

ギリシャ神話におけるオリュンポス十二神の頂点に君臨する最高神であり、古代ロー

マ神話においてもジュピター（ユピテル）の名で最高神として崇められる。

また、ゼウスの語源は天の主、などを意味し、キリスト教において神を讃える「デウス」と同じくした意味を持つ。（ただし存在としては別であり、同一視はされていない。）
 今作における外見は立派な髭を生やした、外見的にわかりやすく言えばイケメン仕様
 のドワーフみたいな顔立ち、もつと言えばイスカンダルをもう少し老けさせて髭を伸ば
 したイメージ。彫りは深く、彫刻の様な厳つくも美しい顔立ちをしており、その体軀も
 また巨大で190cmを優に超える。

当時の古代ギリシャ人男性の平均身長が165cm程であったと言われており、比べ
 てみてもその大きさが伺える。

数多くの宝具を持つ彼だが、今回は重武装した姿——漆黒のフルプレートメイル
 「恐怖」^{フォボス}を纏って現れた。

他にも純白の軽装鎧「光輝」^{イランブシイ}を持つ。

性格は極めて破天荒で且つ、好色。

これは一説には現世の危機に際し活躍する英雄を世に送り出すためであるとされる
 救世^{グゼ}の一環とも言われている、ガ——結局のところ好き者なだけでは無いだろうか。

ギリシャ神話の神はやたらに自由で好色な者が多いがゼウスはその中でもあまりに
 色事にまつわる話が多い、これは後世の人間が我こそは神の系譜に連なる者である、と

自称し倒した結果であり：ある意味ではゼウスは被害者かもしれない、浮気をするたびに妻であるヘラにとんでもないヤキモチを焼かれ、その被害は主に浮気相手に向けられる理不尽ぶり。

相手は騙されたり化かされたケースが殆どで、実際悪いのはゼウス以外に無い。

嫉妬に狂った者程恐ろしい存在は居ないと言う事か：現代に至るまでヘラの名前は所謂「メンヘラ」に現れている様にすら思えてくる。

ー実際には「メンタルヘルス（精神疾患）」がネット上のスラングとしてメンヘラに変容した、というのが真実だが。

だが、人が信じればそれが形を成すのが神という概念存在であり、結果としてゼウスはあらゆる邪悪を打ち砕く雷を操り、万能の力を持つが妻と美女には滅法弱い恐妻家と
言う情けなくもどこか人間臭い最高神の姿となったのである。

【能力値】

筋力：B

耐久：B

敏捷：C

魔力：EX

幸運：A

【クラススキル】

○対魔力 EX

魔術への耐性。神代の魔術すら無効化し、魔法ですらその効果を半減させる規格外の耐性。

事実上この世のいかなる魔術を用いようと彼を害することは不可能である。

○単独行動 B

マスター不在・魔力供給なしでも長時間現界していられる能力。マスターを失っても2日は現界可能。

【固有スキル】

○天空神の眼 EX

「神の視点」とも呼ばれる視覚能力。所謂本来の意味での千里眼であり、距離に関係なく境界などの魔力的な妨害が無い限りいかなる場所をも見透す力。

この力故にアーチャーのクラススキル、千里眼はオミットされている。

ただし、見えすぎるが故に遠距離を精密射撃するのには不向きな能力であり、大雑把な位置に強力な一撃を叩き込むのには使えない。

アーチャー自身、この視界を用いて精密射撃をしたことすら無いため。（主に美しい女性を覗く為に用いる下衆っぷりである。）

つまりは狙撃手としては使いこなせていない。

○魔力放出〔雷〕EX

魔力を体外に雷として放出するスキル。

武器や拳に纏わせて威力を底上げしたり、電磁パルスを放射して精密機器を狂わせた
りできる、またアーチャーに至ってはその膨大な魔力により磁界を操り、その先に存在
する現象を操る事も可能。

ただの石ころも魔力でコーティング（そのまま飛ばしても摩擦で石が消滅する為）す
る事で所謂レールガンの原理で発射し、サーヴァントにすら致命傷を与えかねない凶悪
な礫と化す。

○西洋魔術／ギリシャ文明圏 A

西洋、主にギリシャ文明圏におけるあらゆる種類の魔術を極めた証。

思想、体系の違う天使・悪魔召喚などは含まれない、ただし本人に深く学ぶ気が無かつ
た為かA止まりである。

時代的に後に自身が別名で崇め奉られる事となるローマ帝国の台頭以降のものは習
得していないが、あくまでも神秘とは薄れゆくものである為に派生した一部技術を除け
ば無いに等しく、初見の魔術もほぼ見ただけで魔術式を理解してしまう。

もしも本気で学ぶことを良しとすればEXでもおかしくは無い。

○神性 EX

誰あろう彼自身が大神そのものの分霊である為、規格外のランクを持つ。

邪悪に対して常に有利に、また相手が邪悪であればあるほど威圧効果を発揮する。

MND（精神）判定に成功しなければ行動判定全てにペナルティを与える。

また、宝具（真名解放）以外の攻撃全てに強力な追加ダメージ効果を付与する。

【宝具】

○「猛り灼き尽す神の雷霆」

ランク：EX

種別：対人く対界宝具

最大補足：測定不能

レンジ：0～∞

ゼウスが巨人族との戦、ティタノマキアで救った鍛冶神キュクロプスからその礼に献上された雷そのものを具象化した神造兵器。

その威力は凄まじく、ゼウスが本来の力を持って振るえば一撃で大地を全て融解させ、全宇宙を灼き尽す事すら出来る程で、多くの神々もこの力の前に敗れ去っている。

流石にサーヴァントとしての現界である為そのままの威力では無いがそれでも最大出力ならば英雄王の乖離剣と真つ向から撃ち合える程の威力を持つ。

真名解放前でもはた迷惑な程に強大な電磁操作能力を有し、磁界や電流を自在に操れる。

低出力で放つのは作中、セイバーに向けて放っていた真名未解放の雷撃である。

また、魔力放出【雷】のスキルもこの宝具の恩恵である。

○「恐怖^{フォボス}」

ランク：B+

種別：対人宝具（防具）

最大補足：範囲内の全ての知的生物

レンジ：0～500m

漆黒の全身金属^{フルプレートメイル}で、その異様は見ただけで対象に恐怖を呼び起こす、MND（精神）の抵抗判定に失敗した場合恐怖に身体が竦み、1ターン～3ターンの間動けなくなる。

FGO的に言えば敵全体に確立でスタンを付与するスキルを備えている。

また、黒い霧の様なオーラによる自立防御機能も備えておりB以下の攻撃は全てシャットアウトしそれ以上でも一定値までのダメージをカットし、それが魔力を含む一撃であるなら対魔力も相まって殆ど攻撃としての意味をなさない、欠点は異様に重く、敏捷を1ランク下げてしまう事。

○「光輝」
イランフシイ

ランク：B+

種別：対人宝具（防具）

最大補足：範囲内全て

レンジ：0～50m

純白の軽鎧で、眩いばかりの光輝を纏う。

輝きは電光であり、人間が近づけば灰になる

程の高電圧の雷撃を常に放出している。

厄介な事にこの効果は装備者の意思では出力を上げる事はできても完全に止めることはできず、浮気相手の元に行くにはこの鎧をつけていかねば行けない制約を受けたゼウスが浮気相手の元へと降臨した結果、哀れ女は灰になってしまったと言う逸話が残っている。

：因みにやはり妻、ヘラによる謀略である。

「恐怖」フォボスとは反対に装備者に雷光の如き動きを与える効果を持ち戦場ではこちらを纏

う事の方が多かつたらしい。

○「万物」カテテイ・万象デミウルギア・自在エレフテラ・喝采エウイーヴァ

ランク：C

種別：対人宝具（変身能力）

最大補足：1人（自分自身のみ）

レンジ：ー

神話においてゼウスが様々な人物、動物、無機物や黄金の雨に化けた逸話が昇華した宝具。

ゼウスは老若男女、全てに変化出来たが、更には無生物にすら変化し、様々な女性を口説いたり、襲う際に用いたとされる変身能力。

そこに限界は無く、思い描き、集中するだけで望んだ物や者に変化できる。

また、いかなる姿をとろうともその力は変わらず、変身前に装備した鎧などの装着型宝具の効果をそのまま引き継ぐ。

つまりは、「恐怖^{フォボス}」を着けて梟に変化した場合、辺りに恐怖を振りまくテラー・アウルが出来上がる…。

ぐだ子「なんか…もう、本当なんか…」

ブルマ「ゼウス最低だ…」

紅茶「これ程の宝具を…ただひたすらナンパや覗きや強姦に用いた等…これだからギリシヤは…！」

白衣「エロ神死すべし！」

虎「奥さん怖え…」

アーチャー「あんまりじゃあ、あんまりじゃあ…ワシだって好きでこんな人生歩んできたわけじゃないやい！」

*ゼウスが好色なのは後世の人間が皆が皆私こそゼウスの血脈だと言い出したからです。

多分最初から好色な神様ではなかった、なかったはず…。

士郎「…なんだか収集がついてないな…。」

白衣「代わりに進めておきましょうか？」

桜「そうですね、とりあえず浮気は死刑だと思えます♡」

士郎「ひ!?桜の影からなんか伸びてる!？」

白衣「…これ、まさか…」

士郎「あ、騒いでたサーヴァント全員とついでみたいは何故か藤姉が縛り上げられた挙句全力で投擲された…」

黒化桜「…お星様になあれっ♡」

白衣「…さて、その他の相違点ですが…」

ぐだ子「話始めるの!？」

白衣「まず、先ほど上げたイリヤスフィールの成長、そして7騎以上のサーヴァント召喚、そしてー神霊たるゼウスの召喚。」

桜「なるほど…確かに本来の聖杯戦争の枠を遥かに超えた事態になっていきますねえ…」

白衣「はい、本来冬木の聖杯によつて呼べるのは、東洋を除く「英霊」であり、「神霊」は如何にランクが落ちようとも召喚されるはずが無いんです。」

士郎「神様がそうほんほんと召喚できちまつたら世界がとんでも無いことになりそうだしなあ。」

白衣「はい、作中の私が何故神霊を型落ちとは言え召喚できたかに関してはいずれ理由が明かされるでしょう。」

桜「なるほど…：そういえばお爺様が兄さんに…何かの欠片を渡しましたよね…あれも？」

白衣「ライダーを怪物へと変貌させたあの破片ですね、あれについては大方の読者様がZeroを知っていれば…いえ、むしろ貴女こそよく知っているんじゃないかもしれませんか、桜さん？」

桜「ーなんの事でしょうか？私是一般人ですよ？か弱い弱い、可愛らしい後輩です♡」

ぐだ子「この娘やっぱ黒い：腹黒い：」

白衣「そう、確認されただけでこの作中では聖杯が二つ。」

士郎「本来の大空洞に安置された大聖杯と――慎二の新しいサーヴァント、青の令呪のライダーが持っていた：ホーリーグレイル・オブ・オケアノスとか呼ばれていたやつだな。」

白衣「はい、願望機としての機能は失われている――とはつまり何者かが叶えた願いを現在進行形で叶え続けている、或いはその権能そのものが失われる事態があつたか。」

ぐだ子「――あれ、確かうちのバーサーカーのデータの中に：聖杯再臨 って無かつた：：？」

士郎「え、本当だガチで書いてある：はあ？聖杯を5つう!!」

桜「つまり、都合7つの聖杯がすでにこの地に集っている訳ですね。」

白衣「はい、神霊が降臨した事、聖杯がこんな風にいくつも集まる事実：偶然なはずがありませんよね？」

士郎「どう考えても黒幕がいるよなあ：」

ぐだ子「でも影も形もないよね？」

士郎「そこなんだ、これまでこれだけ不可解な形になりながらそれらしい奴が誰もいない、全てが巻き込まれただけにしか見えなくて：」

ブルマ「いや、一番怪しいのは白衣のお姉ちゃんじゃないの？」

白衣「失礼な、私みたいに控えめな黒幕なんているはずが無いでしょう？」

ぐだ子「……随分アグレッシブな気がしますけど……なんか、変な違和感があるんです

よね、貴女を見てると……なんだろう?？」

オルニキ「……いずれわかる、いずれな。」

ぐだ子／士郎「え、何か知ってるのか!？」

オルニキ「……さあな。」

ぐだ子／士郎「間! 今の間あ!？」

白衣「……謎が増えただけかしら?」

ブルマ「ふふ、いいんじゃない? 今はこれで。」

*という訳で、解説になったかどうか怪しい解説でした。

謎の鍵になりうる発言やなにやらがこのショートコント中に隠れています。

一種の伏線確認と言うか。

ではではみなさま、今回はこれにて閉幕。

新たな舞台で……

お会いしましょう!?

しーゆー!!

第18話『歪み』

「じゃあ何か…イルマ、お前が話に出ていた吸血鬼デイクォーカ？」

「まあ、そういう事になるかの。」

「……ねえ、何で私達を襲ったの？」

「カレイドスコープのジジイがな、言っておったんだ…お前達は…世界を創り変える存在だ、とな。」

「…ちよつ、つと待つて？」

妙な溜めを見せたあと、凜が聞き返す。

「なんじゃ？」

「カレイドスコープ？まさか、まさかよね…その人、名前は…」

「ああ確か、キシユアゼル、ゼレ？」

「キシユア・ゼルレッツ・シユバインオーグ卿でございます、お嬢様。」

「おう、それじゃ！」

「…だ、大師父ウウウウ!?」

凜が目を剥いてツツコミを入れている。

あわやそのまま卒倒しかねない勢いで倒れかけた為に慌てて士郎が抱きとめる。

「だ、大丈夫か遠坂!？」

「……いや、うーん……なんていうか予想の斜め上をいかれたと言うか……」

「……遠坂先輩、私の記憶が確かなら……キシユア・ゼルレッツチ・シユバインオーグ、つて……第二魔法……平行世界の運営を司る、“魔法使い”、よね？」

「え、ええ……そして私の家、遠坂の三代前の当主に教えを説いた人物……噂じや聖杯戦争開始にも関わった……私の家系にとっては大師父グランドマスターにあたる方よ。」

衛宮先輩に抱き抱えられてちよつとばかり嬉しそうに、頬を赤くする遠坂先輩可愛いな。

「……魔導元帥、宝石翁、万華鏡カレイドスコープ……宝石のゼルレッツチ、呼ばれ方は様々あるが……神出鬼没の魔法使いにして死徒二十七祖が一人……同時に、私の吸血種としての『親』にあたる愉快犯のくそジジイだ。」

さて、待て、マテ。

今、聞き捨てならない単語が出ていませんでしたか？

ゼルレッツチが死徒、二十七祖ですと？

あれ、おかしいな……英霊召喚を可能とする世界に……？

世界、世界……？

「あれ…？私今、何を考えー」

ズクン、と視界が僅かに揺れて：

瞬間、頭を鈍器で殴られた様な錯覚を覚えた。

ー頭が、割れそうだ。

いた、イタイ、痛いー痛い痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイ痛いイタイー

「あ、かつーく、う!?」

視界が明滅する様にチカチカと瞬き、心が押し潰されそうな不安と、隣にあるはずの何かが足りない様な欠落感ーーー、

「さ、朔弥っ!？」

衛宮先輩の声とー

「九重さんっ!？」

遠坂先輩の声がー

遠く、かなたに、消えて行く。

『ー貴女が、アナタ達がいくら足掻こうと無駄な事ー全ては私のー■■の中
にー』

黒い、服。

昏い、眼差し。

ぞつとする様な、その冷たい声が。

『誰が、自由にさせて等やるものですかー』

罅割れの様な恐ろしいその口に。

笑みを浮かべながら、そんな台詞を吐いた。

「に、いーさんー私、は…」

最後に見えたのは、埃の残る石畳の床。

私の意識は直ぐにー途切れた。

「…ゼウス、ですって、冗談じゃ無いわ。」

「生憎と事実じゃ、美しい乙女よ。」

「ー汚らわしい目でイリヤを見ないで頂こうか、父上。」

「ああ、そうか、そうよね…あれが真実大神ゼウスだと言うなら…」

「ーワシをまだ父と呼んでくれるのじゃな、ヘラクレス。」

「不本意ながらな、貴様は間違はなく私の父であり…唾棄すべき敵だ。」

雷鳴が轟き、殴りつける様な雨が降り始める。

雨は視界を煙らせて、互いの表情を隠す。

「……残念じゃ、では今宵はこれにて、な。」

ゴルディアスホイール
神威の車輪に飛び乗ると神牛、ゴッドブルが周囲に張った結界に雨が阻まれる。

既に濡れた分は戦車の御者台を濡らすが、髪を乱暴に掻き上げ、ゼウスはただセイバー、ヘラクレスを一瞥した後には空に舞い上がる。

戦車が飛び去った後には破壊痕がまざまざとその様を見せつける様にしてあり、木々を薙ぎ倒し、ベンチを、街灯を砕き、曲げ、焦げつかせ、燃やし、溶かしていた。荒れ狂っていた炎の熱は雨に散らされ、冷え始めている。

しかし。

「……イリヤ、奴は必ず我々で仕留める。」

「当然ね、私達を見くびった事を、死の淵で後悔させてあげなくちゃ。」

イリヤの身体中に、赤々と浮かび上がる紋様。

それは丹田を中心に全身を覆い尽くすほど広がり、光と熱を伴い脈動している。全身の魔術回路そのものが全て令呪なのだ。

神にも等しい力を備えた大英雄……セイバー、ヘラクレスを聖杯なしに召喚し、維持したカラクリ。

イリヤのマスターとしての適性の高さ、この無尽蔵とも言える魔力。

「神霊を従えるなんて裏技、確かに驚いたけれど……勝つのは、私達。」

身体を打つ雨粒が、触れたはなから蒸発して行く。
熱は冷めない。

まるで、彼女の怒りに呼応するかの様に――。

夢。

夢を、見ていた。

そう、これはきつと夢だ。

だって、兄が居る。

兄は、兄は――あの時、確かに。

「朔弥、第六特異点には俺が行くから。」

「ん、行つてらっしゃい。」

兄は、数多の英霊を従え、
■■■■に向かう。

時に私が、時に兄が。

でも、重大な局面はいつも兄が立ち向かい、打破してきた。

私は幾度かの特殊な■■■■を解決したに過ぎなくて。

■■■■王に最初に相対したのも。

■■■■を真の意味で■■■■したのも――兄だ。

幾人もの英霊が、兄を取り囲み、甲斐甲斐しく世話を焼いている。私の隣にも、赤い服装の背の高いヒトが立っている。

嘆息しながら兄を見つめている気配がするが、その顔が見えない。

褐色の肌のアサシン、カボチャを引き連れたキャスター、刀を腰に下げた薄桃色の着物の上にダンダラ模様——新撰組の羽織を着た少女、蛇の様に絡みつく着物の子、他にも沢山、沢山、沢山。

だが、一番目を引いたのは：

その中の誰より献身的に、打算も無く只々——兄さんを慈しむ眼で見つめ、支える少女。

大きな盾を持って、兄を護る姿。

景色が一変し、モニター越しに私は兄と、彼女の戦いを見守っていて。

「先輩、危ないっ！」

その盾は強固で、まるで少女の強い意志を表す様に、あらゆる危険から大事な人を護る様に。

敵宝具の一撃すら弾いて見せた。

「——ユ。」

無意識に、紡いだ真名は零れ落ちて消える。

暖かで、懐かしいその光景は、きつと。
きつと…。

突然に、闇が広がる。

浸された足元が暗闇に沈み、感覚が消えていく。

『カエシテナンカ、アゲナイ。』

『アナタモ、カレモ、タマシイダケデアラガッタ…ダレニモ。』

暗闇に沈みながら、必死に手を伸ばす。

その手は空を切り、何も掴めない。

ーあ、シヌ？

そんな風に怖気が身体を走り。

なにかが私を身体ごと掴みあげ、引つ張り上げた。

痛、なんかチクチクすー

「……………?!?!?」

目を見開く。

そこは、先までの闇では無く。

■■■■でも無く。

蘭草の香りがする武家屋敷——衛宮先輩の家。

私の今の家、居候先。

「——あ、わた、ワタ、し、どうして?」

背中が冷や汗で冷たい。

酷く汗ばんだ身体が不快で、しかし体の感覚がある事に強く安堵を感じて——

「良かった…気がついたか。」

心配そうに覗き込んでいるのは、髪の色は違うけど、懐かしいあの人——

「——エミヤン…ありがと…えへへ…」

自分でもこの時、蕩けた様なだらしなない笑顔をしてしまったと思う。

起き抜けで混乱していたとは言え。

「な、こ、九重?」

なんでだろう、目を丸くして驚いてる。

心なしか顔が赤い?

「朔弥。」

でも、不満はきちんと伝えないと。

「え、は?」

濡れタオルを絞っていた手が止まり、動揺した顔をする彼。

「――朔弥で、いい、の、に。」

むくれて、唇を尖らせながらそこまで言つて。

頭がやつとはつきりして来た。

今、自分は誰に、何を話して――？

「…あ、や、違うつ、今のつわ!？」

無言。

互いに、沈黙する。

やばい、あまりの恥ずかしさに顔が合わせられない…

とりあえず布団で顔を隠して潜り込む。

(うわあ――つ、な、何してるの私イ！)

あれではまるで、看病してくれている恋人に苗字呼びされて、拗ねて甘えていたみたいでは無いか。

あ、あの夢がいけないんだ――あんな、夢が…

そう、思い出した瞬間、震えがきた。

あのまま闇に吞まれていたら、私、どうなっていたの？

《目覚めたかよ、マスター。》

念話だ。

《ーあ、バーサーカー?》

《おうよ、お前が召喚したサーヴァントだ。》

以前にもした様なやりとり。

なぜか少しだけ、それにほっとする自分が居て。

《あれ、さっきの、チクチクしたの》

《あ? なんの話だ? 話が見えねえが起きたならさっさと立ち直りやがれ、面倒くせえ。》

《なん、でもない、ありがと。》

そ、っと布団から起き上がる。

正直震えは未だ止まらない、けど、少しだけ落ち着いてきた。

ただ、考えれば考えるほど、怖い。

あの闇は、一体なんなのか、あの夢は?

ー失いたく、無い。

いつの間にか私、思いつめた顔で自分自身を掻き抱くようにして震えていた。

「ー九重ーあ、いや…さ、朔弥ー?」

さっきの話を間に受けた純粹培養先輩が、「朔弥」呼びしてくれて。

ふ、と震えた身体が抱きしめられた。

「ーえ、えっ!」

途端に怖い、より混乱が勝る。

「大丈夫、大丈夫…怖いことなんか忘れて、力抜いて、負けない自分を思い出せ。」

「ー負けない、自分…」

「ああ、朔弥は強い、あんな殺し合いの場に巻き込まれて、それでも気丈に振る舞って、前に進んできたんじゃないか。」

ぎゅ、と少しだけ力を込めて抱きしめられて。

「何でだかわからないけど…先輩にだけは言われたく無いよ。」

素直に、その身体を抱きしめ返す。

「ーああ、大丈夫…足りないなら俺が助けるさ、だから…少しは力を抜いて誰かに頼ったっていいんじゃないか。」

ぼんぼん、と頭を撫でられる。

暖かで、優しく、どこか懐かしい。

■■■■の記憶も、失う怖さも。

吹き飛んでー

「力を抜いて？病人に何をしてるのかしらねえ…衛宮、くうん?」

「とっ、遠坂ーっ（ゴクリ）」

その手におぼんに乗せた中華粥を持って。

静かに襖を開けた、

赤いアクマが、立って、いた。

「どうやら、とんでもないものが召喚された様じゃあないか、聖女様？」

「ルーだからその呼び方はやめて下さい、アベンジャー。」

「ルーふん。」

鼻で笑いながら、どこか嬉しげにするのは意地が悪いと言うか。

「それに、アレに関して言えば既に随分前から召喚そのものは為されていますよ、セイバーとほぼ同時期に、しかしながらかの存在は規格外故にか正規の枠には当てはめられない事無く、青の令呪の側で召喚された様子でしたが。」

「ふむ、赤だ青だと意味はあるのか？」

「ルー赤、本来の第五次聖杯戦争における英霊のマスターには、それが施され：ありうべからざる存在に関しては青、と言うくくりの様ですね：一部は神明裁決を持つてしても御しきれない可能性もあります。」

神明裁決、ルーラーに与えられた特殊な令呪。

ルーラーは各サーヴァントに対する絶対命令権をそれぞれ二画有している。

しかしかな令呪とはいえその英霊が強力な存在であれば一画では御し得ず、二画用

いたとしても御しきれない可能性は皆無ではない。

「まさかギリシヤの主神が出てこようとはな…その理由はルーラーである貴様にもわからないのか？」

「ええ、残念ながら…」

「いよいよとなれば俺は奴の元へ出向くぞ？」

「構いません、貴方に關しては私も神明裁決権も持ち得ませんし、自由に動ける存在も必要でしょう、事にこの聖杯戦争は異に過ぎる。」

「ーー全く、度し難いわね？」

「ーーッ、引つ込んでなさい…まだ、その時ではありません…」

「どうした、まるで亡霊の声を聞いた様な顔だぞ？」

「ーーいえ、貴方に心配される様では私も立つ瀬がない、大した事ではありませんよ。」

「っは、違いないな、まあ…今は観測するのも良からうよーー待て、しかして、とな。」

変わらぬ吹き抜ける冷たい風と、二人の会話だけが空洞の中に響く音。

生きるものが無いその空間は、まるで冥府の入り口の様で。

ーー結晶もまた、ただ静かにそこにあるだけだった。

第19話 『我儘』

「Intrude ■■■」

そも、自分の人生は矛盾に満ちていた。

救いたいー救えない。

救えなかつたーけれど確かに救えた命もあつた。

沢山の人の命をーて。

たつた一人の大事な■■■を失い。

たつた一人を護ろうと走り出し、沢山の誰かを殺してしまった。

間違えた？

ー否。

それは間違いないんかじゃない。

だつて、それがたつた一つの願いだから。

何一つ、掌に止めおけず、無くした自分の。

唯一残された願いと言う名の呪い。

愚直に走り抜けた先に広がった赤茶けた荒野と、墓標の様に立ち並ぶー。

それは、いつか見た可能性でも、追い続けた理想でも、美しいと感じた彼女がいたあの丘でも無く。

閉じて、間違えて、捻じ曲げられた可能性の蠱毒の中で出来上がった猛毒の荒野。

暗く、紫がかかった毒気に薄く覆われた大気。

居並ぶ墓標の様な何か。

その荒野の中心には、巨大な絞首台が聳え立つ：粗末な木材で出来た螺旋の段差は1
3段。

一段一段が高く、足を上げ、上がるだけで身が竦む。

死に向けて歩くだけの、その道程。

今日も自分は――その螺旋を歩く。

首に縄を巻かれたまま死に向けて、幾度も幾度も自ら絞首台へと。

長く、恐ろしい螺旋に終わりが訪れる。

それはつまり――自分が、死ぬと言う事だ。

ああ、今日も死ぬには――良い日だ。

身体が、浮遊感に包まれ、墜ちた。

[Intrude out――]

「最悪だ、何だ今の夢は……また君か、アサシン。」

「……心外だ、まるで俺が好んで見せつけている様な言い方はやめてくれ、そちらが勝手に覗き見ているんじゃないか。」

声が、反響してエコーを残す。

冬木の街を旧市街と新都に分け隔てる未遠川、その近くにある地下の排水施設。

その広大な空間内にて巨大なコンクリートの柱にもたれながら話す。

目の前には俺に従うサーヴァント、アサシン。

頭には赤いターバンの様なものを巻き、顔には右半ばを幾つかの魔力光を灯す、隈取りの様なラインが走る。

今は無手だが、腰にはホルスターがあり、黒い銃把が二つ見えた。

黒を基調とした動きやすそうなボディスーツの上に赤茶け、最早黒ずんだ色をしたロングコート一枚羽織り、その下の脚にはナイフを備え付けている様だ。

エクストラクラスでは無いものの、彼はどう見ても本来なら固定された筈のアサシン、ハサン・ザッバーハではあるまい。

山の翁、を意味する暗殺教団の開祖から連綿と受け継がれてきたアサシンの語源にもなった集団の頭の一人では、断じて無いだろう姿。

未だ真名をマスターである俺にすら明かそうとしない、曰くー名乗るほどのものは無い、だとか。

まあ一応宝具や能力に関しては開示されているのだから、名前などさしたる問題でもない。

いつそのアサシンらしからぬ英霊を別のクラスだと偽る位が勝ち抜くにはーいや、アサシンなんだからまず必殺でないとかだめか。

正攻法でいくなど馬鹿げている。

魔術師と、マスター。

その二人には契約の成立と共に通常であれば魔力供給の為の擬似的な魔力経路ーパスが繋がる。

それは時に、魔力と共に双方の記憶を見せる時がある。

白髪に、顔の半ばが重度の火傷を負ったかの様にケロイド化しているその壮絶な面持ちを沈鬱にしながら呟く男性。

震える手で羽織ったパーカーのポケットから取り出したプラスチックケースから、錠剤の様なものを取り出し、噛み砕く。

「ーっはあ。」

口の中を満たす清涼感に息を吐く、と。

「…まるでヤク中みたいだな、そうしてると。」

ジト目でそんなことを言ってくるアサシン。

「それこそ心外だ、ただのミント味の清涼剤だぞ、これは。」

10年前から思うこの身体の倦怠感と、思考の鈍りを冷たいミントの味が少しだけ取り戻してくれる気がして、好んで齧っているのだが。

痛いから、苦しいからとアルコールの酩酊に任せてしまえば楽になるかもしれないが、それでは殻に閉じこもってしまった兄と変わらない。

「10年だ、あの忌まわしい事件後になんとか身体を維持して技術を、魔力を蓄えた、今ならあの頃みたいにな無様は晒さないさ…俺を生かしてくれた天に感謝しなくちやあな…」

第四次聖杯戦争。

その爪痕は街にだけではない。

多くの人に傷を残した。

自分もまたその一人であると言える。

てつきり自分は誰にも必要とされていないと、苦しみと痛みに狂いかけた思考の中で何処かで自分は歪んでいるとも自覚していたから、そう思っていたのに、天は俺を救い

やがった。

今の自分を動かすのは、妄執とは違う。

恨みも、苦しみも堪えきれない程抱えている。

しかし、そうじゃない。

そうじゃ、ないんだ。

あの時に自分は学んだ筈だ。

大事な誰かを、護るしかないのだと。

独りよがりな考えと中途半端な力では何も、自分すら救えはしないのだと気付いた筈だ。

それは未だ為されていない。

ただ一つ残った、護りたいもの。

身体に負った後遺症は深刻だった。

だが、乗り越えた。

多少手先が震える事はあるが魔術師としても力をつけた。

今ならば――誰に対しても負ける気はしない。

ただ、惜しむらくは召喚したのが最弱の、アサシンのクラスだった事か。

バーサーカーを引いてさしたる才能もない自分が自滅するのも御免だが、火力不足は

否めない。

「俺にあるのなんて、結局意地だけだな。」

意固地になって、意地で生きながらえてきた。

いつそ死んでしまった方が楽だったろうに。

「意地で結構じゃねえか、信念だ、願いだなんて綺麗に言葉を飾る輩だって結局は自分の我儘を意地になって通したいのと変わりやしないんだぜ？」

——全く、この暗殺者は時々心臓に悪い。

「妙な言葉を吐くなよ、痒くなるだろうが。」

照れ混じりに返すと、静かだった空間内に低い、唸るような音が聞こえた。

蟲の羽音だ。

暗闇を飛び、それは俺の腕にとまる。

「帰ったか。」

それは先ほどもで街中を飛び回り、敵の情報を集めて回っていた使い魔——「視蟲」の一体だ。

流石に常時全ての視覚を共有するのは脳に負担がかかり過ぎるため、録画した映像の様に使い魔が見た物を限定的に視界に再生し、映させる。

「アサシン、今回の聖杯戦争はどうなってるんだ…規格外があまりに多すぎないか…？」

「あ？どういうことだよ？」

「アーセイバーは、大英雄ヘラクレス…その上何故か現れた二人目のアーチャーは…ギリシャの主神だそうだよ。」

「アーバカも休み休み言えよ、神霊が降ろせるわけな…」

「嘘をついてどうする、相手マスターのハツタリでないなら、事実だろうよ。」

「アーマジかよ。」

最悪だな、それ。

アサシンの答えは戯けながら、しかしどうにかしようと考えを廻らす顔で答えただった。

日本、千葉県は成田空港。

ロンドンから長い時間をかけてたどり着いたのは懐かしい空。

何処か淀んだ空気の中に懐かしい香りが混じる。

「アー懐かしいな、この醬^{soy}油^{sauce}の香り。」

慣れ親しんだ日本人にはわからないモノだが、外来の人種からしたら日本と言う地は醬油の香りがするのだ。

まあ、敏感すぎるとも思うが確かに国々で特産も違えば空気も、漂う香りも違うのだ

ろう。

実際、イギリスは紅茶の香りしかしかない、などと言う輩もいる。

しかし、私は日本のこの香りは嫌いでは無い。

長い黒髪が絡んで少々鬱陶しい、英国紳士風に歩く私はウェイバー・ベルベット。

またの名をロード・エルメロイ二世。

第四次聖杯戦争を生き延びた元マスターにして、現在では魔術師の総本山、時計塔の名物講師にして実力者、などと言われてはいるが：

私自身には然程の力は無い、しかし教えた教え子達は次々に傑物と成った。

そのせいか、最近死にそうになる任務にやたらに駆り出される、暗に死んでくれれば良いと言われているに等しい。

確かに、現時点でも教え子達が集まれば時計塔に反乱を起こせる程の力になるだろう。

とはいえそんな事を彼らが望みはしないだろうし、自分に其れ程価値を見出されていとは思えない、せいぜい魔術師らしからぬ自分が面白いとかその程度だろう。

「全く、Fuckだ、Fuckin 過ぎる。」

最近面倒ごとに巻き込まれ続けていた気がするが、今回は最たる事例だろう。

もしも、親しんだこの地でなければ有能で、死に難い力を持つ教え子の誰かに向かわ

せるのも厭わなかっただろう、しかし。

「冬木だけは、自分で行きたいなどと…感傷が過ぎるかな、なあライダー?」

現在、冬木は不可思議な力場に覆われている。

第四次聖杯戦争が終結して10年。

まだ聖杯戦争が始まるには早いはずだった。

だが、破壊された聖杯から溢れた魔力は一部だけだったらしく、たった10年で再度聖杯が起動するだけの魔力が満ちた。

本来なら50年かかるはずだったのだが。

「冬木は魔術的な隔絶状態にあると聞くし…大丈夫かな…お爺さん達…」

第四次聖杯戦争時に特に世話になった老夫婦を思い出し、思わず当時の口調に戻っていた。

そんな風に油断しきっていた私の後ろに、剣呑な気配を纏う者が立つ気配。

「あ、いやいやゲフン! グレン翁にマーサさん…無事だといいが。」

「今更取り繕っても遅くありませんか、ロード。」

パリッとノリがきいた仕立ての良いスーツを着込んだ堅苦しい格好の女性。

短く刈られたショートカット、鋭い眼、背は女性にしては高く、引き締まった体躯。

手にはレザーグローブ、肩には大きなゴルフバックに似たバックをかけている。

「黙れ筋肉達磨…貴様も鍛錬鍛錬ばかりでなく日本人女性の奥ゆかしさの欠片でも学んではどうだ、あ?」

痛いところを見られ、思わず悪態が口をついて飛び出した。

…いつから自分はこう口が悪くなったのか。

相手はまがりなりにも女性だと言うのに、紳士とは言えない態度をしてしまった。

「日本人女性が奥ゆかしい?それは最早遠い過去の話ではありませんか、サブカルチャーに影響されすぎですね、ロード。」

「ぐ、き、貴様…仮にも上司にその口の聞き方は…ぬぐつ」

言い返し終わる前に睨まれた。

視線で人が殺せるんじゃないか、コイツ?

「そんなに可愛くありませんかね、私は…」

そんな殺人視線を叩きつけてきた連れが小声でなにがしか呟いた様だが、聞こえない。

「あ?」

「何でもありません、早くしないと新幹線に乗り遅れますよ?」

と、指さされた時刻は確かに差し迫っていた。

「全く、日本はせわしないのだけは頂けないな…」

第五次聖杯戦争開始から暫く経ち、魔術協会が観測した異常。

監督役からも、監視している筈の魔術師や使い魔からも全ての連絡が途絶。

冬木市を中心に広範囲が魔術的な「人払い」の結界に似た空間干渉を受けていた。

どういう訳か、聖杯は一度起動する気配を見せている。

そしてそれ以降、冬木市は魔術師や素養ある人間以外は近づこうともしない魔都と化し、素養の有る無しに関わらず、入れば二度と戻って来ない。

電氣的な連絡手段すら絶たれ、その事実の揉み消しに魔術協会や聖堂教会が躍起になつていた。

聖杯が無関係とは思えない。

しかし解説不能の超高度な術式に編まれた閉鎖空間は、人を寄せ付けず、入れば二度と戻って来ない。

その道の玄人に見せた所、一種の固有結界じみた場を形成しているとか。

本来なら固有結界などこれほど長期的に維持は難しいはず……英霊であってもそれは同じ……ライダー、イスカンダルの宝具がそうであった様にその維持は莫大な魔力を必要とする上、世界を浸食し続けようにも世界の方がそれを元に戻そうと修正力を働かせてしまう。

つまりは普通ならばどうあれ長続きはしない筈だ。

「固有結界とはまた、特異な状況もあつたものだが……そもそも誰が如何なる目的でそれをしていくかすらわからん、現時点では冬木市封鎖以上の出来事は起こっていない……」

「不可解だとは私も思います、だからこそ現在の魔術協会として送り出せる知識と力、両方を送り出したのでは？」

知識、とはロード・エルメロイ二世、つまりは自分の事であり力、とは。

私の隣で弁当を食い散らかしながら喋る筋肉達磨：封印指定執行者たるバゼット・フラガ・マクレミッツの事だろう。

「不可解ですめば良いんだがな……嫌な予感しかしないぞ、私は。」

ぼやく内に。

バゼットの弁当は3箱目に突入した。

——おい、私の分は何処だ。

新幹線からバスやタクシーを乗り継ぎ、辿り着いた冬木市と隣り合わせた地域の狭間。

後数百メートル進むだけで冬木市に入ろうかと言う位置、タクシードライバーが何だかんだと理由をつけて、これ以上進もうとはしない。

口論の末に彼は、代金は要らないとまで言い捨て、その場に私達を降ろすと逃げる様

に走り去って行った。

それから半刻程経ち、我々二人は国道脇にポツンと立ち尽くしている。

何故冬木市に入らないかと言えば、正直無策で入るのも良しとできずにまずは周辺の魔力異常を探索していたのだが。

「ほぼ異常無し、だど？」

「ええ、これだけ見た目に異常があると言うのに各種観測法には引っかけりません。」

今、目の前の境目にあたる部分には薄紫の膜の様な障壁が見えている。

魔術の素養が無ければ何の異常もない風景だったかもしれないが、二人は違う。

「何だ、これは…言うならばまるで…」

そう、表すとすればこれは時間が停止したかの様な静けさ。

しかし、内側は如何なるものか。

「――結局、入るしか無いわけか…S i t t e r !」

悪態をつき、石を蹴り入れる。

すると。

コーン、と石がコンクリートに当たり跳ねる音が聞こえ、次の瞬間には吐き出される様に障壁の内側から返ってきたのだ。

「――な、んだこれは。」

異常だ、異常としか思えない。
だが。

「グレン翁は……この中、か……」

「行きましょう、ロード。」

「は、確かにそれしかあるまい……ライダーの奴が居れば言うだろうな、我が覇道を阻めるなら阻んで見せよ、我はただ蹂躪するのみぞ、とな。」

理解できないと言う恐怖を、最も心強い身内を思い出し、喝を入れる。

「征服王ですか……できればお会いしてみたかったですよ！」

そう、前置きながらバゼットが障壁へと歩き出し。

それに続いて私も進む。

「いずれ私が彼を再び呼び出した時に、君が生きていれば合わせてやってもいい、きつと君の様な女傑は気に入られるだろうよ、バゼット。」

「楽しみにしておきましょう、約束ですよ？ロード。」

歩き出した私とバゼットが、真っ白い光に包まれ、意識が遠のいていく。

——無謀と無茶の違いくらいは弁えているつもりだったが……結局、私が世界一破天荒な貴方の忠臣である事に変わりはないらしい。

つまりは、こんな無茶をしてしまうのは貴方の影響だ、責任とれよ？

なあ、ライダー。
世界が、塗り潰されて——…。

第20話『因子』

視界が白く塗り潰され、次に目を開くと自分は何故か、見覚えのある埠頭に居た。木箱に腰掛け、薄ぼんやりとした頭を動かし現状を認識する。

「――私は、ウエイバー・ベルベツト。」

「ここは、見覚えがあるぞ：第四次の時に派手にライダーが真名を名乗ってくれた場所だ。」

「私は確かに街境から一步踏み込んだだけだった筈だ：何故こんな所にいる？」

空間が異常な状態であったのは認識していた所だ、つまりは歪みに巻き込まれここまで転移したのか？

いや。

それではアレが説明できん――

埠頭の倉庫の一角に、古めかしい丸型の電波時計が掛けられている。

示す日付はしかし。

「――何故、我々が辿り着いた日付から二週間も遡った日付が表示されているのだ――」

バゼットは？

それに持ち込んだ筈の礼装は――

懐を探る。

あつた。

数本の小瓶と簡易術式を編み込んだ数枚の呪紋布。

そして、ライダー……イスカンドルのマントの切れ端。

「間違いない、夢を見ているわけでも無いようだ……。」

腕時計を確認すれば、その時刻は停止し、日付は二週間先を示している。

「……これは……」

これらが、同時に壊れているとは思えない。

つまりは、本当に時が……？

「いや、流石にそう結論づけるには早計か。」

今は、情報が欲しい。

正直言つて聖杯戦争只中のこの街でサーヴァントも居らず魔術師がうろつくのはさ

あ殺して下さいと言わんばかりだが……

「まあ、期待しなかつたと言うと嘘になるが……仕方あるまい。」

懐ろに大事にしまい込んだ聖遺物に触れ、独りごちる。

「ー待っている、私が解き明かしてやる。」

この不可解な状況、歪みを抱えた聖杯戦争。

放置しておけるものか？

…否、だ。

第四次にあれ程被害を出しながら、聖杯がおかしい事にも触れずに魔術協会も聖堂教会も黙認した。

その結果がこの事態だ。

恐らくだが聖杯はもはやまともではあるまい。

ライダーが、我が主君がその手に掴みたがったのは断じてそんな紛い物では無い。

認めるわけにはいかない。

そんなものは、願望機ですら無い、ただの厄災の火種でしか無い。

そんな紛い物はーいずれ必ず解体してくれる。

だが、始まってしまったからにはどうにかせねばなるまい。

あの日の再現にだけは、ならぬように。

懐が、熱く脈動したような気がして。

それはきつと、ともすれば弱気になる自分を彼が鼓舞してくれたのだと信じて、私は

聖杯戦争へとその身一つで、踏み込んだ。

黒い兜に覆われたその眼差しは解らない。

しかし——その音無き声は呪詛に満ちていた。

何故だ、何故——貴方は、私に！

手に、槍を掴む。

飛び込んできた無数の刃を槍を振るうことで防ぐ。

足は大地を砕かんばかりに踏みしめている。

槍だけで捌けなくなり始めた。

ならばと空いた手に剣を握る。

片手で振り回す様な槍では無いが、卓越した技量がそれを可能にする。

両手に剣と槍を携え、振るい続ける。

刃は、更に数を増やし……中には鈍器や、弓矢、飛礫の様なものまでが射出され、己に

殺到してきた。

——その様な単調な攻撃で私が倒れると思うな……！

声はしかし、喉を鳴らす事はなく。

「我を前に口すら開けぬと来たか……狂戦士のクラスと言う訳でもあるまい貴様、呑まれたな？」

黄金が見降ろし、どこか寂しげに口元を歪め、呟く。

「聖杯の泥……いや、もつと醜悪な何かに、お前も呑まれたか……」

「――私は！ 私は、見つけたのだ！」

「このままにしていれば……やもすれば明日は我が身、か。」

ああ、そうだ……貴方は、貴方だけが――

「見苦しいぞ、仮にも英霊なれば――潔く退場せよ……足掻くほど己が道を否定していると解らぬか。」

――邪魔だ、邪魔だ、邪魔だ！

「見るに堪えんな、せめて我が手ずから誅してやろう……疾く、失せよ！」

360度、全方位から実に120もの宝具――剣、槌、矢、槍、鎌、あらゆる武器が黒い騎士を包囲する。

「滅びよ！」

何故、何故、何故、何故、何故だ、何故だ、何故か、何故か、何故よ、何故にこそ、何故にか――
一斉に黒い騎士に殺到する刃の数々。

絶対的な滅びが迫る。

槍と劍の堅固な守りも、数の暴力には敵わない。

暫くは弾かれていた刃はやがて騎士に突き刺さりはじめた。

—————あ—————

声なき声が、言葉にもならず吐き出されていた荒い息は。

ヒューと鳴るような、細い息を最後に上がらなくなる。

槍袵にされた騎士はハリネズミの様な格好で膝をつき、やがて黒い泥とも、靄ともつかぬ何かになり、崩れていく。

「見苦しくも生き足掻くか…変わってしまったな、貴様も。」

どこか、寂しげに呟きながら孤高の王は黒い霧に背を向ける。

「見苦しい、見苦しい事この上ないな——」

それは誰に向けての呟きなのか。

先程の黒い騎士か、それとも。

「で、衛宮くんは可愛い可愛い後輩に何をしていたのかしら？」

「い、いや遠坂っ、誤解、誤解なんだ!？」

「桜には黙っておいてあげるわ…」

見下した様な眼で言われても!？」

「先輩って大胆ですよね…危うくクラツとしちゃいましたよ、うん。」
朔弥まで！

味方はいないのか!?

「いやいや、パスを通じて朔弥の狼狽っぷりが伝わってきたがよ…まあ、面白い面白い。」
とは、オルク、クー・フリーン・オルタ。

「ちよ、バーサーカーそれ以上は令呪よ！令呪!？」

やたらに焦り出す朔弥に、バーサーカーが更にチャチャを入れる。

「ヒヤツハハハ、なんだ、自分が一番だと良いなー、とか、でもこれ以上先は怖いなー、
とかなんとか言ってた事とか？」

「………!?!?!」

言葉にならない声を上げ、朔弥の顔色が信号機みたいに赤や青に変わる。

終いには座布団でバーサーカーに殴りかかり、バーサーカーは首だけを動かしてそれを避けている。

「ー動くなつ、こんのーバーカーさー!」

駄洒落かよ、つてーええ!?

キーン!、と甲高い音が響いたかと思うと、バーサーカーの動きが止まる。

そしてー座布団、では無く信楽焼の狸が命中した。

「おごわっ!？」

砕けた信楽焼の狸は哀れ畳に散乱し、そしてバーサーカーが怒声を上げた。
「てっ、てめえまたやりやがー何?」

肩で息をする朔弥の手。

よく見れば、令呪と呼ばれた刺青みたいなものが、「一画」減っていた。

「減って、ねえ?」

確かに、今膨大な魔力がバーサーカーを縛り、制御したのが魔術師として、いや…何故か感覚として見えた。

だが、すでに「二画」失われなければならない筈の朔弥の令呪は一画しか失われていない。

「ーまさか、回復したのか?」

バーサーカーの、確信めいた言葉に。

「嘘、あり得ないわ…使い方もそうだけど令呪が回復ですって?」

「え、するものじゃないの、だって石から戻った時には三画に戻ってたよ?」

「しないわよ!？」

ー最早、ヒステリックな叫びをあげるしか無いとばかりに遠坂が叫んだ。

「……驚いたなんてものじゃ無い。

この子……何者なの？

使役するバーサーカーの規格外の強さといい、それを平気な顔で維持する魔力といい……

本人曰く、最初は気を失いそうになったけど、その後はいつの間にかなんとかなった、と。

「……やっぱり……ね」

あの後、衛宮くんへの追求どころでは無く私は彼女を問い詰め、本人に自覚が無さ過ぎて埒があかないので血液を採取し、溶かした宝石を混ぜてその性質を調べた。

出てきた彼女の魔術起源は……

「復元」、「共振」、「竜」。

何それ、凄いの？、とは朔弥の聞いて最初の一言。

「凄いのよ、貴女……言うなれば竜と人のハーフみたいなものよ、竜の血や肉を食べたりしたわけ？」

「さあ、覚えが無いけど……」

「竜の起源、とは言ったけどこれはむしろ貴女の血に宿る特性みたいなモノよ……貴女の

心臓は恐らくとんでもない量の魔力を作り出している…ただ、普通なら身体がそれについていけないはずだけど…貴女の起源、復元の特性が働いているんじゃないかしら…身体を最適、最良の状態へと作り変える…常に自己改造をしているとも言えるわね…血の中の細胞も再生と自己改変を繰り返して、体外に出た…空気中でも細胞が活動しているわ。」

「それ、ホラー映画みたいに九重が増えたりはしないよな？」

「先輩、私をなんだと…」

「…それは無いでしょう、末端の細胞には魔力を自己生成できないからいずれ魔力が尽きて死滅するでしょうね。」

「スチャ、とメガネと指差し棒、教鞭と言ったら良いだろうか、を装着しながら説明に入る。」

「少ないけれど彼女の様な体質は過去に例があるわ、例えば…」

「例えば？」

「竜殺しの英雄、ジークフリート。」

「ジークフリート…ジーク君？」

「くん、つて…まあ、とにかくジークフリートは…悪竜ファーフニル、もしくはファーフニールと呼ばれた竜を退治した際にその血を全身に浴びているの。」

「ふむふむ…、で？」

「なんだか、お伽話を聞いている子供みたいな顔をされてしまった、解ってるのかしらこの子…」

「気を取り直し、教鞭を取り直す。」

「ジークフリートは、肉体の殆どがその血を浴びて不死身になるのだけどー唯一、背中だけは血を浴びなかった、その為に最後にはその場所を槍に貫かれて殺されているわ、一説には悪竜の死に際の呪いから常に背中を晒さなければならなかったとも言われているけれどー」

「それがなんで私の体質に繋がるの？」

「まあ、聞きなさい…今の話の様に竜の血や肉によりその特性を授かればまさに英雄にも等しい力や肉体を授かるの…竜種が現存しないのは竜殺しの英雄が世に現れすぎたからかもしれないけど…つまりは貴女もそうした恩恵を授かっているんじゃないか、つて事よ…時計塔には今もジークフリートの体細胞の一部が保管されているなんて噂があるけど、あながち与太話でもないかもね、時計塔基準のこの検査方法に引っかけたのが貴女でー間違いなく異様な魔力生成能力と、再生を繰り返す力を持っていたんだから。」

首をかしげながら、そんな覚え無いんだけど、と悩む朔弥。

「なあ、なら朔弥は傷を負っても再生したり、或いはそのジークフリート見たいに不死身に近い堅固な肉体を持つてるのか？」

「いえ、そこまで有難いものでも無いようね…ジークフリートは元から素養があつたのでしようけどこの子はどこまでいっても凡人の肉体に無理やり…そうね、軽自動車にFワンのエンジンを積んで走らされてるのと変わらないわ。」

「それってー」

「…竜種の恩恵ね…それが事実なら朔弥の身体は恐らく魔力を生成しつつ、容器になる身体を壊さない様に再生と順応を繰り返すので精一杯だろうよ、あんなものは劇薬と変わらん、普通の人間に耐えられるもんじゃねえ。」

と、バーサーカーも同意する。

「おい、それ大丈夫なのか、九重は？」

「心配しなくても無理をしなければ大丈夫でしょうね、其れ程彼女の復元の魔術起源の効果は竜種の血と相性が良かったんでしょう。」

「そうか、なら良いんだが…」

ほっとしている彼には悪いが、本当は…かなり危ういだろう。

奇跡的なバランスで成り立っているのが現状だ。

ーまあ、それはコイツも同じ、だったっけ。

あの時の「治療行為」を思い出したら恥ずかしさがこみ上げてきた。
わ、忘れなさい、私！

「遠坂？どうした、顔が赤くー」

無言で教鞭で殴る。

スチール製のソレはかなり痛いはずだ。

「あ痛っ!？」

「話を戻すけど、多分令呪はその復元に巻き込まれる形で、再生しているんじゃないかしら…」

まあ、ソレを作る莫大な魔力が何処から流れているかはまるで見当がつかないのだがー

「つまりは、令呪が三画ある状態を完全な状態、と肉体が認識したからこそ令呪の欠損を補えた、と？」

「そう言う事よ、アーチャー。」

流石、私のサーヴァントは理解が早いわね、頭を抱えてる衛宮くんとは大違い。

「推測の域を出ない話だけど、それにしても貴女の規格外さにはほとほと呆れるしかないわね…」

「これで彼女に非凡な才能があった日には凜、君以上の魔術師になっていたかもしれん

な。」

アーチャーまでが、そんな風に言う、悔しいけど、確かに。

「ー半竜同然の肉体を持つてるなんてもう魔術師の域を出かけてるわよ。」

半眼になり、アーチャーを睨んでやるが、肩をすくめて躲すだけ。

「なんにしても、貴女の父親…確か九重十蔵だったかしら…聞かない名前だけど、何者なのかしらね？」

「お父さん、自分のことはあまり話さない人だったからなあ…あ、でも確か。」

「確か？」

「お父さんの通り名、聞いたことがあったっけな…確か、そう…」

考え、思い出した名前。

それはー

「アジ・ダハーカ…とか？」

セカンドオーナーとして、聞き捨てならない二つ名だった。

…*****

竜、龍ードラゴン。

英雄譚に語られるそれは大概の場合悪の象徴である。

英雄に正しく殺され、人の世に平和が訪れた事をわかりやすく示すための悪役。

悪があるから善が敷かれ、善があるから悪が敷かれる。

世の理とはかくも矛盾に満ちたモノ。

善のみで成り立つ世界等人の世には有り得ないし、悪のみの世界も有り得ない。

コインの表裏の様に、世界には善と悪が混在している。

悪は、誤りか？

否、ひとつの在り方に過ぎない。

竜は、悪か？

否、ひとつの命に過ぎない。

価値観などは種族、それどころか人と人の間ですら違うものだ。

ましてや異種族となれば尚更だろう。

——人と竜では、価値観そのものが違う。

つまり、竜だから普遍的な悪、である事にはならないのだ。

中には良い竜もいるだろう。

しかし、良い竜だから世の中が受け入れてくれる訳でもない。

男は、遙か遠い先祖に龍を持つ一族だった。

今や血は薄れ、あくまでも龍を祀るに過ぎない一族であった筈が、男は真逆の先祖が

えりを起こし、強い竜因子を宿すに至った。

——半竜半人。

正に己が意思に関わらずその様な力を持つて産まれたが為に身内からも疎まれ、殺された。

しかし、男は幾度殺されようとも蘇った。

刺されても、斬られても、砕かれても、轢き潰されても、燃やされても、何をされても3日と経たずに蘇る。

男の名は、アヴウドル・スイーンハイム。

歳も一定の歳から老化を止めた、いや：酷くゆつくりになった。

20半ばを超えたあたりから20年に一度くらいで漸く年齢を重ねる様になった。

結果、今の——40半ば程度の外見に至るまでに彼は実に四百年の時を過ごしていた。

巷では彼を蛇王ザツハークが幽閉された御山から抜け出したのだの、アジ・ダハーカの再来だのと騒ぎ立てた。

いよいよ居場所がなくなると、彼は持ち前の身体と魔力を使い、己が身を守る生き人形をこしらえた。

それが、幼い子供の姿をしていたのがいけなかったのか。

その当時にはまだあまり知られていない錬金術の秘蹟によるホムンクルスでしか無

かったのだが、彼は「幼な子を喰らい、己が身の竜を植え付けて傀儡にした」と言う濡れ衣を着せられてしまう。

やがて、すれ違いから手製の農具を振りかざして襲いかかってきた鍛冶屋の息子を反射的に放った魔力で殺してしまう。

その事が益々民衆の恨みを集め――

やがて、その地にも男の居場所は無くなった。

ホムンクルスでさえも数の暴力に抗えず、男は捕らえられ、処刑される。

しかし、死なない。

死ねないのだ。

結局、死んだふりをして土葬された土から這い出し、遠く海外へと逃げ延びる。

それから更に時は流れ、50過ぎの外見からはとうとう百年を経ても身体は老化の兆しすら見せなくなる。

溢れるほどの魔力を用いて作り出した数々の秘蹟は、現代に生きる魔術師達の技術の基になった。

己が力を隠し、隠遁を続けた彼だったが……：皮肉にも彼を外へと再び連れ出したのは、己が一族の末裔だった。

一族の性はすでに無く、彼でなければわからないくらいに薄れた血の残滓。

しかし、一族は彼の事を当時の様な悪名で語り継ぎはしなかった。

魔術の祖、ソロモン王に劣らぬ偉大なる竜魔術師——アブドウル、と呼んで一族の中でのみ、密かに語り継いでいたのだ。

それを聞いた男は、黙って一族の末裔たる女に語り聞かせた。

信じるか信じないかはわからないが——

それは、自分の事なんだよ、と。

「——凄い人だね、そのアブドウルさん？」

「……それから、彼は表舞台には立たないまでも魔術協会にも協力し続け——やがて、十五年前に封印指定を受けたの。」

「あ？なんだそりゃあ……十五年……聞いた限りじゃその男は幻想種や神に並びかねない力を持つてるじゃねえか、それが魔術協会になんで今更目をつけられた、もつと昔に目をつけられてなきやおかしいだろう？」

わっかんねえな、と胡座をかいて頬杖をつくバーサーカー。

「——力を巧妙に隠し、あたかも古い文献を読み解いたと嘯いていたらしいわ、自作の魔道書を、だけどね。」

「彼が世に出てから20年、その知識は重宝されたし、利用価値もあつた、けれど——彼

が竜因子を持つなんて誰も知らなかったのよ、公の場で…彼が言い争いの末に傷を負うまではね。」

傷が瞬く間に塞がり、無くなる瞬間を目にした魔術師達はどう思ったのか。

「それは、彼の妻となった一族の末裔、サロメを貶める発言をした当時、ロードだった一人の魔術師の言葉が発端だったそうよ。」

「…その一族の末裔、名はサロメとは…皮肉にしか聞こえんな、その符号は。」

アーチャーは正に皮肉気に唇を歪める。

サロメとは、近親婚を咎められたのを理由に聖書に言うヨハネを殺害しようとした女な名前である。

そして、ヨハネは神により生かさされ、死ねなかった。

「事実は小説よりも、とはよく言ったものよね…そして、その血を調べられた彼はまたしても居場所を失いかけ、妻と共に逃げようとしたわ、争いを好まなかったのかしらね、戦えば、勝てたかもしれないのに。」

「それで、どうなったの?」

「…妻は、逃げる途中で封印指定執行者に殺され、怒り狂った彼がその執行者を殺害。」
「…馬鹿な野郎だ…そんなに腹が立つなら最初からそんなことにならん様に女だけを連れて隠遁し続けたら良かったろうに。」

「これらの話は、殺された妻、サロメの霊から時計塔の死霊術師が聞き出した話らしいわ。」

(朔弥は、気づいていない…いや、気づきたくないのかもね…)

「それから数年、逃げ続けた男は——極東の田舎町で見つかり、時計塔秘蔵の不死殺しの神器を用いて完全に殺されたわ、それが十年前の話よ。」

「なるほどな、いやいや…耳が良いのも考えものじゃなあ…聞きたくもない話を聞いてしまったわ。」

ス、と闇から浮き上がるように現れたのはイルマ。

「イルマ?」

「儂が最後に見た貴様の父親、九重十蔵…いや、アジ・ダハーカと呼ばれた封印指定の魔術師だがな、80も超えた様な皺くちやの爺だったぞ、身体からは殆ど血の匂いがせんかった、恐らくだが——力の源たる血を貴様に、いや…貴様の兄と二人に分け与えたのでは無いか?」

「え…お父さんが、アブドウル、さん?」

「母親がサロメかどうかはわからないけど貴女に竜因子が宿る理由、どうもそれが当たりみたいね。」

「じゃあ、お父さんは——事故で死んだんじゃあ、無い…?」

「そうね、辛い話だけど…：そうなるわ。」

「大丈夫か、九重？」

衛宮君は…：またそうやって無駄に優しく…

いや、それが彼の長所なのかしらね。

「しかし、解せねえな…：自分の命を危険に晒してまで何故不完全にしか馴染まない朔弥に血を分け与えた？」

バーサーカーの懸念は最もだ、それは私もわからない。

「さあ、ね…：私もこの話は又聞きだから…：私のお父様、遠坂時臣が第四次聖杯戦争に参加する前に…：弟子と話していたのをたまたま聞いてしまっただけだし、ね。」

「よく、そんな昔の話を詳細に覚えていたな…：遠坂。」

「気になってね、それから暫くしてからその、弟子に聞き直したのよ、ほら…：学校の事件隠蔽に出張ってきた聖堂教会の神父、この聖杯戦争の監督役でもある言峰綺礼よ…：何故だか異様に嬉しそうに、仔細に、事細かく聞かされたわ、もう、嫌になるくらい。」

「遠坂先輩、私…：その監督役さんに会ってみては、駄目ですか？」

「…え、いやまあ構わないけど…：あまりお勧めしないわよ、あいつ絶対人格破綻者だから…。」

嫌そうに、しかし私の了承をもって、次に向かう場所は決まったのだった。

第21話 『蛹』

それは、呪いだつた。

叶わぬ望みー、願いと云う名の呪いだ。

男は子供の頃に見た夢のまま、救済を願つた。

傷つき、戦い抜いてー辿り着いた黄金の杯。

「は、ははっーコレで良いんだ、コレで全て、何もかも救われるんだー。」

目尻に涙を浮かべ、震える声で指先を伸ばす、男の足元に横たわるのは、先程まで男を支えていたサーヴアント。

満足気な笑みを浮かべ、今や消滅を待つ身。

「ー叶わない夢はない、願いは力に変わりーこれで、私も、貴方も救われ…」

眩い光の波が視界を灼き、世界を包んだ。

ーースベテヲ、救う？

バカライウナ、ソノヨウナ結末ガ、アルナド…

ダガ、キサマガイチバンノゾムモノダケデモ救ツテヤロウ。

キサマは、仮ニモ勝利者デアルカラナ。

歪み、嘎れた声が聞こえた。

「さてー出てきたは良いが…やはりこの聖杯戦争はあまりにも歪よな。」

冬木という街を円蔵山の中腹、柳洞寺の管理地である墓場から見下ろす、ダークグリーンのスーツ姿の男。

どうにも現代にしてはレトロな、古めかしいタイプのものだ。

男は人では無い。

サーヴァント『復讐者』^{アヴェンジャー}　『ー真名を巖窟王…

エドモン・ダンテス。

男の目には可視化された怨念が見える。

古きから新しきまでだ。

「ー怨嗟の念が強すぎるな。」

『復讐者』^{アヴェンジャー}　『である彼からしてもこうまで異常な恨みの念が色濃く顕れるのはただごとではなかった。

冬木…ここはどうにもただの街とは言えない。

夜に紛れてはいるが彼もまたサーヴァント。

その魔力は尋常では無い。

だが、今はそれも抑えられ、一般人に等しい程に隠されていた。その上、今の彼には厳密にマスターはいない。

魔力は有限ではあるが他のクラスのサーヴァントと違い彼は自身の魔力を周囲のマナから吸収して得ることも出来る。

ほぼ自給自足だ。

「この気配……どうやらここそこそとなにやらしている輩が居るな。」

柳洞寺に目を向け、すぐに興味を失い背を向ける。

「まあ、今は別件だな。」

一瞬後には闇だけが残る。

青白く、仄暗い灯火がほんの僅かだけ地面に焦げた跡を残す。

アヴェンジャーが持つ高速移動。

魔力放出の亜種とも言える力で、時には光熱そのものと化して宙を翔けるその力は魔力を殆ど発しない。

体内で爆発的に高めた魔力を足裏や空气中に一瞬弾けさせる縮地に近い移動方。

だが身体を一時的に炎と変じるその能力と相まってそれはまるで、セントエルモの灯の様だ。

派手さは無く、しかし確かに存在を主張し、次の瞬間には消えて失せる。

彼の本来の俊敏さも合わせればまるでフィクションの中の忍者の如く残像を残す様な動きを可能としていた。

彼独自の嗅覚：恩讐を感じ取るソレが導く先へと直走る。

冬木の新都と旧市街を別つ境界線、未遠川の周辺に在る排水施設。

都市部に雨水などが流れ込むのを防ぐ為、川へと繋がる巨大な地下水路だ。

かつて、正史の第四次聖杯戦争の折にもキャスター、ジル・ド・レエがそのマスターと潜み快樂殺人を繰り返していた場所だ。

「……もまた一段と濃いな……」

水路を飛び越え、奥まった空間に踏み込もうと足を出した途端。

脚に絡みついていた不可視の糸が切れた。

バガツ！、と言う音が聞こえたかと思えば無数のボールベアリングが超高速で飛来する。

本来ならばサーヴァントたる彼にはこの様な鋼の玉など傷一つ負わせることはできない。

「……だが。」

「これはっ……魔力で編まれている!?!」

咄嗟に判断し、眼前に己が魔力を蒼き炎に変えて叩きつける。

炎は壁となってベアリング弾を焼き尽くす。

「魔力で編まれたトラッププー近代の暗殺者…イレギュラークラスか!」

本来ならば暗殺者のクラスはハサン・ザッバーハただ一つ。

山の翁のいずれか一人しか召喚対象たり得ない。

しかし、このトラッププー明らかに関定するならば暗殺者の行動そのもの。

正面切つて戦う三騎士でも、残るいずれのクラスにもそぐわない。

「プーお見通し、か!」

まだ若い男の声。

声のした方に振り向いた瞬間、背中に衝撃が走る。

「プー!?!」

念の為に警戒していた甲斐があった。

背後から斬られる可能性は考慮済みであった為、背後に張った魔力がアサシンらしき男が斬りつけた刃を逆に押し折っていた。

「プー2度通じるものではないが、セイバーなどが使う魔力放出の応用だ…局地的に魔力を集めて己が弱体耐性をカバーした。」

鋼の決意、攻撃に回せば敵の防御を貫通し、己の筋力を一時的に引き上げると同時に数瞬だが肉体の脆い部分を補強するスキル。

「くっ、厄介な……！」

飛び退き、闇に紛れんとするアサシン。

「逃すと思うか、暗殺者！」

仮に回避スキルで躲そうにも先の鋼の決意による貫通効果は大抵の防御、幻惑を相手の気配が僅かにでも補足できれば無効化可能だ。

だが。

「……なに？」

唐突に、気配が一切感じ取れなくなる。

如何にアサシンの持つ気配遮断スキルがあるとは言え一度攻撃に出た以上簡単には気配を辿れなくなるわけが無いのだが。

「気配だけでは無い……魔力まで攪乱しているのか、これは？」

よくよく目を凝らせばこの広大な地下空間内のあちこちに先のトラップに似た仕掛けや、呪符が貼られている。

「原因はあの呪符群か……」

（舐めてくれるな、暗殺者風情が？）

「この様な仕掛け一つで俺を封じた気なら……おめでたい事だ！」

バ、と飛び出した次の瞬間にはトップスピードに達し、残像を残す速度で地下空間を

翔ける。

次々と炎が瞬き、呪符が見る間に数を減らす。

時折発動するトラップも炎に阻まれ、燃え落ちる。

「なんて出鱈目……力、いや……速さで罠を強行突破されるなんてね……でもこれは、どうだい？」

ヴワン。

無数の羽が一瞬のズレもなく同時に羽撃く。

「喰いつくせー羽刃蟲!!」

先のアサシンとは別の声。

それを合図に一斉に物陰から飛び出した凶悪な鋭さを持った大顎と刃物の様な羽を開いた蟲がアヴェンジャーに殺到する。

これが人間なら2秒と持たずにズタズタに噛み裂かれるだろう。

だが蒼い炎が一際強い輝きを放ち、アヴェンジャーの全身から噴き出し羽刃蟲を焼き尽くす。

「……姿を現せ魔術師、何も今すぐ貴様を殺すつもりは無いのだ……だがこのまま続けるなら……我が宝具をもつて全て焼き尽くしても良いが、どうする？」

「……何が狙いだ。」

「貴様はこの聖杯戦争、真つ当に願いが叶うなどと思うか？」

「――サーヴァントである貴様が何を言い出す…いや、何を企んで…」

「――そこか、魔術師。」

話すうちに、僅かな敵意――つまりは一種の恨みが自分に向けられる、位置を特定するには十分だった。

「――！」

一瞬にして間合いを詰め、物陰に隠れた魔術師へ手を翳す、その気になれば焼き尽くしてしまえる様に。

だが、その姿は想像もつかない姿であった。

身体のは大半は蛹の様な表皮に覆われ、柱に半ば癒着する様にもたれかかっている。

「見つかつてしまうとはな…随分苦心して施した認識障害の結界だったんだが…俺の技量じゃここまでか…」

ス、とアサシンが姿を見せ、主人の前に立つ。

その姿は予測のままに近代的な出で立ちだった。

頭はターバンの様に赤い布を巻き、顔の大半はフードと口元を覆う布で隠れて目だけがギラついた眼光を見せる。

黒を基調とした近代的なボディースーツの上には元は淡い色合いだったのが汚れ、赤茶

から黒にに変色したコート。

腰のホルスターには二丁の銃把が見えていた。

「アサシン、君では彼は止まらんだろう…もういいよ、なんなら俺を殺して再契約にかけるといい。」

「…早合点するな、殺す気ならばそうしている、まずは話し合いだ、ビューパーマン。」

「…昔、そんな特撮ヒーローがいた様な気がするな…まあ僕は念力なんか使わないが。」

意外に冷静に冗談を返しながら、魔術師、間桐雁夜は自由になる首だけを動かして白髪に半ばがケロイド化した火傷跡に覆われた顔を此方に向けた。

「全く不便なものでね…定期的にこうして身体を再生して毒素を出さなきゃ生きていけない身体なのさ…。」

直後、パリパリと背中辺りに亀裂が入り、蛹が割れて雁夜の身体がゆっくりとせり出してくる…まるでB級映画のワンシーンの様に異様な光景。

「…よければ、後10分ばかり待ってもらえないかな、エクストラクラスのサーヴァント君。」

「待つのは慣れている。」

フ、と笑いながらそれに返すアヴェンジャー。

アサシンはと言えば無言でその間に立つのみであった。

「しかし、暇じゃ。」

吸血種、イルマ・ヨグ・ソトホープ。

真祖を除けば最高位に位置する吸血鬼である彼女には凡そ吸血種らしい弱点は無い。

例えば、陽の光。

日光浴ができるレベルだが、強いて言えば日焼けで黒くなりすぎるのが嫌。

例えば、流れる水。

少々肌を刺激するが…寧ろ痛いながらも気持ち良い、ちよつと自分はMかも知れない。

い。

例えば、ニンニク、十字架。

ニンニクは臭くなるし、気持ち悪いがその程度。

十字架は…流れる水と変わらない。

触れたらピリピリするけど触れる位置によつては寧ろイイかも知れない。

何処かって？

言わせるで無い、この助平め。

「お嬢様…いくら衛宮様方が教会に出かけて暇だからと言つてその格好は破廉恥すぎは

しませんか…」

呆れ顔で呟くのは執事である死徒、イゴール。

初老の男の姿は一見温和だが、これで本性は恐ろしい巨体を誇るのだからわからない。

「日本の冬はいかん…炬燵とやらはあまりに魔性だ…骨抜きにされてしまう。」

炬燵に潜り込み、頭と両手を出した状態で蜜柑を剥き剥きしている。

因みに、ドレスは邪魔になって傍に脱ぎ捨てられている。

…下着だけで炬燵を背負った格好なのである。

「確かにドレスのスカートは炬燵に籠るには不向きでしょうが…そもそもその様に亀かエスカルゴの様な姿は…」

「あー、煩いな…ワシの勝手じゃろ、血も吸わずに霧になったりなんだかんだと魔力使いすぎたんじゃもん…切ーじやない、士郎の血を吸おうにもここ、正面から戦ったら洒落にならんかのばかりじゃろうが。」

ぷー、と頬を膨らませる姿は年端もいかぬ少女らしいものだが、口調は老獪な年寄りそのものだ。

「…いつそそこの一般人の血を吸えば良いのかもしれないが…それはプライドが許さん。」

「難儀な事ですなあ…ほほっ。」

それをどこか微笑ましいとばかりに軽口を返すイゴールは楽しそうである。

「貴様なあ…最近主従と言う立場を忘れておらんか、ん？」

「滅相もない、ただ、長い付き合いですからなあ…主従を超えてどこか孫を持つ祖父の様な気持ちも無いわけでは御座いませんが。」

「…ウ又う…」

「衛宮切嗣…不思議な御仁でしたな…今はどうしているのやら。」

「どこかでしぶとく生きているだろうさ、そうでなくては困る。」

「…ふふ、決着を、ですかな？」

「そうじゃ、借りは返さねばな。」

「…似た気配だと言うだけで、勘違いして抱きついた事は忘れておきましょうか。」

「いつ、イゴールっ！殴るぞおまえ!？」

顔を真っ赤にして炬燵から立ち上がるイルマ。

汗ばんだ下着は薄く張り付き、子供らしくも、大人に成りかけている未成熟な肉体を晒す。

「ああ、ですからはしたない…」

「話を逸らすなっ!？」

衛宮家は主人不在でも賑やかである。

「いよいよキナ臭くなってきたものだ……」

冬木ネオ・ハイアットホテル。

10年前に倒壊したこのビルであったが、新たに建造されたそれは最新、最高級を謳い、当時のホテル以上の豪華さとセキュリティを備えていた。

その最高級の客室に居るにしては珍妙な組み合わせの二人。

一人は、東洋人は幼く見えるとは言え身体つきに反して幼い顔立ちの、ショートカットの女性。

もう一人は、2メートル近い巨軀で腕を組む筋骨隆々の大男、しかしその見た目は儼ついでというだけに留まらず、美しくさえある黄金比。

アーチャー、ゼウスとそのマスターであった。

「ええ、また：時空が歪みを見せましたね、今回は小規模な時空震でしたが……」

「此方に降りたつて以降、頻繁に聖杯経由でちよつかいをかけてくるものが居るな。」

「解っていた事です、貴方の様な規格外を従えているのはひとえに、その“ちよつかい”に負けないで頂きたいから——でもあるんですからしつかりして下さいね？」

「――ハ、そこいらの貧弱な英霊と一緒にしてくれるな、分霊とはいえ…ワシは神であるぞっ。」

「神を名乗りながら異変一つどうにもならないとはお笑い種です。」

「――ぬかせ、小娘が…この街は異常極まりないんじやよ…我が眼を持つてしても全容が見えぬのだ…如何にこの身が全盛期に比べいささか以上に格を落としていようと、見通せない状況などない筈なのだ。」

「――アイオフザウラヌス天空神の眼ですか…出鱈目なスキルですが…それで私の入浴覗くのいい加減やめてくれませんか、本気で。」

生暖か…いや、最早その域を通り越して乾ききった眼で自らのサーヴァントを見る。

「そのチベツトスナギツネの様な目はやめんか、マスター…」

「そう思うなら真面目にやってください。」

はあつ、とため息を吐きながらこめかみを押しえながらアーチャーに目を向ける。

「まったく、笑っておればすこぶる魅力的だと言うのに…」

「貴方に言われても嬉しくありませんよ…私がそんな風に言われたいのはあの人だけですから。」

「あの人、のお…全く…お主の様な女に想われるその男は幸せものよな。」

「ええ…ですから、必ず、必ず救いますよ。」

薄桃色の髪に、紫紺の瞳、そこに決意の光を灯して立つ姿は。

女神すら霞む程に神々しい。

しかし、同時にあまりに危うくもあつた。

「あまり独りで気負うでないぞ、人の身で叶う事などそう多くはないのだ…他ならぬお主こそ解っている筈じやろうて…奇跡とはただ一人で起こすものではない…神に抗うは人の業であるが、ただ一人で成し得るほど容易なものではない…違うか。」

「ええ、そうです…貴方を召喚し、この地に立つ為に如何に多くを失ってきたか…忘れたわけではありません。」

それほどに「あの人」は大きな人だった。

そして、同時にあまりにも優しく、脆い。

他人を救うことに躊躇などしない癖に、自分を救う事など考えてもいない。

危なっかしくて、愛おしい人…

「ええ、必ず救います…待っていてくださいね…先輩。」

第22話 『恩讐』

「これは…どう言うつもりだ？」

「ん？見た通りだが、何を悩む、金なら手に入った、問題あるまい？」

「——いや、確かに君が適当に買ったスクラッチがいきなり当たって大金に変わるのを見たのも驚きだけだな。」

「まあ、換金は戸籍の無い俺ではできなかったからな、半分はお前にやろう。」

「あ、いやなんか後が怖いし何より俺には金を使う未来があるかだってわからないから、要らないよ。」

曰く、彼の持つスキルの効果らしいが…

「黄金律A」とはここまで理不尽に効果靦面なのか…

「そんな事で聖杯を望もうと言うのか貴様は…まあいい…理由か。」

「いや、俺は——」

聖杯を、のくだりを否定しようと口を開く。

が、先にアヴェンジャーの言葉がそれを遮る。

「ふむ、強いて言えば気まぐれだな。」

「—は？」

アサシンは今姿を消している。

今現在向かい合うのは俺、間桐雁夜とアヴェンジャーだけだ。

「気まぐれだ、気まぐれ：そうだな、より具体的に言うならば：お前の気概が気に入ったと言えれば納得か？」

「——いや、ますます理解に苦しむが…」

「オレは、特殊なサーヴァントでな。」

「ああ、そりゃエクストラクラスだもんな…」

「いや、そういう意味ではない。」

と、会話をしながら今俺の目の前には信じがたい光景が広がっている。

アヴェンジャー、彼はニヒルに口元を歪めてはいるのだが、余りにも似合わない。

「オレは聖杯により招かれた、本来とは違う、通常と異なりマスターの居ない——完全に独立したサーヴァントだ。」

今、凄く重大な案件をサラッと吐き出されたが：僕の目は寧ろその姿を認められずいた。

つい数時間前に、まるで蒼き流星の如き動きで空を駆けたとはとても信じがたい。

なんせ、今の彼はどういう訳か借りてきたレンタルアパートの一室で、やたらに可愛

らしいクマさんプリントのエプロン姿で料理を作っているのである。

しかも、外套は脱いだもののレトロなスーツはその下に着用したままで。

「…え、あ、そ、そうなのか。」

「なんだ、意外に驚かん？」

フライパン片手に可愛らしく小首を傾げる姿は一部の層が見たら喜びそうな感じだが、男だ。

「いや、もう今日は驚きすぎてキャパが…」

最早苦笑いしかできない。

しかしこんな姿を見せて油断させて俺をどうする気だ？

「あの地下空間で蛹から羽化した後に貴様は言ったな？」

そう言えば確かに御大層な事を言ったかもしれない。

今や自分の生き長らえる意味そのものと言えるくだらない話。

「——許しがたい者が居る、と。」

「ああ、確かに言ったな、そうさ、俺の祖父だと嘯くあの妖怪爺——あいつを滅して、救うんだあの子を…今度、こそ！」

「その、眼だ。」

心底から美味そうなものを見つけたと言わんばかりに期待に満ちた眼が、俺を射抜

く。

「眼？」

「ああ、そうだ：恩讐に生き、恩讐に身を焦がす者の眼だ、死に挑み、然しながら希望を抱いたその矛盾——実に気に入った。」

その台詞だけならニヒルに決めた彼の姿はかつこいいと言えなくも無い。

だが、クマさんエプロンである。

「まずは、食え。」

「え、あ、ああ。」

さきほどまで皿に盛り付けなどされていなかった筈だが、気づけば机には出来上がった料理が所狭しと並んでいた。

少しばかりスパイシーな香りと、ガーリックの香り。

「簡単なものだが栄養価は高い筈だ、貴様はまず身体を養え。」

：コイツ、もしかしたら世話焼きなだけか？

疑うのが馬鹿らしくなってきた。

て言うか、そもそもあの時殺そうと思えば殺せた訳だしな：疑う事自体ナンセンスな話だったのかもしれない。

「ありがとう、戴くよ。」

料理に罪はあるまい。

「——オブウツ?!?!?」

…調理した者には…罪があつた。

一口含めば口に広がる異様なまでに強い大蒜臭、辛味の中に絶妙に間違つたバランスで感じられる妙な甘さ。

「レバーのニラニンニク炒め、ニンニクの芽添え、味噌風味だ、美味かろう?」

「あんた、栄養価だけみて混ぜたな!」

涙目でむせながら抗議する。

栄養価を足し算すればいいと言うものでも無いだろう!本気で!

「——馬鹿な、不味いとても?」

こ、こいつツ本気で驚いてやがる…マジか。

「美味い不味い以前の問題だ、ニンニク入れすぎだろう!」

「そんなに臭いか?」

「味覚大丈夫かお前ツ、半ば失いかけた俺の嗅覚でコレだぞつ、普通なら卒倒するわ!!」

「——な、んだと…ならば…あの赤いのがほざいていた感想、事実だと言うのか?」

なんだか思案顔になつたアヴェンジャーだが、とりあえず無言でやたら臭い料理を片付ける。

臭いに無頓着になりかけた俺でコレだ…多分外まで臭ってるんじや無いか…

嗅覚に鈍感な俺の鼻にガリーツクの香りが届いた時点で気づけば良かった。

あれは最早食材への冒瀆である。

「とりあえず、まだ材料はあるな…」

結局、何故か自分が料理を作る羽目になった。

どうしてこうなった。

なあ、そう言えば桜ちゃんも、一度だけ不器用に目玉焼きを焼いてくれた事があったなあ…

うちに来たばかりで、俺が出奔して間もなく、一度だけあの屋敷に荷物を取りに戻った時だ。

蟲爺のいないときを狙って、勢いに任せて出奔した時に持ち出せなかった、フィルムを取りに。

思えば、あの時間違えていたのだ。

あの時——あの子がいた事に驚いている場合じゃ無く、無邪気に笑いながら久しぶりだと、そう言っただけ料理をしてくれた。

おもてなし、だと言っただけ。

何故、そんな事に構わずすぐに連れ出さなかったのか。

そんなままごとに付き合う事さえしなければ。

あの子をあの場合から救い出せた筈だったのに。

「なんじゃ、貴様大言を吐いておいておめおめ出もどりか？」

「——っ、どうしてもここに捨て置くには惜しい物を忘れていたから取りに来ただけだ……貴様の思い通りになんかなる気は無いからな！」

不意に戻った蟲爺に啖呵を切り、食べかけた卵焼きをそのままに、ただ、小声でありがとう、と言うのが精一杯だった。

爺の目の前からあの子を連れ出すほどの勇氣も無く、力も無い。

このまま去るならこの男も自分をわざわざ殺しにも来ないだろうなどという懦弱さに負けた。

そして、暫く悩みに悩んだ末に。

第四次聖杯戦争に参加しようなどと。

間違いを犯してしまう事になったのだ。

そう、歪んだ想いに囚われて、囚われの少女と、その母を——想い人を救いたいと願いながら、その実自らのエゴに周りを巻き込むだけの、歪んだ願いを抱えて——。

人は、幾度間違えば正しくあるのか。

恩讐があるのだとすればそれは、寧ろ俺自身に対してなのかもしれない。

「ふむ、この靈基盤の反応は一体如何なる事か…既に12体分の反応があるなどと…」

此度の第五次聖杯戦争、その監督役たる聖堂教会の神父にして神罰の代行者たる彼、言峰綺礼は些か困惑していた。

ルーラー、アヴェエンジャーに関しては靈基盤にその存在は確認出来ない。

故に彼は読み違えている、サーヴァントは現在13騎では無く、自らが擁するイレギュラーを足せばさらに1騎、計15騎存在する事を。

今回、正規の7騎に加えて自らが擁する「前回」の生き残りであるアーチャー、英雄王ギルガメッシュを入れて8騎。

それが初めに描いた全体図であつた筈なのだ。

しかしある時期を境に次々と反応が増え、今や英雄王を入れると13騎。

脱落したライダーを除き、それでも従来の倍の数の英霊が現界している。

「把握する限りの英霊はギルガメッシュ、セイバーにヘラクレス、アーチャーに凜の従える無名の英霊…ランサーに李書文…真名不明のキャスター、アサシン…、そして規格外のバーサーカー…クー・フリーン…」

呟いたのが当初把握していた英雄王を含み、ライダーを除くサーヴァント7騎。クー・フリーンに関しては対ライダー戦にて開帳した宝具名から察しはついた。

「その上…更に7騎…未だ真名不明の海賊らしきライダー、宝具からしてランサーはフィン・マツクール…それに正体不明のアサシン、…第二のセイバークラスは現状不在、キャスターは姿を見せず、バースーカーは真名不明な上にマスターも素性がまるでわからん、アーチャーは…神霊、ゼウス——だと？」

教会地下の一室で霊基盤を睨むその顔は珍しく顰め面であった。

想定外の事態が起きすぎている。

「ふん、綺礼よ…中々に良い面をしているではないか…あまり我を興に乗せてくれるな、縊り殺したくなるでは無いか、なあ？」

背後にラフな格好の美丈夫。

金髪、紅眼の人間離れた畏怖と均整が同居した男——英雄王ギルガメッシュが腕を組み、見降ろしていた。

「ギルガメッシュか…ふん、困惑もしようというものだ、一体聖杯はどうなっているのか…アレを宿したにせよ此度の事態は度がすぎる。」

「何、あの赤いのに好きに暴れ回らせてやれば良からうが、そろそろ頃合いでは無いか？」

そう、つまりはランサーを捨て石にしろと言っているのだ、この英雄王は。

確かに、英雄王の力を持つてすればほぼ全てのサーヴァントを打倒可能だろう。

だが。

「ギルガメツシユ、いかに貴様でもあのアーチャーに対しては完封ともいκανだろう。」
「——ふん、この我を誰だと思つている…神など、微塵に碎いて那由多の果てへ消し飛ばしてやるわ！」

ギルガメツシユが負けるとは思えない、しかしあのアーチャー相手に複数入り乱れる混戦になれば必ずどこかで綻びが生まれるだろう。

それは面白くない。

それでは、面白くないのだ。

だが。

「確かに静観するのもそろそろ終わりにすべきかもしれないな…。」

「ランサー。」

令呪を通じ、監視を続けていたランサーに告げる。

「——頃合いだ、貴様が良しとする相手の首を取れ、ただしあのアーチャー…ゼウスにだけは手出しするな、貴様では消し炭にされるのがオチだ。」

《ようやくその気になったか、マスター…しかし消し炭にとはコケにされたものよな…まあ、どのみちワシが好む手合いでも無い故にたごうてやるが、な。》

「好きに暴れるがいい、目立たなければ幾ら殺そうが構わん…ただし逐次報告だけはし

ろ。」

《承った、それでは——ランサー、李書文……これよりこの身は、修羅に墮ちようぞ——
ク、楽しみよなあ!》

それを最後に、プツリと意識のリンクが途切れる。

「やれやれ、あれでは報告も真面目にしてこんかもしれんな、まあ……一人二人潰してくれば構わんか……」

「で、客のようだが?」

英雄王が目で上を指す。

「どうするのだ?」

「迷える子羊には、道を説くのが神職の務めと言うものよな。」

「——はっ、どの口がほざくのだ貴様!」

愉しくて仕方ないという風に笑いを堪えるのに苦労するな、と返す英雄王。

「さて、私には口は二つとないのだがね。」

「口は?舌は、と続くのではないか、この似非神父めが、クックク、ハッハハハハ!」

英雄王が姿を消し、綺礼は階段を登り、礼拝堂の扉を開く。

「ようこそ、神の家はいつ如何なる時にもその門戸を開いている——懺悔かね、相談かね

?」

薄ら寒い笑顔を浮かべ、客人を出迎える。

そこには見知った顔。

遠坂凜、己の魔術の師である時臣氏の娘、氏の亡き後は私がまだ幼い彼女の後見人でもあった。

その後ろには、見慣れぬ少女。

使い魔やランサーから報告は受けている。

あの、九重十蔵の娘。

アジ・ダハーカを継いだと思しき者、九重朔弥。

そして衛宮。

衛宮士郎——あの男の、養子。

「久しぶり、でも無いけど……綺礼、監督役としての説明責任を果たしてもらおうわ。」

と、凜が切り出す。

「よかろう、凜……お前が私に頼み事など……その二人には感謝せねばな？」

「——よしてよ。」

それ以上の言葉こそ無いが、しかし凜は明らかに嫌がっている。

そんな姿を見ると抑え難い嗜虐心に駆られる。

「時に、その少年は？」

「え？あ、ああ……土郎は弟子よ、出来は悪いけど素養はあるわ、サーヴァントを従えるでも無いし、その、ちよつとほつとけなくて、あ……いや……兎に角、取引したのよ、取引。」
慌てた様に捲したてる凜。

ふと、なんとは無しに感じた。

(なかなか、面白いでは無いか。)

ニイ、と益々怪しい笑顔を浮かべ、彼らを招き入れる。

「まあ、立ち話もなんだ……入り給え。」

ああ、愉しい時間になりそうだ——。

願い。

願いとは何だ？

ヒトの望み。

渴望。

叶えたい想い——

狂おしいほどに求める強い思いに突き動かされ、彼らは呼び声に応える。

そう、何の為に。

私は何の為に此の時代に現界したのであつたのか。

今となつては、もうその答えは出て。

だからこそ——彼を。

救わなくてはならない。

そうだ。

あんな、あんな理不尽な黄金に疎み、立ち止まっている場合では無いのだ。

——待っていてください、必ず——貴方の元に、戻りますから。

ああ、私の——鞆。

私と言う愚かで独りよがりだった抜き身の刃を受け容れた貴方。

必ず。

必ず——

光が、瞬いた、気がした。

第23話 『赤と青』

それは、まるで綺羅星の様に――

始めにそれは、星々の輝きを受けてたゆたう様に暗い宙に漂い流れていた。

それは、円錐にも、円柱にも、匣の様に、瓢箪の様に、或いは壺の様にも見えた。

夢幻の怨嗟に囚われた虜囚を乗せた箱舟――

罪人達を連れ、世を憫んだ女は空を漂う。

やがて、その人知を超えた感覚は、蒼く美しい宝石のような星を観る。

『アア――ナント、ウツクシイホシ、カ。』

ソレは、知らず知らずに呟いていた。

その感覚に捉えた星こそが、ソレが遙か昔に求め続け、何時しか忘れてしまっていた大切なモノを育んだ場所であるとも気づかずに。

『ソウダ――ツギハ、アソコガイイナア？』

無邪気な声は、耐え難い歪みを孕み、度し難い傲慢さと、気が狂いそうな甘い毒の香を含んでいた。

綺麗だから、欲しいから……だから。

『壊しちゃおう。』

一瞬だけ、その声に人間味が宿り、直ぐに無機質な、陰湿な、空寒い響きに戻る。そうして。

ソレは太陽から三番目に位置する惑星へと、降下を開始した。空気と擦れ合うその硬質な肌が、不思議な七色を撒き散らし、まるで——綺羅星の様に。

1999年、7月。

空に七色の流星が見えたと一部天体マニアの間で騒がれた。

だが、その星はとうとう落下した事実も無く、噂は噂として消えていった。

まだ、今ほどに電子情報網も発達しない頃の話。

ほんの一握りの人だけが騒いだ小さな話。

その日、人類史は密やかに、しかし確かに滅びの窮地を脱していた。

誰が救ったわけでも無く。

ただ、偶然の——いや。

必然の歪みをもたらした救いに。

そして。

歪んだ歴史は、一つの転換期に再びの歪みをもたらした。

誰一人気付かぬまま。

救われた世界は、次なる滅びに晒される事となる。

『アア、タノシイナア、ハジマルヨ、ハジマルヨ——キミガマチノゾンダ、ウマレオチル
シユンカンガ、イヤ——ノゾマレタ、カナ?』

『ハハ、ヨケイナオセワカイ?ケレド、ウマレオチテモラワナキヤア、ナンドモ、ナンド
モ——カタチヲナスタメニ、キミハノゾマレタママニシタライイ、ネガワレルノガ、ホー
リーグレイル——ワタシモママ、ヨニデルコトコソガ、在り方なのですから——』

在り方?
人らしい在り方はどうに忘れた。

しかし、人に憧れる。

失った。

喪ってしまった。

『ハテ——ナニヲナクシタノダッタカ…』

『ハテ——?』

懐かしい街並。

懐かしい空気。

ここは自分が知る冬木の地でありながら、冬木の地では無い様な違和感。
「しかし、あれからもう10年か。」

若気の至り、馬鹿ここに極まる理由で参加した第四次聖杯戦争。

自分はそこで死に直面し、生を得て、そして何より人として得難い経験をした。
ただ、認められたかっただけの自分。

卑小な自分を、大きな身体で導いてくれた征服王。

そして、敵でありながら王たる彼の生き様を認め、自分を見逃した英雄王。

あの後、セイバーも、英雄王も、どうなったかは定かでは無いが。

起こった災厄を鑑みるならばおそらくマスター共々果てたのだろうか。

遠坂時臣の死に様は実に奇妙ではあったが――

「まあ、今考える事では無いか。」

小さな公園に差し掛かり、ブランコや砂場で駆け回り、はしやく子供の声が遠くに聞こえた。

違和感こそあるが、のどか過ぎる光景。

「本当にここは、あの結界の中……いや、冬木、なのか？」

「異な事を言うやつじゃなあ……？」

ふ、と急に声がして振り向く。

そこには白髪の長い髭をたくわえ、ボロを纏う一人の老人の姿があった。

片目は目の病気で患ったのか、アイパッチの様なもので隠している。

「冬木にきまつとるじゃろうが？」

「え、ああ——数年ぶりですてね、大層変わってしまったな、という話ですよ。」

何度かマッケンジー夫妻に会いには来たが、ここ数年はそれも出来ていない。

咄嗟に、変に思われたかと言いつくろう。

「ほー、まあ、気をつけなされよ……懐が暖かそうじゃからなあ、坊主。」

浮浪者？それともスリか何かだろうか？

いや、それならこんな風に声をかけてはこないか。

「ご忠告ありがとうございます、大丈夫ですよ、これでもイギリスの、治安も良くない場所での暮らしが長かったのでね……物盗り程度にどうにかされるほど甘くはありませんから。」

多分、おのぼりの外国人だと思つて声をかけてくれたのだろう、酔狂な——いや、まるでマッケンジー夫妻の様に優しい御人だ。

「そうかね、まあ……念のためじゃ、ワシがおまじないをしてやろう。」

「そう言いおき、老人は指をササ、と走らせた。

「ほほ、ワシこれでもまじないが得意でな、坊主には不幸が見えとつたからな、少し払つてやったわい、お前さんに幸多からんことを、な。」

ふ、と笑い。

柄にもなく優しい笑顔でもう一度礼を述べる。

「ありがとう、おじいさん……貴方なんだか似ていますよ、僕の知っている人に。」

「そうか、綺麗なおなごなら紹介してくれ、是非な。」

と、わきわきと指をいやらしく動かす爺。

「男ですよ、貴方と同じお爺さんだ。」

やれやれ、と肩をすくめて背を向ける。

「坊主、楽しいやつじやなお前さん……縁があればまた会おうな、ほっほっ。」

面白いのはあんだら、とは言わず手を上げて答え、その場を後にする。

老人は、黙って先ほどまで繰り返していた作業に戻る。

手元の袋から取り出した餌を、茂みにいたカラスに放り投げる。

美味そうにそれをつつく二羽のカラスを見て目を細め、呟く。

「美味いか、美味いか？」

餌をやる対象は変わっているが、やはり冬木はのどかであった。

表からみる、限りは。

「なんだ、今の——」

聖杯戦争が始まって、もう何日めだろうか。

昼に何をしたかも臆げな位に頭がはつきりしない。

何かを見た様な気がする。

忘れてはいけない何かを。

「痛っ?！」

左手の甲に、鋭い痛みが走る。

切った覚えもないのに血が滲んで流れた。

「なんだ? つと布団についちまう…。」

慌てて流れた血が落ちない様に右手を重ね、そのまま洗面所に向かう。

血を洗い流した後に現れたのは、剣。

昏く冷め覚めと月の様に冷徹な刃がそこにあった——眩く輝く、金の刃もそこにあった。

「——っ!?!」

一瞬、手から二つの刃が突き出している様に見えた。
美しい金色と、禍々しい黒。

しかし直ぐにその幻覚は消え、ただ、赤い刺青に似たものが左手甲に浮かび上がった。
いた。

「これ、まさか…令呪、か？」

何故、この状況で自分に令呪が顕れたのか。

「——俺に願いなんか、無いんだがなあ…イツツウツ!?」

更に右手に痛み。

重ねて血が流れ、金色の尖った先が見えた。

「これっは…いつ、いつてえ——」

都合6画。

二つの令呪が左右の手に宿る。

「うっ、ぐああああああっ?!?!」

蹲り、堪らず声を上げる。

言いようの無い激痛が身体を引き裂く様にして通り抜けていく。

『大丈夫ですかっ! 土郎——!』

懐かしい誰かの声が聞こえた。

それは、幻聴だとわかっていながら。
頬に、涙が伝った。

「うっ、あ——あああああ!!」

泣き叫ぶ様に頭を掻きむしりながら叫ぶ。

「ちよつと、士郎っ、大丈夫!!」

声に驚き、飛び込んできたのは凜だ。

赤い、いつもの服装に、髪だけはまだまとまりきらなかったのかまだ肩に流れたまま、すこし跳ねていた。

「とお、さ、か?」

「ちよつと、本当に大丈夫? 顔、真っ青——」

嘘——、と。

今度は凜の顔が白くなる。

「なんで、あんたに令呪、が?」

呆然と立ち竦む凜、その後ろからバタバタと誰かの足音。

「何事ですかっ!?!」

「あ、()——朔弥?」

「む……」

わざわざ、名前で呼び直したのを聞きとがめ、凜の顔に朱が戻る。

蹲る士郎を見た朔弥が、先ほどの凜同様に顔を青くして、駆け寄った。

「ちよつと、血が……いや、先輩顔、真つ青ですよ、大丈夫なんですか?」

令呪など、見えなかったかの様に士郎に寄り添い、支える姿。

ああ、私——やつぱり、魔術師なんだなあ。

そんな風に、普通と違う自分が嫌になる。

凜の思いは誰に聞きとがめられる事も、無く……は、無かった。

《凜、無理をするな——何も君が何時も魔術師然としなければならぬわけじゃ無いんだ。》

《え、士郎?、あんた何言つ——あ、アーチャー?》

《全く、動揺し過ぎだ……小僧と俺を、間違えなくてくれたまえよ。》

《え、あ……ごめん、つてそうじゃない、そうじゃないでしょ……余計な御世話よ!》

《ふん、その方が君らしいよ——凜。》

従者の声に、反論しようとした矢先。

「——なつ?」

カランカランカランカランツ!

鳴子の様な警戒音。

「敵?」

行くわよ!、と凜が舌打ちしながら駆け出し、朔弥も士郎に肩を貸しながら立ち上がる。

「バーサーカー!」

「ああ、ここに居るぜマスター。」

庭先に魔力を感じる。

敵は外壁を通り越して入り込んだ様だ。

「小僧、マスターとここに居な。」

そう言い残し、バーサーカー、クーフリーン・オルタもまた凜を追う。

「始まった、か。」

最後に呟いた言葉は誰の耳にも届かない。

しかし、言葉通りに。

事態は急激な変化を見せた。

庭には、無数の影が揺らめいていた。

黒く染まったまるで亡者の様な幾つもの影。

口々に怨嗟を吐き出し、姿は様々。

剣、暗器、槍、魔導書——様々な獲物を構えた其れ等は一様に眼に光は無く、泥の様

な光沢をした身体を引き摺る様にじわじわと包囲を狭めてくる。

「な、何よこれ……？」

凜の眼には、そのステータスが見えた。

つまりは。

「全部、サーヴァント!?!」

「何事だこれは……随分禍々しいが、あれがサーヴァントだと?」

アーチャーの疑問はもつともだ。

何せ見た目は英霊とは程遠い、言うなれば悪霊そのものの姿。

「——黒化英霊……歪んだ力に侵され、変質した英霊の成れの果てだ。」

答えたのは、バーサーカー。

「黒化、だと?」

「ああ、そうだ……俺もまた歪んだ願いから変質して生まれた口だからな、御同類の事はよく分かるのさ……俺の真名はアーチャー、お前ならもう検討がついてるだろう?」

「あ、ああ……宝具を見たからな……しかし君のソレは私が知るものとは些か以上に違っていたが……?」

「そうさ、故にこそその変質、アレは俺の様な黒化英霊の成り損ない……言うなれば、デミ・オルタつてところか、自我が無いんだよあいつらは。」

「クー・フリーン・オルタ、それが俺の本来の真名さあ。」

そう言いながら槍を構え、庭先の黒化英霊を睨みつける、クー・フリーン・オルタ。

「真名を……良いのか？」

「ハ、もうお前も、嬢ちゃんも聖杯がまともじゃ無い事には薄々勘付いているんだろう？」

「それは——」

「いや、お前は知っていたはずだな……アーチャー、いや……剣製の英霊よお？」

「な、貴様——!？」

「は、その反応じゃ俺の事は覚えてないか、いや……オルタ化した俺やそのあたりの事は座の記録にすら届いていない、か？」

「な、何を言っている、何を？」

困惑するアーチャーを他所に、バーサーカーは殺気を高めていく。

「さあて、それじゃあ一仕事、するかねえ！」

「——何してるの、アーチャー！」

遅れて、凜が叫ぶ。

「っ、ええい、仕方ない！」

手に双剣を握り、駆け出す。

ガイン！と音を立て、刃を弾く。

強い。

己の意思を失ってこれか。

「これが英霊だと言うのは本当らしい、な！」

「アーチャー、気をつけて……こいつら全部雑魚じゃ無いわ……むしろ強敵よ！」

凜の眼に見えるステータス、それを見ればわかるが、その真名はわからずとも能力は臆げに判る。

それら全てが高水準、その上何らかのステータスの底上げがなされている様だった。

「バーサーカーの狂化スキルみたいなもの？」

自我が無い彼らは、その反面強い力を得ているのかもしれない。

「く、しかしマスターも無しに何と言う馬力だこ奴ら！」

最初に揺らめいていた数騎をなんとか斬り伏せるアーチャーとバーサーカー。

アーチャーは強引な太刀筋から体勢を崩しながらもなんとかと言うていだ。

しかし、影は更に増援を寄越してきた。

黒い油溜まりの様な中から、現れたのは剣の英霊。

構えた豪壮な剣を振り上げ、そこに光が集まり始める。

「え、ちよつとアレ真逆！」

凜の焦りはもつともだろう、あろう事か黒化英霊、デミ・オルタは自我すら無いと言
うに、宝具を開帳しようとしているのだから。

「ちい、あの光…マズイ、対軍宝具っ!？」

間に合わない、バーサーカーは未だ残ったランサーの黒化英霊と鏖迫り合いをしてい
たし、アーチャーもまた体勢が崩れた直後——

「遠坂つ、アーチャー、バーサーカー、無事か、みんなっ!」

叫び、朔弥の肩を借りながら手に銃を構えるのは士郎。

そして、それが剣の英霊の意識を向けさせてしまう。

「足掻ク者——神は、貴様ヲヲ、才認めになラヌ——」

今までバーサーカー達に向いていた剣先が、士郎へと向けられ、光が——

「士郎——ッ!!」

凜の叫び、そして。

「セイバーツ!!!」

甲高い、少女の声と、剣が奔る音が。

聞こえた。

第24話 『混沌』

聖杯戦争とは、願いを叶える願望機、聖杯を巡り願いを叶える為に七人のマスターと、サーヴァントが争い、聖杯を得るに相応しいと証明し、手にする為の闘争である。

要約すればそう説明を受けた後、士郎と朔弥はそれぞれ別の意味で首を傾げた。

「何故、わざわざ殺し合わないのか？」「それこそスポーツみたいルールを設けて競つちやいけないのか？」

「衛宮士郎、だったな——ならば貴様は、大切な誰かを生き返らせたかった、として…誰かが決めたルールで、やりようによつては勝てたかもしれないとなつて負けた時に納得し、願いを諦められるとでも？」

「う、いや…それは——」

「そらみたことか、ヒトは所詮ヒト…譲れない願いを抱えた者が、命もかけずに引き下がるなどと甘いのだよ、だからこそ聖杯も争いを長く凄惨なモノにしない為に…いわば慈悲をもってこの形式を定めたのでは無いかと思うがね。」

「そんな人間ばかりって訳じゃ…」

「そうだな、諦められる者もいるかも知れぬ、しかし全ての参加者がそう言えるとは流石

に君でも思えるかね？」

「……っ！」

唇を噛み、黙る。

悔しいだろうな、この人心底お好みだから……

そう考えながら、次は私かと声をかける。

「——貴方、本当に神父様？」

皮肉でもなんでも無い直球の疑問。

なんせ目の前の人物はあまりにも嬉しそうに衛宮先輩を論破し、愉悦に満ち満ちた顔をしていたから。

「……いかにも、迷える子羊に応える神父だとも、ああ……私ほど敬虔な信徒もそうは居らんよ、可愛らしいマスターよ。」

「……綺礼……あんた真逆ロリコンだったわけ？」

「何を言うのかね、これでも死別はしたが妻帯者だぞ、私は？」
聞いていた凜が驚愕している、知らなかったのだろうか。

「……色白で、可憐な女性でな——私のような殺伐とした男には似合わぬ聖女の様な女性だったとも……もつとも、私などに関わったが故に幸せらしい幸せを知らずに天に召されてしまったがね。」

「…あんだ、元代行者だものね…奥さん、普通の人だったの?」

「ふむ、アレは代行者の妻になるには余りに普通の人間らしい幸せを感じ、私の様な者まで包もうとする変わり者であつたがね、なんだ凛…男女の機微でも学びたいのか、なんなら教えてやらんでも無いぞ?」

又たりとした笑顔を向けられ、凛が怯む。

「お、お断りよこの変態!」

「ふむ、残念だが仕方ない…まあ、バーサーカーのマスターよ、君が言う様に私は人間味に欠ける男であるとは思うがね、しかし紛れも無く神職につくものだ。」

「…確かに淡々と教えを説くには良いのかもしれないけど…いや、そんな話をしに来たわけでは無かつた…」

つい、脱線してしまつたが。

いや、意図してさせられたのかな?

「…言峰神父様、貴方が代行者で、その上、私の父、九重十蔵について知っていると聞いたので…教えてください、父は…殺されたんですか?」

「—驚いたな、真逆君が、あのアジ・ダハーカの娘、とは…」

間を空け、応える様は本当に驚いた様にも見える、が。

「ならば、役割とは言え君のお父上には気の毒な事をした—私もまた、アジ・ダハーカ

封印の現場に立ち会った一人でね…最後に手をかけたのは私では無いが…な。」
「なら、やつぱり…?」

「ああ、封印指定を受けた君の父上は不死殺しの刃で四肢を落とされた後、魔術協会の封印指定執行者がとどめを刺した。」

「…その、執行者の名前、は?」

怒りが、目の前を赤々と染める。

「流石にそれは話せない、聖堂教会と魔術協会とが連携して行った数少ない事例ではあるが、故にこそ機密を漏洩するわけにもな、それとも私を今すぐここで殺すかね、サーヴァントを従えた今の君になれば容易い事だ。」

一瞬、バーサーカーに命じそうになるが、怒りを必死に押しとどめる。

「——いい、です…実行犯でも無い人に手をかけたくは、ありませんから。」

実行犯でも無い人に、それはつまり…そういうことなのか。

自分で言いながら驚きだ。

「そうか、ならば…君は命の恩人と言えるな…ひとつ、ひとつだけ教えてやろう…その実行犯、此度の聖杯戦争の参加者の一人、マスターだ。」

「…ありがとうございます、神父様。」

「なに、これも神の使徒としての役目だとも」

「綺礼——あんたねえ！」

反射的に食ってかかったのは、凜。

「遠坂先輩！」

「なによ？」

「大丈夫、大丈夫ですから。」

「…九重、お前…」

士郎も、凜もそれきり黙る。

気まずいまま、もう聞いておくことは無いかと言峰が問うと、誰もそれ以上聞きはしなかつた。

なんだか——妙に疲れた。

「なあ、九重。」

「ナンデスカ、エミヤシロウ先輩？」

「なんでカタコトだよ…八つ当たりするなよ…いや、したくもなるだろうけどさ、気にしすぎるなよ、無理なら無理で吐き出しちまえ。」

「…衛m…いや、士郎あんたねえ…」

凜が呆れ顔で、言峰教会からの下り坂を歩きつつ士郎にぼやく。

「なんで、つて…先輩が優しくするからじゃありませんか——もう、馬鹿。」

「は？なんだそれ？遠坂、わかるか？」

「あたしに振らないでよ…わかるけど。」

「そうですよ、先輩はもう少し自覚してくださいね、この天然スクエア先輩はっ！」
ぺち、と脛を蹴飛ばされ、土郎は困り顔で唸るばかり。

（鈍いなー、鈍すぎるな…こいつ、本当に——ん？スクエア、四角??）

はたと、凜も思いあたり、思案する。

（朔弥でしょ、桜でしょ…本人入れたって三角じゃ——ん、まさか…）

「ちよつと、朔弥つ、貴女まさか私も数えてないでしょうねっ!？」

「——え？」

心底から、違うの？そんな馬鹿な、と言う顔をされた。

「ちつ違うわよ馬鹿っ?!?!」

真つ赤になって否定する凜。

「違うと言われましても…ねえ？」

と、何故か実体化して歩いていたアーチャーを振り返り同意を求める朔弥。

「いや、私に振るのかね…君は…」

至極複雑な顔で言い淀むアーチャーの顔に何故だか溜飲が下がった。

「——んんん??」

と、首をかしげ…

「ま、いつか。」

急に笑顔になる朔弥。

「女（の子って）と言うのは——」

何故かハモる、土郎とアーチャー。

「黙りたまえよ——」

「いや、お前が真似すんなよな?」

急に険悪な二人。

「男って——」

今度は、凜と朔弥の声が同期するのであった。

…お互い様だろう、これ。

そう思っただけで見ているのは、意外にもバーサーカーである。

「全く、世話の焼けやがるマスターだ。」

面倒そうに、しかしどこか嬉しそうに。

その端正な顔を綻ばせる様を見たら。

メイヴは、あの我儘女王様はなんと言うだろうと。

薬代も無い事を考える程にはバーサーカーらしく無い思いを巡らせながら、並列してその思考は。

この、聖杯戦争を捻じ曲げている何者かを。どう、殺してやろうかと。

朔弥の父を殺したと言う執行者もまた、事実なら如何に苦しく、無惨に殺せば良いのかと。

あまりに「らしい」思考を巡らせていた。

結局。

ああ、俺はやはり、狂ってるな。

と、思い至るのみであった。

「いや、らしくねえ。」

全く、本当に自分はどうかしてしまっていた。

教会でのやり取りを思い出し、冷や汗をかきそうな現実に辟易する。

「本当によ、ぬるま湯に浸かりすぎてふやけつちまつてたなあ……」

あわや、士郎とともにマスター、朔弥までが宝具に吹き飛ばされる所だった。

ギチ、と尖った歯が唇を切り、血が流れた。

「感謝する、ぜえ…青いの。」

バーサーカー、クー・フリーン・オルタが目を向けた先。

士郎と、朔弥を護るように飛び出した一人の少女。

その手には、英霊ならば、見間違えるはずも無い燦然とした輝きを放つ剣。

「エ、エクス…馬鹿な、君は今回、現界していなかったのでは無いのかつ!？」

「エ、え、…」

「あ？」

「エー…エックス!!!」

はあ？

と。

アーチャーの顔が面白い事になった。

「我が名はエックス！謎のヒロインエックス！けっして、けっして…アルトリア・ペンドラゴンなどではなあいつ!!!」

「」

(; 旦)

（。D。；）

（；つD（）ゴシゴシ

（。D。）え？

こんな感じに。

アーチャーは面白いくらいに二度見、三度見していた。

「えー、と…アサシ、ン？」

マスターにのみ見えるステータスウィンドウを見て声をかける、と。

だばー、つと。

本当にだばー、つと。

涙を溢れさせながら「ジャージ」に、「体操着」に、「ブルマ」ハーフパンツではない。

更に胸には「あるとりあ」と平仮名で書かれている少女——あるえ、さつき自分でアルトリア・ペンドラゴンでは無いとか言いませんでしたか。

さておき、少女は、泣きながら答えた。

「セツ、セツ——」

「セツ○○○?」

「小学生みたいな煽りやメロ馬鹿!」

戯けた事をほざいたバーサーカーにはハリセンで突っ込んでおいた。

さつきふやけつちまってたなあとか言いながらしっかりボケかましてるよこの狂犬
……って。

「セイバーなんでずううう、アルトリアでいいんですううう、うわああん!」

なんか、大号泣された。

「こ、この靈基身体が、つ、靈基身体がいけないんです、思いもしないこと口走るしつ、くつ、

黒歴史なんですツ信じてください士郎っつ!!」

「…その、劍…間違はなく君はアーサー王…いや、アルトリア・ペンドラゴンなの、だ
な?」

「し、信じてくださるのですね、流石アーチャーですつ!!」

眼を潤ませながら息つく暇もなく訴えているアサシ…いや、自称、セイバー。

「話が全くわからないんですが…」

凜は完全に置いていかれ。

朔弥はなんだか首を何回も何回も傾げていた。

「…なあんだらう、何回もこんな光景を見たような、でもコレジャナイ感がある、ような気が…??」

「まて、落ち着け、アサシ——」

「違いますぞ〜セイバーなんでずうう!!?」

「あ、わかつた、わかつたからセイバー!」

泣きながら鼻水を擦り付けるセイバー（仮）にどうしたらいいのかと言う顔の土郎。

「…なんだろう、何か、何か壊れちゃいけない幻想が壊れたような気がしてならないっ
！」

困り顔で器用に泣き笑いの様な声で呟く土郎の声で、何故かアーチャーが顛顛こめかみを押さえて天を仰いだ。

「俺は、答えを得たから——だからもう、いいよな…?」

呟く台詞がなんだか不味い。

「…ちよつとあなたたち…いい加減に…ッ、しろーろーろーッ!!」

カオス極まりかけたその場に。

凜の大音量の一喝が響き渡った。

「はっ!」

「あ。」

「…め、面目ない…ちとトリップしてしまつた様だ…クツ…！」

いや、アーチャー、くつ殺さんですか？

違ふよ、貴方にそんな属性ないからね？

「なんだかわからないが凄く悲しくなつたんだ…なんだろう、本当になんだろう…」

衛宮先輩、頑張つて下さい、なんだかわかりませんがわかる様な気もします。

「す、すみません…取り乱しましたはい、私はアーサー王の別側面…かなりふざけた時空で発生した…所謂黒歴史なんです…でも意識は、意識はきちんと私ですからつ、セイバー死すべしとか無性に叫びたくなるけど、私は私ですからつ！」

「…セイバーに何か恨みでもあるの？」

遠坂先輩の至極まともなツツコミ。

「…聞いたら駄目だと思ひます、本当に勘弁してください…」

アーサー王、また泣きそうだった。

「…と、とりあえず…気を取り直して！」

パン！と頬を叩いて気合を入れ直したアサ、いやさセイバーが士郎に向き直る。

「ス——、ハア、問おう。」

「え、あ？」

「貴方が、私のマスターか？」

「……あ、ハイ多分……？」

困惑顔のまま、士郎は令呪を翳す。

両手、共に。

「では、これより、我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある——サーヴァント、アルトリア・ペンドラゴン……これより貴方の剣と成ろう……。」

粛々と、金砂の髪を揺らしながら告げる、彼女は確かに美しい。

しかし、ブルマが。

体操着の名札が。

「あ、ああよろしく、セイバ……プフウ！」

今、そこに気づいた士郎が吹いた。

盛大に吹き出した。

「し、シローウ!？」

今度こそ、騎士王がマジ泣きした。

……ねえ、大丈夫？この聖杯戦争、大丈夫？

とりあえず。

新たな仲間が加わったのである。

——どうしてこうなった。

第25話 『未来／見来』

「ねえ、死んでくれる？」

目の前に立つのは、影。

遠き日の写し身が目の前に居る。

アーチャー、ゼウスとの決着をつけるために街へと向かう最中。

それは浸み出ずる様に現れた。

「なんなの貴女——」

黒い、ワンピース、紅い宝玉の様な瞳。

幼く、手足こそ短い、陶磁器の様に白い肌。

「何って…私は、貴女、貴女の可能性。」

毎朝鏡台の前で見る貌。

「…不愉快よ、セイバー、やりなさい。」

巨大で、威圧的な存在を背後に引き連れて。

「…あは、あははははは!!」

それは…、狂った様に笑う、幼い貌は。

「承知した——紛い物は消えよ。」

「できるかしら、できるかしら！ねえ!？」

嬉しそうに、愉しそうに、殊更愉快でたまらないと嗤う、「過去の自分」。

「やっっちゃえ——バーサーカーっ!!」

黒いワンピースの少女が手を振り下ろし叫ぶ。

「——オオオオオオオオ!!」

鼓膜を破られそうな咆哮が轟き、巨大な石柱から削り出された斧剣が疾る。

それは、とても理性を失い狂化した者の太刀筋では無かった。

九つの斬撃が走り込み、懐へと潜り込もうとしたセイバー、ヘラクレスに迫る。

「狂っても——ヘラクレスわたくしに違い無いと言う訳かっ!!」

即座に炎剣の刃が同じく九つの斬撃と化し、全てを弾き返す。

ギヤリイン、と鋭い金属が鉄塊を擦る様な耳障りな衝突音が響く。

が、体軀が違う。

力も、狂化した分あちらが僅かに上回る。

「ぬっ、く!？」

セイバーは僅かにたたたらを踏み、踟躕めく。

「あら、呆気ない、あはははははっ!」

黒いワンピースのイリヤは笑う。

「グオ■■■■オオ■■オ■■！」

集音マイクがあれば音割れしてしまいそうな咆哮が再び響く。

斬撃が閃き、セイバーの胸に殺到する。

「セイバーッ?!」

ズシヤ!!

硬い砂袋を鉄塊で叩いた様な鈍い音。

「あら?」

確かに斬撃がセイバーを裂いたと思っていた黒いイリヤがピタリと笑いを止めた。

「フ、武技は忘れじとも…己が宝具の効果すら忘れたか、バーサーカー。」

斧剣は、その刃を通せない。

事に、ランクとして落ちる神代の時代の石柱を削り出しただけの粗末な斧剣では。

宝具としての格はようやく最低限度と言ったところだから。

「——ネメアの獅子…?」

「そうだ…生半な刃は宝具と言えど通じぬよ、そして…ただの打撃になり下がった攻撃が通じぬ理由は…マスターならわかるだろう?」

「そう…、^{ゴッド}十二の試練^{ハド}も健在と言う訳ね。」

「なれば、諦めて消えよ……紛い物！」

セイバーの視線が、影の様な姿の己バーサーカー自身を射抜く。

ボツ、と空気を貫通して剣閃が奔った。

バーサーカーの、暗い影の様な肌が炎剣に見る間に切り刻まれる。

「ガ——ア ■■■アア！」

ドシャリ、と肉片が地面に落ちて、真つ黒な、コールドタルの様になって消えていく。

「……フ、うふふ、うふふふふ——」

「……何を笑うのよ……気味が悪い」

「哀れ、哀れね、早く楽になってしまおう方が、苦しまなくて済むのに……聖杯戦争なんて何故するの、私にその意味は無い……いいえ生きる意味さえありはしないくせに——アインツベルンである、と言うただそれだけで動く人形の癖に！」

キリツグが居ない。

お母様も居ない。

そんな世界に——意味なんか、あるの？

「黙れ——黙れ、だまれ、黙りなさい！」

髪が浮き上がり、ザワザワと生き物の様に蠢き、その中から銀の煌めきが躍り出る。

「——形骸よ、命を宿せ——！」

星の光を浴びて煌めくソレは針金だった。

髪の中に仕込まれたそれは魔術により伸び上がり、宙を舞う。

瞬時に形を変え、鋼細工の美しい鳥が羽撃いた。

「——カッ……」

針金が胸を貫き、短い呼吸を吐き出して吐血する黒イリヤ。

そのまま、地面に倒れると先のバーサーカー同様にコールドタールの様な液体に変わり、染み入る様に消えていった。

「……なんなの！なんなのよ！」

ヒステリックな声を上げる主に、セイバーはそつと手を出し頬を撫でる。

「気にしなくていい、取り乱せば相手の思う壺だ。」

「……わか、わかっている……わかっているの！」

ギユウ、とセイバーの太い腕にしがみつく。

爪が食い込み、普通ならばセイバーの皮膚は裂けていただろう、が。

「イリヤ、あまり力を入れるな……お前の爪の方が割れてしまう。」

「…………う……う、ふう……」

静かに泣くイリヤ。

あの黒いイリヤが言った事が余程こたえたのだろう。

確かに、イリヤには未来が無い、過去縫るべき二親も失い、寄る辺も無い。

残されたのは「アインツベルン」であり続ける事だけ。

「泣くな、私が居るだろう…イリヤ。」

「う、ううえ、う——あああつ！」

慟哭。

たかだか十数年の彼女の人生には何も無い。

アインツベルンと言う呪いに縛られ、唯一外に繋がる扉と言えた父親に見捨てられ、母を失い。

「もう、私には、私には…キリツグ、キリツグ助けてよ、キリツグ——」

父親になって欲しい、そう言った彼女。

しかし、求めるのは「キリツグ」。

セイバーでも、ヘラクレスでも無い。

「泣くな、イリヤ——」

結局、親の温もり、特に父親の愛など知らぬ自分には代わりを演じる事すらできないのか。

「泣くな…」

主の小さな身体を抱きしめながら。

大英雄ヘラクレスは考える。

先の影。

アレは、なんなのか。

どこか、懐かしいとすら感じた：

同時に悍ましく／望ましく――

不安そのものでしか無い、その感情。

しかし、感情は感情でしか無い。

答えのないままに。

今夜はこれまでか、と。

ゼウス探索を中断し、主を抱き抱え、跳んだ。

「――なるほど、状況は理解しました：なににせよ、アーチャー、凜：あなた方が味方である事：これほど力強い事は無い。」

衛宮邸の庭での戦闘。

黒化英霊を退け、一息ついた面々は情報の共有を行う為に居間に集まり食卓を囲んでいる。

マスターである凜、朔弥、そして士郎。

サーヴァントであるアーチャーとバーサーカー。

イルマは興味が無いとばかりに地下へ潜ったまままだ。

…いや、少し前まで炬燵にいたらしい跡が残っていたが。

みかんの皮とかみかんの皮とか。

そして——、セイバー、アルトリア。

いや、正確にはアサシンであるのだが、言うとな本人が泣き崩れるので皆がセイバーで通す事にしたのだ、察して欲しい。

彼女、あの混戦の最中に衛宮邸内部に突如召喚されたらしい。

そして、「シロウ」を強く覚えていた彼女は。

その危機に迷いなく飛び出し、黒化英霊を斬り伏せたのだ。

「…アルトリア、君は…君は本当にあの、アルトリアなのか？」

「…ええ、一人の哀しい男に救われた孤独な王だった、あのアルトリアですよアーチャー。」

二人の間に、何故か入り込めない空気を感じた。

「貴方が…彼」と知ったのは更に後、でしたけどね…覚える限り3つの平行世界の記憶を有していますが…私は救われたアルトリアです。」

含みのある言葉、視線。

絡み合う様に親愛——否、それ以上の何かを感じる。

ふと、その優しい眼差しがアーチャーだけで無く、士郎にも向けられた。士郎の方もまんざらでも無い顔をしていたりする。

「…何ですかね、あれ…?」

ブス、と頬を膨らませ呟く朔弥。

「知らないわよ…私に聞く?」

やはり不機嫌な凜。

「な、なんだかわからないが二人とも親しい仲なのか?別にいいじゃないか…なんだか奇跡みたいなものだろう、あれ…って事はアーチャーって…アーサー王伝説に所縁の英霊なのか?」

少しだけアルトリアの慈愛の眼差しにドギマギしながら士郎が呟くと。

「…知らないってえのは時に残酷だなあおい。」

バーサーカーの声は他には届かず、しかし士郎の呟く声は他に届いて。

「アーサー王所縁の弓を使う英霊って事は…トリスタン卿か?」

「アレと一緒にしないで頂(きたい) どうか!」

アーチャーと、アルトリアがハモった。

トリスタン卿…何か問題人物だったのだろうか。

「え、あ、はいすいません…?」

「は、私は何を…いや、何故かトリスタン卿と同一視されるのが我慢ならなかったのだ、何故か…」

アーチャー、どうも記憶しているわけではない様である。

「記憶に無いだけで何処かで会っているのかもしれないね…いや、あの男は有能でしたが些か問題のある性格でしたから、無理は無い…」

と、どこか疲れた様子のアルトリアⅡアーサー王、本当に何したの、トリスタン。

「私は、アーサー王所縁の英霊など恐れ多い者では無いよ…未だ記憶は継接ぎだが、少しならば思い出した事もある——私は真つ当な英霊では無い。」

語り出したアーチャーに、凜が暫し驚き、停止する。

「凜、話しておくが構わないか?」

「え、ええ…協力関係にある訳だし…何より今回の聖杯戦争はおかしいわ…場合によっては聖杯は諦めた方が良いのかも知れないし。」

「——そうか、君がそこまでわかっているならば…話せるようだな。」

神妙なアーチャーの口調に「r b : 欠伸 > あくび」をするバーサーカーを除いた全員が目する。

「先ず、先の私の話だが…私は真つ当な英霊では無い、所謂守護者…カウンター・ガー

「ディアンと言う存在だ。」

「守護者……そうですね、貴方は、矢張り。」

何故言わなかった、と言う顔を凜に向けるアルトリア、対する凜にはその意図がわかるはずも無い。

「アルトリア、君は知っているな……契約が果たされず、死後に正統な英霊となる君とは違い……私は、死に際に願ってしまったのだよ、力を、望みを叶える力をね。」

「守護者……？」

とは、士郎の言葉……アーチャーは一瞬だけ複雑な顔をしたが、続ける。

「——ああ、世界の意思、抑止力と言えるものに契約を迫られた俺はその力と引き換えに守護者となった……守護者とはな、人類滅亡を防ぐ為に同じ人類すら抹殺する防衛装置——この星の免疫細胞の様なものだ。」

「故に、俺には真つ当な英霊の如き名も無ければ、伝説に謳われる様な力も無い。」

「だから、記憶が無いなんて言ったの？」

「マスターには悪いと思つたがね……いや、当初記憶が混乱していたのは事実だよ、ただ、思い出してからも態々こんな話を聞かせる意味も無かつたのでな。」

「アーチャー……貴方ねえ、はあ、いいわ続けてよ、まだあるでしょ？」

「ああ、すまないな。」

一拍おいて、息を吸ってから再び話を再開する。

「我々守護者や英霊に時間の概念は薄い——故に召喚があればあらゆる時代、あらゆる平行世界に招かれる可能性があるが…少なくとも、今まで冬木の第五次聖杯戦争に呼ばれた場合、多くは記憶にプロテクトがかけられ、最後に至るまで聖杯や参加者についての記憶は磨耗したかの様に思い出せず、終わりを迎えて来た。」

「私も、彼も…私は正直特殊な召喚のされ方をしていたのですが、平行世界の冬木における聖杯戦争に、ほぼ全て関わっています。」

「嘘、どんな確率よそれ…」

凜が驚くが、そこにアーチャーが補足する。

「驚く事も無い、つまりは我々が居てはじめて聖杯戦争が歴史上起こりうる、つまりは特異点に近い存在なのだろう…聖杯戦争がある、と言う時点でこの時代の冬木に我々があること自体が歴史の転換点と認識されていれば確率など無意味だ。」

「そうです、アーチャー…貴方は何処まで思い出したのですか？」

「いや、正直に言うに従来よりも様々な事を思い出した気はするが、まだまだ記憶は穴だらけだ…すまん。」

「いや、気にすることでも無いでしょう、私とて似たようなものです、しかし…私は本来セイバーとして…つく、あーアサ、アサシンなどでなく、セイバーとして、早々に召喚

されていた筈なんです、この家の土蔵で、ランサーに襲われ死にかかった士郎に。」

「え、土蔵、それって……？」

「そういやランサーに襲われたのは朔弥で、召喚されたのはバーサーカー、だよな？」

「うん、赤毛の……怖い目をしたランサーだった、しゃべり方はなんかおじいちゃんみたい
な。」

「……享年が高齢だったのでしょうか、戦いに身を置く英霊にしては珍しいですが……問題はそこでは無く……本来、ランサーとして呼ばれたのは……青い槍兵、クー・フリーンでした。」

「……ああ、そうか、そうだったな……校庭でランサーとやり合った時に違和感があったのだ……何がおかしいかもわからない程度の違和感だったが、そうだ…………本来はバーサーカー、君の別側面が本来のランサーだった筈なんだ。」

顔に掌をあて、考えながら思い出した事をぽつりぽつりと話続けるアーチャー。

「ふうん、俺は話したように少々特殊な生まれ方をした身でね……ランサーの俺としての記憶は共有してねえよ、いや生前に関しては覚えてるがね。」

畳に寝転び、欠伸をしながら聞いていた バーサーカーが話をふられて面倒そうに手を挙げ、答えた。

「……そもそも、そこだよ……九重朔弥。」

「ふえ??」

「君は一体、何者だ?」

アーチャーの鷹の如き視線が、朔弥を射抜く。

「びっ!」

びくり、と跳ね上がるようにして怯える朔弥。

「…おい、てめ…」

士郎が朔弥を庇おうと口を開いた瞬間。

「俺のマスターだ…よりによっててめえがマスターにそんな眼をしやがるかよ…弓兵?」

一瞬、本当に一瞬で槍を突きつけたバーサーカーがアーチャーの喉に穂先を押し付けた。

「…やめて!バーサーカー!」

朔弥が何故か、悲鳴みたいな声で静止する。

「…命拾いしたな、赤いの。」

ス、と槍を引く。

「…ほとほと君は企画外だな…音も無く間合いを詰められるとは思わなかったよ…しかし、九重朔弥…君と、まさに今その異常な実力を示したバーサーカー…見知らぬ槍兵…」

君達こそがこの異常な聖杯戦争のカギになり得ると私は睨んでいるのだよ。」

「…バーサーカー、できればわかっている事を話しては頂けませんか?」

「セイバー、いいや…王様よ…俺は、話さねえ…一つ言えるのは、聖杯なんかよりまともじゃ無い何か…いやがるだろう、つてだけだな。」

どか、つと胡座をかく形で座り、朔弥を引き寄せるバーサーカー。

ぼすん、とその体を抱き抱える様に、護る様に。

「にやつ!?バーサーカー、何???」

「てめえ、危なっかしいからちよつとこうしろ。」

「え、え、うえ???」

思わぬスキンシップに朔弥大混乱。

「ねえ、セイバー、アーチャー。」

凜がため息を吐きながら二人を流し見する。

「なんででしょう(なんだ)?」

「とりあえず、変にくつつかないで真面目に話してくれる?」

…いつの間にか、アーチャーの傍らにはアサ…セイバーが寄り添う形でびったりくつついていた。

「あ、こ、これは失礼…アーチャーの傷を見るつもりでしたが…誤解させてしまいました

か?」

「アーチャーの傷なら私が魔力を送るだけで治るじゃないの…余計なお世話よセイバー。」

「なんにせよ…聖杯戦争はここに居るメンバーだけでも中断、再開は聖杯の状態を確かめてからでも良からう?…降りかかる火の粉は払うにせよ、な…クラスはともかくアルトリアが味方になったのであれば戦力として申し分ない…他のサーヴァントを倒すのも難しくは無いだろう。」

「アーチャー…無意識?無意識なの?」

アーチャーの手は、何故かアルトリアの頭を優しく、優しく撫でていた。

愛でる様に、壊れ物を扱う様に、優しく。

「む、あ…こっこれは——」

「…とにかく!方針はそれにかまわんな、マスター、皆!」

「…構わないけど…聖杯とかあまり興味無いからな…しかし、アーチャー…自重しろよてめえ。」

なんでか、士郎の額にも青筋が浮かび。

朔弥も、凜も。

とてつもなく冷たい視線をアーチャーに向けていた。

「…シロウ…私の事で怒って…?」

なんでもか、嬉しそうなアルトリア。

今度は、凜と朔弥の視線が士郎に向けられた。

「えっ、ちよ!? な、なんでさ!？」

流石に…理不尽である。

とりあえず朔弥はバーサーカーの膝に収まりながらでそれはどうなのかとか、バーサーカーもちよつと朔弥の頭を撫でたそうに見ていた事とか…もろもろあったが、

——誰も突っ込まなかった。

第26話 『鳥籠』

……夢。

これは近くて遠い、愚かな自身の過去。

「遠坂時臣——質問は一つだ、何故……桜を臓硯の手に委ねた。」

「——何？それは……今この場で君が気にかけることなのか？」

「答えろ——時臣イ!!」

強く、強く問いかける声に、嘆息を交えて答える声。

「ハ……問われるまでも無い、愛娘の未来に幸あれと願ったまでの事……」

「——ツ、何だと!?!」

怒りに目の前が霞み、目眩さえ覚えた。

「……二子をもうけた魔術師は、いずれ誰もが苦悩する。」

最早、先に続く台詞も大方予想がついた。

「秘伝を伝授しうるのはただ一人……何方か片方は“凡俗”に墮とさねばならぬと言う、

ジレンマよ。」

凡、俗…。

一呼吸、一呼吸が、苦しい。

心が、張り裂けてしまいそうで。

「——とりわけ我が妻は…母体として優秀過ぎた…凜も桜もともに等しく希代の素養をそなえて産まれてしまったのだ、娘達は二人が二人…魔導の家門による加護を必要としていた。」

あの、遠い日の母と子の姿を…この男は、ただ「凡俗」と切り捨てるのか——！

「いずれか一人の未来の為に…もう一人が秘め持つ可能性を摘み取ってしまうなどと——親として、そんな悲劇を望むものがあるものか。」

そんな——そんな、理由、でっ…知って、知っているのか！桜が、桜が間桐の家でどんなことをされているのかを!?

「姉妹双方の才能について望みを繋ぐには…養子に出すより他に無い。」

知らないはずが無いよな、それで！それでどうしてそんな顔ができるんだ——！

「…だからこそ、間桐の申し出は天啓に等しかった——聖杯の存在を知る一族ならば、それだけ『根源』に至る可能性も高くなる——」

そんな、そんな理屈——産まれてくる先を選べない子供に押し付けて！

それで、それが——!!

「魔術師とは、生まれついてより力ある者、そして……いつしか更なる力へと辿り着く者——その、運命を覚悟する以前からその責任は血の中にある……それが、魔術師の子として産まれると言う事だ、私が果たせなくとも、凜が。」

子供は、貴様の、一族の夢とやらを叶えるための道具じゃ無い!!

「そして凜ですら至らなかつたとしても、桜が——遠坂の悲願を継いでくれるだろう。」

時臣、時臣イ!

何故、何で貴様は、そんな!

凝り固まった妄執が正しいだなんて、言えるんだつ、お前が、お前が優秀で、葵さんを、幸せにしてくれると思つたから!

だから、俺は——

第一、それでは!

「——貴様、相争えと言うのか、姉と妹で!」

「仮にそんな局面に至るとしたら……我が末裔達は、幸せだ。」

「な、に?」

「栄光は勝てばその手に、負けても先祖にもたらされる、かくも憂いなき対決はあるまい?」

狂つて、いる。

こいつは、いや、魔術師なんて奴らは皆が。
狂ってやがる!!

「貴様、は——狂っている!!」

ああ、この時の俺は——余裕も無く、時臣が全て知った上だと信じて止まなかった。
「語り聞かせるだけ無駄な話だ……魔導の尊さを理解せず、あまつさえ、一度は背を向けた……裏切り者には。」

裏切り者。

奴からしたらそうだったのだろう。

考えてみれば、時臣の言い分は、全てが間違いでは無かったんだ……稀有な才能を持つてしまった二人は、一般人として生きるには難しく、したとして直ぐに捕縛され、良くて封印指定と言う名のモルモット……悪ければホルマリン漬けの生体魔術標本にされていたかもしれない。

「——わかるまい、……この所業、それすらも……強き理由あつての事であるのだと——」
あの、いつも人を見下し、怪しげな嗤いしか見せない臓硯がただ一度、零した言葉。
理由とは、何であつたのか。

もしかすれば、奴なりに深い訳があるのだろうか。

否、あつたとして……奴が許されざる者である事に変わりはないが。

眠れない眠れないと横になって目を閉じるうちに見た浅い夢。

いつか見た光景が脳裏に蘇っただけの。

空が白み始め、朝日が昇る。

カーテンの隙間から

夢は、終わり。

そうだ、もう——過去だけを見つめるのは止めにしたのだから。

で、無くては……「彼奴」に会わせる顔が無い。

「どうした、雁夜？」

昨日出会ったばかりの、エクストラクラスのサーヴアント、アベンジャーが眠気に頭が回らない俺を覗き込んでいた。

「いや、夢をな……見ていたんだ。」

「ああ——他人の事はあまり言えないんだがな、あんたも本当に不幸極まりないな……」

「アサシン……まさか……お前——」

「わりいな、バツチリ見えちまったよあんたの夢。」

仕方ない、と溜息を吐きながら二人を見比べる。

方や、女性だと言われても違和感がなさそうな髪型のアベンジャー。

方や、精悍な男、になる手前と言った風体のアサシン。

「…何故、俺は男二人の顔を朝日とともに拝まねばならんのだ…」
考えて、少し切なくなつた。

ああ——桜ちゃん、きつと大きくなつてるだろうなあ…

会いたい、などと言う許されない思いを顔を振つて振り払う。

「さて、アサシン…情報、あるなら報告よろしくな。」

「朝から勤勉だな、マスター。」

どこか人懐こい笑顔で悪態を吐くこの暗殺者。

まあ、嫌いでは無い。

「当然さ…余裕なんかないんだからな。」

キッチンからは、湯を沸かす音だけが聞こえてきた。

アベンジャーには、コーヒーか紅茶だけを頼む事にしたからだ。

さて、このイレギュラーだらけの聖杯戦争。

なんとか勝ち抜かなきゃあ、な。

時刻は数刻遡り、深夜の冬木上空。

「ふん、つまらん…つまらんぞ。」

紅い眼を不機嫌に細め、街を眺める美丈夫。

英雄王ギルガメッシュは感じていた。

「如何なるものかはわからんが……無粋な匂いだ、神如き何者か……或いは神そのものが糸を引いているか……？」

空を覆う不可視の壁。

それは本来であれば内側からは「ある」と認識することすら不可能なものであつたが、偶然にも上空を遊覧飛行と洒落込んでいた彼は見つけてしまったのだ。

「我が宝物を持つてして解析できず覚えもない力だと……宝物に由来するものでは無いか、或いは何がしかの存在そのものの力であるのか……不愉快だ、我が思うようにできず、鳥籠の鳥の如き扱いを受けようなど……必ずその大罪、我が前で償わせてくれる……」

もし、今「アレ」を抜けばこの壁を破壊する事も不可能では無いかもしれない。
だが。

「しかし、我をして気づかせぬ輩とは些か興味もある……どうせならば、この状況をも楽しんでこそ王と言うものよな。」

確かに不快ではあるが、ならば気づきすらしていない凡夫どもの足掻きを眺めるもまた一興か。

黄金の船に腰を据え、夜の街灯りを見下ろしながら。

最古の王は笑みを浮かべた。

「…あの泥に似た何かといい、この街に現れた幾つかの厄介な気配…考え次第では面白ではないか、そうよ、神ですら我を意のままにはできぬと知れ。」

一転して笑い始め、夜空に一人声を上げる。

その笑いは暫く響き…やがて、彼がその場から去って行き静寂が戻った。

聖杯戦争開始当時、紅く丸かった月は徐々に欠け、今は下弦——半月まで形を変えて
いる。

静かに輝く月は黙し、空には現代には珍しく、何一つ飛行していない。

鳥はおろか、飛行機、果ては人工衛星の光すら届かぬ空。

都会にあるまじき美しい星々のみが瞬くその空に。

街に暮らす誰一人、気づかない。

異常が異常とわからない。

そこに囚われるのは人のみに非ず。

英霊ですら、その籠の中であつた——

「シロウ、アーチャー。」

「何かね、セイバー。」

「どうした、セイバー？」

「今日の賄いは何でしょうか。」

キラキラした目で二人を見つめるアサ：セイバー。

服装は今は凜から譲り受けた私服で、白と青を基調とした可愛らしい服装だ。

：正直、士郎には何故凜がこんな服を持っていたか甚だ疑問であった。

アーチャーは知っていたのかそこはあまり気にしていないようだ。

「ならば冷蔵庫の貯蔵は十分か、小僧。」

挑発的な物言いで士郎を煽る弓兵。

いや、お前それ英霊の台詞じゃないから。

「舐めるなよ、いつだろうと客が来ても構わないだけの備蓄はあるぞ?。」

ニヤリと返す士郎の言葉に無言で冷蔵庫を開けたアーチャーがそれを見て嘲笑する。

「ハ、この程度でドヤ顔はよせ未熟者——彼女を満足させたくばこの三倍は持つて来い

と言うものだ!。」

アーチャー、士郎。

活々きすぎではなからうか。

「ねえ、何なのあの主夫二人：私達女よね?。」

「：お昼からあまり重いメニューは厳しいな：ただでさえ、最近身体動かせなかったのに：（石化で）。」

などと言っていると、今時珍しい古めかしいタイプの据え置き型の電話機が音を奏で始める。

「あ、ハイ衛宮です。」

すぐに士郎が電話に出、応対する。

「…はい、え？ネコさんが？大丈夫なんですか？はい、大丈夫ですよ今日だけなら手伝いますから、ハイ、ハイ——」

聞こえた内容はあまり喜ばしいとは言えないものらしいのは伺えた、同時に女性らしい「ネコさん」の名前。

「どうしたのですか、シロウ？」

「あ、いやコペンハーゲン…バイト先の方が体調不良で病院に行かなきゃならぬらしいんだけど…どうしても今日は予約した品物を取りに来るお客さんがいて店番が欲しいらしいんだよ。」

と、顎に手を当てる思案顔でアーチャーが口を開く。

「…行きたまえ、夕飯までは私が引き受けよう、但しセイバーは連れて行け…いかに貴様が魔術を扱うとはいえサーヴァントに襲われでもすれば無意味だからな、此方は私にバーサーカーがいれば過剰な程に戦力がある。」

「なんだよ、気味が悪いくらい物分りがいいじゃないかアーチャー。」

てつきり、逃げるのかとか煽るのかと身構えていたのだが。

「世話になつてゐる御人なのだろう、礼を失するのを良しとするほど程の悪い人間であるつもりもないからな、貴様の話であつたとしても、だ。」

「他人事では無いでしように：相変わらず素直ではありませんね、アーチャー？」
からかうようにセイバーに言われ、アーチャーが眉間に皺を寄せる。

「セイバー、夕飯はデザート抜きで良いのだな？」

「なつ、シつ：アーチャー、それはあんまりではありませんか!？」

「知らん、反省しろ馬鹿者。」

拗ねた様にそつぽを向くアーチャーに、慌てて機嫌を直してくださいと懇願するアルトリア。

「夫婦（だ）ね」

「夫婦だな。」

「なんだよあれ。」

凜、朔弥、バーサーカーが同様の感想を。

士郎はなんとも言えない気持ちを感じながら言葉を放つ。

「：まあ、とにかく準備してコペンハーゲンに出かけてくるよ、夕飯前には戻れると思うから皆は寛いでてくれ。」

「あまり悠長にするのとは思うけど昼日中から動くものでも無いしね…：そうさせてもらうわ。」

「は、俺もマスターから離れる気はねえよ。」

「じゃあ、それで頼むよ。」

士郎が自室に財布と僅かな荷物を取りに行き戻る頃には。

台所で、結局デザート抜きを言い渡されたアルトリアがしょんぼりしながら戻ってきた。

「ハア、シロウ…：それでは行きましょうか。」

「ああ、ごめんなアルトリア、つきあわせちまつて。」

「——ッ」

息を飲む様に、アルトリアが僅かに頬を赤らめ、停止する。

「どうした？」

「あ、いえシロウに名前と呼ばれるとちよつとびつくりすると言うか、なんともその。」

「あ、悪い…：アーチャーがそう呼んでたからつい…：嫌か？」

「あ、いえ…：外や部外者の前でなければ構いません…：嫌だなんて、思いませんか？」

「あ、ありがと、う？」

玄関先に出るまでにこれである。

「ねえ、凜ちゃん——」

「何よ、朔弥……ちゃん付けするくらいなら凜でいいわよ……」

「あれ、どう思う？」

「みたままよね……アーサー王って移り気なのかしら……英雄色を好むとは言うけれど……」

「うん、なんかね……不思議とセイバー？がアーチャーにであれ、先輩にであれああいう態度してるのを見てたらどつちにしても何だかモヤモヤするのよね……何でかな……」

「奇遇ね、私もよ。」

ガシ！

と手を取り合い、年の差を超えて二人はこの瞬間、友情？で結ばれたのである。

「君達な……私は仮にも英霊だぞ……丸聞こえなんだがな……」

疲れた様なアーチャー。

「胃薬いるかよ、色男？」

ニヤニヤニヤニヤと嬉しそうなバーサーカー。

「余計なお世話だ……」

更に深いため息を吐きながら、アーチャーは黙って昼の支度にかかるのであった。

冬木は、異常事態にありながらも今はまだ、平穏であった。

第27話 『酒精』

酒屋兼居酒屋、コペンハーゲン。

新都のオフィス街にある洒落た内装を持った店で、店舗は地上部分には酒屋、地下に続く階段の下にはバーがある。

昼は配達も承る酒屋、夜は居酒屋にと忙しい隠れ家的な人気店。

冬木市にある酒屋の中で、ある意味最も品揃えがマニアックな店。

それにはとある理由と、負けず嫌いな店員、音子（ネコ、と読むべし、おとこと正しく読むではないけない。）に原因があるのだが。

まあ、今はそこは割愛しよう。

「と、言うわけでさあ士郎ちゃん、頼んだよろしく上得意様なんだよ、ご予約の方。」

「ハイ、任せてくださいいお二人にはお世話になりばなしですから。」

切嗣が居なくなつた後、蓄えだけでは不安だからと探したバイト。

しかし、未成年を雇い入れてくれる筈も無くどうしたものかと思いつながら探していたら、ネコさんの親父さん、コペンハーゲンの店長は事情を聞き、快く雇ってくれたのだ、その恩には報いねばなるまい。

そんな話を、一度店長に話したら「最初は兎も角途中からはむしろこちらが大助かりだ」とはありがたい言葉も頂いた。

「で、これなんだけどき。」

と、店長が取り出したのはやたら嚴重に鍵がかけられた黒いアタツシユケース。

「…はい？なんですかこれ…なんでこんな嚴重に??」

「いやね、凄くお高いお酒なんだよ、コレ。」

「はあ、にしても大袈裟じゃありませんか?」

「ははは、値段聞いたら飛び上がるよ〜」

と、土郎の腕に手錠をはめ出した。

「え、ちよ??」

「こうして万が一にも誰かに取られない様に、ね!」

「や、待ってください…店番するんですよね?」

カチャカチャ、と。

アタツシユケースと腕が繋がれる。

「うん、でもこれ本気で高いからさ。」

嫌な予感しかしない。

「…幾らなんです?」

「んー、都心に家が建つよ?」

「え、はあ!」

目を見開いて驚愕する土郎を面白そうに見守る店長。

「あははは、いやあ、コネと言うコネを駆使して手に入れたんだ、ネコが連れてきた客がとんだ富豪で、しかも我儘放題な青年でねえ、世界一の酒を献上してみせよ、なんていうのさ、献上だなんてうちはプライドを持つて店を開いてるから、どんな王侯貴族にもタダで酒をくれてなんかやらないつて柄にも無く熱くなつて啖呵をきつてしまつてねえ。」

なんだか少し楽しそうな店長。

碌でもない話じゃないか、それ?

「そしたらさ、面白い。ならば金はくれてやるから最高の一品を届けてみせよ。でなくば貴様らの尊厳、命共々消えることになるう!だよ?いつの時代の暴君だよ、つて思わない?」

「——店長、その暴君の相手を俺にしろ、と?」

「あははは、メンゴ☆」

古っ!?

いや、店長の世代ならそうかもしれないがそうじゃない。

「は、嵌めましたねネコさん……」

どうにも、ネコさんの体調不良とやらも怪しくなってきた。

「と、じゃない店長く早く連れてけくあたしや病人だぞく？」

と、一階の方からネコさんの声。

「……元氣じゃないかよ……つたく。」

どうやら、面倒な客を押しつけられたか。

「あ、お酒の説明とかはそのメモに詳しく書いてあるから、後はいつもの士郎ちゃんな

ら大丈夫大丈夫、宜しくね。」

(シロウ……私、なんだか嫌な予感がするのですが?)

とは、気配遮断で隠行中のはずのアルトリアの念話。

何故だろうか、その意見に激しく賛同している自分がいる。

「何故かな……うん、嫌な予感しかしないぞ?」

と、慌ただしく二人が出て行く音がして、店内がやけに静かになる。

「……そういうや、何も受け渡しだけならバーこっち、じゃなくて良かったんじゃないか……?」

「シロウ……問題はそこではないでしょうに……」

と、声がして振り向いた先にはアルトリアがいた。

但し、ネコさんがいつもしているのと同じ黒いエプロンに、給仕服(メイド服)に近

い可愛らしいドレス姿だ。

「……………」

士郎が、たつぷりと2秒ほど固まった。

「シ、シロウ？やはりこの格好は変でしたか??」

変なものか、寧ろ…

「あ、ああ、似合ってるぞ?」

「あ、ありがとうシロウ…そう言われるとやはり嬉しいですね…?」

はにかむ様に上目遣いで呟くアルトリア。

ご、後光が差して見える…!?

「しかし、先ほどのネコとか言う女性…侮れませんね、私の存在を見破られようとは。」

「え、嘘だろ?」

今のアルトリアはアサシンクラス。

気配遮断している彼女を見つけるなんて人間業じゃないぞ?

「いや、それが意味不明でして…いきなりこう…エミヤンを狙う牝の匂い…出てくるが吉だよ!」——などと言われてしまいました…意味はわかりませんがとんでもない気配察知能力でした。」

「…それでアルトリアから出て行った訳か。」

「ええ、まあ…その後はなんだか分からない内にこの服を着せられまして…恥ずかしいですね、これは…」

「いや、似合ってる、凄く。」

「シ、シロウ…」

「まあ、と頬を桜色に染め、士郎と向き合うアルトリア。」

「やがて、アルトリアは目を伏せ、閉じる。」

「——え、え？」

「士郎としてお年頃、いかに鈍感でもそれが何を意味するかは——」

「酒蔵の雑種はいるか！」

「バーンツ、と勢いよくバーの入り口が開き、入ってきたのは白のラインをアクセントにした黒いジャケットに白いワイシャツ、黒のパンツ姿の金髪、紅眼の美丈夫だった。」

「あ…え、い？」

「アルトリアが口をパクパクさせながらその闖入者を見て眼を白黒している。」

「——なんだ、おらんの…む？」

「男は、そう呟いた後にアルトリアに眼をやり、ニタリ、と満足そうな、しかしどこか高慢な表情でこちらを睥睨する。」

「本来ならば…我を出迎えぬ時点で死をもつて贖わせるところだが——なかなかどうし

て、気が利いておるではないか…なあ、セイバー?」

「なんだ、あんた——?」

「痴れ者が、我とセイバーの逢瀬に立ち入るでない、今ならば見逃してやるから疾く失せよ…雑種。」

フン、と鼻で笑いながら士郎を歯牙にもかけぬとあしらう男。

「な、何故貴方がここにいるのだつ、アーチャー!?!」

「ハ、我を誰だと思つている…?高々数年の魔力などどうとでも維持できるわ。」

「——さ、サーヴァント!?!」

「察するに、その雑種が此度のマスターか…随分と貧弱な…セイバー、貴様のステータスにも影響があるのではないか、ん?」

まあ、その美しさと変わらぬ「愛嬌」があるならば強さの是非なぞ我は問わぬがな?

と、男、アーチャーは勝手な理屈を並べたてる。

「ギルガメツシュ…、古代ウルクの英雄王——シロウ、気をつけて下さい…あれはこと英霊を尽く凌駕しうるだけの財を持つ難敵です…!」

「…!」

士郎もまた、聞いた事のあるとんでもない大英雄の名に慄く。

「ふん、そう褒めるな、こそばゆいでは無いか…まあいい、セイバー、お前が居るのは嬉

しいが：今日は酒を買いに出向いたのだ、酒蔵の雑種がこの我を唸らせる品を用意すると豪語したのでな：戯れに金を与えて奔走させて見たのだ、今日が期限であつたのだが――」

「：へ、じゃあ：お客様じゃないか、すみません、これは大変失礼致しました：ではこれを買ひ付けにいらしたのはお客様、ギルガメツシユ様でよろしかつたでしょうか？」

と、士郎が突然がらりと対応を変え、接客モードに移行する。

「え？：え？：し、シロウ？？」

アルトリアはその急変に頭が追いつかずに混乱する、が。

「――ほう、客と認識した途端に掌を返すが如き：いや、そのプロフェッショナル振り、見事である：少しはましな雑種であつたか、良い：では酒を出して見せよ。」

「はい、少々お待ちを。」

返事を返し、アタツシユケースの鍵を一つ一つ開け、開く。

手錠も外し、中身をバーカウンターに置き、開帳する。

「えー：銘はマツカ○ン・インペリアルM、その試作品との事ですが：最高の腕前を持つ硝子細工職人が創り上げた至高のボトル、中に封入されたのは万を超える樽から選び抜いた7種から、25〜75年物の最高品質の物を調査したウイスキーであるとの事：王にご満足頂くため、マスターが苦心の末に手に入れた、まだ市場に出回る前の最高級品

をご用意しました。」

アタツシユケースから取り出された、琥珀色の液体を湛えた美しいボトル。

それは、後に市場にて約65万ドルで落札される事になる正規の品の、いわば刀で言う影打ち。

真打の名刀の如き譽れは無くとも、その切れ味に変わりはない。このウイスキーもまたそういった珠玉の逸品であった。

後の正規品と比べ幾分か職人の遊び心の入ったボトルは古風なデザインであり、そこには宝石の様に一見して誰にでも高い、と思わせる装飾は無く、しかし見事なカッティングと、どこか幻想種に似た雰囲気を持つそのデザイン。

本来市場に出すには少々趣味に走りすぎて蔵入りしたモノ。

ボトルの先端には天馬があしらわれ、表面には美しいカッティングを施されたガラスがさながら琥珀の海に宝石が膜を張るように、輝きを放つ。

しかし、今回ギルガメツシユにこれを用意するにあたり、敢えてこのデザインのものを選んだ店長の眼力、正直何者だ。↑

「ほう…悪くはない、見た目は合格だ。」

ギルガメツシユがそう呟き、手を翳すとそこに黄金の波紋が浮かぶ。

波がおさまると、そこにはキラキラと光を零す妖精の様なものが舞っていた。

「な、なんです、それは!？」

アルトリアが警戒心露わに声を上げる。

「静かにせよ、これは酒精の一種だ：我が宝物庫の酒蔵に住まうものでな、飲まずともその酒が我が財宝に足るか否かを見分ける生き物よ。」

「はあ、便利だなそれ：目利き、いや酒利きの必要無いじゃないか。」

「中には希少性から開封を躊躇う場合もあろう、それが真に価値あるものかを見極めるにはちょうど良いのよ。」

フン、と士郎の言葉に存外丁寧な解説をする英雄王。

やがて、光はボトルに纏わりつく様に円を描いて飛び回り始めた。

「…どうやら此奴の眼鏡にかなったようだな、良い…あの雑種には褒美を与えると伝えておけ、そうだな、貴様にも一つ褒美をやろう。」

そう言つて、ボトルを先ほどの波紋にしまい込むと、光はそれを追つて波紋に消えていった、そして英雄王は、何の気まぐれか士郎に向き直る。

「本来ならばセイバーにふさわしくない貴様のような雑種、斬り捨てても良いのだが…先の応対、粗はあるがその年齢からすれば悪くはない、励めよ。」

そう言つて差し出されたのは、一揃いのショットグラスだった。

美しく、先ほどのボトルを上回る精緻な細工が施されている。

「…あの、これは…?」

「貴様は雑種としてはましな部類に入る、故につまらん事で死んでしまふなよ、セイバーも一時預けてやろう…まあ、最後には我に傳くのだ…火遊びの一つくらいは容認する度量も王たる証よな。」

「…ああ、簡単に死ぬ気なんかないさ、感謝するよ…英雄王、ギルガメツシユ。」

今度は店員では無く、マスターとして、一人の衛宮士郎として答えた。

「シロウ…」

アルトリアが、ほう、と熱い吐息を吐き出して士郎を見つめる。

「故に、勝ち残り、最後に殺しあう前に一献飲み交わすくらいはしようではないか。」

つまりは、英雄王は士郎に、聖杯戦争で生き残り最後に己の前に立つことを許すと
言っているのだ。

「そうだな…でも、お前と酒を飲むことはできないな。」

今の今まで上機嫌だった英雄王の眉間に皺がよる。

「ほう…つまらぬ事を、何故だ?」

「いや、だつて俺未成年だから。」

それを聞いて。

英雄王は紅い眼をめいっばい見開いた後、大声で笑いだす。

「ハ、クハハハハハハ！堅物すぎるであろう、小僧、少しは融通を効かせるくらいはせぬとセイバーに愛想つかされてしまうぞ、んん？」

クイ、と士郎の顎を持ち上げて瞳を覗き込む。

不意打ちのような動きの急変にアルトリアも慌てるが間に合わず。

「気に入った、お前が生き足掻く様を見るも一興よな。セイバー？」

「なんです、マスターから手を離しなさい英雄王！」

「貴様も——無様に生き足掻いてまでも此方側に舞い戻りたかったか……小僧の影響か？」

叙事詩に名高い英雄王、ギルガメッシュ。

その瞳に射抜かれ、士郎は身動きできずにいた。

（まずい、簡単に間合いを詰められちまった……この男の気分一つで、俺は死ぬ……）

ギルガメッシュの顔が息がかかるほどに近い。

ニイ、と口元を歪めて笑う。

「中々楽しい反応をしてくれるな、死ぬなど言ったところだ……まだ殺しはせぬから安心しろ……まあ、くれぐれも我を失望させるな、小僧。」

「英雄王！それ以上は許しません……！」

アルトリアが臨戦態勢に入り、服装はそのままに、手には黄金の剣が顕れる。

「ハ、最初から剣を露わにするとは…よほど此奴に執心とみえる…まあ良い、続きはまたにしておこう。」

と、バーカウンターの一枚の紙片を置くとギルガメッシュは直ぐに出て行った。そこには小切手。

100000000、と記されたそれは確かに本物だった。

「英霊って…お金あるんだな…」

その後。

帰ってきたネコさんに散々からかわれた。

やれ、アルトリアの具合はどうだった、とか。

店を汚してないだろうな、勿論性的な意味で、とかなんとか。

そして、約四千万の仕入額との差に。

店長が喜色ばんだ悲鳴をあげたのだった。

第28話 『アンゴルモア』

「さて、アルトリアには夕食はとりわけ多めに用意しておかねばな…」

誰にもなく言葉を紡ぎながら、台所で我が家の様に手慣れた作業をする弓の英霊。

いや、真実それは…、そんな彼の元に、意外な人物が声をかけてきた。

「よう。」

現れたのは、冬だと言うのに袖もないレザージャケットを素肌に羽織っただけの、しかしフードだけは室内にもかかわらず外さない。

狂戦士のクラス、それも特殊な霊基を備えて現界した、アイルランドの大英雄。

「クーフリーンか、どうした…賄いならば今しばし待てと君のマスターに伝え給え。」

「ハ、そんな雑事にわざわざお前さんを訪ねて来ねえよ、それより…「君のマスターに」たあ…随分とよそよそしいもんだな、え？」

「何が言いたい。」

「どこまで、思い出した？」

「どこまで？平行世界の記憶、いや…座の記録と言う意味ならばあまり芳しくはないぞ…きつかけがあればもう少し思い出せるとは思いますが…」

恐ろしいまでの情報が雪崩の様に頭に流れ込んでくる。

わからない、私は、何時の、何処の、どんな立場の、如何なる「エミヤ」であったのか——

視界がグルグルと回り、膝をつく。

「どうやら思い出したか……てめえの記憶が垣間見えちゃいたからな……賭けだったか。」

世話の焼ける野郎だ、とお手上げのポーズをするバーサーカー。

「お、思い出したぞ……クー・フリーン・オルタ……貴様が誰か、朔弥が……私にとつても……いや、今は違う……彼女にあの時と同じ「盾」の令呪は無い——もう、彼女は全ての英霊のマスターでは、ない、のだな？」

「ああ、契約と言う意味じゃ俺だけのマスターだ、だがな……こちらの存在であるからか、記憶こそ無いが——あいつはあいつだよ、お前さんにも……あの小僧にも知らずに惹かれてやがる……いいのか、あのままいけば過去に……お前さんの大事なマスターを盗られちゃうぞ……」

「今、この時の私は遠坂凜のサーヴァントだ……如何にこの冬木の聖杯が異常をきたしてしようとも……彼女に聖杯を捧げるが契約……サーヴァントである以上それを履き違える事は……」

「馬鹿が、この冬木の聖杯に詰まつてるのは……憶測だがてめえが知る災厄じゃあねえぞ

…杯の破壊だけで止まるようなヤワな代物じゃねえ、なんでこの俺が——こんなもん抱えて召喚される様、わざわざ仕組んだと思つてやがる？」

腕を組み、柱に寄りかかっていた身体をこちらに向き直し、その胸元を晒す。

三つの巴が輪を描くその刺青の中心から浮かび上がる、五つの輝き——

「待て、それは真逆！」

「ああ、そうだ、ホーリーグレイル…イ・プルーリバス・ウナム——それを核とした五つの力の塊…この異常を引き起こした、冬木聖杯を中心とした計測不明の異常力場…アンゴルモアの牢獄——それを打破すべく送り込まれた切り札だ。」

「アンゴルモア、だと…？」

「ああ、ことの発端はここ、特異点Fじゃあ無い…1999年、7月——外宇宙より飛来したたった一つの隕石…それが聖杯の中に居たこの世全ての悪——アンリ・マンユを侵食し、中に巣くつた。」

「っ、馬鹿な…そんな馬鹿な…確かに人理は修正されたはずだろうっ、ならば何故この様な異常を引き起こした、最早■■王の介入も無い、歴史は正され、全ての人の記憶から我々のした事は消えているはずだろうっ、何故、何故今更——いや、待て…ならば特異点より生まれ、カルデアのみに繋ぎとめられていたはずの貴様が座に存在し、召喚されて…いや、カルデアがあの時と同じ目的を持って動いているのは何故だ、人理は修正さ

れた、ならば観測する為の機関に戻っていなくてはおかしい！」

「ああ、そうだ…本当ならば、な。」

「教えろ、私にカルデアを思いださせ、なおかつ貴様が存在する意味を！」

「冠位指定——グランドオーダーは、真の意味で完遂されていなかったのさ、正直言つて俺の記憶もまだ穴がある、この冬木に来た時点で随分と封鎖をかけられた…聖杯を五つ抱えた俺でこれだ…聖杯を持たない…聖杯再臨を終えていない面子は送り込まれたはなから聖杯に巢食う何者かにこの牢獄の中の一存在として取り込まれたよ。」

「真逆——」

「ああ、そうだ…お前さんもまた、異変解決にとマスターと共に数多くの英霊と共に送り込まれた一人で間違いない、記憶が戻ったのが何よりの証だろうよ。」

「いや、そうとも言えない切れない…おそらくだが私はこの冬木に元から呼ばれる筈のアーチャーでもあり、同時にカルデアのエミヤでも、ある様だ…意識して初めてわかるが…融合した様な感覚があるのだ。」

「ほお…そうか、聖杯が無いお前さんは靈基を喰われたか…それを、補う為にこちらの自分自身に、そういう事か。」

「ああ、おそらくだがそれで正解だろう。しかし、ならばマスター…いや、朔弥は…こちらの存在と言ったな…カルデア側の彼女は、いや…彼女の兄も…どうなった？」

「——死んだよ。」

「な、に？」

世界が、凍りつく音が聞こえた気がした。

聞いてはならない、聞きたく無い。

護ると誓った、抱きしめ、手を握り締め、決して離すまいと——それが。

「だから、死んだよ。」

冷徹に、突き放す様に、言い放たれた。

「う、嘘を言うな！彼女が、あの男が！死んだなどと戯けた嘘をよくも、よくも吐いたな

貴様っ、貴様——!!」

胸倉を掴み、引き倒す。

抵抗も無く、されるがままオルタが倒れて。

「あ、あああああ——っ!!」

マウントをとった格好から、殴る。

殴る、殴る、殴る、殴る——。

「は、はあ、はあ、はあ……何故、抵抗もしない、貴様……巫山戯て……」

「巫山戯て、この俺が無抵抗に殴らせてやると思うか？」

「馬鹿な、ならば……本当、に？」

「はつきり、確認できたわけじゃあねえ……だが、レイシフトを用いた一度目の干渉に於いて……彼奴ら二人を含むほぼカルデアの全戦力を投入しての殲滅戦、その開始と同時に、敵が牙を剥いた、その時に大規模な力場の干渉に飲み込まれて大半の英霊が存在ごと削りとられ、二人も光に吞まれて消えた。」

「殲滅戦だと?」

「ああ、言っただろう……ここは特異点F——炎上都市冬木になる筈の場所……修正され、真つ当な聖杯戦争が行われる筈の冬木だった。」

「炎上都市——あの、惨劇がここで起こる?」

「ああ、故に大規模な戦闘を予測し、送り込まれた大部隊だったんだがな、結果は先も話した通り、拳句再び歪み始めた歴史は、冬木を火の海に沈めるに留まらず……繰り返し、繰り返し人々を殺し続ける蠱毒の壺と化した。」

「既に数度、この冬木は聖杯起動と同時に炎上都市と化している……そして、暫くの間を空けて、巻き戻る。」

「なん、だと……何故?」

「知るかよ、俺が聞きてえ……その上、僅かずつ変化している、前回にいなかった人物が増えたり、減ったり、な。」

「何故、今それを私に話す?」

「こいつを通じてお前さんが時折カルデアの記録を垣間見ていたのは察してたよ、だからこの賭けみたいなもんだ…もはや停滞していて良い状況には無いからな。」

「昨日の、黒化英霊、か…シヤドウサーヴァントとは違うのだな、あれは。」

「シヤドウより厄介だな、稀に意思を持つタイプもいる上に宝具を使いやがる奴もいる様だ…昨日やられかけてヒヤつとしたぜ…」

「それに、死んだと言ったが…お前さんの話を聞いて少しだけ希望も出た、朔弥だが…彼奴も時折カルデア側の記憶を見るかもしれないねえ、いまいち干渉されているのか判然とはしないがな…小僧を「エミヤン」とか呼んでいたからな。」

「——っ！」

それは、その呼び方は…知人を思い出すから止めると何度言っても、彼女がしつこく呼ぶので諦めがちに許した、愛称。

不意打ちだ、不意打ちにも程がある。

絆は途切れていないのだと、希望はあるかもしれないのだと、落としておいて持ち上げて…この、バーサーカーが…っ！

頬を、一筋熱いものが流れる。

「ハ、泣いてやがるよこいつ。」

雫は、バーサーカーの顔に落ちて。

「五月蠅い、人の恥を愉しむな…英雄王か、貴様は…！」

「まあ、今はお前さんと俺の中にしまつとけ…まだ誰が敵で誰が身内か判別できん。」

「…そう、だな…ああ、そうしよう。」

涙を拭い、立ち上がる寸前。

がらりと戸が開いた。

「ヤッホー士郎っ、美味しい匂いに釣られたトラー！」

酒瓶片手に。

虎が桜を伴い、上がりこんできた。

「あり？」

何この状況、と呟くは冬木の虎。

だが、それはアーチャーとバーサーカーこそ言いたい台詞だった。

何故貴女はこのタイミングで入ってくるのかね!?!、と喉元まででかかった言葉を飲み込んで。

(クール系×ワイルド系…もしやこれは…)

などと言う腐女子脳がはたらいた人が約一名いたのは、本人だけの秘密である。

どちらの、とか聞いてはいけない。

円蔵山、柳洞寺。

その境内にて、絶世の美女と言われてもいいほどの美しい女性が、普段のフード姿では無く、こちら側の人らしい服装で御山を見上げていた。

「どうした、キャス——いや、メディア。」

「いえ、戴いたこの服…気に入りましたわ、流石、宗一郎様。」

「仮にも夫婦ならば偶には贈り物くらいするのだろう、真似事だ…喜んでもらえたならそれはそれで嬉しくはあるがな。」

と、口にしながらまるで喜色が伺えない顔で話す、葛木宗一郎。

キャスター、メディアの現マスター。

「いえ…本当に嬉しいのですよ?」

ふ、と柔らかく微笑み…しかし直ぐに山にまた目を向ける。

「どうにも…この喜びを噛み締めてばかりはいさせてくれない様ね…」

と、唐突に衣服を脱ぎ始める、キャスター。

「なんだ、キャスター…まだ夕暮れだ、少し早くは——む。」

何かずれた会話をしていた宗一郎もまた、構えを見せた。

とはいえ、腰を僅かに落として手を多少前に掲げただけのファイティングポーズとも
 言えない自然体だった、が。

「折角戴いた服……汚したくはありませんもの」

一糸纏わぬ姿になったキャスターがパチン、と指を鳴らすと直ぐにいつものフード姿
 に戻り、庭先には複数の骸骨——竜の牙を媒介に呼び出した兵士、竜牙兵が湧き出した。
 『キャス、ターのサー、ヴァント……主は、貴様が聖杯に介入……事を……許可、されて、オラ
 又……ヨツテ、死ヲ、給ワルガ、イイ——』

「誰の手かは知らないけど……先を越されたねかしらね……既に不完全ながら英霊を支配下
 に置いているみたいね……けど……術式が美しく無い、力任せに操るだけの強引な術式……そ
 の力は驚きだけど……キャスターたる私にとつて不愉快極まりない……良いでしょう、相手
 になりましょう……宗一郎様、申し訳ありませんが前をお任せ致します。」
 「承知した。」

宗一郎の構える拳と、脚に保護の術式がかかり、次の瞬間。

竜牙兵の間を縫って飛び出した宗一郎が、迅雷の如き速度を以つて黒く陰つた英霊へ
 と肉薄した。

ゴキン。

鈍い音がして、名乗りも無いまま、先の無名の英霊の首がへし折れる。

即座に消滅したその端から、新たにもう一騎、いや…二騎。

一騎は素手、女性らしいシルエツト…僧服にも見える…が…クラスはよくわからない。

一騎は槍を持ち、まだ若いであろう体軀のランサーらしき英霊。

「ぬ、厄介な…」

竜牙兵が片方を抑えようと女性らしいシルエツトに殺到するが、一瞬にして蹴散らされた。

唯の二振り、足と拳が風を切り、骨達を根こそぎ砕いて見せた、しかもどういふ訳か復活するはずの不死の兵は散らばったまま動かない。

「洗礼詠唱を付与した拳——ち、聖人の類か！」

キヤスターが歯ぎしりをしながら睨む。

このままでは数の上で不利だ。

いかに自分が援護しても一騎当千の英霊を二体…同時に相手にするには人の身のマスター、宗一郎には荷が重い。

「フツ！」

呼気を吐き、しなる鞭の様な変幻自在の拳が先の聖人に襲いかかる。

その動きに相手は体勢を崩し、その心臓に貫手が——突き刺さる前に槍が横から宗一

郎を狙う。

「…文字通り横槍という訳じゃなあ…」

ギン、と。

槍に槍が挟み込まれ…弾かれた。

「しかも黒いの、貴様…功夫が足らん、出直してこい。」

割つて入つて来たのは、赤い髪。

中華風の衣装に身を包んだランサー。

「お主の技は面白い、儂と死合わぬうちからやらせるには惜しい…故に——助太刀致す。」

「感謝する、ランサー。」

「…危篤なサーヴァントだこと…けれど今は、乗つておきます…とはいえ下手な真似をするなら背中を撃ち抜きますからね？」

「おお、怖や怖や…心得た、今は、な！」

ポツ、と槍が空気を貫き、黒いランサーへ迫る。

同時に再び奔つた宗一郎の拳もまた、聖人を捉えた。

決着は、直ぐにでもついてしまいそうではあるが、僅かな間のランサー、キャスタの共闘が、始まった。

乖離する。

世界から、全てが。

閉じた坩堝に諍いは絶えず、絶望にこそ。

希望は最後にあらわれるのだ。

神は、天上におわすことなく。

人に、希望は無い。

だから、希望を見出さねばならぬ。

絶望に、世界が全て侵食される前に。

希望を見出さねばならぬ。

——やかましいのお：貴様の言葉など知るものかよ、ワシはワシ：大神ゼウスなるぞ？如何にこの身が卑小な型枠に押し込められようが、変わらずワシはワシ：貴様もこの様に無為な干渉、大概に止めろというのじゃ：迷惑千万よ。

我が言霊を正確に聞きしながら、何故キサマはその意に従わぬ、何故、何故——
何故？

そりゃあ、儂こそが「神」に他ならんからじゃ…何故貴様の様な輩の意に従わねばならんか、その方が理解できぬがな？

ああ、■■■■——哀れな、ものよ。

曰が沈みゆく街を眺め、大神は一人思考に耽る。

目を閉じれば見えてくる街の姿、いくらか見えたサーヴァント達の姿。

「そろそろ、動かにならん、マスター？」

「始まった、のですか？」

「まだ断言はできませんが、彼方此方に湧き出しておる。」

「わかりました——今夜何処かの陣営に仕掛けます。」

「応よ。」

ニヤ、と。

不敵な笑いを浮かべて大神は立つ。

嵐が、吹く前触れの様な、そんな顔で。

第28. 5話 「タイガー道場 *alter native*」

〔タイガー道場 / *alter native*〕

虎 「長かった…長かったぞ読者諸君みんな！ようやく、ようやく我々の出番だ！出番！タイガー道場つオルタネイティヴツツ！！」

ブルマ 「えっと、体格がいつものロリにもどりません師匠！」

虎 「ブハ！弟子いな、なんだそのエロさは、(ぱつつんぱつつんなサイズ小さめの体操着とブルマに苦しそうな銀髪紅眼の巨乳を見て) け、けしからんっ！！」

紅茶 「…いや、何というかあざといな筆者…」

ブルマ 「絵にならないと意味がない気もするけどねー？」

紅茶 「…しかしイリヤ、君それだけあちこち育ちながら声はかわらんのだな…」

ブルマ 「んー、そだねえ…本編の私は多少冷たい喋りだけどCVは変わらないらしいよ？」

虎 「またメメタな話を…」

紅茶 「メタ、だ。」

紅茶「で、今回は何かね説明補足の集まりと聞いてきたが。」

ぐだお「はいはい、というわけでみなさんこんばんは、こんにちは、おはようございます、皆様の暮らしをみつめすぎるスタンプに最近シニールさを感じているぐだおこと九狼です。」

虎「どんな挨拶よ。」

紅茶「：マスター、ボケだらけの現場に取り残されるサーヴァントの気持ちも少しは別れ、戯け！」

ぐだお「さて、ではまず整理していきましようねー、しまつちやおうねー（棒）」

紅茶「：ぼのぼのとかわからんだろう：」

ぐだお「まずは（スルー）ことの発端から説明しましょう：読者様の視点では、まず我が妹：朔弥がランサーに襲われた場面から。」

虎「これ、本来なら士郎が襲われてたはずなのよね？」

紅茶「そうだ、私とランサーの校庭での対決、それを目撃し、校舎内で一度殺されたのは衛宮士郎、私の過去だった。」

ブルマ「お姉ちゃんは死ななかつたよね？」

紅茶「ああ、そうだ：彼女が魔術師であることなどが幸いし逃げおせている。」

ぐだお「うん、まずそこからいろいろおかしなことになったんだね、そもそも朔弥は

本来この街にはいなかった。」

紅茶「そうだ、ランサーもまた本来のクーフリーンではなかった。」

ぐだお「そこはオルタのクー、オルクが来ちやったのもあるのかな、代わりにその空きに据えられたのはr:いや、一応まだ真名出てないのか、今更だけど。」

ブルマ「出し損ねただけみたいよ、筆者。」

紅茶「うむ、まあ中華なランサーに差し代わっていた。」

ぐだお「さて、このまま差異を並べていくとキリがないから、大きな違いの、判明分を時系列に並べてみたよ？」

紅茶、ブルマ、虎「どれどれ……」

【年表】

【1986年頃?】

第四次聖杯戦争より8年前、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、衛宮切嗣、アイリスフィール夫妻の間に生まれる。

【1994年】11月頃

第四次聖杯戦争、勃発。

正史では間桐雁夜はこの時死亡したとされるが、この歴史においてはなんらかの方法

で生きながらえた。

また、衛宮切嗣もまた、本来の時期に衰弱死はしておらず、現在は行方不明扱い。

【1999年】7月

宇宙より恐怖の大王、虹色に輝く隕石らしき何かが飛来。

この時、通常の計器類に捉えられないままに冬木に落下し、大聖杯内のアベンジャーすら侵食、内部に巢食う。

【2004年】2月頃

第5次聖杯戦争、勃発。

一度目は正史を完全に再現する形で進んだ様子、しかし結果がどうなったかは不明、聖杯起動と同時に冬木に異界が展開。

カルデアスタッフがその原因、特異点の中心が1999年に飛来した「何か」である事を観測、「アングルモアの牢獄」と名付ける。

【聖杯起動後】

魔術協会、聖堂教会共に一度目の起動で異常を察知するも、全ての観測手段は中を見通せず、更には魔術師や力を持たない人間からはその異界を、認識さえできず、近づけば本能的な忌避感から中へ向かう事すら困難な事のみを把握。

第四次聖杯戦争関係者であるロードエルメロイ二世と、封印指定執行者のバゼット・

フラガ・マクレミッツを派遣。

【???

カルデアより、時空を超え、グラウンドオーダーを完遂した英雄、九重九狼、朔弥の出击を決定、人理修復の為にレイシフトを敢行するも、仮称、「アングルモア」による時空・因果干渉を受け、カルデアは朔弥、九狼と言う得難いマスター二人を含めて壊滅的な被害を受ける。

この下はカルデアに関するネタバレ、今作品の独自設定。
読みたくない方は注意。

【今作に於ける「カルデア」】

【カルデア存続について】

本来、グランドオーダーを完遂した時点で他所の特異点修正と同じくしてカルデアスタッフ、九狼、朔弥が歴史に残るはずも無く、消えると思われるが：そうはならなかった。

推測としては、世界が「カルデア」を群体の英霊、として座に召し上げたとも、グランドオーダーがまだ完全に完遂されていないともされたがそこは不明。

現に通常手段では人類史を救ってもカルデアから外には出られないままであり、レイシフトを行わなければ外へは向かえないままである。

また、現実世界の様々な歴史上にももちろん九狼と朔弥は存在する。

(今作品の朔弥は現実世界側の朔弥であると目される、但し記憶の流入は起っている?)

【各平行世界の歴史の齟齬】

ぐだお「と、言うのが大まかな話の流れですね、僕はこのレイシフト時に光に飲まれて以降、行方不明と言う事になります。」

虎「まだ原作（F G O）終わってないのだががしかし。」

ぐだお「まあ、そういう可能性のひとつと捉えてください、僕はF G Oでのグランドオーダーを成し遂げた後のぐだお、と言う事です。」

ブルマ「朔弥は、は現実のお姉ちゃん？それとも…カルデアの？」

ぐだお「さて、オルクはエミヤ同様に朔弥も現実の朔弥と同化して生きながらえたんじゃ、と期待しているみたいだけど…さて、どうだろう？」

虎「朔弥ちゃん人間でしょ…英霊みたいな真似は不可能なんじゃ？」

紅茶「いや、推測の通りにカルデアが群体の英霊、として守護者のカテゴリーに召し上げられていれば…厳密には朔弥は英霊であると言えるかもしれない…奇跡があればと、信じたくなるな。」

ぐだお「紅茶は朔弥好きだもんなー」

紅茶「な、な、何を言ってるのかね君はっ？」

虎「ぷっ、可愛いw」

ブルマ「きゃー(≧▽≧)」

紅茶「ごほん、それとだな、いろいろと複雑化しているから一応補足するのだが…正史、としているのは第5次聖杯戦争、衛宮士郎が騎士王、アルトリア・ペンドラゴンと出会った…所謂S N——S t a y n i g h tの世界なわけだが。」

ぐだお「ふむ?」

紅茶「あの世界は、実はFate/Zeroの歴史と必ずしも繋がる訳ではない、らしい。」

虎「切嗣さんがいないとSNも始まらないんじゃない?」

紅茶「うむ、概ねは変わらないのかもしれないが、一応はあれは派生した歴史の可能性でしか無いようだ、まあ殆ど正史扱いだがな。」

ぐだお「そうした話をするなら、FGOにおける歴史も違いますね、此方では2004年の冬木で初めて聖杯戦争が起きた事になっています、その後冬木の聖杯戦争のシステムを元に作られたのが、カルデアにおける複数英霊を使役可能にした——「守護英霊召喚システム・フェイト」らしいですし。」

ブルマ「つまりどういうことだっばよ…」

虎「…全部が似たような世界だけど、それぞれ違う…?」

ぐだお「多分それが一番正確な答えかもしれないですねえ、先に話した歴史の開始が違
う以上、本来なら僕らカルデアがこの平行世界に介入する意味が無いんです、しかし—
—シバが観測した、と言うことは僕らにとってもこれを見過ごしてはいけない、ので
しようね。」

【理由とギリシヤ】

白衣の女性「カルデアが関わる理由：それは簡単な話です、この異変が放置すればあらゆる平行世界へ害をもたらしかねないからでしょう。」

ぐだお「あれ？なんか君どこかで見えたことが…」

白衣「き、気のせいでしょう…それより。」

紅茶「そうか、敵は因果すら歪めた怪物：放置すればあらゆる平行世界を歪め始めかねない、のか？」

白衣「ええ、ですから——すべからく人類を、世界を揺るがす事態…守護者が動いてもおかしくはありません。」

紅茶「霊長の守護者——アラヤの手が伸びると？」

ぐだお「もしかしたらカルデアこそが自覚はないけどその、守護者なのかもね？」

白衣「ええ、その可能性もありますが、それ以上の上位存在が動く可能性もあるでしょう。」

虎「それ以上？」

ブルマ「守護者は人類の存続に動くけれど…人を護るための集合意識がアラヤなら、世界そのものを護るのは、だれなのか…わかる？」

虎「あはは、わかんないw」

ブルマ「そ、実はわからないわ、守護者に関しては何れも存在を観測されているけど、その上位存在はあるだろう、との予想はされながら、確認されていないの。」

ぐだお「…人を護るのが英霊、カウンター・ガーディアン…なら、世界を護るのは…もつと、強い、何か？」

白衣「そうですね、グランドオーダーの際には■■■王■■■が何らかの手段を講じてその降臨を防いでいたとも思われます、彼の者の第三宝具は世界を覆いましたから、その影響か、或いはその上位存在がカルデアが救う事をあらかじめ知っていた、か。」

ブルマ「■■■王■■■の陰謀は、此方の世界でも画策はされていたようだけど案外あっさりとは開始前から前提条件を覆されて頓挫したみたいね、公式にそれは明言されているわ、■■■王の計画、案外ガバガバだとか揶揄されてるけど…まあ、私の身内も大概だから他所の事をとやかくも言えないけれど…アンリマンユとか、バーサーカーでヘラクレス呼ばずにアーチャーで呼べば最強だったとか…まあ、今作品ではセイバーだけど、ヘラクレス。」

*ヘラクレスは実はキャスター以外全てに適正がありますが、よりによってバーサーカークラスだと数々の宝具が使えません、ステータス上げててもそれが敗因みたいなモノ、実際今作品ではセイバーヘラクレスにバーサーカーヘラクレスはあっさり負けまし

たが、その理由は宝具が大理石の斧剣であったためにネメアの獅子とゴッドハンドの護りを突破できなかった事と、黒化した影響で完全消滅は無くなりましたがゴッドハンドが無効になった為。

紅茶「彼がバーサーカーで無ければ我々はSN正史に於いて為す術なく負けていた可能性が高いからな…今回のセイバーでも然り、不意を打つ事で一度は打破したが…彼の宝具を考えたら次は通用すまい？」

ブルマ「ふふん、そうよ十二の試練は十一の命のストックに加えて一度殺されたものは二度と通じなくなる最強の防衛、継戦特化の宝具だもの！」

ぐだお「いやあ…此方でも高難易度で本気のバサクレス相手にした時はきつかったなあ…あれは通じなくなる機能まではなかったけどそれであれだもの…あれが意思を持って冷静に襲いかかってくるとか考えただけで詰みだね。」

虎「うわあ、じゃあ後十一回、異なる方法で殺さなきゃ死なないわけ、あの筋肉セイバー？」

ブルマ「筋肉言うな、まあ12回ね。既に最初にやられた分は回復したし。」

紅茶「な、回復までするのかあれは!？」

ブルマ「膨大な魔力が必要にはなるからストック1つ回復するのに数日はかかるけどね、私以外の並のマスターなら干からびてるわ。」

ぐだお「流石ギリシヤ最強…ギガントマキアじゃあ神々では殺せない巨人族相手にするためにゼウスが呼び寄せるくらいだからなあ…人であった頃から人外じみた強さを誇っていたのも頷ける話だね…。」

虎「私ギリシヤ神話詳しくないんだけど、なんでヘラクレスはゼウスをあんなに憎むのかしら、血縁者でしょ？」

紅茶「ああ、それはなゼウスの妻、ヘーラーにヘラクレスは嫌われていてな…その悪辣な計略に心身を侵され、妻子を自らの手で殺める事になったからだ、ゼウスがあちこちで不貞を働かねばその様にヘーラーが嫉妬にかられはしなかつたであろうし、彼が親交があつたヘパイストスの事もまた、ヘーラーは醜い、という理由だけで我が子と認めなかつたのだよ、それが理由で鍛冶神ヘパイストスは母ヘーラーといがみ合い続け…親子で和解することもなかつたようだ、誠実なヘラクレスはその事も、妻子の事も許せなかつたのだろうか。」

虎「でも、それ悪いのはヘーラーじゃないの？」

紅茶「一概にそうとも言い切れまい、ヘーラーはゼウスを愛したが故に嫉妬に狂つたのだからゼウスがもう少し誠実ならば起こらなかつた悲劇とも言えるからな。」

白衣「男女の仲はわかりませぬ…私は男が悪いと思えますけど…どっちつかずで、ふらふらふらふらするとか、しかも関係までもつなんて最低では？」

ぐだお「何故かな、なんだか胃がキリキリしてきたよ……」

紅茶「奇遇だな、私もだ……うっ、痛たた……」

マルタ「……貴方は少し反省したほうがよろしいのでは……とくに紅茶。」

紅茶「君は……マルタではないか……杖も無しに君がいるのは珍しいな？」

マルタ「まあ、今回端役でしたが出番がありましたからね、水着は頂けないのでライダーの時の服装に籠手だけつけた素手の状態で。」

タラスク（無言で頷いている）

紅茶「……ますますヤンキー聖女扱いされそうだな君……その姿でバイクに乗って背中に文字でも入れたら完璧に特攻○女じゃないか……」

マルタ「なんですって!? 殴るわよ!?!」

タラスク（（（（；。D。）））））

紅茶「やめたまえ、タラスクが怯えているではないか……（宝具発動の度に巻き込まれるから気が気ではなからうな……）。」

ぐだお「あはははは」

紅茶「しかし、君がこの舞台裏にいるという事になると本編で語られた『削り取られた』英霊の末路はやはり——」

マルタ「ええ、不本意ながら黒化英霊として黒幕に使役されている者が殆どね、みす

みすカルデア側は敵に力を与えた事になる。」

ぐだお「まあ、カルデア側以外の英霊も囚われているから、恐らく過去に冬木聖杯が召喚した英霊も使役されているね、座とのラインに干渉したのか、聖杯が記録していたのかはわからないけど。」

紅茶「ギルガメッシュは相変わらず我を保っているみたいだな…流石と言わざるを得ない、複雑ではあるが。」

白衣「彼も特別な英霊ですからね…カルデアにもいた彼ですが、第四次から現界しているのは変わらないようですから別個体と認識すべきでしょう、朔弥を覚えていけば直ぐにでも味方につくとは思いますが、それは無いでしょうね。」

紅茶「今回は出会い方が違うからか士郎を気に入っていた様だが…投影をみたら掌を返すだろうか…」

ぐだお「いやあ、彼一度気に入れば案外口は悪いけど寛容だよ…多分あれこれいいながら助けてくれそうだけど。」

紅茶「あの男とは馬があつた試しが無いのでどうしても疑ってしまうな、偏見はいかんのだが。」

ぐだお「そうかなあ…ホロウの釣りの時とか君ら凄いい仲良さそうじゃない…。」
紅茶「耳鼻科と眼科に行け、マスター。」

ブルマ「…私の平行世界の友達がなくて良かった、カップリングがどうか言い出す案件だわ、これ。」

虎「プリヤの話はよせw」

【事象の差異と解説】

ぐだお「さて、では細かな相違点も洗い出してみよう、数はあるけど簡単に解説します。」

ぐだお「はい、まずこれ。」

◇ ぐだ子（朔弥）がオルタニキを召喚。

◆ ランサーが近代中国の英霊。

◇ アインツベルン陣営はセイバーを召喚。

◆ バゼットの鯖はフィン・マックール。

ぐだお「ヘラクレスがセイバーなのは、そもそもバーサーカー枠がオルクで埋まったから、ではあるけど理由の順序が逆なんだよね…恐らくはカルデア介入まではヘラクレスはバーサーカーのまままで繰り返し聖杯戦争に参加していたんじゃないかな？」

虎「ランサーが違う理由は、同じ存在であるバーサーカーのクローリンと、ランサーのクローリンが同時に存在できないから、なのかな？」

紅茶「バゼットの鯖が本来クーフリーンだった為か、これもまたフィン・マックールにすりかわっているな。」

ぐだお「そこに介入して、エミヤ同様に中華ランサーとフィン・マックールが自我を残そうとしたのかもね、彼等はウチのカルデアにいたし…まあ、記憶／記録はどうやら覚えてないみたいだけど、中華の方は朔弥殺そうとしたし…まるくおさまったら後で自害しかねないあの人…」

ブルマ「ちなみに別側面ならば同名の英霊も同時に存在する事は理論上はあり得るわ、カルデアでは当たり前に起こっていた様だけど。」

ぐだお「あはは、確かに。」

◇ 主人公は最近影薄いけどぐだ子（朔弥）。

ぐだお「これについては、士郎君がだどるはずの道をうちの妹がたどることになったみたいだけど詳細な理由は不明、前述した様にカルデア全体が英霊として召し上げられているならば、自身と同一存在を因果を捻じ曲げてきた黒幕に対抗して呼び寄せ、同化した結果である可能性がある。」

紅茶「あくまでも憶測レベルだがな。」

ぐだお「まあね、でも現段階ではこれ以上考察は不可能かな、情報開示量が足りないよ。」

◆ 衛宮士郎が実戦レベルの魔術をさせる。

◇ 切嗣は死が確定しておらず、行方不明。

◆ 雁夜が生存、青のアサシンのマスターに。

マルタ「この辺りは第四次からの流れが完全に覆る勢いね？」

紅茶「そのせいかな、第五次にもかなり変化が見られるな。」

ぐだお「確かにね、これに関しても情報の量が足りないけどひとつ言えるのは…やはりここは似た様な平行世界である、と言う一点かな…僕らがそれぞれ知る歴史と聖杯戦争の開始から違うから。」

虎「切嗣さんがSN史より元気だったからか、士郎に魔術を真面目に教えたみたい？」

紅茶「それにしてもおかしな点はあるのだが…仮に切嗣が真面目に教えたとして、果たして私がああもスラスラ魔術を使えるだろうか…」

ブルマ「まだこれも情報が足りない、かな？」

紅茶「そうなる、すまない。」

ぐだお「(必死に笑いを堪える仕草)」

紅茶「…何かねマスター…」

ぐだお「ご、ごめんその声ですまない、は腹筋にく、くる、ぶっ、くくくっ」

紅茶「失礼だな君は!？」

虎「中の人ネタ、乙」

◇ 夢によりカルデア関与の可能性が浮上。

◆ 一部鯖にカルデアの記憶が…？

ぐだお「これに関してはもう、答えが本編で出ましたね、オルクが介入した事でエミヤにカルデアの記録／記憶が戻りました。」

エミヤ「カルデアの異変介入と、黒幕の時空・因果律干渉の結果、と言う話だな。」

虎「話がでかすぎてついていけない…」

ブルマ「師匠、ガンバ！」

◇ 天の杯ルートでもないのに黒化英霊出現。

◆ 冬木は何らかの力場で隔離状態。

ぐだお「これもねえ、黒幕、仮称『アンゴルモア』が原因とされてるけど…まず天の杯ルートの泥による英霊ともまた違うから誤解しないでね、黒化した英霊はどうもアンリマンユに取り込まれた時ともまた微妙に違うから。」

紅茶「アンリマンユの力をもアンゴルモアが取り込んだのかと思っていたが…違うのか？」

ぐだお「全て間違いとも言わないけど、まずスペックがおかしいんだよね…自我があつたりなかったり、ステータスが上がったたり…」

紅茶「アンリマンユに囚われたセイバーや、バーサーカーにも天の杯ルートで意識はあつた様だが？」

ぐだお「それだけじゃない、一見して顔や姿がわからないのさ、宝具でも見ればわかる程度でさ。」

紅茶「そう言われれば天の杯ルートでは見た目が黒かったりはしたが、誰だかは一目瞭然だったはずだな…」

◇ 聖杯により(?) 裁定者ルーラー&復讐者アベンジャー召喚。

◆ 更に7騎の英霊が追加召喚される。

◇ 前半と後半の鯖の令呪の色は赤と青。

ぐだお「これもね、ルーラー、アベンジャーの召喚…本当に聖杯…、アングルモアがしたのかな？」

虎「その心は？」

ぐだお「まず、理由が薄い、なんともなれば結果ごとリセットできるくせにわざわざルーラーを呼び出し、尚且つその監視にアベンジャーを呼ぶ…矛盾しない？」

紅茶「確かに意味がわからんが…」

ぐだお「アベンジャーはともかく、ルーラーは別の力の介入があつたんじゃないかと思ってるんだよ、僕は。」

ブルマ「別の力？」

白衣「それこそ先ほど話した守護者の上位存在：神如き何者か、では？」

紅茶「…ますますわからん。」

ぐだお「それから令呪の色分け、これはあまり深い意味は無いのかもね…元来の枠で召喚されたのが赤、程度で…」

紅茶「青側はやたらにチート級が多い気はするがな。」

白衣「力の均衡が崩れてはいけないと世界そのものがバランスをとり、事態を終息させる為に干渉したのかもしれないね、本来因果律に干渉などすれば世界からの揺り戻しに合うはずですから。」

ブルマ「追加召喚に関しては、聖杯に備わる予備システムを起動しただけの話ね、万が一悪用された場合の保険に作られた対抗措置よ。」

虎「そのあたりは聖杯大戦とかその辺ぐるとわかる、わかります。」

◆ 慎二の第二鯖はフランシス・ドレイク。

◇ ドレイクは月の聖杯戦争の記憶がある。

◆ Xには平行世界の不完全な記憶が。

◇ アーチャーもまた、まだらに記憶が。

ぐだお「聖杯を持っていたから、このドレイク船長間違いなくうちの船長なんだけど

…なんでムーンセルの記憶があるんだ、この人…」

紅茶「私にも平行世界の記憶が蘇ってきたくらいだ、この世界、実は他の平行世界と境界が曖昧なのではないか？」

ぐだお「X、いや…アルトリアもなあ、そうなのかなあ…霊基が混ざってないかな、彼女の場合…」

紅茶「まだ彼女、他にも多数側面があつたはずだが…」

ぐだお「うちには槍の側面は獅子上も乳上も居ない、から無いと…思い、たい。」

虎「それフラグ、絶対フラグ。」

紅茶「これ以上アルトリアのゲシユタルト崩壊は勘弁してくれ…」

◆ ロード・エルメロイ2世が来日、冬木へ。

ブルマ「一緒にバゼットも来ているけど、何故か別れ別れな上に記憶すらおかしくなっていない、バゼット？」

虎「なんか時系列おかしいんだよね、時間がどうのこうのって言ってたし…」

紅茶「巻き戻しの影響で中の時間軸が外と違うのかもしれないな、ロードだけが記憶がまともな理由がわからないが。」

◆ 士郎に真逆の双令呪、ヒロインX（in青王）

ぐだお「…なんでかな…アルトリアが複数いるからかな（白目）」

ブルマ「筆者曰くきちんと意味はあるらしいですが、今はやはり開示する気は無いみたいですね。」

虎「筆者エ…」

◆ 新アーチャーはギリシャの主神、ゼウス。

ブルマ「なんで神霊が降臨したのよ…ワケワカンナイ。」

紅茶「いや、そもそもアンリマンユもゾロアスター教のれっきとした神格だぞ、そう考えれば方法次第で神霊もサーヴァントに落とす事も不可能では無いようだが。」

ブルマ「…言われてみたら、確かに。」

白衣「いろいろ大変なんですよ？ゼウスの制御…魔力だけでなく…」

ぐだお「あー（察し）」

◇ 大聖杯の存在する大空洞内に謎の結晶。

ぐだお「なんだろうね、コレも、意味深にずーっと引つ張ってたけど、これがアンゴルモアの隕石、なのかな?？」

ブルマ「なーんか怪しいけど…そうかなあ?」

虎「これで記載していた分は終わりかな。」

ぐだお「いやあ、多かった：しかもほとんど答えてないじゃんこれ。」

紅茶「結局、また謎が増えたつてお叱りを受けないか：？」

虎「紅茶、それ以上いけない。」

ブルマ「まあ、とにかく今はここまでという話みたい、皆さんお付き合いありがとうございます
（ご）ございました！」

マルタ「少しは役に立てたかしら。」

白衣「まあ、全部ネタバレするわけにもねえ。」

虎「とりあえず悪いのはギリシヤ、にしとけばいいんじゃない？」

ぐだお「いやいや、それは流石にw」

ブルマ・虎「まあ、とにかく！ありがとうございますたくく!!!」

第29話 『凧』

「凧が、来る。」

凧？

「ああ、世界を揺るがす大凧だ。」

怖い、いや、だよ。

「なに、心配はいらん……何の為にこの様な極東の地にまで出向いたと思うておる？」

早く、出たいよ。

「暫くかかるな、だが——必ず元凶は取り除かねばな……黄昏を見る前に世界がなくなってしまうのでは……我々が今までなにをして来たかわからなくなるでは無いか。」

じゃあ、元凶を、喰えばいい？

「お前は——すぐそれだ、少しは考えてものを言わんか、全く。」

難しいこと、ニガテだ、よ。

兄者、は狩の事しか、考えてない、よ

……ととさま。

「まるで犬の様な事を言うでない……誇りを持たんか……誇りを。」

おいしくない、から、いらぬ。

「しようのない奴じゃな…はあ。」

——兄者…とと様、呆れてるよ…

「しかしまあ、あやつがまさか地上に干渉しようとはな…まずはお手並み拝見かの？」

囲まれている。

四方八方から感じる気配、禍々しい力。

「まずいな、想定外だ…これは尋常ではないぞ…バーサーカー、離れてくれるなよ…僕だけでアレを突破するのは不可能に近い…」

愛用の銃器を構え、しかしサーヴァント相手にはなんの意味もない事を考えれば牽制になれば良いところだろうと周りを見渡す。

見えるだけで数騎。

「馬鹿な、何故サーヴァントが群れをなしてるんだ…しかも、基本ステータス以外が見えない…クラスすらわからないだど？」

第四次のアサシンの様な特殊な存在？

それにしても一騎一騎のステータスが高すぎる…！

「——ウ、ア ■■■——…」

バーサーカーもまた、本能から忌避したか、警戒心を露わにして周りを睨む。どうすべきか判断もつかず様子を見ていると、やがてセイバーらしき影が見えた。身の丈に見合わぬ大剣を構えた少女らしき影。

「あ、あ、ア—— ■■■オオ ■■■！」

「ど、どうした…：バーサーカー、落ち…！」

制止も間に合わぬまま、バーサーカーが弾丸の様に飛び出した。

勢いのまま少女へと躍りかかると、その両手を振りかぶり、ハンマーの様に叩きつけた。

「——!!」

言葉はなく、しかし少女は大剣を横に構え、腹を片腕で支えてその一撃を受けきつて見せた。

なんとと言う膂力か、少女の外見をしてもそこはやはり、サーヴァント。

「■■■オ！ ■■■！ ■■■——!!!」

聞き取り辛いのが、心なしかバーサーカーは同じ単語を繰り返し叫びながら拳を振るいつづけている様に聞こえる。

その猛攻を受けながら、少女もまた口を歪めて笑っている様に見えた。

「バーサーカー、奮起するのはいいが飛び出しすぎだ、このままじゃ…っ、クソ！」
バーサーカーと少女を中心にサーヴァントが円を描く様に包囲し始める。
まずい。

バラバララ、と手にした機銃を連射する。

だが。

「、やはり無駄か…！」

弾丸は着弾したのもも軽々と弾かれ、鎧や皮膚を貫けない。

そもそもほとんどが回避されている。

「バーサーカー…退がれ、宝具を用いて離脱を

——!?!」

ドフ、つと。

軽い音がして身体が浮き上がる。

殴られたのだ。

サーヴァントからしたらほんの軽い一撃っ、しかし人の身には…

「げ、あ…!!」

胃液を吐き散らして崩れ落ちる。

目の前には、杖を構えたキャスターらしきサーヴァント。

キヤスター？キヤスターの一撃で自分は悶絶していたのか。

「な、さげなくなるな……クソ！」

意地で身体を起こし、振るわれた杖をかくぐり、唱えた。

「——time alter double accel !!？」

固有時制御。

人の身には過ぎた力だが、体内に限定する事でその影響を最小限に。

世界に咎められずに時空を歪める特異な魔術。

一瞬、2倍速に加速し、キヤスターの視界から逃れ、頭に懐ろから取り出したもう一つの銃器を向ける。

トンプソン・コンテンダーカスタム。

大口径の一撃のみを射出する携帯できる拳銃としては最大威力を発揮する改造品。

弾丸には30106スプリングフィールド弾。

本来は対応しない口径だが、カスタム時に無理に作らせた銃身はそれを吐き出した。

ガオン！、と拳銃にあるまじき音を立てて弾丸が吐き出され、慌てて身体を捻ったキヤスターの頭を掠め、肩を撃ち抜く。

本来ならば、例え肩を砕かれようと即座に治癒をかければ問題ない程度の傷。

弾丸が自身を貫いた事に驚きこそするが、キヤスターは魔術を用いて——

その、肩が爆ぜた。

「?!?!」

キヤスターは訳も分からず、混乱しながらのたうち回る。

「君が魔術師で無ければ僕がやられていたよ…いや、それも最早時間の問題、か？」

取り囲まれたバーサーカーも、暴れまわりはしているが徐々に追い詰められていく。

「諦めが早いのですね…貴方？」

鈴を転がすような様な、可愛らしい声。

どこか冷たく話しながらもその澄んだ声はそれが女性だと感じさせた。

そして、立ち塞がるのは巨軀。

異様なまでの魔力を漲らせた、鎧の隙間からでも解る、筋肉の塊の様な立ち姿。

「な——に？」

後に、あの声の後にあの姿で一瞬我が耳を疑ったとは彼の言葉。

しかし、現実にはその後ろに女性が控えていて見えなかったただけなのだが。

「先の一撃は見事だったがな、あまりに冷静にすぎやせんか…少しは足掻いて見せよ、人間？」

漆黒の鎧に身を包み、両手に青白い雷を纏う大男。

「アーチャー、やりなさい！」

澄んだ声が、放てと叫ぶ。

「ハッハー、是非もなし!!」

豪雷一閃。

光が瞬いたかと思えば、次の瞬間には辺りに気配は皆無。

バーサーカーと、アーチャーを除いた気配は根こそぎ消滅していた。

「——アー、■、ロー——」

悲しげに呟いたバーサーカーを背に。

堂々と此方を向いたのは、大神ゼウス。

現状、此度の聖杯戦争に於ける最大最古の英霊であった。

高く、高く。

天に聳える山が見えた。

その頂に、一人の男が磔にされている。

その肉は、岩肌張り付き、半ばが石のように変質してしまっている。

腸が露出し、鎖に繋がれた姿は明らかに生きているとは思えない。

だが。

動いた。

男は呻きながら涙を流しているのだ。

「何故、解放した——何故、私はここを離れてはならないのだ、罪は罪、罰は罰——償う事で私は……まだ、■■■■でいられるのだから……忘れないで……ああ、忘れないで……母様——」
「原初の火を与え給うた神ともあるう者が、なんと情けない……さあ、泣いていないでここから降りるのだ。」

「——巫山戯るな！巫山戯るな？誰が望んだ、誰が頼んだ！私はこのまま朽ちてしまいたい！消えてしまいたいのだ！人は、栄えた、栄えて、墮落した！私が招いた、私が犯した罪だ！」

「——だが、お前のその罪が、人を生かした、人を……確かに救ったのだ。」

むせ返るような、嫌な臭気が漂う山肌。

その臭いと、足元には犬面鷲身の異形が、矢に貫かれて横たわる。

「ああ、ああ——お前が来たことで、私の唯一の理解者が、死んでしまった……死んでしまったのだ……」

「正気か、それは貴様の腸を啄ばんでいた化け物ではないか。」

男——プロメテウスの言葉に。

解放者、ヘラクレスは眉間に皺を寄せて唸った。

「だが、私はこの鷲に啄ばまれ、しかしこの鷲に生かされていたのだ……」

この男は、底なしの馬鹿か。

自分を苦しめ続けた畜生が、事もあるうに自分を生かした？

ヘラクレスは知らなかったが、彼は三千年もの間、この異形の鷲の糞尿を糧に生き続けていたのだ、不死故に死ぬことは無いプロメテウスだったが、もしも腹を満たす事がなければ。

如何にそれが汚物だったとしても彼の精神を辛うじて？ぎとめたものでもあった。

故に、辛苦に晒された彼にしてみれば、何時しか鷲は彼の唯一の理解者となり得ていたのだ。

鷲には、ただ栄養ある岩肌にはぶら下がった便利な餌場にしか思われずとも。

彼が狂った親愛を抱いたのは、無理からぬ話であつたかもしれない。

考えてもみれば、三千年だ。

三千年の間誰と話すこともなく、ただただ腸を抉りだされる日々……

この男は狂う事で唯一、自我を残したのだ。

「哀れよな……だが、私にも、人々にとつても貴方は恩ある神だ——」

やがて、無言のまま泣きじやくるプロメテウスを胸に抱き、山肌を降り始めるヘラクレス。

やがて視界は霞み、ぼんやりと意識が覚醒します。

「ああ——光、光が見える：雷火に怯える必要も無い、寒さに凍えることも無い：人に希望を与えたのは確かに、貴方なのだから——」

背後に聞こえた声は、どこか異質で、今ここにあると思えない。
しかし。

優しく、悲しく、苦しそうな——

目覚めたそこは、自分のベッドだった。

「イリヤ、おはよう。」

「——り、ズ？」

リーゼリット。

自分の一部、アインツベルンのホムンクルスで：そして、妹のような存在。

「お嬢様、ご無事でなによりでございます。」

「セラ……」

同じくアインツベルンのホムンクルスであり、魔術師としての自分の師でもある、姉

の様な、存在。

はたと気がつき、飛び起きる。

「そう、そうだわ……早く……あの不埒な神を跪かせなきゃ……私を、アインツベルンを侮った事を悔やむ様に——」

「落ち着け、イリヤ——今のお前の精神状態で逸るのは得策ではない。」

そう、制止したのはセイバー、ヘラクレス。

「夢を、見たわ——セイバー、貴方が……鳥葬の磔刑にされていたプロメテウスを助けた時の夢を……貴方、プロメテウスに向けた目と同じ目を今、私にも向けたわね？」

「プロメテウス……懐かしい話だな。」

「私を、憐れまないで。」

強い拒絶、強い、悲しみと怒り。

それは人の強さで、弱さだ。

「全く、強がり——」

嘆息しながらも、ヘラクレスは否定はしない。

ベッドからよろめきながらも起き上がるイリヤを支え、その丸太の様な腕に抱え上げた。

「アーチャーを、探すわ。」

「承知した、マスター…アインツベルン。」

わざわざ家名だけで呼んだのはヘラクレスなりの皮肉と、ある種の優しさではあったが。

イリヤは答えず、行きなさい、とだけ命じる。

「行つてらっしゃいませお嬢様…」武運を。」

セラの台詞に頷き、ヘラクレスが同時に足に力を込める。

もう日が沈んだ空に、砲弾の様な速度で飛び出していく。

「イリヤ、もう、行っちゃった…」

「お嬢様、でしょう…リズ。」

「セラ、は…硬すぎ。」

「貴女は柔らかすぎるのです、メイドとして少しは自覚なさい…ですが…今だけは許しましょう…イリヤ——無事に帰ってきてくださいね。」

それが、例えほんのひと時であっても。

聖杯戦争が終われば消えゆく自分達には、貴重な、貴重なひと時なのだから。

もしも。

幸せな、唯人に生まれていたら。

自分達は、笑いながら生を謳歌しただろうか？

そんな事を考えるほどには、彼女もまた、人であつた。

第30話 『絶招』

「どうした、綺礼？」

カソツクを首元まできっちり閉め、暑苦しい程に厳格に着こなす。

男：言峰綺礼はいやに嬉しそうに肩を震わせていた。

「く、ククク：ククク、あっはっはっは！」

使い魔が齎した映像。

そこにはくたびれたレザーコート、煙草を啜えて銃器を手にする一人の男が映っていた。

衛宮切嗣。

魔術師殺し——

「生きていたか、戻ってきたか、信じていた、ああ信じていたとも！」

「その顔、覚悟：：ようやく10年前と同じ貴様に戻ったな、待ち侘びたぞ！」

喜色に満ち満ちたその顔は、常の神父を知る者からしたら驚きだろう。

無感動、無表情なこの男が、あまりにも、あまりにも活き々きと、饒舌に喋るのだから。

「……………」

背後に立つ紅眼の美丈夫はその口元を笑みに変え、ただその背を見つめていた。

あの、昏い影の様なサーヴァントの襲撃から1時間程。

正面からでも、搦め手を使おうともあちらがこちらを認識した時点で詰んでいる。

それほどにこのアーチャーの力は群を抜いている。

その主従に促され、今僕らは冬木ネオハイアットホテル——10年前自分が爆破したホテルの後継にあたるホテルのスイートに通された。

第四次のケイネス・エルメロイ・アーチボルトと言ひ、魔術師然としたマスター達は危機意識は無いのか、こんな空中に居を構えて…爆破しろと言わんばかりだ。

いや…この主従ならば力づくで全て弾き返してしまいかねないが。

「で、僕をこんな所に連れてきてどうしようと言うんだい。」

ケイネスの時の様にフロアが異界化していたり、工房になっていたりはしない様だが、敵の拠点だ、警戒して悪い事はあるまい。

「…意外に臆病なんですね、貴方?」

「慎重だと言ってくれ。」

白衣に、ボルドーカラーのネクタイ、パンツスーツに身を包んだ知的な美人。

アーチャーのマスターで、名前は知らない。

声は鈴の音のようで、その容姿は100人いたら99人は振り返るであろう程に異性からも同性からも羨まれるであろうほど整っていた。

——いや…何を考えているんだ、僕は。

とか考えながら、視線はつい、豊かに実る一部分を見てしまうのは男のサガか。

「…気のせいかのお…そいつの背後に…わしが妻に睨まれた時みたいな言いようが無い怖気が見えた気がするんじゃないが…」

腕を組みながら呟くアーチャー、どこか第四次で見た征服王に似ている。

言われた途端、怖気を感じた。

嫌な事を言わないで欲しい。

お前みたいな神気溢れるサーヴァントが言うとは洒落にならない。

「…なんだろう、嫌な予感しかしないんだが。」

「■■■■…」

バーサーカー、哀れむような目で見るな、後なんでお前アーチャーに平伏してるんだ、負けを認めたみたいになるなよ、おい。

後に、彼が大神ゼウスであると聞いて納得した、バーサーカー…カリギユラが治世していたローマは彼らギリシャの神々を呼び名こそ変えつつも崇拜していたのだから、最

早最初から屈していた様なものだろう。

「は、手応えのない——きて。」

湧き出した黒化英霊を一息に葬り、キャスターと葛木に向き直るランサー。

「中つ国由来のサーヴァント、かしら…：貴方、私達の側につく気は無いかしら…：正直なところ私達の願いは半ば叶っているのよ、だから聖杯が要ると言うなら貴方に渡しても構わないわ…：マスターには死んで貰いますけど。」

このランサー、武人氣質であるのは明白、加えて理不尽な願いなど持ち合わせていないのは問わずと知れた。

ならば、この優秀な前衛を手放すてもあるまい、人間であるランサーのマスターは信用など出来ないから死んで貰うしかないが。

「は、生憎よな…：マスターに恵まれたとは言わぬが儂は強き者と死合いたいだけだな——」

ギラギラとした目は、葛木に向いている。

最早言葉は要らぬとばかりに、葛木、己がマスターまでが薄く笑いながら構えをとる。それも、本気で殺すための型を。

「殿方の考えることは今も昔も解りませんね…：さりとてマスターがそう考えたならば、

異論を挟みません、残念ですよ、ランサー。」

「は、厚遇の申し出感謝する、しかしこの身は武に捧げたものなれば——いぎ、尋常に。」
そして、思い通りに運ばないのが人生と言うものか。

最早一度目の生は終わった身でありながらも、矢張り運命と言うものからは逃れ得ぬのか。

「この、後に及んで——戻れ、じゃと!？」

「…貴様のマスター、無粋が過ぎるな…」

これ以上は言葉には出さない葛木であったが、その表情は明らかに気の毒だ、と語る。

「…地獄に堕ちろ、マスター…。」

血が流れる程に唇を噛み締め、己がマスターに恨み事を吐き出す。

「野暮用を申し付けられた、業腹だがこの様な些事で令呪を使われても叶わぬ故な——勝負は預ける。」

《毎度毎度良いところに水を差しよって…狙っておらんだらうな、貴様…》

《真逆、優先事項が出ただけの事よ。》

——どうだかの。

まあ、今は仕方あるまい…先ほどの申し出を袖にしたのは誤りであったか？

否、この機会は正しくあの男が儂を呼び寄せた故の付録の様な第二生よ——なれば、

ある程度は従うが義と言うものであろう、間違ひでは、無い筈じゃ。

「…ランサー、いつでも歓迎するわ?」

魔女が、見透かした様に笑みを向けてくる。

「は、身に余る評価、痛み入るがな…二言は無いても。」

そう言い残し。

ランサーは未練を振り払うかの様に激しい音を立て、境内の石を蹴り割る様にして離脱して行つた。

「あら、私がキャスターでなければ後始末に困る所よ、全く。」

す、と手を翳しただけで巻き戻しの様に境内の荒れた様子が消え、半壊していたものも全て綺麗に元どおりになる。

「…やはり、幾度見ても不思議なものだ、我が目を疑いたくなるな。」

常ならば黙つて見ていたであろうマスターも先のランサーの熱にあてられたか、いやに饒舌だ。

「私は——魔女ですから。」

他に言われれば許さぬ蔑称を自ら皮肉気に口にする。

「…お前は、お前だろう、キャスター。」

——そこは、メディアと呼んでほしいのだけだ。

この方にそれを求めるのも違うかしら。

などと思ししながら、コルキスの魔女、メデイアは思う。

こんな形でなく、生前に出会っていたなら、自分はその様に悲惨な人生を送らずに済んだのだろうか、と——…

「ランサー。」

と、目を剥く様に語るのは言峰綺礼、己がマスター。

「なんじゃ、マスター。」

物凄く微妙な顔で、生暖かい視線を送るランサー。

「この男を追い詰める…貴様好みではあるまいが、存外しぶとく、強かな男だ…少しは楽しめると保証しよう。」

「…構わんが、なぜ今なのだ？」

「殺さず、生かして捕らえろ…サーヴァントがいる様だがそれは完膚無きまでに殴殺して構わん。」

答えになつておらず、と言う顔ながら洩々と出て行くランサー。

「…良いのか、令呪で縛らなければ面白がつて殺しかねんぞ？」

「…あんな猪武者に、あの男がやられるものか…だが、仮にもランサーが聞いた通りの漢

であるなら奴を間違ひなく追い詰めるだろう。」

ただ、それと「殺せる」事は同義では無いが、と薄ら寒い笑顔で、自分が笑みを浮かべたことにも気づかずかずに答える綺礼。

その台詞を聞いた英雄王は、とうとう堪えきれずに笑いだした。

「ふ、ふはははは、綺礼：お前笑っているぞ？ 矢張り面白い奴よな貴様は：見ていてまるで飽きぬ。」

精々、己が成したい事をするがいい、と。

綺礼の肩を叩いて退室して行く。

「…そうか、私は——笑えて、いる、か。」

己が顔を、その無骨な手が包み、口の端と目だけが覗く。

それは、酷く歪な：人らしい感情を真には理解できぬ彼が唯一理解した命題^{こころ}。

愉悦と言う感情の魔物：。

閉じた街、閉じた空。

それを知るでもなく、しかし彼は嗤う。

それは、紛れもなく。

彼にとっては「希望」であつたのだから。

妙な悪寒、風邪でも引いたのかと仕方なく携帯のナンバーを交換し、断りを入れ、彼らが拠点にしているホテルから出て近くのコンビニへと歩いて来た。

簡単な栄養材を購入し、店先で飲み干してダストボックスに放り込む。

ガタン、と音を立ててそれは箱を揺らし。

確認して直ぐに公園を散策する様にして煙草を吸いながら歩いた。

「出てきたらどうだ：サーヴァント。」

「ふ、気づいていたか：中々に戦慣れしている様じゃな？」

「褒められて嬉しいものでもないが、な。」

煙草を踏み消し、懐の得物を握る。

「声をかけた、ならば抗う気はあると言うことじゃな：行くぞ！」

ドカン、と空気が爆破されたかの様に激しく震え、ランサーの姿が一息に迫り、直前で鋭角に角度を変えた。

「ぶ、物騒な奴じゃな！」

木には、ピンと張られた鋼。

足裏から送られた魔力で起動した、予め街の各所に仕込んでおいたトラップの一つ。

細く、束ねた女の髪と撚り合せて洗礼を施した魔力銀——ミスリルの鋼糸だ。

「そのまま首が落ちてくれれば楽だったんだけどね、残念。」

「なんと…追い詰められたのはわしの方、か…?」

辺り一面に張り巡らされた鋼系の網。

ランサーの最大の長所である「速度」は封じた。

後は、力で捻じ伏せるだけだ。

「バーサーカー、やれ!」

糸の無い、狭い範囲にバーサーカーを実体化させて、視野を共有してこれ以上は動くな、という範囲指定のみを簡潔に念話で指示を出す。

バーサーカーの怪力を生かし、連撃を加えるも、ひらひらとかわされる。

しかし掠めた拳は木の幹を粉碎し、破片が辺りに降り注いだ。

「は、ほっ、こいつはたまらんな…だが、速さだけで武を誇ったわけでない事を教えてやろうか!」

槍を投げ捨てダン!と脚を踏み、地を揺らす。

本来ならばこの様に強く踏み込むのは震脚としては間違いなのだが、敢えての派手なパフォーマンスだ。

力で勝るバーサーカーに対し、まるで柳の様な体捌きでゆるり、と先ほどの音と反対に。

揺らめく様に傍に滑り込み。

バーサーカーの胸に、トン、と。

——拳が触れた。

「絶招——猛虎・硬爬山……」

本当に軽く、ただコツンと当たるだけの拳が、バーサーカーの逞しい胸を、軽鎧ごと陥没させた、常人ならばそれだけで命絶たれていた事だろう。さらには、そこに追い討つ様に肘が衝撃が消える「前」に吸い込まれた。

バガン!!!

鉋石をハンマーで叩き割る様な音。

吹き飛んだバーサーカーの身体が、鋼系に絡まり、ズタボロになりながら止まる。

酷い有様だが、なんとか霊核は損傷していない、慌てて治癒の為の魔力を流す。

「なっ——バ、バーサーカー!?!」

なんと言う事か。

槍を手放してなおあの戦闘力。

桁違いの技術、そしてあの技——

「真逆、貴方は……!」

「ほ、知っておったか……人はワシを……『神槍』……などと呼ぶらしいなっ。」

やはり、サーヴァントとは面白い…ワシの本命の一撃を受け…なお生き足掻くもの
いようとは――

そう眩く顔は喜びに染まる、まるで子供みたいな…無邪気な笑顔で。

しかし、その手に死を乗せたまま……

稀代の格闘家が、手を伸ばす――

「迂闊だね、神槍…、李、書文!!」

そう、迂闊だ。

槍を手放さずに鋼糸を切断しながら戦われれば今頃詰みだったかもしれない、しかし…その格闘家故の矜持が、自信が。

彼の判断を過たせた。

言葉と同時に懐で握っていた得物。

それを、抜く――フリをして。

逆手で隠し持っていたもう一つを放り投げる。

キュア!!

光が迸り、ランサーの眼を灼いた。

「ツガ、小癩な——！」

至近距離でのフラッシュグレネード。

相手が、人であつたならばまさか爆薬を投げつけられたか、と目を閉じて伏せただろう。

だが、ランサーはそうはせず、爆破前に投げ返す自信があつたが故の過ちを犯した。確かに彼は疾い。

着火前に掴み取り、投げ返そうと手首のスナップのみで投げ返した。

が、切嗣がそれを見越していないはずも無い。

投げ返すか、蹴り飛ばすか、或いはそのまま突つ込んでくる、と予想し、既に爆破寸前まで待つてから投げていた。

結果的にソレは、ランサーの掌を離れ、彼の顔面の高さで起爆した。

切嗣は既に背を向け、目を閉じたまま記憶した地形を思い出しつつ疾駆する。

「バーサーカー、霊体化して付いて来い、逃げる!!」

流星に目を灼かれ、涙を流しながら一瞬躊躇うランサーを背に、とにかく逃げた。

このままでは拙い。

決定打が無いのだ、そもそも自分には聖杯など必要無い、寧ろ破壊しなければならぬいからこそ病んだ身体を押し参加したのだから。

「ならば…誰かと手を組むのも…妙手かもしれないな。」

10年前なら、考えもしなかったであろう思考。

舞弥がいたら、言うだろうか。

——切嗣、貴方は弱くなった、と。

「は、なんだありやあ…」

黒づくめのマスターとバーサーカー、それを追い詰めたランサーらしい相手の戦闘を影から見ているのは雁夜が召喚したアサシン。

「バーサーカーもとんでもないパワーだった…槍を手放してからのの方が強いんじゃないのか、あのランサー…」

槍をまともに振るう場面こそなかったが故の誤解であったが、彼のランサーはその槍の手腕は正に神域。

それを鍛錬する為の前段階に習得したもののこそ八極拳であり、後に李氏八極拳と呼ばれ数少ない弟子によって伝えられている、現代に残る数少ない実践派の武術。

しかし、その気性から「手を抜く」などと言うことが一切無かった彼は、生涯実践派

の技術を錬磨し続け、無駄の無い…実戦において見た目が派手なだけの技術など意味は無いと地味であろうと意味のあるものを突き詰めた。

結果として生まれたのが先に挙げた李氏八極拳でありその中心にあるのが彼自身の生涯そのもの——『六合大槍』である。

つまりは先に見た拳打は彼にしてみれば敵に、状況に合わせたに過ぎない。

「にしても…あのバーサーカーのマスター…そうか、そうかよ…皮肉な運命ってものかな？ やっぱりマスターの話通り…イレギュラーの多い聖杯戦争、なんだな…」

一人納得する様に呟き、アサシンは闇に、消えた。

第31話 『神々の系譜』

視界が白く灼ける。

急激な可視光線の変動に、サーヴァントの常人以上の視力は逆効果だった。眼が良い分余計に光を浴びて眩む。

しかし。

一瞬の躊躇いこそあれ……そこまでだ。

涙を流したまま、それも眼は閉じたまま。

ランサー……否。

李書文は走り出した。

獲物が逃げた先、林の木々や残ったワイヤーも障害物にすらならない。

走るスペースがある以上、何処に何があるうが問題無い。

圏境——、中国における武術、或いは仙道の極みの一。

万物自然の気と己自身を合一化する事により周囲に完全に溶けて消える魔技。

……万物の気に合一すると言う事は即ち、周りが見えずとも何ら問題が無い。

仮に音や触感……五感悉くが奪われたとしても。

彼の神槍を止める事能わず。

「くく、カカカツ、やってくれた、やりおる、楽しいなあ…なあ！」
声が響く。

故に段々と後ろから迫っているのは解る。

だが、気配が無い、消えた。

「クソ、なんなんだ…魔力すら感じない…声だけが聞こえるなどと、これはどんな宝具だ…かの神槍にこんな逸話など——」

衛宮切嗣は焦っていた。

魔術師殺しと呼ばれ、何度も死線をくぐり抜けた自負がある。

それが。

気配を消したわけでも無い、喋りすらしている相手の位置が特定出来ない。

「怖いか、恐ろしいか、小僧！」

享年は70にもなろうという年齢だったと聞く。

ならば自分は確かに小僧だろう。

「ああ、怖いね気味が悪いっ、何なんだ李書文っ、貴方は一体何をしている…貴方ほどの武人が姿も見せず凶手（暗殺者）の真似事か!？」

「死地に於いて——闘争の場に於いてよもやその様な下らぬ誇りを問われようとは…我

が楽しみを下げに落とすで無いわ。今更その様な矜持は持たぬ、自尊心などという下らぬ妄想に取り付かれ、武を磨く道を謀り、己が意思を貫徹ぬモノなど意味は無い——。」
何かに気づいたかの様に会話が止まる。

…一瞬の静寂。

「ならば…とつくりと——敗北の味を知るが良い、人間つつ!!」

響いたのは轟雷そのもの。

響き渡る荒々しい声に導かれる様に雷の雨が降り注ぐ。

辺りは光と音の洪水に満たされ、一瞬何もわからないくらいに視界と可聴域が破壊されんばかり。

「っ、っこれは…っ!?!」

驚くランサーの圏境が破れ、姿が見えた。

「気による合一化は辺りを押し流すほどの広範囲の雷撃に蹂躪されてはとても保てるものではなかった。」

「ほう！よく避けた、人間！」

「滅茶苦茶な奴じゃな、おい!?!」

流石の「神槍」も慌てていた。

然もありなん…僕だって最初は度肝を抜かれたからな。

全く厄介だ、ああ、厄介だ。

余りにも規格外で、あまりにトンデモナイ。
だが。

それだけに——味方となればこれほど頼もしいものも他に居ない。

「…助けを求め、それはそう言う事だと認識して宜しいのですね？ミスタ、衛宮。」

「ああ、是非も無し…僕としても火力不足に悩んでいた何処に渡りに船さ、先ほどはワザと渋りましたが…バレていたかい？」

「まあ、連絡先を聞いて少し考えたいなんて言いながら通話状態で黙って会話だけ流されればわかりますよ。」

「…違くない、すまないが宜しく頼むよ…あー…」

「…私の事は…そうですね、エレインとでもお呼びください。」

「了解した、M s. エレイン。」

会話が進む間もアーチャーは彼らとランサーの間に仁王立ちして牽制している。
やがてしびれを切らしたランサーが吠えた。

「貴様ら、ワシを無視するでないわ！」

槍を構え、アーチャーに矛先を向ける。

「は、この私に…宝具でもない鋼を向けるか？死にたい様だなランサー、死にたくなけれ

ば宝具を出せ…その槍、捨て置いて、な？」

アーチャーの両腕に紫電が奔る。

それはバチバチと火花を散らしながらアーチャーの前方で弾け続けた。

「…確かに、落雷が槍に落ちては敵わんな。」

と。

あまりにあつさりと槍を手放し、再び徒手空拳になるランサー。

「生憎神秘だなんだとが薄い時代に生まれたものでな…他より幾分か丈夫で重い造りの

この槍以外、持ちあわせてはおらんよ。」

故に。

槍を手放して相手をしよう、と。

このアーチャー相手に言い放ったのだ、このランサーは。

「鬼に逢うては鬼と、仏に逢うては仏と——、心ゆくまで殴りあおうではないか！」

カツ、と笑いなながら声をうわずらせ、雄叫びを上げるランサー。

「武人の矜持という奴か、先ほど否定していたわりには熱いことではないか。」

「勘違いするな…わしはな、強きものと存分に死合いをしたいだけよ…生前、ついぞ味わえなんだ生死を賭けた真の武を…競う相手に飢えていただけの事…そこに矜持など無いわ。」

「は…嫌いでは無いぞ。貴様の様に勇猛な猛者は貴重故な。もしも望むなら我が血を飲んで、神の末席に座る気は無いか、神性は無かろうと又シならオリユンポスに置いても良かろうよ。」

「アーチャー…馬鹿…！」

自らの情報をうっかり口にするアーチャーにマスター、エレインが嗜める。

「オリユンポス…確か…ギリシャ神話の？そしてその雷の力…真逆御身は…神の列席に名を連ねた者か…！」

列席どころか頂点に居るのだが、そこはエレインも口にはしない。

「…勇者よ、返事は如何に？」

「は、光栄な事じゃがなあ…お断りだ。」

ニヤ、と笑いながら拳を構えるランサー。

「残念だ。ならば…敵として、その身の一切を滅ぼしてやろう！」
それを合図に。

戦いの火蓋は切られた。

一瞬にしてランサーが間合いを詰めようと神速の移動を見せる。

しかし、アーチャーもまた雷速の移動により同じだけ下がる。

そのまま両手から放たれた稲光りが地面を叩き、土が爆ぜた。

土煙がもうもうと立ち込め、視界が塞がれる。

だが、ランサーは圏境による気の合一により視界は要らず、アーチャーの神の眼もまた煙一つで視界を奪われる様なものではなかった。

互いに煙は意味は無く、ランサーが放ったのだらうか、気を纏わせた石が弾丸の如き速度を持つてアーチャーへ殺到する、それは恐ろしい威力の指弾だった。

指の力だけで弾かれた石塊は気を纏い、鋼鉄すら貫く魔弾と化し、それを電磁波を用いた反作用で反らしいなすアーチャー。

その直後には雷の雨がランサーを撃たんと降り注ぐ。

一進一退の攻防は、一見決め手を打てないアーチャーが不利にも見えた。

何せアーチャーの雷撃は強力だが今の所当たる気配が皆無。

対してランサーは徐々にだがその間合いを詰めつつある。

このままいけば遠からずランサーが懐に入り込み、強烈な一撃を見舞えば終わり。

——素人目にはそう見えた。

だが、実の所事はそう単純では無い。

ランサーは確かに一撃必殺と言える拳すら持つ、だが近づけない。

距離を詰めてはいるが先ほどの様な異常な速度を發揮されればまた離されるだけだ。

そしてアーチャーもまた、決め手を打つにはここはあまりに街中すぎた。

もし、先ほど以上の威力でランサーを仕留め得るだけの雷光を放つなら、街を巻き込むことになるのだ。

「ふん、流石は神の列席に名を連ねる者よな…：なんじゃ先の異常な速度は、なんの手法か。」

「は？簡単な事よ。雷撃を調整して電磁磁石的な応用で浮かんで走っただけだ。」

アーチャーの説明はイマイチ分かり辛い。

つまりは彼は人型のリニアモーターカーになった様なものであった。

足元に作り出した力場と、地面から微弱に発せられている磁力を増幅し、反撥させる事でまさに雷速を可能にしていた。

…仮に、人間がこの移動を行なった場合は身体が真つ二つに折れ曲がるだろう、急加速の負荷に耐えられずに。

「ふうむ、やはり恐怖^{フォボス}の方では速さが足らんなあ…？」

「カ、カカッ！その速さでなお足らぬと来たか、楽しい、楽しいぞ…：アーチャーツ…：とと、難儀な事じゃな…：身体が若いからか…：強者を前にすると妙に落ち着かんわ!!」

満面の笑みでそんな事を宣い雷の雨を避けながら飛び回るランサー。

それを嬉々として追い撃つアーチャー。

「…ねえM.S. …エレイン。」

「何でしよう魔術師殺しメイガスキラ？」

「僕等完全に蚊帳の外じゃないか？」

「…普段役立たずな上にセクハラゴッドですから…戦闘でくらい死ぬほど役にたつてもらいませんと。」

「…君、辛辣だね…」

「…。」

互いに会話が得意で無いマスター二人は直ぐに会話が尽きた。

沈黙したまま戦いの趨勢を見続けるだけ。

しばらくそうして落雷と石飛礫の飛び交う様を眺めていた二人の表情が凍りつく。

「——この、殺気……」

「なんだ、どこかで……このぬたつく様な陰湿な気配……」

二人に向けられた明確な敵意。

それはワザワザその存在をアピールするが如くに発されていた。

「——久しいな、衛宮……切嗣？」

いつの間にか、公園の端には人型の影、そこに在るは黒。

漆黒のカソックに身を包んだ神の使徒。

「貴様……言峰——綺礼!？」

切嗣は目を剥いて眼前の「敵」を見た。

既に死んだ筈の男。

確かにこの手で殺した男がそこに居た。

「馬鹿な、馬鹿なつ、貴様は確かに……起源弾で撃ち、その上僕がこの手で心臓を撃ち抜いた! 何故生きている……っ!？」

そして。

死した筈の男の頭上にある黄金。

街灯の上に手を組んで立つは全き黄金の王。

「貴方……貴方は……英雄王……ギルガメツシュ……!？」

その姿を見、エレインは瞠目する。

「ふん、我が名を知るか……この時代にあつても私の偉業は揺るがぬと見える……良い、特にそこな雑種の不敬は許そう、本来ならば私の名を軽々しく口にした時点で極刑ものだが……そこは時代故と寛容にもなろうではないか、貴様の美しさにも免じて、な。」

ナチュラルに上から見下しつつ口説きにかかるこの傲岸不遜が服を着た様な男。

エレインはいかな理由かこの黄金の英霊の真名を知りえた様だ、しかし——

「英雄王、だと……何故、貴様までが現界している、第4次から10年だぞ!？」

「ふん、我を誰と思っている？その程度の事造作もないわ…貴様こそしぶとい事よな？人の身である中身に侵されながら良く今も戦えるものだ、そこは褒めてやらんでもない。」

お前の様な男に褒められても嬉しくもならない、切嗣はそう考えながらも別の領域でも思考する。

考えていた限りにおいて最悪を通り越した想定外。今ここでこの二人が現れるなど…！

「不思議かね？衛宮切嗣。」

「ああ、地獄から戻ってきたか…言峰綺礼。」

「酷い言われようだな…私はこれでも聖職者だぞ、逝くならば天に召されるのではないかな、私ほど敬虔な信徒もそうは居まい。」

不敵な笑み。

人を見下す様な嘲りの眼。

「間違いなく…貴様は言峰綺礼、なんだな…」

「私の様な人間が二人とこの世にいるものか、そして貴様には…今一度問わねばならぬ。」

「く、クク…やはり貴様らは面白い…いや、愉快であるぞ！」

「——マスター……何故出てきたかは知らぬがまた邪魔をしに来たのか。」

アーチャーと睨みあう形で乱入者に注視するランサー。

アーチャーもまた、二人を見て動きを止めていた。

「無粋よなあ……興が乗ってきたと言うに……なんなんだ、貴様らは。」

「は、貴様の様な愚物に言われようとはな……貴様は神に連なる者だな？ その神気……虫唾が走るわ。」

忌々しげにアーチャー……ゼウスを睨みつける英雄王。

「ランサー、言ったはずだな？ アーチャーには手を出すな、と。」

ギヌ口、と睨みを効かせる綺礼。

ランサーに対し、さり気なく左手の令呪をチラつかせる。

「ワシが容易く敗れると言いたいのか？」

「容易くとは思わん……だが、負ける。」

「舐められたものよな……神であろうが、鬼であろうが毆殺して魅せようではないか。」

ランサーは己がマスターを睨み返し、視線ですら人が殺せるのでは無いかと言う程に怒りを向ける。

「ランサーよ……貴様は勝てぬよ、そやつが真実神であるのなら——人の身から逸脱する術を持たぬ貴様は負ける、間違いなくな。」

黄金が語る。

人の身に過ぎぬ槍兵が哀れと言わんばかりに。

「ならば見よ……止めろと言うなら令呪を2画は使え……でなくばワシは止まらんぞ？」

「いいだろう、止めはせん……大言を吐くのならばやってみるがいい、……令呪二画を捧げる、ランサー……貴様の敵を、必ず殺せ。」

翳した令呪がキーン！と音を鳴らして魔力の塊が、李書文の身体へ吸い込まれてゆく。

「なんじゃ、話せるではないかマスター……八極拳を学んでおるだけあるな。」

笑いを一つ、鬼気すら立ち昇る背を向けて。

ゼウスへと再び向き直る李書文。

「アーチャー……いやさ……異国の神よ。」

「何だ、勇者よ。」

「我が一撃——躲してみせよ。」

腰だめに脚を沈め、震脚を静かに踏み込む。

構えは無窮。

武練の果てに至る一つの極致がここに在る。

それは彼の唯一の矜持。

武を磨く、武を放つ。

悉くを砕くが為の——ニノウチイラズ。

「神に槍する我が拳——徒手であらうと全てを砕く——」

これ以上の言葉は要らず。

これ以上の時間も要らず。

ただ、必倒の理ことわりのみ。

「神槍無二打——…七孔噴血…撒き死ねい!!」

我が拳に、二の打ち要らず

今までを凌駕する速度で。

それまでを圧倒する氣勢で。

拳／死が迫る。

躲せない。

これを躲すだけの技量はアーチャーには無い。

しかして、受ければ死。

ならば。

「見事なり——なればこそ…とく見よ…神の権能、我が系譜——顕れ出でよ。」

「アーチャー…まさか…止めなさい、それは貴方の…!」

マスターが止めると叫ぶが遅い。第一…出さねば死に等しい痛みが待っている、それ

は御免被る。

「災厄攘う神威の山羊盾——!!」

煌びやかな装飾に彩られた真円型の盾。

それは…表面に神獣、アマルティアの鞣し革が貼られ、神の金属…アダマンが組み込まれた絶対不可侵の神の盾。

ゼウスが娘、女神アテーナーに貸し与えたとされる対神宝具。

李書文の無二打が絶死の拳ならば、これは全てを断絶し邪悪を打ち払う神の権能。

盾に阻まれた拳が火花を散らす。

魔力を喰い散らかし、権能すら殺しにかかるその脅威の拳が勢いを増す。

「カ、カ、カカカツ世界は広いッ！」

やがて。

その拳が血を噴き出した。

手首から先が碎けて微塵に散る。

「いいや、貴様はやはり人を超えておるよ…ワシが相手でなくば…言葉通り神々すら殺し得る拳であつたわ。」

ギシ…メキメキッ、ビギンッ!!

高い音を立て、盾が二つに割れた。

神の一撃すら受け流す不可侵の盾が、だ。

「我が宝具……遥か連なる神成る系譜、はわしに連なる神の宝具、捧げられた供物に至るまでを召喚する……中でもアイギスは絶対の護りであったのだが……貴様の拳は……神が編んだ概念すら殺してのけたか……李書文。」

「アーチャー、まだ儂は……生きておるぞ！」

と、足元にあつた槍を片足で跳ね上げ、片手で掴むと同時に恐ろしい程の速度でアーチャーの眉間へと穿つ。

だが。

穂先がアーチャーへ届くことはなかった。

先ほど石飛礫てを逸らしたのと同じ電磁干渉。

槍が通常の金属に過ぎぬ以上その干渉を避けることは叶わなかった。

「ぬかつ、た……わ……ほんに……世界は広い……クク、業腹じゃがマスター、ギルガメツシュ……貴様らの言葉通りになつてもうたなあ……だが……満足じゃわい、神に一太刀……浴びせた故に、な。」

「何……？」

ギルガメツシュが怪訝な顔で問い返す。

直後、ゼウスの頬が深く裂けた。

血飛沫が舞い、赤いものが流れる。

「は…衝撃波で我が肌を裂いたか…本当に惜しい男よな…」

哀しげに呟いたゼウスの腕は、ランサー、李書文の胸を貫いていた。

紫電を纏う貫手が、霊核を破壊したのだ。

「盾が無ければ儂が死んでいただろう、誇れランサー、貴様は確かに全てを殺す。」

「は、敵に慰めの言葉を投げかけられようとはな…だが…それがギリシヤの大神とあらば…誉れとすべきかのお…ああ、だがやはり…悔、し……」

ランサーの身体が金の粒子となって崩れていく。

サーヴァントの死とはこう言う事だ。

霊基を保てず座へと還る。

（ち、消える間に思い出すか…なんじゃ、■■■■…おぬしがマスターなぞしておったのか…随分と冷たい顔をするようになりおつ、て…声をかけてやりたいが…は、もう声帯も維持できないな…すまんなあ、どうやら儂はお主らを害してしもうたようだ…）

書文の無事な片手が、ゼウスの後ろへと伸び、何かを掴もうかと言う様に差し出され。最後にふ、と微笑を浮かべ…そしてついに消え崩れた。

「ランサー…安らかに…さて、次はどなたが相手でしょうか…今、何故だか自分でもわかりませんが物凄くイライラするんです。」

「マスター…奴らの相手はワシがするんじやから…下がつとれ。」

「…あの神父の相手は僕がしよう、エレインはサポートをしてくれると助かる。」
何故だか、この女性性は信頼できる。

どこか…雰囲気が舞弥に似ているからか。

「…しかたありませんね、さあ…それでは行きますよ、アーチャー、切嗣！」
いきなり呼び捨てか、と少々面食らいながら切嗣もまた答える。

「…お手柔らかに、レディ。」

それを見た英雄王が無言で宝物庫を展開。

言峰もまた手に黒鍵——代行者が用いる簡易概念礼装を構えた。

「さあ…今度こそ…本当の答えを聞かせてもらおうぞ…衛宮切嗣…！」

——夜の公園に、銃声が、響いた。

第32話 『激怒』

半ばが焼け焦げた木々の間を走り抜け、夜の公園の中で3つの影が交差する。

「最初から互いの場所が知れているなんて……どうにも不利だ、ねー」

と、愚痴をこぼしながら腰のホルスターから抜いた短銃を連射する。

「ハハハハハハッ、無駄だ、衛宮切嗣！」

嬉しくてたまらないといった表情で黒鍵——、代行者が使う簡易式典礼装を扇状に展開して弾丸を弾き、躲しながら迫るカソックの男……言峰綺礼。

「私を、忘れていただいては困ります！」

横合いから飛び出したエレインが尋常でない速度で体当たりを仕掛ける。

「——身体強化か、驚異的な速度だが……緩いな、女！」

あつさりと体当たりの勢いを肩から僅かに触れるようにして受け流した綺礼は、そのままエレインの背後にまわり……深く踏み込み、足裏から腰、肩にかけて練りこんだ螺旋運動のみでエレインの華奢な身体を弾き飛ばした。

「きゃあつ!?」

意外に可愛らしい声を上げて吹き飛ばすエレイン。

木の幹にぶつかり、ウツと呻いて崩れ落ちた。

「こうげき靠撃 とはこうやるのだ…とランサーなら言っただろうな？」

ニヤ、と口角を吊り上げてエレインを一瞥した後直ぐに切嗣に視線を戻す綺礼。

「緩くなつたのは…君じゃあないのか、言峰綺礼！」

足で踏んで仕掛けていた罠を起動。

綺礼の足元から真上に吹き上がるのは対人地雷、凶悪な威力を誇る鋼弾が、人の身体など易々と――

「は、見越していないと思っただか？」

綺礼の身体は驚くことに、その衝撃をもともしなかった。

否、正確には鋼弾が…爆風に捲き上る土煙までが全て滑るようにして身体に触れずに通過していく。

ありえない。

「な、なんだと？」

驚く切嗣を見て益々口角を吊り上げ、答えを出す綺礼。

「クク、貴様がこうした道具に頼る事は分かっていたのでな…ギルガメッシュから借りた矢避けの護りを付与した魔術礼装だ。」

チャラ、とカソツクの中からネツクレスを取り出してみせる。

「チ…やつかいな！」

不味い状況である。

近接戦闘に秀でた相手に対して飛び道具が実質封じられた。

地雷が吹上げた爆圧や鋼弾まで「飛び道具」と認識するのか。

…わざわざ銃を防いで見せた後から明かしたあたり、何度でも完全に防ぐと言う訳ではなさそうだが…あと幾度叩きこめば通じるかが解らない以上望みは薄い。

あちらからすれば致命的なもの、躲しきれないものを礼装で無効化するだけの話だろう。

仕方なくスーツの内側、銃とは逆に吊るしてあつたサバイバルナイフを抜き、ホルスターと役立たずになつた銃を投げ捨てた。

これで手持ちの武装はナイフと…懐のコンテナダーカスタムのみ。

「ぐ、噂にたがわぬ実力…流石は元、代行者…人外を相手に立ち回る化け物揃いとは聞いていましたが…私も拳法、習っておけば良かったなんて今更思いましたよ…つう…！」
顔をしかめ、ふらつきながら立ち上がるエレイン。

「…頑丈だな、背骨が折れていてもおかしくない当たり方をした筈だが…。」

僅かに眉を上げ、エレインの頑健さに驚く綺礼。

「生憎、頑丈さだけが取り柄なんです、私。」

「下がれ、君では足手まといにしかならない…むしろアーチャーの補助に回る方がいい。」

「何を…貴方も攻め手がないんじゃないですか、魔術師殺し？」

強がるように軽口を叩くエレイン。

「…だが、君がいても変わる訳では、」

「あまり見せたくはありませんでしたが致し方ありません…！」

と、先ほどと同じく無策に体当たりを仕掛けるエレイン、あれでは先の繰り返しだ。

いや、僅かに違ふとすれば左手が何故か曲げられ、何かを構えるような動作で突き進んでいるが…肘打ちでも加える気だろうか？

「やめろ、無駄だ！」

叫ぶが、遅い。

「…愚かな！」

綺礼も先と同じようにエレインの肩口に合わせて受け流そうとして――

吹き飛んだのは言峰綺礼の方だった。

「ぬぐわっ!？」

バチ、と弾かれたようにエレインの身体に触れる前に、綺礼の身体がまるで車に跳ね

られたかのように錐揉みしながら空中に投げ出される。

「…な、んだと!？」

しかし、体操のオリンピック選手もかくやという身のこなしで僅かに体制を崩しながらも着地する。

「…何をした、女!」

「さあ?手の内を明かすのは三流のやる事ですから?」

先ほどの綺礼の行動を揶揄するように言い返すエレイン。

戦局は膠着し始めていた。

互いが互いの手の内を見破れない、或いは対処に困る現状。

エレインのなんらかの手もまた、綺礼に致命傷を与えるには足りない。

数度、繰り返されたその攻防に区切りがついたのは綺礼と、エレイン双方が唐突に呻き、飛び退いたからだった。

「く、アーチャーつ、宝具を連続展開しましたね…ま、魔力を使いすぎ、で…う!」

「ち、ギルガメッシュめ…まさかアレを抜いた、な?」

互いが魔力をサーヴァントに吸い上げられたのだろう。

本来なら絶好のチャンス…しかしあの矢避けのネックレスがある以上切嗣には手段が無い、バーサーカーもまだランサー戦のダメージから回復していない。

「この場合は…預けたぞ、衛宮、切嗣！」

口惜しそうに吐き捨て、言峰綺礼は去っていく。

「悔しいのは此方だよ…全く忌々しい…大丈夫かい、エレイン？」

膝をついたエレインを抱き起こし、支える。

「だ、大丈夫…魔力を…かなり持っていかれてしまいました…。」

蒼白な顔。

あまり大丈夫には見えなかった。

「疾く、滅びよっ！」

黄金の波紋から無数の宝具が飛び出しアーチャーを襲う。

剣、槍、斧、刀、様々な武具は全てに神性を打破するための力を備えた宝具だ。

「…こりゃあ、喰らえば痛いではすまん、あ！」

アーチャー…、ゼウスも負けじと雷光を激しく迸らせて宝具の群れを撃ち墜とす。

「我（オレ）は貴様ら神々がどうしようもなく煩わしい、虫唾が走るわ！」

「初対面からなんだかんだと言われても困るな…貴様はあれか、現代で言うところの

ボツチか、ボツチと言う奴だな、うわはははは！」

「我を…出来損ないの凡百と同列に扱うでないわ、この愚神めがっ!!」

激情に駆られたギルガメッシュの背後と言わず、あらゆる方向から宝具群が顔を覗かせると一緒に発射された。

それはさながら黄金の竜巻の如く波紋は次々展開されてはゼウスへと宝具射出を繰り返す。

「は、こいつあかなわんな！」

僅かに慌てるそぶりをみせたゼウスだが、声にはまだまだ余裕がある。

「現世より疾く去ねっ！」

恐ろしい轟音と閃光が辺りを染め上げ、嵐の様な攻めが終わる、と同時に。

「油断大敵、と言う言葉を知つとるかっウルクの英雄王!!」

頭上より声とともに降り注ぐ極太の雷光。

ゼウスの姿は先ほどもまでの重厚な黒い鎧ではなく、眩い輝きを纏う純白の軽鎧に換装されていた。

宝具、イランブシイ光輝。

雷光が如き動きを可能にする雷光そのものを凝縮した光の鎧。

ランサーに見せた雷速の移動を常に、それも空中ですら飛行可能にしたその速度は黄

金の竜巻を逃れて余りあるものだった。更にはその効果は速さのみではなく、雷を増幅する効果も備えている。

「な、めるなっああああっ!!!」

ギルガメツシュの背後から飛び出した自動迎撃宝具である銀の円盤群が雷光を遮り、威力を減衰させる。

が、打ち消すことは叶わず押し負け、煙を吹いて爆散した。

が、威力を落としたソレを新たに取り出した雷光を吸収する効果をもつ剣で払い、ようやく相殺する。

「これを受けきるか…英雄王の名は伊達ではないな、んんっ!？」

「貴様に褒められようと…苛立ちしか湧かんわ戯けっ!!」

ともに破格の霊格を備えたアーチャー同士。

恐ろしいまでの遠距離戦が繰り返される。

ただ、多彩な宝具を操るギルガメツシュに対してゼウスはその手数はともかく、種類は少ない。雷と、電磁誘導によるレールガン化した物質射出のみだ。

だが。

ギルガメツシュに乖離剣「エア」がある様に。

ゼウスにもまたまだ見せていない残り10の神具がある。

オリュンポス12神の力の象徴たる神の扱う宝具が、そして自身の切り札たる神の雷も。

「ふははははは、当たらねば意味がないぞっ英雄王っ!!」

神性を打破する宝具をいくら撃ち込もうと、確かにゼウスのあの速度では当たるものにもない。

「ならば…縛り上げてやろう、天の鎖よ!」

ギルガメッシュが手を振り上げ、振り降ろすと360度あらゆる方向から鎖が飛び出した。

その先端は尖っており突き刺されれば無事ではすまないだろう。

「は、どうしたところで囲みを抜けければ同じ…ぬ!?」

先ほどと同じく鎖の囲みを抜けようと速度を上げると、鎖もまた恐ろしい勢いで加速し、ゼウスの脚を捕らえた。

「馬鹿な、なんじゃこれは!」

「天の鎖…我が友エルキドゥが遺した対神宝具…原初の神すら拘束せしめた神縛る鎖よ、そおら、締め上げてやろうぞ!」

左脚がギリギリと鎖に締め付けられ、肉を裂き、血が滲む。

「は、神の血も赤色であったか!」

愉快そうにギルガメツシュが笑い、更に手を振り下ろす。

鎖がゼウスの四肢を拘束し、宙空に磔にした。

「ふはははははつ、その鎖は貴様の神性が強ければ強いほど強度を増し、なおかつ締め上げるつそのまま手脚を引きちぎるか、或いは串刺しか…選べ…愚神!!」

「やれやれ…この様な切り札を持つておったか…仕方あるまいつ大盤振る舞いじゃ…神の権能、我が系譜——顕れ出でよ。」

ゼウスを中心に膨れ上がる神気。

鎖はそれを感じ益々締め上げるが、ゼウスは僅かに顔を歪めたのみで宝具を発動する。

「燃え、灼き断つ軍神の剣!!!」

手を封じられているからか、ゼウスの眼前に顕現した黒い刃をもつ諸刃の片手剣。

それは一種恐ろしい黒々とした刃に光を反射させ…生じた赤黒い火閃が天の鎖を一瞬にして焼き切った。

「なあ、にいつ?!」

驚愕しながらも再度鎖を展開しようとするギルガメツシュ、だが。

「天の鎖よっ!!」

鎖は、姿を見せない。

「な…、天の鎖よっ!?!」

悲鳴に近い声で、ギルガメツシュが珍しく取り乱す。

「…貴様とその厄介な鎖のえにしを一時的に断ち切った…いかに叫べどもその鎖は応えぬよ…では…反撃といこうかの!!」

軍神の剣が消え、ゼウスがそう言った直後。

ギルガメツシュが爆ぜる様に飛び出し、手にした剣で切りかかった。

「ぬわっ!?!」

鬼気迫る勢いと、その異常な速度。

先ほどまでのギルガメツシュとどこか違う。

「貴様、貴様っ、よくも…エルキドウとの絆を、断ち切っただと…許さん、許さんぞこの、この…クソ戯けがああああっ!!!」

語彙が貧弱になるほど、ギルガメツシュは怒りに狂いながら剣を振るう。

「ぬわっ、と、ほ、おおっ!?!」

ギルガメツシュの周りにいくつもの文様の様な輝きが見える。

おそらくあれらがギルガメツシュの身体能力を限界以上に引き上げているのだろう。「い、イランプシイの雷速に追いつがるなど、出鱈目だな貴様っ!?!」

「死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、消え失せろこの愚物があー!?!」

劍で切り掛かりながら宝具を射出し、更には自動迎撃宝具を攻撃に転用し、自らを掠める様な射出の仕方となりふり構わない血眼の攻め。

それでも躲し続けるゼウスに業を煮やし、再び大量の宝具を連続展開する。

「ちよこまかとお…逃げ回るしかできんのか、貴様はっ！」

そして、先ほど以上の速度で撃ち出された黄金の竜巻、その流れに放たれた雷を放ち、吸収もする自動迎撃宝具。

それを盾にして引き抜いたのは――

黒い螺旋を描く幾何学的な尖塔に赤いラインが走る奇形、英雄王が誇る最強最大の対界宝具、世界を撃ち壊す創世の劍。

「ちいいつ、ソレは、まさか…！」

「知っていたか…ならばこれを拜謁する榮譽に咽びながらあの世に行け！…我が最大の一撃にて幕引きとしてやる…滅ぶがいい…っ、天地乖離す――」

乖離劍の螺旋塔部分が回転をはじめ、今にも放たんと振り上げた、その刹那。ドクン、と鼓動が跳ね上がる様に。

ギルガメッシュの脳裏に記憶が駆け抜けた。

「なんだ、この…記憶――は、く…ん？」

唐突に動きを止めたギルガメッシュを訝しみながらもゼウスもまた助かったとその

隙に離脱する。

「なんじゃ、あ奴？…まあ、マスターに無理をさせすぎたよつてな…ちようど良いわ。」
頭を抱えるギルガメツシュを他所に。

ゼウスは逃げの一手を打つのであった。

第33話 『雅、翳りて。』

「……もう、やめてください……。」

やめる？ ナニを？

「何度、こんなことを繰り返すんですか？」

……ガ……、……ルマデ。

「我儘を言わないでください、桜。」

ヌウ、と伸び上がった影の両手が、少女の頬を慈しむ様に撫でた。

「——やめて！ ライダーの顔で、声で……私を呼ばないで!!」

黒く歪んだタールのような影から這い出た、上半身だけのメドゥーサ。

その身体は衣服もなく、豊満な乳房が溢れでる様にして見えている。

顔は右半分が赤黒いラインに侵され、目は白眼が黒く、黒目が真っ赤に染まっている。

バシ、ツと。

平手がメドゥーサの手を払いのけた。

虚数、ノツカイテ、ヨ……汝ハ、貴重、ダ。

ユエに、コソ、キオ、く、を残した、ニ。

パツ、と。

脳裏によぎるのは大聖杯を前にしてその身体を影に貫かれる赤毛の少年の姿。
 「先輩、先輩、先輩……もう、死なないで、生きて下さい、生きて、生きて……うあーあ
 ああああああああつ!!」

もう、少女を蹂躪する悍ましい蟲も、翁も居ない、だと、言うのに。

少女は——ちつとも、幸せになれはしなかった、自由すら、無かった。

||

赤い月の浮かぶ空。

冬木旧市街の武家屋敷の庭に、三人のマスターとサーヴァントは集っていた。

「さて、士郎に、アーチャー。」

「なんだね、ア……セイバー?」

「なんだい、ア……セイバー。」

「二人してアサシンって言いかけるとやめてもらえますか?!泣きますよ、私!!」

抗議するアサシンのアルトリアはもう半泣きである。

「い、いやすまん、何故か口走りかけた…」

「え、俺はアル——つて、いや真名言いそうになって真名はまずいかな、と…」

「士郎は許します、アーチャーは後でカリバります、確定です、むしろ確定からの大フィーバーです、二本でぶつた斬ります。」

「な、アルトリア!?!やめたまえ、本気で死んでしまうではないか!?!」

おい弓兵、真名、真名!!

などと、漫才をしているとそこに新たに突っ込みが加わった。

「なにしてんのよ、あんた達…あとセイバー…」

も何時迄も拘らないの、話が進まないじゃない。」

凜の呆れ顔に、続くは浅黒い肌の筋肉巨人。

「そうだな、夫婦喧嘩は俺も食わねえぞ?」

——それで良いのか、克蘭の猛犬…。

「バーサーカー…冗談とか言えるんだ…しかも自虐ブラックジョーク…」

とは、朔弥。

「まあ、兎に角皆準備はよろしいですね?」

「ああ、ばつちりだ」

アルトリアの言葉に答え、投影したサバイバルナイフと、強化を施した数種類の拳銃

類をホルスターに収める士郎。

「…投影品でないとはいえ結局銃を使うのか、貴様…。」

もうどうでもいいか、と投げやりながら苦い顔のアーチャー。

「そもそも最初からいつでも臨戦態勢よ、私は?」

と、腰に手を当てながらふふん、と言いつつ凜。

「俺としても早いところ現状を打破したいところだな、敵を扶るなら早い方が、いい。」

「好戦的ですね…まあ、先ほどの新都心側からの発光現象は異常な魔力量でした…間違
いなく特大の力がぶつかり合いをした余波…おそらく宝具でしょう。」

「ああ、真昼かっつくくらいに空が白くなってたからな…騒ぎにならないのは人払いや認
識阻害の结界でも張られていたんだろう。」

「今こそ動く時でしょう…大聖杯が収められた円蔵山の洞穴…そこを打破するには絶好
のチャンスです…キャスターが巢食っているのはわかっていますが…われわれ全員が
かかれば楽に勝てます。」

「…確かにキャスターが想定通りコルクスの魔女であれば負ける道理は無いだろう…門
番にアサシンが居たとしても大丈夫だ、しかしな…今回は君が経験した聖杯戦争のどれ
とも違う…いかなるイレギュラーが存在するかわからんぞ?」

「…その時はその時でしょう、最早躊躇っている場合でもありません。」

「そうだな、確かに急いだ方が良かろう。」

アーチャーが同意し、そのまま全員で柳洞寺へと歩き出す。

「士郎、私が抱えて走る方が早い…行きますよ?」

と、アルトリアが士郎を軽々と持ち上げ、横抱きに抱えた。

お姫様抱っこである。

「ちよーこれは、幾ら何でも恥ずかしい!」

「「……………っ!」」

当人二人以外の全員、笑いを堪えるのに必死であった。

||

「…どうとう来ましたか…さて、全力で迎え討たねばいけませんね…此度もあまり長い
蜜月は続きませんでしたわね…。」

山道を登る複数の気配。

山門に守りは無く、このままいけばいかに彼女に有利な場とは言え数に負けるだろ
う。

破格の霊格を備えた二人に、あの厄介なアーチャー。

3対1では如何に神殿化したこの境内であれ敗北はほぼ確定。

「宗一郎様…今迄お世話になりました、今宵、この時を持つて契約を破棄させていただきます。」

そう独りごちコルキスの魔女、メディアは自身の胸に歪な短剣を突き立てんと、逆手に構え。

その手にスウ、と伸びた掌が重ねられた。

「…宗一郎様、何故…」

「キャストアー、いや…メディアよ、仮初めにとはいえ夫婦の契りを交わしたのだ、独り逝くなど許さん。」

「…何を、貴方からしたら私はただの、行きずりでしょう?」

「…いいや、おまえは…何もなかった俺に熱を灯した、生きる意味をもたらした。」

「…罪なお方、私はこれでも王女でしたのに。」

「…なら、どうしたというのだ?」

「…この私をこうまで骨抜きにするなど…本当に、罪なお方です事…」

そのまま二人は身体を重ね、抱きしめ合う。

長い口づけを交わし、確かめるようにした後は…山門に目を向けた。

立ち昇るのは影。

幽鬼のように立ち昇る人形は、長い刀を背にした羽織を着たサムライであった。

『最早、自我など殆ど持つて行かれたのだがな…残滓に過ぎぬこの身で良ければ…使い潰すがいい。』

と、声は無く念話だけがメディアの頭に響く。

「…アサシン…パスも無く、貴方は最早聖杯の傀儡でしょうに…何故？」

『さてな、まるでこれこそが役目だと言われた気がしてな、気がつけば立つておったよ。』
ふふ、と笑いを零しフードを取り払うキャスター。

「…オヌシ、ヤハリ、顔…出した、ガ良い」

それだけを絞り出すように肉声にして伝えて、アサシンは念話すら通じなくなった。

「…最後にそれ？本当に気障ね…貴方…残念、宗一郎様がいなければ少しぐらついていたかも知れませんが…けれどそうね、せつかくの厚意ですから…遠慮なく使い潰させてもらうわ、アサシン。」

に、と口元を歪めて笑うアサシン。

「……ろえた」とても言いたげに。

「そろそろだ、もしも私とセイバーが覚えている通りなら…山門にはアサシンがいる筈だ。」

アーチャーの言葉に頷き、見えた山門には…

黒い影が佇んでいた。

「あれは——アサシン!？」

「邪魔をするな、シヤドウ!!」

アーチャーが弓を構え、矢を放つ。

が、一瞬間いた刃がそれを斬り落とした。

「…ココ、トオサヌ。」

その間に山門前にたどり着いた面々に伝えるように声を一つ絞り出す、アサシン。

「その様な姿になってなおこの山門を守りますか、アサシン。」

今度は声は無く、ただ構えた刀がその返答だった。

「ならば、私が相手になりましょう。」

アルトリアが、青いジャージ姿に燐光を零すマフラーを首になびかせ、その手に輝く

聖剣を構える。

それを見たアサシンが感嘆した様に息を漏らす。

「皆、手出しは無用…さあ、行きますよ!」

金の輝きがアサシンを斬り伏せようと幾度も閃き、それを流麗な動きを持って受け流すアサシン。

力と疾きでねじ伏せにかかるアルトリアの剛の剣、対するアサシンの柳の如き柔の剣。

「凄い…なんなのあれ…刃が見えないんだけど…」

「楽しそうな相手を独り占めか…俺の分はあるんだろうなあ…あ？」

「出番まで待つてよ、バーサーカーが暴れたら私が疲れるんだから…」

凜の声に被せるようなバーサーカーの声、それを嗜める朔弥。

「力や速さは完全に上なのに…全て軸をずらして刃を逸らしてる、しかも——あれ、宝具じゃない…ただ長いだけの刀だぞ!」

「ほう、あの動きの中それが解るか…小僧、やはり貴様は…」

「は?…何だつてアーチャー?」

「いや、気にするな…それより今ならば走り抜けられよう、行くぞ!」

「トオ、サ、んと、いッ…た!」

掠れた声でアサシンが叫ぶと、そこに複数の影が立ち昇る。

「ち、デミオルタを呼びやがった。」

バーサーカーが眩き面倒そうに槍を構える。

「何、嬉しいんじゃないの？」

さつきから闘いたがっていたバーサーカーはあまり嬉し気ではない顔で朔弥に返す。

「自我もない奴を相手にしても面白かねえ。」

「まあ、なんにしても…先生！出番です！」

いきなり腰に手を当て、胸を張りながら何かのたまう朔弥。

「誰が先生だ用心棒か、俺は！」

「にやはははっ」

「戯け、来るぞー！」

二人のコントを待つほど影達は優しく無かった。

アーチャーの指摘通り一斉に獲物を構えて走り寄り、斬りかかってくる。

双剣を投影したアーチャーが最初に、矛を構えた大柄な影と切り結ぶ。

「ぐ、この膂力…体格、武器…呂布か！」

「呂布って、三国志の英傑じゃない！なんでそんなのが影化してるわけ!？」

凜が悲鳴みたいに叫ぶ。

それはそうだろう。

何せ冬木の聖杯で東方の英霊は呼べないはずなのだから。

「私を知るか！だがこの奉天牙戟はどう見ても、呂布のそれだ！」

矛を弾き、いなしながらアーチャーが怒ったように返し、次に走り寄る影を一度に二人。
人。????????!

バトサーカーが足止めた。

片側は槍を、片側には長い尾を叩きつける。

「……」

影達の声なき叫びが響く。

バトサーカーが相手にする影の後ろから、フードを被り片手に括り付けた簡易クロス

ボウを放つアーチャーらしき影。

影はすぐに薄い皮膜に包まれて姿を消した。

(ち、あの馬鹿緑まで取り込まれてやがるか！)

「ちよ、何今の…アサシン!」

凜は勘違いしているようだがアサシンだと言われても違和感は無いの…あれは

アサシンでは無くアーチャー、ロビンフットだろう。

カルデアでの記憶を少なく無い量保有するバトサーカーにはそれが理解できた。

もしも、カルデアの英霊の大半が相手に奪われているとすればかなりまずい。

「ぬうつ…ああ!!」

呂布の矛を弾き、がら空きの胸を斬りつける。

痙攣するように跳ねた後に呂布の影は崩れて消えた。

「……ぐー！」

だが、アーチャーもまた少なく無い傷を負ったのか肩口を押さえてよろめいた。

「アーチャー、大丈夫!?!」

凜が慌てて治療の魔術を使い治療にかかると。

「流石に三国志に名高い豪傑……理性をなくしながらこれ程とはな……無傷の勝利とはいか
なかつたか。」

「……よく言うわよ、呂布奉先って言ったら無敵の代名詞みたいな英傑じゃない……それを
一対一で宝具もなしに倒して、それ？私にしたら貴方こそびつくりよ……本当、どこの英
霊よ貴方。」

「さて、そこは何故か記憶が曖昧でな？」

「……そう言うことにしておいてあげる、でもいつか教えなさいよ？」

「……黙秘権は無しかね？」

「当然♡」

「あかいあくまめ、とアーチャーが心中毒づいたのは言うまでもない。

「…さて、マスター、アヴェンジャー、どうするよ?」

「…どうもこうもあるか、なんだアレは…本当に同じサーヴァントか。」

「同感だね、俺は魔術師でしか無い、が…あれらが如何に規格外かくらいは解る。」

ピルの一角から双眼鏡でゼウスとギルガメッシュの激闘を見守っていた雁夜、アヴェンジャー、アサシン。

真昼のように明るく光ったかと思えば、公園の木々は薙ぎ倒されてミステリーサークルみたいになっていた。

「…あれ、どう誤魔化すんだ教会の連中。」

「…さあね、地盤沈下だとしても報道するんじゃないか、後は不発弾の誘爆とか。」

「…しかしあの力…アレがギリシャの主神だというのも領けた、奴の宝具も確認できたのは上々だ。」

「…いや、あれは一端だと考えたほうがいいぜ、アヴェンジャー…あんな剣はゼウスの逸話には無い…借り物くさいんだよな。」

と、灰藤色の眼を細めてアヴェンジャーに注意を促すアサシン。

彼らからは流石に開放した際の真名は聞こえておらず、その色形を目視したのみではその正体も見破れなくても仕方ない話だ。

「ほう、根拠は？」

「…むしろあれがゼウスの主武装だと思っただろう。根拠こそないだろ。」

「…一理ある。」

シャポーの鍰を直しながら納得するアヴェンジャーを横目に、雁夜は考える。

「俺達に勝機があるとすれば…アサシンによる陽動と、アヴェンジャーによる一撃必殺を狙うより無いだろうな。」

「…最善手としてはそうだろうな。」

淡々と、それで足りるとも足りないとも言わずそう答えるアヴェンジャー。

「もしくは逆に、あんたらに陽動させて俺が敵マスターをBANG、つてのは？」

「先の敵マスターの不可思議な防御を見ただろう、おまえの攻撃が通るかも怪しかろう。」

「辛辣だね、俺にも切り札の一つくらいあるんだぜ？」

軽口を叩きながら、三人は闇に消える。

聖杯戦争は、未だ混迷の中に。

第34話『悪夢』

「…おかしい。」

「なによ、藪から棒に？」

黒化英霊の群れは確かにこちらを押しとどめようと動いている。

アサシン…あの長刀、アーチャーとアルトリアが言っていた「佐々木小次郎」に違いはあるまい。しかし解せないのはソレが黒化しており更に他の黒化英霊を呼び寄せた事だ。

「…キヤスターの陣営はまだ黒化したりしてないと思つてたんだけど…」

「それだけ今回の聖杯に異常があるつて事でしよう、益々冬木のセカンドオーナーとしては見過ごせないわね。」

「…そうじゃない、そうじゃないよ凜ちゃん。」

何かがおかしい。

うまくは言えないが——

「くつ、この男つ…黒化しながら此れ程に巧みな技を——」

アルトリアが僅かながら押されている。

魔力放出こそ行えるがセイバークラスで現界したわけではないからかその押しが弱い。

「…フ。」

ニヤ、と口元を歪めて刃を構え直す佐々木小次郎。

「…私の技、通じないと思うなら受けて見なさいっ…シロウツ、宝具を使います！」
「ああつ、存分に持っていけ！」

両手で握っていた黄金の聖剣を片手持ちに、片手を空けて後方に飛ぶ。

「…サ、セヌー！」

まるで、アルトリアの宝具が対城宝具と知るかのように距離を詰めて発動させじと迫る佐々木。

だが。

「飛んで火に入る夏の虫——と、言うのでしたかつこの国では!？」

叫び、構えた両手に有るのは。

黒鋼と、黄金。

「!？」

二刀を構えたアルトリアを見て面食らうアサシン、佐々木小次郎。

「ふ、その一瞬、命とりですよ……星の息吹……宙（ソラ）の黒渦——相反し、喰らい合う——星を屠れ……宙（ソラ）を断て……エックスウ！」

飛び込んでしまった小次郎には最早刀を受け流すしか手はなく。

しかし、それは受け流せるような刃でも無かった。

全てを忘れて魅入ってしまう黄金の聖剣と。

全てを飲み込む虚無の様に黒く反転した魔剣。

どちらも銘は「エクスカリバー」。

「カリ、バアアー!!」

交差した刃が、長刀を易々と断ち切った。

そのまま光と闇は同時に小次郎を捉え……

「ガハツ……み、ごとなり……」

その絞り出す様な声と共に、アサシン佐々木小次郎は光となって消えていく。

「……九重朔弥あ……」

凜とした、声を聞いた。

多分これがアサシン本来の声なのだろう。

「……な、何!?!」

「……託す、メディアを、救ってやってくれ……囚われた多くは助からぬ、斬れ。」

私に今、したように、と。

「な、なんで今そんな事言つて——」

「朔弥、聞いてやつてください。」

アルトリアが神妙な面持ちでそう促す。

「…セイバー、君は…」

傷を治療し終えたエミヤもまた似たような面持ちで。

「わかつたわよ…」

「死の間際にようやく自由になるとはな、抗うにも限度があつたわ…聖杯に気をつけるがいい、あれは最早…人類悪、そのものだ。」

「…人類悪？」

バーサーカーが苦虫を噛み潰したような顔で呟く。

「私の口からは…ここまでは、だ…」

これ以上は言えぬのだ、と自嘲気味に笑うアサシン。

「——ではな、マスター。」

え？

マスター？

どういう意味かと問いたただす前に、アサシンの姿は月光に溶ける様に消えていった。

「人類、悪……だと?」

エミヤもまた、苦々しい顔で呟く。

月にかかる翳り。

黒く影を落とすそれは――

||

「クソ、なんなのだこの街は……異常だ、異常しかない!だと、言うのに誰一人としてそれに気づきもしない……こんな馬鹿な話があるか!」

ロードエルメロイⅠⅠ世、本名ウエイバー・ベルベットは口にゲソ……イカの足を加えながら毒づき地面を蹴飛ばした。

イライラしながら考えごとをしていたら眉間に皺を寄せていたらしく、通りすがりのガテン系のおっさんに同情された。

「にいちちゃん、カルシウムたりてねえのか?やるよ。」――と。

メザシならともかく、イカの足にカルシウムは無い……多分。少なくとも豊富では無い。

いや、そうじゃない。

そうではなくて……この現状だ。

時空間系パラメータはてんでバラバラ。

道から道へでは無く、街の境目付近で数歩歩いたらいきなり壁に囲まれていた何て事も。

時間感覚自体が曖昧で、油断すると意識が持っていかれそうになる。

ともすればそれに抗わない方が甘美だとばかりに意識に、ナニカが働きかける。

「……何故かはわからないが……私にだけ加護のようなものがあるのか……街にいる人たちが皆が時々掻き消えるように居なくなる……その次の瞬間には日が落ちたり昇ったりするなど……」

ある時には、目の前で談笑していた学校帰りの女子高生らしき一団が唐突に、まるで夢遊病者の如く瞳の色を失い立ち尽くしたのを見た。

そして、日が落ち、昇っていったかと思えば踵を返して……学校へと引き返していく様を見た。

在野の魔術師を訪ねた時には、その姿毎消え失せ、次の瞬間には日が昇って朝になり、寝室らしき場所から寝ぼけながら現れた。

何故貴方は結界にかかりもせず私の工房にいるのか、と激怒された。

当然だろう、招いたのはそのもの自身……

しかるべき連絡手段を用いて時計塔のロードであると名乗り、招き入れさせたのだから。

魔術抵抗を持つものはおそらくそうして大規模な仕掛けにより誤認し、ないものは深度の深い催眠の様な状態に落とされ、操られる。

…ここはまさに「鳥籠」或いは「箱庭」とでも呼べる場所だ。

最早、人の業ではない。

その中で自分だけが夜を、昼を…おそらくは「正確」に過ごしている。

はじめに意識が飛んだ時にどの程度時間感覚が狂わされたかわからないが、それ以降はまだ2日と経ってはいない。

しかし、実に数度日が落ち、昇ってをこの眼にしかと見た。

まるでビデオの早回しの様に――

「やはり、あの時の老人…あの老人に『おまじない』とやらをされてから、だ…」

そう、あれ以来異常を異常だと認識し始めた気がする。

それまでは自分も街の人々の様になっていたのだろうか？

「ゾツとしない話だ…しかし鍵はあの老人が握っているに違いあるまい…見つけねば…」

どういうわけか争う魔力などは感じるというのに、サーヴァントには一向に出会えな

い。

今の自分が出会ってどうするという話はあるが、そもそもの陣営にも出会えないのが最早異常である。

出向くたびに、まるで意図したかの様に場面が変わる。

日が落ち、昇って：「何もなかった」かのよう。

ただ、破壊跡などがあるのだ、或いは修復された破壊跡が。

「…本当に、私はいつもいつも貧乏くじばかり引いている気がするな…」
今この場にとある人物がいればさも嬉しげに笑うだろう。

…思い出したら腹がた立ってきた。

「フアアツ〇!!!」

唾とイカの足を空中に浮かせながら叫ぶ長髪のイギリス人紳士。

…否、もう立派に不審者である。

少なくとも…紳士たるものが叫ぶ様な内容ではなかった。

||

月明かりを遮るのは影。

蝙蝠の翼の様にマントを広げた、キャストターの姿。

「油断が過ぎるのではなくて!？」

その一言と共に特大の魔力弾がまるでレーザーの様に高速で幾つも降り注いだ。

石段が弾け、周りの木々が抉り穿たれる。

「きゃあ!？」

悲鳴をあげた朔弥をバーサーカーが抱えて避けた。

矢避けの加護を持つ彼には飛び道具の一発や二発では当たりはしない。

「…キャストターか!」

アーチャーもまた、即座に凜と、ついでに士郎の襟首を掴んで回避行動に移っていた。

唯一、宝具を撃ち込んだ直後のアルトリアだけが魔力弾の直撃を受ける。

被弾した場所から土煙が上がり、視界を塞いだ。

「!」

だが、舞い上がる煙が晴れた先には無事に立つアルトリアがいた。

「…キャストター、確かにタイミングだけを見れば危なかったですが…あの程度の物量ならば直感だけでも対処可能ですよ?」

「…シングルアクションの魔術としてはありえない速度と威力だったけど…流石はキャストターのサーヴァント、規格外ね…」

凜が呆れ混じりに抱えられたまま唸る。

反対側の手で襟を引かれて宙を舞った士郎はといえば投げ出されて激しくむせていた。

…気道が潰れなかっただけマシだろうか。

「ガハ、あ、ゲツホ、アーチ、ヤーてつめえ!」

「だ、大丈夫、士郎?」

凜がいささか間拔けに、脇に抱えられたまま士郎を心配する、と。

ドサリ、といきなり手を離された。

「あ痛つ、アーチャーツ、何するのよ!」

「…知らん、着地くらい自分でしたまえマスター。」

不機嫌さを隠しもしない声に凜が立ち上がりながら不服を訴える。

「な、なんなのよもう!」

「…はあ!」

アルトリアが木を蹴り飛び上がり、キャスターに斬りつける。

空中故に魔力を放出する事で軌道修正しながら弾幕を避ける。

「やっかいね、まるで先読みをされたみたいにならば！」

ブワ、と多量の積層型魔法陣が複数展開され、さらに弾幕の量が増えた。

「…くっ!？」

流石にかわしきれなくなり剣を交差して弾くも勢いを殺されてアルトリアが地面に落とされた。

「ラチがあかねえな…なら…これでどうだ?」

クーフーリン・オルタ、バーサーカーが魔槍を構える。

グ、と踏み込んだ足に爪に似た装甲が現れ、地面に突き刺さる。

固定したのだ、放つ為に。

「…我が槍は因果を逆しまに——全てを穿つ朱（あけ）の棘——その心臓、貫い…っ」

「させんよ、狂戦士。」

その槍が放たれるまさに寸前。

横合いからヌルリ、と気配無く現れた男。

葛木総一郎。

その手は鎌首をもたげた蛇にも似た動きでクーフーリンに迫る。

「ぬっ!？」

ガイン、と慌てて引き寄せた投擲寸前の槍を無理やり拳と体の隙間へ挟じ込む。

ブチブチと筋肉が千切れる嫌な感触。

「あの体制から…槍を振じ込むか——面白い、流石というところか。」

口では驚きながら身体は微塵も動きを止めず、葛木の手足はまるで鞭の様に不規則な軌道を描いて迫る。

刹那に叩きこまれた手数は実に十八。

人体の急所や関節を破壊にかかる一撃一撃は情け容赦無くクーフリーンに群がり、噛みつきとうと殺到する。

「…チイツ、おかしな技を—」

足の固定を外し槍を強引に振り回して葛木を飛び退かせた後、向き直る。

「…仕留めきれんか…。」

葛木の拳は確かにバーサーカーの身体を幾度も抉り、打ち据えた。

だが、足らぬ。

「…は、最初の数度は加護のおかげだがよ…その後にテメエ、矢避けの加護に護れない殴り方に…触れる様な打撃に変えやがったな？」

そう、矢避けの加護は、矢を避ける。

飛び交う矢弾を、あるいは拳もまた「飛んで来た」と認識すればそれを反らす。

だが。

緩やかに、触れた箇所から浸透する様な打撃では反らせない。

「厄介な力を持つているものだ、しかしその頑丈さも規格外だな。」

「はっ、生憎…生き汚いのが取り柄でな。」

口の端から血を流しながら悪態をつく。

ダメージは決して軽くはない。

「…てめえこそ、本気でただの人間、か？」

いかにキャスターの魔術強化があるとはいえサーヴァントを打撃で痛めつけられるなど。

もはや人外の領域だろう。

「…身体能力の高さだけが戦いの全てではなからう、現に私は力も、速さも——貴様に遠く及ばない。」

「ああ、だがその奇妙な技と…異様な先読み…まるでサーヴァントを相手にしてる気になつてきたぜ…あんた、アサシンじゃねえのか？」

と、どこか喜色を滲ませ、笑うクローリーン。

「違うな、…だが、次で終わりだ。」

ス、と再び双蛇が鎌首をもたげる。

「…おい、アーチャー、手を出すな。」

不意に背後に言葉を投げかける。

「…今ならば簡単に撃てると思うのだがね。」

赤いアーチャーが、弓に矢を番えていた。

「俺の楽しみ…奪うなよ。」

ニイ、と口を裂けた三日月の様に吊り上げ、答える。

「…了解した、ならば早々に決めたまえ。」

「ありがと、よっ!!」

轟、と空を裂いてバーサーカーの巨体が飛び出した。

「く、やはり前衛をつとめられるのが総一郎様だけでは…出なさい、竜牙兵!」

キャスターの左手からばらまかれた骨片が地に触れると同時に骸骨兵となり、セイ

バーと、飛び出したバーサーカーの眼前に群がり始めた。

「は、有象無象が幾ら出ても、なあ!」

槍の一振り毎に数鬼が砕かれ、青白い火を残して消えていく。

だが、地面からは湯水のように骸骨兵が湧き出しつづけていた。

「く、大した強さではないが…なんと鬱陶しい!」

アルトリアが忌々し気にそう言い放った、その時。

大地が、揺れた。

||

「…胎動が…始まった？」

大空洞内に響く微振動。

——ソレは、目覚めの予兆。

「嘘、早すぎる、まだ数日しか経つ…あれ？」

聖杯戦争開始からほんの数日。

頭ではそう認識していた、今の今まで。

だが。

あらゆる光景を見せられてきた彼女、桜は悟る。

日付けが、合わない。

起きた出来事に対して明らかに日付けが経っているのに。

本来終わるべき——日目の夜を超えていない。

「…何を、何をしたの！つねえ、▲@#??ツ、教えてよ!？」

名前が、音にすらならない。

告げることが咎められたかの様に頭が、痛みを訴える。

「は、ぐっ…!？」

よろめき、壁に手をつけて耐える。

そもそも何故こらえたのかもわからないが、しかし。

疑問を持つことを諦めちゃダメだ。

そう、ただそう感じた。

虚数、ノ、使い手ヨ。

抗ウナ。

「…いや、です、先輩を、姉さんを…皆を絶望に落として喜ぶあなたのいうことなんか、聞いてあげません！」

沈黙。

微振動だけが感じられる薄暗い洞の中で、ふいに声が聞こえた。

「…やれやれ…強情な。」

「え。」

そこに見えたのは、あり得ざるモノ。

赤いスーツにステッキ、紳士然とした佇まい。

「…う、そ？」

「久しぶりだな、桜——元気になっていたか、などという気はないが…やはり感傷的な気持

ちは拭いきれないものだな…人の心とはかくも面倒なモノだ。」

「…お、父様…?」

「ああ、そうだ…おまえの元、父親だった人非人だよ、私は。」

皮肉気に口角を吊り上げ、自虐的に呟く男。

先代セカンドオーナー。

遠坂時臣が、そこに——居た。

悪夢は、まだ始まった、ばかり。

第35話 『胎動』

これはFate／stay night、及びFate／Grand Orderの二次創作です。

鳴動する大地。

揺れに従い左右に振れるビル。

「…始まったぞ、マスター。」

「な、なんだこれは？」

ゼウスの力と、英雄王の突然の不調に救われる形で争いが止まり、僕とエレインはホテルに戻り、今後どうするかを話し合っていた、その時だった。

「…この箱庭の再編よ。」

「箱庭、だと？」

「ええ。」

確かに違和感があった。

確かに見知ったはずの冬木だというのに、どこかに違和感を感じていた。

「文字通りの意味とすればここは、実験場のようなものか？…まさかとは思いますが我々す

ら意志を持ったつもりで傀儡、などというオチは勘弁してもらいたいな…B級映画のラストでもあるまいし…神の玩具にされた哀れな泥人形、なんて事になりたくは無いぞ。」

「安心してください、我々はれっきとした人間…傀儡などではありませんよ、ただ…」

数瞬、言葉を止め何かを考えこんだ彼女だが、すくにこうべを上げて話しを続ける。

「この再編が終われば我々は一切の記憶を消され、あちらの思惑通りの位置からリスターゲットせられます、一部例外的な加護を得ない限りは。」

「ええ、聖杯——、或いは神々の加護を。」

「…そうか、君にはアーチャーが…。」

「ええ、大神ゼウス…ギリシャの主神たる彼の力で私は再編…繰り返しを免れています…それと、さっきの泥人形云々の話は英雄王には絶対にしてほいでください…逆鱗に触れますよ、先このエロゴッドが地雷踏み抜いた時みたいに。」

「…：肝に命じておこう、無駄にあんな破壊を撒き散らされても叶わないからな…マスターである言峰をどうにかすれば良いだけの話だ。」

「…お主にも協力関係になったわけだからな…ワシからの加護をやるうか。」

そうして、ゼウスが僕に手を翳す。

「——是は、我が妻、ヘーラーの加護である、畏れ、敬え…アルヒ・ティズヴァス・イサス…！！」

ゼウスの手の先に展開された積層型立体魔法陣、その輝きは僕を包み込み、その心に

触れた。

「……っ、何を!？」

「本来ならば下級の神や魔物を支配し、操る術式だ……それに手を加えてマスター以外の人間にパスを通し、ワシの力の一部を貴様に植えつけたのよ、どうだ……力が湧いてこよう？」

確かに、丹田の辺りから熱を持ち、魔力が湧き出てくるかの様だ。

「……力、はいいが僕を精神支配なんかしてないよな？」

「ほ?……ああ、そうかそんな手段があつたか!……しまった、マスターに使っておけば今頃毎晩しつとりと——」

「……あ、あ、ちや、あ?」

怖い。

怖すぎる。

端正なエレインの顔が真顔になって、口元だけ釣り上がると美しいという前にどこか根源的な恐怖を覚えた。

「ひ、マスター、そう怒るな……ヘラじゃあるまいし……全く、冗談じゃ、冗談……第一この宝具は対象一人に一度きりじゃからして……マスターにはもう使えんから安心しろ、貴様に
もな、小僧。」

「——まあ、貴方からすれば僕など小僧以下でしょう……とは言え……あまり舐めてくれな
いで欲しいところだ。」

袖に隠していたデリンジャー（超小型の単発式拳銃）を抜き、アーチャーの眉間を狙
う。

「……は、そんな玩具が効くと?」

「弾丸は対神術式を刻んだ特別製だ、痛みくらいはあると思うが?」

「……やめてください、アーチャー、切嗣も。」

溜息をつきながら、エレインが割って入る。

「……本気でやり合うつもりはないけどね、舐められっぱなしでは共闘関係も何もない、僕
なりに意地くらいあるさ。」

「ふ、そうか……まあ嫌いではないがの。」

「……今はそれより。」

「ああ、異変、だな。」

高層ホテルの窓から見えた円蔵山からは、白い光柱が立ち昇っていた——。

新都のビルの一室から、アーチャー陣営を見張つていれば円蔵山から光が見えた。

「…アヴェンジャー…君は聖杯に召喚されたと言つたな…なんだ、あれは？」

帽子のツバを直しながら光柱を睨む復讐者。

「…ああ、絶望が始まるか。」

「絶望？」

「…正直、俺にもあれが何かはわからん、ただまともな力ではないな、俺を呼び寄せたこともそうだが…禍々しい何かを感じる。」

「…で、ツンデレなあんたは聖杯ではなく、こうして人間についたわけだ。」

アサシンが気怠げに眩き、律儀にアヴェンジャーが返す。

「ふん、言葉もなく俺を使い潰そうと言う聖杯の意志なぞに構つてやるものか、俺が見たいのは生き足掻く人間の業よ。」

「ふーん、なんだか俺には理解できないがね。」

「は、お子様には解るまいよ…昏く、消えることのない燠火の如きこの灼熱の感情——復讐とは、甘美で、恐ろしく、そして愚かな程に醜くも美しいものだ。」

悦に入つた様に語る、アヴェンジャー。

「…復讐、ね…確かに人を怨むことすらなかつた俺には理解できないね。」

「…怨むことが無かつただと？そんな事があるものか…いや、真実そうだとするなら貴

様は人として壊れている。」

「ああ、俺は壊れている、だからこそ人を殺して、コロして、殺し尽くして——そして、救いながら、救われず…首を吊る羽目になったんだからな。」

…以前に見た、夢のイメージが蘇る。

あれはやはり、アサシンの。

「…は、自覚してそれか…救われんな。」

「…軽蔑したか？」

「いや、むしろ尊いとすら思うがね、貴様は壊れる事で己を貫いたのだろう…それもまた我とは違う形の人の業よ。」

なんだろうか、妙な疎外感がある。

「して、間桐雁夜よ…おまえは何を望み、何を成す？」

「…今度こそ桜ちゃんを救い、魔術によつて不幸な目にあう人間をなくしたい…叶うなら聖杯の力で世界の魔術を消してしまいたいね。」

「…ふ、なるほどな…理解できなくはないが、愚か。」

に、と嗤うアヴェンジャーはどこか同情じみた感傷を匂わせる。

「…なんだと？」

「怒るな、怒るな。」

…怒るだろう、普通。

「…何、貴様の願いではな…魔術によって不幸になる人間はいなくなるだろう、しかし世界は魔術に変わる何かを当てはめてくるだけ…最終的に不幸な人間は減らぬし、世界の修正力が違う形でその娘や、魔術によって不幸になっていた人間を再び不幸にするだけだ。」

「…なら、どうしたらいいって言うんだよ?」

「何、一人の人間が護れるものなど微々たるものだ…そこを履き違えずにまずは目の前を救え、それを只々繰り返して…世界を救ってしまった馬鹿を、一人…いや、二人知っている。」

「二人?」

「ああ、愚かにも美しい…純粹過ぎて危なっかしい双子だった。」

「なんだいそりや。」

「…ふ、其奴らとて世界の有り様を変えたわけではない、そのままの、有りの俣の世界を焼滅から救っただけだ、もちろん…周りに助けられながらだがな。」

「…そんなものかい?」

「ああ、そんなものだ、結局一人の人間が巨大な力を得たところで…限度があるのだ…だから、絆を紡ぐ…青臭い話だ…おまえたちがもしその双子に出会えたとしても、オレが

こんな事を話したなどと言ってくれるなよ？」

「恥ずかしくて死んじまうか？」

ニヤニヤしながらアサシンが割りこむ。

「ああ、火が出るな！」

「君の場合怨讐の炎が出そうでシャレにならないな……」

「クハハ！ 違う、さて……では行くか……聖杯の元に皆集うであろうよ、あの光が悪さをする前に決着をつけに行かねばな。」

「……聖杯戦争、本当に正常に機能してるのか、コレ？」

「……してはいないだろうな。」

「……やっぱりか。」

「おいまで、じゃあ僕の努力は!？」

「……さて？」

「……面白いから見えてやるよ、マスター。」

——趣味の、悪い事だ。

「…で？都合の良い事ね、キャスター。」

「…私も厚顔だとは思うけれどね、あの光、振動——貴方達も異常だとはわかるでしょう？」

あの振動と光。

それに反応したキャスターはいきなりの休戦を申し出てきた。

「…確かに、そうね。」

腰に手を当て、怒り心頭の顔で交渉をしているのは遠坂だ。

「あなたがたにはわからないかもしれないかもしれませんが…この聖杯戦争は何度も繰り返しているわ。」

「は??」

「…やはりな…」

驚く俺たちの中で唯一、納得しているのはバーサーカー。

「バーサーカー、知ってたの？」

朔弥が不思議そうに聞き、アーチャーは訳知り顔で見つめるのみ。

「…ああ、正確に言うなら…俺だけが覚えている、と言うべきか。」

「…何ですって…なら、貴方はただのイレギュラーでは無く…?」

「ああ、おまえもそうなんだな、キャスター…いいや、メディア。」

目を剥いて驚きながら返すキャスト。

「…やはり、貴方はあのカルデアのサーヴァントでしたか。」

「ああ、そうだ…貴様が覚えているのなら争う意味も無かろう…確かに俺はカルデア所属のサーヴァント、バーサーカー…クー・フリーン・オルタだ。」

「ちよ、何を真名をバラし…え、クー・フリーン!?!」

ケルトの大英雄じゃない!、とは凜の声。

「…そこで頷く貴方も、覚えているのかしら、鍊鉄の英霊。」

「…ふ、真名をバラさない辺り配慮に感謝しよう…神代の大魔術師よ…しかし、俺は残念ながら断片的にしか覚えていない。」

「…貴方達…一体何の話を…!」

遠坂が理解ができない、と叫ぶ。

当然だろう、俺、朔弥、遠坂のマスター三人ともが完全に蚊帳の外だ。

アルトリアもまた困惑している様子だが、とりあえずは詮索せず静観の構えだ。

「時間も無い…全て、話してやる。」

そうして語られたバーサーカー、クー・フリーンの話は。

俺たちの想像をはるかに超えた話だった。

人理継続保障機関、フィニス・カルデア。

とある者の手により起こされた人類全て、人類史を焼き尽くそうとする途方も無い計画。

魔術協会も、聖堂教会も全てが歴史ごと無かった事にされた。

残った七つの特異点、それを修復し、黒幕を打倒したのが――

「それが……こいつ、九重朔弥と――」

「その兄、九重九狼。」

双子のマスターだ、と。

「え、えええ!?!」

「……嘘、では無いみたいね……貴方達が揃って私たちを担ぐ理由が見当たらない……もの。」

啞然とする遠坂、九重、俺。

当然だろう。

「……わ、私身に覚えが無いんだけど……」

「そりゃあそうだ、おまえは朔弥だが、グランドオーダーを成し遂げた朔弥とは正確には

別人……だろうからな、憶測ではあるが。」

「…ええ、貴女は変わらない…けれどおそらく…今話した貴女は、貴女の内に眠って…いえ、存在を重ねていると言えるかしら。」

「…わかるのか、キャスター？」

「ええ、エ…じゃない、アーチャー、貴方の様に霊核を重ねて存在を維持したのではない、彼女はあくまで人間よ。」

「…俺の推論は的はずれだった、か？」

バーサーカーが言うには、彼の記憶にも欠損があり、正確な所はわからないとか。

だから朔弥は、「カルデア」と言う群体の英霊として世界に召し上げられた存在であり、故にこそアーチャー同様に破損した霊基を補うためにこの世界の自分自信に同化して、生きながらえているのではないかと。

「…惜しいけれど違うわ、カルデアは英霊の座についてはいない…もしそうになっているなら何故、私が記憶を維持していられるの？マスターがこの有様なのよ？」

「…確かに…しかし、どうなっているのだ。」

アーチャーが頷き、先を促す。

「…結論を言うならば…私には記憶がほぼ残っているわ、この聖杯戦争の黒幕に関する知識こそ奪われているけれど、ある程度推論はたっている、そうね…何があつたかを話してあげる。」

流石は神代の大魔術師、魔女メデアと言ったところか。

後ろには葛木先生がふむ？、と頷きながら話を聞いていた。

「——あの日、私達カルデアの英霊はマスター、朔弥、貴女に導かれてこの冬木の特異点を修正するために降り立ったわ。」

「…記憶が随分違うな…俺は冬木に来る前に光に吞まれたと覚えている、が…」

確かに、バーサーカーの話も聞いたが、どうも矛盾がある。

「…それは、貴方が一度目にレイシフトを行い、失敗したからよ、クー・フリーン・オルタ。」

「…何?」

「最初は…常に前線に立っていた朔弥、貴女の兄…九狼がレイシフトを敢行したわ。」

しかし、結果はバーサーカーの話の通りの失敗。

二度目にはそれを踏まえて、嘆いたカルデアスタッフの怒りに突き動かされた執念が相手の時空干渉を跳ね除けるだけのデータを得、対抗術式を刻んだ。

「…九狼の、あの子の犠牲を無駄にするわけがないでしょう…朔弥や、あの子を慕うサーヴァント達がどれだけ怒り狂ったか…わかるでしょう、貴方は。」

「…ゾツとしねえな、俺、もしカルデアに帰れるなら…そんなときやただじゃすまねえな…」

しかし、ならば腑に落ちない。

「なあ、ちよつといいかキヤスター?」

「何かしら、坊や?」

妖艶な笑み。

そう、底なしの沼に引きずり込まれそうな、暗い闇。

「…あ、ああ…対抗術式を刻んで…どうして朔弥は今こんな事に、あんただけが記憶を維持してるのは何故だ?」

「…私が、マスターの存在を証明するための、レイシフト理論上に必要な…サブの観測手をしていたからよ。」

「…そうか、合点が言った…常にデータを蓄積し、カルデアにバックアップを送り付けていたあんただからこそ…聖杯の力も無しに記憶を維持できたわけか…意味消失を防ぐための予防措置がまさか、記憶を維持するために役立つとはな。」

「ええ、殆どのサーヴァントがああのような怨念に屈した今、カルデアとも繋がりを断たれて…最早諦めていたのだけれど。」

貴女が健在だと言うなら…まだ、希望はあるかもしれないわね、と。

メディアはそう言ったのだ。

「朔弥、貴女の記憶——戻すことができると思うわ。」

ここに、再びグランドオーダーが、始まる。

第36話『500年の妄執』

「…お、父様…?」

「ああ、そうだ…おまえの元、父親だった人非人だよ、私は。」

赤いスーツ、ステツキ、口髭に、整った髪。

何より炎の如き意思を示すその瞳の奥の光。

まごう事なき先代セカンドオーナー、遠坂時臣がそこに立っていた。

「…そんな、お父様は第四次聖杯戦争で亡くなった筈…!」

「ああ、私は死人だよ。」

「な、何を言つて…何を!!」

最早桜の心は崩壊寸前だった。

無数の蟲に蹂躪されようと、純潔を奪われ、人と言つて良いのかすら判らない程に胎内を造り替えられてすら残っていた桜に残された希望。

繰り返すこの坩堝…、必ず、必ずいつか打破されるものと。

「た、助けて…先輩、先輩いい…!」

だが。

繰り返すだけでなく。

死者を操ることすら、蘇生すらできるといふのなら。

もう、抗う意味すら無いのでは無いかな？

いかに足搔こうと 無意味なのではないか。

頭を抱え、涙していると時臣の大きな手のひらが頬を撫でた。

「…桜、おまえの役目は楔に他ならぬ…おまえが未だ引き継いだ記憶と自我を保てるはその役目故よ…私のような端末では無く、おまえには可能性が残された。」

「…私の、可能性？」

「そうだ、世界を繋ぎ、希望をもたらす…」

唯一の可能性だ、と。

「希望、私が、希望？」

「人という種の可能性、それこそを我が主は望まれた。」

ステッキを一振りし、暗闇に火が灯る。

明かりは、今迄見えなかつた洞窟の奥を照らし出した。

そこにあるのは、黒。

昏く、光を浴びて艶を見せる黒曜石の如き黒。

伸び上がる巨大な腕。

その頂きに見える、結晶体。

翡翠色をした結晶が光を返す。

結晶の中には影が見えた、少年の影。

そこに…無言で寄り添う、一人の女性。

否。

アレは——

裁定者。

無慈悲に、定められた調律を守る者。

「…ルー、ラー？」

何故だろう、わかるのだ。

アレがなんであるか。

「…ええ、桜…私はルーラー、ジャンヌ・ダルク…彼を守り、人を人たらしめる最後の砦となる者です…：ようやくわかりました、貴女のようなモノが居る…：そしてそこな男…：桜の父だと、死人だと言っていましたね——」

「遠坂時臣、かつてそう呼ばれた者ですよ。」

「…端末…ですって？良くも私や彼の前に…姿を見せたものですね、その男の姿とて殻

に過ぎない癖に……ええ、本当に良くも……!」

穏やかだったその顔に僅かな苛立ちが見えた。

救国の聖女と呼ばれた彼女が嫌悪するなど。

彼女は旗を翳し、立ちほだかる様に結晶の前に立つ。

「近寄る事など許しませんよ……!」

?????!

「」

聞き取れないが、なんと言ったのか。

「貴様がいる限り無駄だからな……今はまだ、その男に触れはせんよ、イレギュラーの裁定者よ。」

「……イレギュラー、やはり私は冬木聖杯と呼ばれたのでは無く——」

「ああ、そうだ……所謂世界の矯正力という奴だろうな……世界からすれば我々こそが異端なのだから……対抗措置にアヴェンジャーを喚んではみたが、真逆貴様らに縁ある男を呼び寄せようなど……腹立たしい限りだ。」

「……帽子男を御しきれなかったわけね……ざまあみなさい、……!」

??????

一瞬、聖女の顔が憎しみに歪む。

言葉まで荒げる姿は何処かおかしそうに笑う童女の様な、純粋な悪意に満ちていた。父は、いや、父如きこのナニカは。

彼女に一体何をしたのか。

そして——翡翠に閉じ込められた、少年。

彼は、一体誰なのか？

橙色の髪、何処か憎めない顔立ちをしている、しかしごく平凡に見えるその少年は、その手に。

盾を模した「令呪」を宿していた——。

「…クソ、なんだというのだあれは！」

伸び上がる光の柱。

ロードエルメロイⅠⅠ世、ウェイバーは毒づいていた。

「…あの場所は…大聖杯…！」

第四次聖杯戦争以降、調べに調べた。

冬木は円蔵山に安置された巨大術式…、冬木の大聖杯。

急がねばならない。

事態は私が知らない場所で深刻な局面へ進行している様だ。

走る、走る、走る。

走り、もつれ、転んだ。

「ぐぎゃつふ!!」

そう、そうだった。

「わ、私と言う奴は…此の期に及んで…!」

体力不足で力尽きるなど。

「ゆ、許されるはずが、なかりう?!」

ガバ、と起き上がり…ひいひい言いながらお山の上を目指す。

「シット…、やはり身体は鍛えておくべきだった、のか…」

などと項垂れていると、不意に林道の奥から何かがヌウ、と現れた。

それは。

「な、何いつ、犬…いや、狼?」

体長数メートルはあろうかと言う巨大な獣がそこにいた。

スンスンと鼻を鳴らし、こちらを値踏みするようにして――

「くっ、南無三!!」

などと、日本で影響されて覚えた言葉：義妹あたりが聞いたら馬鹿にされそうだ。

——毒づき、小声で唱えていた魔術を発動。

驚愕の言葉を挙げたふりをしながらの裏詠唱：サイレント・キャストと呼ばれる小技である。

：まあ、小手先と笑わば笑え。

コレが、使い魔でも、サーヴァントであつても、逃げねばならない。

故に。

「食われてなど……やらんからなあー！」

風が特大の断頭台ギロチンと化し、獣を両断せんと放たれた。

この上なく会心の出来。

この一撃ならば僅かながらサーヴァントにも届くのではないかと。

手にした魔力増幅のタリスマンを握りしめてその一撃に期待——を持つ前に自身に失望する。

ひらり、と。

不可視のギロチンは容易く回避されて林道の樹木数本を両断するに止まった。

そしてあっさりと襟首に、その巨大な牙が突き刺さ……らなかつた。

はぐ、と。

啞えられたままに獣が階段を駆け上り始めた。
「な、ん、だ、と、おおおおお——!？」

ウオ——ン!!

咆哮が響く。

ロードを啞えた獣だけでは無い。

さらに現れたもう一頭が並走する。

「こ、コレは…魔獣か!？」

訳がわからない。

この魔獣…殺す気ならば先ほど簡単に自分を噛み殺せた筈だ。

一体、何者の使い魔なのか。

「止まれ、獣。」

そんな事を考えている内に。

いつしか道を登りきつていたらしい。

「ぐぬわっ!？」

いきなり落とされた。

「ぬ、ぬぐ…貴様何者だ…?」

不気味な矮躯の老人。

杖に寄りかかる様に立ち、視線を向けてくる。

その身から感じられるのはとびきりの邪気。

「ふえ、ふえ、ふえ、知っておるぞ、貴様……前回の聖杯戦争であの征服王とおった小僧じやなあ……背丈だけは伸びたようだが——相変わらず魔術は拙いままか？」

ウゾウゾと老人の足元から湧き出す、無数の奇怪な蟲。

「……その、蟲……そうか、間桐の……マキリ・ゾオルケン……!!」

咄嗟に懐から取り出した試験管を投擲する。

そこに封ぜられた魔力が。

火と言う型を得て爆ぜた。

「ほっ、火か、怖や怖や!!」

ザア、と。

蟲が数を増し、炎に飛び込んで行く。

生物が燃える嫌な臭いが漂いだし、火が蟲壁に遮られる。

その壁からバチバチと音を立てて弾けた蟲が焼けた呪い、鉄の針と化して飛び出した。

「火針蟲……焼けて弾ける呪言の塊よ……さあ、悶えて死に行くがよいわ、獣めが!!」

此方を見てすらいない。

渾身の一撃も利用され、その燃え立つ呪針は火を纏い二匹の獣に殺到する。だが。

並みの魔術師ならば百度は死ねる呪いの針を受けて、獣は微動だにしなかった。

その毛皮は呪いを弾き、針はその先端を肉に届かせることすらなかった。

一匹は老人に飛びかかり、そして先まで私を啜っていた方の獣が私を守る様に立ち塞がった。

「…おまえ…?」

ぐるう。

静かに唸るその瞳には確かな知性がある。

「カツ、畜生風情が——このワシに…ワシの、500余年に渡る悲願を邪魔立てするか！」

ズア、と。

地面から二匹の巨大な百足に似た巨大な蟲が頭を出し、飛びかかった狼を牽制する。

更に老人、マキリ・ゾオルケンの身体から弾丸の様に飛び出した甲虫が獣に向かい、かわされて樹木に大穴を開けた。

「…何という威力だ…対戦車ライフルではあるまいし！」

ある人物の影響で、にわかとは言え知識を持ってしまった重火器の知識と照らし合わせても、遜色どころか上回るのではないかという威力。

「醜いのう…高々500年程度…生き足掻いた末に目的すら見失った小僧っ子が。カン、と。」

杖を立て、地を叩く音。

振り返るとそこには、散々探し回っていた人物が居た。

「貴方は——、やはり!」

やはり、唯人ではなかったか、と。

問いを投げかけようとしたロードを手で制して、老人は笑う。

「ほほ、また会ったのう…ヌシとはやはり縁があった、か…おぬし…覚悟はあるか?」

「…覚悟?」

「おうよ、果てなき知識に身を浸し、かつ…英雄の道を歩む覚悟はあるか?」

「…何を言つて——」

会話はしかし、続かない。

「なんじや、貴様はつ…小僧だと、ワシを小僧などと宣うは何処の馬の骨か!!」

百足擬きがさらに湧き出し、こちらに殺到する。

その鋭い顎門から覗く牙は鋼鉄すら容易く咬み裂くだろう。

「…黙れ、小僧。」

そう、老人が言葉を放った瞬間。

先ほど自分が放った炎が兎戯に見える程の激しい炎が一瞬にして吹き上がった。

「…これは、原初の秘蹟ミシク文字!？」

キエエー!!

金切声を上げ、百足擬き数匹が瞬きの間に灰と化した。

「…この、魔術——キヤスターの、サーヴァントか!」

マキリ・ゾオルケンが憎々しげにこちらを睨む。

「…黙れと、言わなんだか?」

ヒュ、と。

軽い風音が鳴ったかと思えば。

マキリ・ゾオルケンの胸から槍が生えていた。

「ゲアツ!」

見えなかった。

狼の動きも目で追いきれない程だったが、今…いったいいつ槍を投げた?

格好だけ見れば、古ぼけた服に片目を覆うものもらいを隠す様な…眼病でつける様な

使い捨てのアイパッチ。

手に持つ杖はいつのまにか無くなり、肩には一羽の鴉が止まっている。

「——それと、一つ間違いを正しておこうか…儂はキャスターでは無い。」

「ガ、ならばこの槍…ランサーだとしても、いうの、か…ごふっ。」

口から血反吐を吐きながらマキリ・ゾオルケンが問う。

「…儂はグランドキャスター、冠位を持って世に降りたちし者——あの好色なアーチャーの同類よ。」

「ぎ、ぎぎ、ま…も、か——」

「そろそろ黙れ。」

言葉と共に老人の姿が変わる。

ボロは黒いローブ、アイパッチは黒い革の眼帯に。

顔も幾分か好々爺じみていたものから鋭い眼光を宿すに至り。

その身体から滲み出る言い様のない威圧感。

「やれ」

アオーン！

アオツ、アオツヴオウ！！

二匹の獣が吠える。

「ぎ、ぎああああっ!?!」

それが振動の波となり、マキリ・ゾオルケンを捉えた。

「から、だが…崩れつ、ぎいいつ!」

ポロポロとゾオルケンの身体から蟲達がこぼれ落ちていく。

「…貴様とて最初はその様な妄執に囚われてはおらんかったであろうにな…」

「…な、何を…ワシは、ワシは…生きるのだ、永遠を生きて、生きて——」
ハタと。

その先を紡ぐことができずにゾオルケンは言葉を詰まらせる。

「——生きて、何を…したかったのだ、ワシは、私、は——?」

虚空を見つめる瞳が、大空洞の方角を向いた。

「…ユステイーツア?」

それを最後に。

マキリ・ゾオルケンと呼ばれた男の殻は破れた。

バリン。

その矮軀を突き破り、世に産声を上げるのは…呪い。

ノロイ、のろい、呪い。

怨念の塊が噴出する。

地を汚し。

空を染め上げて。

瘴気の柱が噴き上がる。

『カツて高貴たレと、悲願を求メタ魂を以ツテ…、』

白く、僅かに灰色に燻んだ巨大な肉の柱。

側面には無数の巨大な眼、眼、眼、眼。

十字型に割れた虹彩を持つ紅い眼は此方を睨め付けており、ギョロ、ギョロと不気味に蠢いている。

『我、怨嗟ト憤懣ヲ抱き…今、此処に——魂の坩堝へ…現、界、セリ。』

「な、なんだ…なんだアレは!!」

悍ましい、悍ましい、悍ましい、悍ましい!

見ただけで目を潰したくなる。

声を聞いただけで発狂しそうになる。

いかん、落ち着け…ある種の神殿と同じだ——精神を鎮めろ。

「…ヌシに力を授けてやろうと思うたが…これはそれどころではないな…さて、どうしたものか…この様なモノ…いかにして葬るかのお…」

「…つ、ご老人！何を悠長なことを…貴方がいかなる英霊かは存じ上げませんが——あのような化け物…倒せるのですか！」

と言うか、なんなのだ、アレは！

やはり厄イ。

あの義妹にふられた仕事や話がまともであつた試しがあつたか？

いや、無い…帰つたら必ず何らかの形で報復してやる…絶対にだ！

「倒すだけならなんとかな、しかし今は儂の力もまだ安定しておらんしな…何より下手に倒せばアレは、その身に孕んだ瘴気の塊を山裾からふもとに垂れ流すぞ？」

啞然とするしか無い。

あの様なサーヴァントすら飲み込みそうな極大の悪意を前に。

この老人は、なんとも飄々としているでは無いか。

『グランド、クラス——その名を騙るか、塵芥メがアアア！』

カッ！

瞳が輝き、爆発が巻き起こる。

地面を捲りあげながら光の波が押し寄せる。

「う、わっ!？」

「カアッ！」

杖の一振りです活性化した林の木々が枝葉を伸ばし、塞ぐ。

それらの葉は全てが硬化のルーンを刻まれていた。

鋼以上の硬度と強力な魔力に覆われた防壁が壁となる。

『その様なモノ、無力と知れ…貴様が如何に強力な英霊であつたとしても——この街にいる限り…勝ちはない——お前には、無理だ。』

一際強く、眼群が輝く。

『友は全て——消えゆく。』

紅眼は更に無数の爆光を生む。

これでは反撃すら出来ない……………！

ルーンに強化された樹木は爆光を防いでいるが、このままでは押し負ける。

ウォーン！

魔獣が飛びかかり、爪牙を振るいその肉塊を切り裂く。

しかし、浅い。

「…あー、罅が開かんのお…」

老人が、つい、と腕にはめた黄金の腕輪に触れようとしたその時。

「魔神柱——そう、ならば…アレが関わっているとう？」

憎々しげに呟いたのは、フードを目深に被った、美女だった。

「ほ、コルキスの——動いたか。」

「…貴方、何者かしら、私のことを随分と訳知り顔で…まあ、いいわ…」

階段を駆け上がり、抱えられ、或いは息を切らしながら現れたのは、少年少女達。中には知った顔もあつた。

「…君は、遠坂の?」

紅い外套の男に抱えられていた黒髪の少女。

資料で見た顔だ。

「貴方はっ、確か時計塔の…君主^{ロード}——、エルメロイ?」

「…II世、をつけてくれ給え…正直私の様な未熟者が背負う看板ではないよ、五大元素

…アベレージワンの天才、遠坂凜。」

気の強そうな、それでいてその目には優しさが宿る。

「…同じ御三家でも随分な違いだなマキリ。」

肉塊を目に、眩いたその言葉に。

「ま、マキリって…あれが!?!」

呪いの塊の様なそれを見上げ、驚愕する凜。

「…と、遠坂…アーチャーに運ばせるとかずるいぞ、くそ!」

その背に、気を失った橙色の髪をした少女を背負う少年。

「——あれが、間桐の…?」

「間桐って…待てよ、まさか慎二が——」

少年が慌て、肉塊を見た。

「ガッ…あ!?!」

身体が震え、多量の汗を吹き出し始める。

——さもありなん、天才、遠坂はレジストした様だが…凡百の身なればあの呪いはキツかろう。

「落ち着け、少年…あれは極大の悪意…まともに意思を開いてあれを見てはならん…己の心の前に壁を作るイメージをしろ、息を整え…己を切り離せ。」

この状態でも少女を落とさないのは見上げた根性だ。

「あ…カハツ、はあ、あー」

…意外に飲み込みが早い。

この少年…見た感じ才能は「私同様」無いに等しい…だが、長所だけを伸ばせば案外化けるのではないか?

「落ち着いたか。」

「は、ハイ…ありがとうございます…えと。」

「…ロードエルメロイⅡ世、時計塔のロードの末席に身を置かせて貰っている、魔術師

の端くれだよ。」

「…ロードの癖に端くれとか、嫌味？」

半眼でそう足したのは遠坂凛。

「…私がこの立場にいるのは…偏に過去の過ち故だからな…はめられた様なものだ、分不相応にも程がある。」

『…囀りオルワ、人間共!!』

「ふん、マキリ・ゾオルケンに寄生してまで何をしたい？」

ロードが呟く。

「…あの妖怪みたいなジジイ…とうとう人間辞めたわけ…なるほど。」

凛が納得顔をした言葉に少年の方が何故かホツと息を吐いた。

慎二が、と言っていたがマキリの関係者だっただろうか？

マキリにはもう、直径の…魔術師足り得る子孫は居なかつたはずだが。

「…アレは…魔神柱、忌むべき人理の敵よ。」

バサ、とローブを翻して先ほどの美女が杖を翳した。

「消え去りなさい——コリユキオンツ!!」

ポツ、と。

空気を裂く音を立てて無数の魔力弾が肉塊を直撃した。

『ガアアああッ裏切りの魔女、メディア：我が主人が見逃していたからと…調子にノルで、ナイゾ!』

傷口から煙と、黒い呪いの泥を吐き出しながら、肉塊が怨嗟の声を上げる。

「…醜悪極まりないな。」

「ふん、真逆また、あれを見るはめになるとはな…さつさと抉り殺すか。」

紅い外套の男が眩き、続けて現れたのは半裸で、身体中に棘の様なものを生やした奇形の槍を持つ男。

「…やめんか貴様ら、下手に倒せば呪いを撒き散らしかねんからワシが抑えながら手を考えていたと言うに。」

「…ご老人、しかしあの巨体…もはや街への被害は免れないのではないか?」

と、二度目のやりとりで紅い外套の男が口を挟んだ。

「…あの化け物を…結界に取り込んだ上で倒せば問題あるまい。」

ク、と。

唇の端を吊り上げて笑う男。

「…結界じゃと…、馬鹿を言うな障壁を張ろうがあ呪いの濃さではすぐに溢れ出すわい…それこそ禁呪でも持ち出さねば——」

バツ、と。

老人の横に着地した男は、背中を向けたまま言い放つ。

「ふん、問題無い——なんならトドメを刺してしまつて、構わんのだろう？」
顔は見えない、見えないのに。

…そのドヤ顔してるのがまるわかりな声音だった。

「なあ、凜^{マスター}？」

第37話 『無限の剣製』

「…どうやら…自体は火急の勢いで動きはじめたようだな、ギルガメツシユ。」
「そうか。」

光の柱を見やる言峰綺礼の眩きに実につまらなそうにギルガメツシユが答える。

「…どうした、おまえが望む混沌ではないか。」

「ふん、誰かに裏から操られる愉悦など…楽しむ意味もない。」

教会の庭先で話す二人。

そこに一人の影が歩み寄る。

「——何者だ、貴様？」

その、気配。

ただの人には見えず、かといってギルガメツシユの眼を持つてしてすら、その底も見えない。

未来視を可能にする英雄王の眼を誤魔化すなど人の身には不可能、ならば人外と言う話になるの、だが。

「…貴様は、何故貴様がこんな場所に居る？」

「どうやら、綺礼の知己の様だった。」

「おお久しぶりですねえ、言峰綺礼。」

巻き舌の特徴的な喋りをする、褐色の肌、綺礼同様にカソックを着込んだ姿。

「——第九秘蹟会、筆頭騎士…第九鞞…だいきゅうししょう…ナイン…貴様の様な破戒者が何故？」

第九秘蹟会。

第八秘蹟会が正式な神の恩恵を受けたと認定された聖遺物を回収する部署であるのに対し、第九秘蹟会は外法を破戒する。

神に連なる聖なる使徒として、異端の教えを破戒して回る狂信者の集団。

…中でもナインは九人の筆頭騎士の一人。

本来は敬虔な神の信者であり、その盲信とも言える思考により行動する他の第九秘蹟会の一員と同じく異端の破戒を行う者。

「…ふふ、気軽にナイ神父、と呼んでくれ給え…君と私は長い長い付き合いではないか、なあ？」

「…代行者時代に何度か組んだと言うだけだろう、過度に馴れ合うつもりは無い。」

値踏みする様な、ヌラヌラと嫌らしい視線。

「…わあたしとは、仲良くはしたく無い、と言う顔だね？」

「…貴様の様な狂信者と馴れ合う馬鹿が居るか？」

そんな探り合いをする彼らを。

英雄王も苛立った眼差しで睨みつけていた。

「…主従揃って私が嫌だとみえる、仕方ないよね、ああ仕方ないな…ふ、ふふふ！」
顔を掌で覆いながら、空を仰ぐ様に高笑いするナイ神父。

「何が可笑しい、雑種!!」

その笑いは、英雄王の怒りに触れるのに十分だった。

展開された金の波紋——王の財宝ゲートオブパレロンから無数の原典宝具が高速で射出された。

「ふうんっ!」

と、野太い声で腕を振った、唯それだけで。

昏い何かが帯の様に翻り、宝具を絡めとり、容易く、「砕いた」。

「んん…主従共に使えるなら使うつもりだったが…どうやら、自意識だけは高いようだ。」

「…綺礼、逃げよ。」

「…は？何を言っている、ギルガメッシュ…貴様らしくもな…に？」

時既に遅く。

言峰綺礼の胸から生えた昏い触腕。

ナイン・テンプルナイツ。

名など無く、その呼称はその存在を表す記号。

9番目の神殿騎士、ただそれだけ。

ここに。

神をも滅ぼす教会最大の「[r b : 禁忌 > タブー]」が顕現した。

「なめる、なあああ!!」

怒号と共に引き抜かれた乖離剣。

しかし。

「うおつとお、そんな危なっかしいオモチャは…振り回して貰っては困るな!」

束ねられた触腕が、一気に加速し。

ギルガメツシユの…乖離剣を持つ右腕を…

切り飛ばした。

「がっ、あああああっ?!?!?」

血飛沫が飛び、腕から離れた乖離剣は粒子化して、消えた。

その腕を片手で受け止めたナイ神父は、

嗜虐的な嗤いを浮かべて。

倒れ伏し、死に体の綺礼を見た。

言峰 綺礼。

彼が最後に見たのは：

瞳に、赤々と光を灯し、嗤う。

三眼の——、怪物の姿だった。

無。

何もない、白一色の世界。

「…私は…朔弥。」

手に、盾を宿した私。

「私も、朔弥。」

胸に、竜を宿した私。

「——」

どちらも、私。

『朔弥』

懐かしい、声。

——にいい、さん？

『今の朔弥は此方の自分自身に重なりながら存在する状態だ…そうでなければ全てを奪われてしまうから。』

無造作にはねた癖毛、人好きする笑顔。

間違い、ない…兄さんだ。

じわり、目頭が熱くなる。

「——生きて…」

『…今は俺の事は気にしないで、自分を心配しなよ？』

存在が、揺らぐ。

ひどく不確かだ——

『そうだ、カルデアのバックアップを失った今、朔弥の存在は酷く不確かな状態にある。』

「…意味消失…！」

『そう、思い出してきたかい？』

兄さんの声と、カルデアの名前。

それを境に、脳裏に様々な映像が去来する。

炎上都市、冬木。

オルレアン。

オケアノス。

魔都、ロンドン。

アメリカ。

エルサレム…キヤメロット。

バビロニア。

そして――、終局特異点：

そうだ、何故。

何故、こんなに大事な記憶を無くしていたのだろうか。

レイシフト、大雑把に説明すればタイムスリップに近いこの現象は、人間を霊子化して時を遡り…過去を変える。

それは即ちサーヴァントにも近い霊子存在になる事で世界の強制力から逃れる為に。

だが、人の魂はそうした行為に耐えきれない。

故に、意味消失、存在を保てず消失してしまう危険もあるのだ。

故にカルデアのバックアップによる存在証明をし続ける事でそういった危険を防ぐのだ。

だが、そのカルデアからも、予備として機能していたキヤスターからのバックアップもなくなり、私は…一度消えて無くなりかけた。

そこに、強く惹かれたのが自分と同じ波動。

この世界における自分自信だった。

そう、そうだ。

私は、私に重なる事で「意味消失」を免れたのだ、ならば。

「…ありがとう、私。」

「…どういたしまして、私。」

礼を返されたその瞳から光が失せた。

…そうだ、この世界の「私」は。

既に、かの者に負け、死を迎えている。

心臓に感じる、確かな熱。

竜種に連なる血が脈打つ。

そう、貴女…私に貸してくれるのね？

コクリ、頷いて消えていくもう一人の私。

白い世界に、赤が産まれる。

私の胸から飛び出したソレは、巨大な竜と化して羽を広げた。

咆哮が響き渡る。

ああ、目覚めなければ。

涙が頬を伝う。

赤い光が、目を灼いた。

||

「なんなら、とどめを刺してしまっても、構わんのだろう？」

どうしようもなく、この馬鹿サーヴァントが調子に乗っているのが解る。

…癩だが、それでも私はこう言うしかない。

「ええ、アーチャー…存分に…やりなさい！」

令呪を翳し、命じる。

莫大な魔力がアーチャーに吸い込まれ、手から令呪が一角消失する。

「承った、マスター!!」

アーチャーの足元から吹き上がる、魔力の渦。

「――トレス、スオン 投影、開始――」

I am the bone of my sword.

――体は剣で出来ている

熱い、風が吹く。

d. Steel is my body, and fire is my blood.

血潮は鉄で、心は硝子

泣き出しそうな風が。

I have created over a thousand blades.

幾たびの戦場を越えて不敗

幼き日に夢を貰った。

Unknown to Death.

ただの一度も敗走はなく

ただ、ひたすらに駆け抜けた。

Not known to Life.

ただの一度も理解されない

理解、して貰おうとしなかった。

Have withstood pain to create many weapons.

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う
 だけど——答えはすぐ側にあつたのに。

Yet, those hands will never hold anything.

故に、その生涯に意味はなく

大丈夫、俺は——答えを見つけたから。

So as I pray, ——

その体は——

そう、今の、俺は。

「おはよう、エミヤン。」

「へ、あ…目、覚めたのか九重!」

士郎が、驚きながらも嬉しそうに。

UNLIMITED BLADE WORKS.

無限の、護る為の剣で出来ている。

——ああ、相変わらず寝坊助だな、朔弥!」

ゴウ、と。

炎の輪が地を走る。

世界が、塗り替えられていく。

赤い荒野に無数に突き立つ剣の墓標。

空には巨大な歯車が回り、眩い橙色をした光が空間の中心に浮かんでいる。

「い、これ……！」

「ほ、魂消た、固有結界か!!」

凜が、老人が驚愕する。

朔弥に記憶が戻ったのだろう。

私にも、鮮やかな思い出が流れ込んできた。

ああ、こんなに暖かで、大切なモノを。

私ときたら、放置したままだったなどと。

「さあ、此れなるは無限の劔でできた丘——人類史を焼き亡さんとした悪意の御柱よ……」

その身、その眼でしかと見るがいい!!」

手を振り下ろすと同時に。

数多の劔群が魔神柱に殺到する。

『英霊、如きガ、頭ニ乗ルカ!!』

傷口から呪泥（じゅでい）を吐き出し、のたうちまわる肉塊。

その声には、怨嗟が充ち満ちている。

「相変わらず、見るに耐えないね…エミヤん、オルク！やっちゃって!!」

「…ついでみたいに言うな、小娘…まあ、その方が…テメエらしい、がな。」

どこか、嬉しそうな顔のバーサーカー。

「ちよ、朔弥！アーチャーのマスターは私、私だから…ってちよつと待つて、衛宮つて言つた、今つ?!」

「あつ」

エミヤと、朔弥の声が重なつた。

「ああああつ、ついうっかりいい!!」

「…あああ、なんだ、その…遠坂?」

エミヤが、まるで士郎が困つた時のような顔を見せる。

その瞬間、凜は全てを悟る。

「そう、そう言う事…、は、ははっ…頭痛い…理解したわ、このつ馬鹿つ!!」

スパーン!と…凜が。

履いていた靴の片方を居合抜きに脱ぎさり、勢いよく衛宮士郎の頭をはたいた。

「あいたあつ、な、なんでさつ?!」

「黙れ、この嘘つき!女たらし!」

「は、ええっ!?!」

…やつあたりなのはわかってるけど。

そんな顔で士郎をどつきまわしている凜。

そんな、磨耗した記憶の彼方にある懐かしい温もりが。

「護つて見せよう——今度こそ!!」

劔の丘から抜き放つ。

一本の、黄金。

「…っ、その、劔は!」

アルトリアが、目を見開いた。

それは、始まりの劔。

王を選定した岩上の劔。

「勝利すべき——」

光が、頭上に掲げられた刃に収束する。

それは、人類を護るべき光。

救国の王を選定した、始まりの聖劔。

「黄金の劔ッ!!」

金の粒子が輝きを放ち、一直線に魔神柱をめがけ、迸った。

『グ、ギイイえあアーツ!?』

光に吞まれた肉塊は、再生する側から崩され、焼けていく。

「…御主、やるではないか！」

老人が賞賛を送り、エミヤがニヤリと唇の端をつり上げる。

「ふ、令呪まで使わせたのだ…まだまだいくぞ、魔神柱うっ!!」

ザシ、と。

カリバーンを突き刺さし、次なる剣を。

「羅刹王を降す不滅の刃、悪鬼を滅ぼす光の輪——ブラフマー・ストラ羅刹を穿つ不滅 アア——!!」

握り、魔力を込め、即座に投擲した。

それは瞬く間に光の輪となり、全ての魔を穿つ刃の車輪へと変貌を遂げた。

『…ギエアーツ!?』

刃は回転しながら魔神柱を削る、削る、削る！

「…まだまだ、そのまま爆ぜろ…ブローケン・ファンタズム『壊れた幻想』 ツ…ブレイクツ…!!!」

ドズン！

莫大な対魔性の側面を持つ魔力が爆発した。

魔神には特に痛い筈だ。

「は、少しは働こうか…全呪解放——」

バーサーカーから放たれた、硬質な魔力。

それはあの晩、士郎が止めた、彼の宝具。

魔力はその身体を覆い、硬質な鎧に、棘に、牙に成る。

「加減は無しだ——絶望に沈むがいい。」

それは、まさに狂戦士。

バーサーカーにふさわしい姿。

獣じみたその姿は、ゲイボルクの素材となった魔獣、クリードの骨を用いた攻勢防御外骨格。

バーサーカーの膂力をEXまで引き上げ、全身を凶器と化す切り札。

「——噛み砕く死牙の獣　ツツ!!!」

パガン！

あまりの力に、蹴り足に打たれた地面が爆ぜた。

ロケット砲もかくやと言う速度で飛び出すと、そのまま魔神柱の胴に風穴が開いた。

『ア——アアアアアア——!』

苦悶にその巨軀を折り曲げる魔神柱。

「まだ、終わりじゃねえぞ?」

再び、地面を蹴り飛び上がったバーサーカー。

その身は遙か上空に飛び出し、何も無い宙空を蹴った。否。

宙空に展開したルーン魔術の光の板。

それを足場に四方八方から超高速の、魔槍を身体中から生やした英霊砲弾が魔神柱を穿つ、穿つ、穿つ、穿つ、穿つ！

みるまに削られ、再生すら追いつかずに形を変えて行く。

『馬鹿な！バカナ！コノ、我が：魔神、バルバトスがア、一方的に、蹂躪されるナド、アリエナイ！ー！ー！！』

「もつとだ、もつと嘆け！バルバトスウ！！」

甲高い笑い声を上げながら、決り続けるバーサーカー、その眼は正に狂気に充ち満ちて。

魔神柱バルバトス。

その十字の光彩を持つ無数の瞳に。

ハッキリとした恐怖が映る。

『や、ヤメろ、ヤメろ！ヤメロお！』

「残念だが、貴様に人権は、無えんだよ！」

ブシヤア！

一際大きく斬り裂かれ、呪泥が吹き出す。

『あ、お、ノ、れ、え——貴様ら、ソウカ……思い出したノダナ……あの、煉獄の様な戦いの日々をおつ……なればこそ！貴様らは——全てを知るが故に全てを嘆くのだ……』焼却式バルバトス——燃え尽きよツ!!』

複数の眼から、一斉に爆光が放たれ、爆ぜた。
だが。

「ふあふあ、その力はもう見たでい……出力が上がろうと仕組みを理解したならば防ぐにも容易なものよ……邪悪よ、失せよ——！」

老人が杖を振る。

複数のルーン光が閃き、爆光を9割方飲み込み、消しとばす。

『な、ニイ!?!』

そして。

クリード・コインヘンを解除したバーサーカーが、地面に爪を突き立て、脚を固定。

ミチミチと筋繊維を千切る音を立てながら。

槍を、構え。

「抉り穿つ——」

投げた。

——塵殺の槍 ツツ!!」

空中で数千の光に別れた槍は。

魔神柱、バルバトスの身体を余すところなく抉り砕いて行く。

『あ、あ、あ、我が、我がああ!!』

その声が。

『滅ぶなど、あり得ぬ、ならぬ、死んでなるものかああ、生きて、生きて——ユ——??ア

ああああ——!!』

人であった、マキリ・ゾオルケンのモノに戻る。

それを断末魔に。

魔神柱、バルバトスは完膚なきまでに消滅した。

「…ふ、う…流石にこれ程の呪泥を吐き散らされるとキツイものだな…だが、街への流出は防いだし…大半はバーサーカーが槍の力で削ぎ殺してくれた、これで、終わりだ。」

「うん、今度こそバルバトスを倒し切った、んだよね?」

「は、あれで再生なんざ不可能だ…槍の呪いで確実に殺し尽くしたからな。」

流石はクフリーリンの「ゲイボルク」と言うところだろう。

「これが…今代の聖杯戦争のサーヴァント…なんという力だ…英雄王にすら並ぶのではない、か…?」

今迄黙していたロードエルメロイⅠⅠ世があんぐりと口を開けて、そう呟いた。

ああ、流石に疲れた。

ぐら、と。

視界が揺らぐ。

「あとは、任せた…。」

ああ、俺は。

あの頃望んだ、人を護る者に…

正義の味方…いや。

大事な人を護る守護者に、なれただろうか？

どさり、と身体が地面に落ちた後に霊体化する。

朔弥と凜が心配する声を最後に、この身は英霊だというのに。

…私の意識は、途切れた。

第38話 『眩き黄金』

「…あれ。」

岸波白野。

緩くウエーブのかかった肩甲骨辺りまで伸びた薄明るい茶髪、それなりに出るところも出てくびれも有る身体。

何処にでもいる、平凡な女子高生。

私は無個性で、特に目立たず、いつもクラスで三番目くらいにいた。

秀ですぎず、馬鹿でもなく。

ただ、埋没している。

だと、言うのに。

何故か努力しなくちゃいけない様な焦燥感にかられて、気がついたら努力している。

どうでもいい筈なのに。

世界も、自分も、強いて言えば気に入った人を見て…その人達がしあわせならそれでいい。

私の心は。

未だに不完全だ。

何かが、足りない。

欠けているのだ、大切な、大切な何かが。

月明かりが見える、仄明るい夜に。

何故か急に目が、覚めた。

時刻は、遅いとも早いとも言えない時刻。

夜には違いないし、うら若い女性が外に出る様な時間では、決してない。

「……なんで、かな……呼ばれてる様な、そんな気がする……。」

不思議とそれは、確信があつた。

確かに、誰かが私を呼んでいる。

「……待つて、今、行くから。」

ぎゆう、と握りしめた手の甲には、消えかけた痣。

手早く制服に着替えて上からダツフルコートを羽織る。

「誰が、居るのかな——。」

赤い背中。

青い和装。

それがわかる程度にはギルガメツシユは馬鹿ではなかつたし、言峰がやられた時点で慢心も無かつた。

にも、関わらず。

人類最古、最強の英霊の力を目の前の黒人は易々といなして見せた。

「悲しいなあ、英雄王…最初から全力で抗えば…：まだしも勝ち目があつたらうにな、今回の聖杯戦争…私を殺し得るモノが複数居る——貴様まもまた、可能性はあつたのだが！」

人間。

ただの人間が、英霊相手になんと不遜な事か。

本来ならば人間が英霊にスペックで上回る事は不可能に近い。

ごく稀な特殊例を除けば…命懸けで漸く傷つけ、或いは滅する「可能性」を持てる程度。

が、この男の言葉は真逆。

全くおかしな物言いなのだ、普通ならば。

「貴様、一体…何だ？」

「言峰が言つたらう…：私は第九秘蹟会…：九人の筆頭騎士が一人——第九鞘、ナイイン…：だ、とも。」

会話の最中も触腕はギルガメツシュを捉えようと蠢くが、複数の銀の円盤が雷鳴を鳴らしながらそれを阻んだ。

この力、アンリ・マユに近しい、だが：違う。

「最初の泥…ケイオスタイドを煮詰めて固めたかの様な凶悪なまでの混沌の力。此れ程の狂気に等しい力を人間が？」

あり得ない。

「…凶に、乗るな!!」

先ほどから真正面からの宝具射出を繰り返していたギルガメツシュ。

しかし、唐突にナインの周囲を囲む様にして宝具が射出された。

「ぬう!?!」

緩急を変えた一撃に一瞬、対処が遅れる。

とは言え、難無く迫る宝具群を叩き落としたナインが見たのは、光学、魔力迷彩宝具——ハデスの隠れ兜で姿を消すギルガメツシュだった。

「——この、屈辱…忘れぬぞ…!」

ナインを睨みながら徐々にギルガメツシュの姿が消えていく。

追撃を仕掛けようと思えば出来ただろう。

しかし、ナインはただ鼻で笑う。

「くく、再戦を楽しみにしていますよ…精々、良いマスターを探して見てください…フワハハハハハツ！」

||

走る。

ただ、導かれる様に走った。

予感が、ある。

きつと、この先に。

私が出会わべき誰かがいる。

冬木のベツドタウン——その道を抜け、山あいになづく途中にある冬木教会、そこへ続く道からほど近い、西洋墓地。

夜間の其処は不気味なほど静かだったが、不思議と怖くはない。

一步、また、一步。

近づいているのがわかる。

「…ああ、そうか、私がいつも感じていた焦燥感は——」
黄金の夢。

かつて歩んだ月の記憶。

そう——私は貴方に出会う為に。

故に、この世に生を受けたのだから。

「……ギル。」

墓石の一つに息も絶え絶えといった程で寄りかかる、常ならば決して見せない弱々しい姿。

それでも、その姿は眩く、私を照らす黄金だった。

どこまでもどこまでも——

果てなく遠いこことは違う月の裏側で。

出会った時のまま。

「はく、の——貴様なのか?」

キョトンとした顔。

珍しい。

鳩が豆鉄砲食ったみたいな顔をしたギル。

レアだ。

「く、くくくく…唐突に貴様を思い出した…今この我は関わらぬ筈の貴様を——何故かと訝しんで見れば、そうか、そうか…居たのだな。」

「貴方の眼、使えばすぐわかつたでしょう？」

「ハ、未来がわかりすぎてはなんの面白みも無いわ…言峰は哀れであつたが…おまえが居るのであれば此度の恥も、苦痛も耐えてやろうではないか…なあ、白野。」

「ギルをいじめた奴は、何処？」

キ、と前を見据え、虚空を睨む。

「戯け、油断したばかりにこの体たらくではあるが…我を誰と心得る…王の中の王、ウルク王、ギルガメツシュであるぞ？」

「ふふ、ギルはやつぱり——そうでなきや。」

ああ、欠けていたパズルのピースが埋まった様な充足感。

ふわり、と。

優しい匂いがギルガメツシュの鼻腔をくすぐった。

「ふん——待って、おつたか？」

「ふふ、たつた、17年程しかたつてないよ、ギル…おかえり。」

「——ふん、よくぞ待ち、我を見つけ出した…褒めてやろう、白野。」

ひし、と抱きしめて。

そして、ギルの顔を確かめて――

キスの一つもしてやろうか、と身構えたその時、気づいてしまった。

「あれ…あれ…ギル…腕、腕が無いよっ!？」

「騒ぐな、片手ももげた程度。」

「や、だって、腕が、痛い?大丈夫?あ、あわわわわわつど、どど、どうしよう!？」

涙目であたふたしていると、ギルに小突かれた。

「あ痛!」

「落ち着けと言うのに、戯け。」

そう言つて、ギルは金の波紋に手を突つ込み、小瓶を一つ取り出し、一気に中身を飲み干した。

「ん、ぐ…相変わらず不味い霊薬だ…」

と、そんな呟きをしたかと思えば。

腕が見る間に生えた。

「う、うわ…」

正直肉が盛り上がり、腕を形成する様はキモイ。

「ふう、これで…お前を抱けるぞ白野。」

ぎゅ、と。

不意に抱きしめられた。

そのまま。

このままに……時が止まれば良いのに、なんてセンチメンタルな気持ちになった。

……私らしく無いな、コレ。

「このままお前を押し倒したい所ではあるのだが……今は些か事情がある、とりあえず離れるとしよう。」

4次元ポケツ——もとい。

ゲートオブパピロン
王の財宝 から取り出された翡翠と黄金の舟、ヴィマーナ。

それに乗せられ、ナイトフライトと洒落込む。

「ねえ、ギル……私ね……ギルの気配を感じてただ走ってきたから……周り、見てなかったんだけどね……アレ、何かな？」

御山、円蔵山から立ち昇る光の、柱。

山裾付近で閃く爆光。

「——聖杯に、何かあった様だな。」

「えっ、聖杯、聖杯あるの!?!」

「……白野、再会そうそう慌ただしい事ではあるがな——再び我と契約を交わせ。」

と、そう言つてギルが私の顔を引き寄せた。

「へ、ふえ!？」

「アーチャー、ギルガメッシュ——これより貴様は我が主にして半身、命を分かつ者だ……簡易ではあるがココに契約を交わす——岸波白野……覚悟せよ、貴様は私の、モノだ。」

唇を強引に奪われた。

「ん、ん——!？」

「暴れるでない、コラー！」

身体の芯から溶かされてしまいそう。

「ん、んふ、は、あ……ちゅ、ふあ……」

甘い痺れが、全身を侵す。

「ギル……ん、はあ……!？」

「ふ、がつつくでないわ白野。」

唇が離れ、糸を引く。

「あ、やあ……ギル……いじ、わる。」

ス、と。

右手の中指に何かが通された。

指輪、だ。

「左はそのうちにはめてやる…今はこれで許せ。」

「にや、にや!?!」

見る間に顔が熱くなる。

「令呪を封じたモノだ…しばらく身につけておけば貴様に再び令呪が宿ろう。」

「——相変わらずなんでも出てくるね、ギル…やっぱり貴方はギルえも——」

「……。」

睨まれた。

うぬぬ、解せぬ…!

だつてどうみてもドラ○もんじやないか!

「ふ…先ほどまで屈辱に腹わたが煮える思いだったのだがな…貴様のアホヅラを見たら笑えてきたわ、ふ、ふはははははははは!」

「酷っ!?!」

「さて——令呪が馴染むまでは傍観するとしようか…あの痴れ者を裁くのはそれからだ…」

うやあ…ギルが本気で切れてる…まあプライドの高いギルが片腕もがれて黙ってるわけがないよねえ…どうしてここにいますとかいろいろ聞きたいけど、聞いたら怒りそうだなあ。

月明かりに照らされ。

闇を裂く光の柱を見下ろしながら――

何故かギルはワインを取り出し、私を膝に抱き抱えだした。

「あの…ギル？」

「なんだ。」

「――あれ、なんか大変な事が起きてない？」

「だろうな。」

「…いいの？」

「ふん、業腹だがフェイカーに、騎士王…その上あの女がいる様だ…我が出ずともあちらは構うまいよ。」

「フェイカー、無銘がいるの!？」

「…なんだ、まさか彼奴が良いのか、白野？」

――あ、拗ねた。

「なに言ってるかな、私がギル以外興味を持つわけないでしょ…それでも一度は命を救ってくれた相手だから、お礼くらいは言いたかっただけだつてば。」

「…お前がそういうのであれば…今度あの赤いのは高級ハムでも送りつけておこう。」

「…お歳暮じゃないんだから…。」

…喜びそうだけど。

「白野。」

「ん？」

「——此度の聖杯戦争…一筋縄ではいかぬ…この我をして脱落の危険性があるだろう…死なずにすむ様、ゆめ、警戒を怠るなよ。」

「…ありがと、大丈夫だよ…ギルがいるんだもの、私達が負けるわけないでしょ？」

「…ふ、そうであつたな…お前の戦術眼は我が眼をも超えたある種の予知の様なもの…ふふ、また、我を使いこなしてみせよ。」

「まーかせて！」

満面の笑み。

自信たつぷりの顔、できたかな？

本当は、泣き出したい。

嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて。

大事な大事な、私の欠片。

それが、見つかったから——。

おかえり、ギル。

もう一度、心の中でそう眩き。

私は…待ち望んだ黄金に包まれ眼を、閉じた。

||

「…バゼット。」

「なんでしよう、ランサー?」

金糸の様な美しい髪を手で梳きながらランサー、フィン・マックールはマスターであるバゼットにたずねる。

「どうにも浮かない顔だね。」

「…今回の聖杯戦争…わからない事だらけです、あのバーサーカーのマスターの顔、見ましたか?」

「…いや…見ていないが?」

「あの周到な手管、覚えがあります。」

「ふむ…魔術師同士そういうこともあるだろう。」

「…いえ、そのモノは既に故人であるはずなのですよ。」

考えこみ、空を見上げる。

「第一、私にしても——、一体いつどこに来たんですか…確かに長髪の誰かと来た様な

気はしますが…あれはもつとこう…?」

「…何を言ってるんだい、君とはこの冬木で出会い、契約を結んだろう。」

それだ。

そもそもその状況からしておかしな話で。

野良サーヴァントなどあり得ない。

ましてや此れ程の大英霊が。

「く、考えれば考える程に頭に霞みがかつた様に…ッ!」

ぐわん。

大地が、揺れた。

冬木全体が振動し、夜空に光柱が伸び上がる。

「…あれは…!」

そちらに駆け出そうとした、瞬間。

ドズン!、と。

巨大な何かが空から降ってきた。

「——アーチャーを探していれば…妙な異変もあつたものだ…その上探してもいないものは見つかるとききたか。」

鈍色の体軀、首筋に這う、後ろに撫でつけられたうねる様な髪。

その眼は理性を宿してはいるが、何処か狂気を孕んでいるようにも感じた。

その腕は人ではないかと思ってしまうほど人形じみた美しさをした少女を抱いていた。

「…探しものでないのであれば失礼、しかし——英霊と英霊、出会ったからにはする事は決まっていよう…違うかね？」

槍を構え、ランサーがバゼットとの間に入った。

「ふん、身の程知らずね…見逃しても良かったのだけれど…そうね、夜空をセイバーに抱えられて跳ぶのも飽々していたもの…いいわ、セイバー、やってしまいなさい！」

「…了解した、イリヤ。」

「…イリヤスフィール・フォン・アインツベルン——セイバーのマスターよ、以後、お見知り置きを…ランサーと、そのマスターさん？」

「…バゼット・フラガ・マクレミッツ…ランサーのマスターだ、アインツベルン。」

「よろしくね、最もあなた方とはこれきりになつてしまっただけ…それと。——家名だけで呼ばれるのは好きじゃないわ…」

セイバーがマスターの少女、イリヤをそつと地に降ろす。

「では、ランサー。」

「ああ、セイバー。」

ランサーの手には水を纏う魔槍、無敗マク・ア・ルイの紫靱草。

セイバーの手には炎を纏う神劍――

互いの獲物が、切っ先を光らせる。

「いざー！」

跳躍は、同時。

一瞬の交差で互いに放つ一撃一撃は、刃を介してその腕に衝撃を伝える。

「ぐう、なんと重い……！」

一撃の重さが半端ではない、それはケルトの英雄達を知るフィンにしてそう思わせるだけのもの。

「……なんという上手さか……私の斬撃を枝分かれする前に止めたか。」

今の一撃で、セイバーとしては残り八の斬撃を以ってして一息に葬るつもりであったのだが。

ランサーはセイバーの膂力を。

セイバーはランサーの技術に。

互いが舌を巻く。

「さぞ、名のある大英霊と見たが……名乗りを上げられぬのが惜しい限りよな……」

「……なあに、ランサー、貴方私のセイバーの真名が知りたい？」

「ふん、此れ程の手練れ……せめて名乗りを上げたいと思うが騎士と言うものであろうよ。」

「いいわ、ヒントを上げる……セイバーはギリシヤ最大最強の大英霊……それだけ聞いたら後はわかるでしょう?」

息を飲む、バゼット。

神代から受け継がれた古き家系である彼女には、その一言で十分すぎるほどに想像できた。

あの剣は、生半な宝具ではあり得ないの是一目で見てとれた、その上でギリシヤ、そして彼が纏う獣皮、恐らくは獅子、……それを主としたその防具。

「……ギリシヤ……獅子……炎を纏う剣……まさか、まさかそれは——マルミアドワーズ……?」

「……正解だ、この剣は銘をマルミアドワーズ——我が友、ヘパイストスが打ち鍛えし神の剣……そこまで看破したならばもう名乗りを上げて差し支えなからう。」

「は、ははは、ならばその防具、ネメアの獅子か……正に、正にギリシヤ最大の英雄よな……」
「改めて名乗りを上げよう、我が名はヘラクレス——ギリシヤに生を受けた古めかしい
武人……さて、後世の騎士よ……貴殿の名は教えてもらえるのかね?」

「……ああ、ああ、光栄だ、ヘラの栄光——十二の難行を成し遂げた勇者ヘラクレス……相手
にとつて不足なし……我は、ファイオナ騎士団が長!」

「…へえ、貴方が…」

「強く！気高く、美しき智慧者——フィン・マックールとは私の事だ！」

「自分で美しいとか恥ずかしいからやめてください…後勝手に真名を名乗らないでください、全く…」

「騎士として、応えぬわけにいくまいよ？」

…貴方にそんな矜持があったのに驚きですが。

「面白い、あの嫌な光も、アーチャーも気にはなるけど…音に聞いた赤枝の団長の槍…へし折ってあげなさい、ヘラクレス!!」

「やれるものなら、やってみるといい！」

再び構え、槍を繰り出すフィン。

それを一瞬遅れたというのに難なく捌くヘラクレス。

どちらも恐ろしい程の技術と力。

本来なら人の身に介入など、不可能。

だが、バゼットは違った。

「フツ——はあ!!」

硬化のルーンを刻んだグローブと靴が斬り結び、飛び退いたヘラクレスに追い打ちをかける。

「ぬ！」

激しく打ちあつた直後故に、まさかのマスターの乱入に対処が数瞬遅れた。

「はああああ!!」

乱打がヘラクレスの肌に叩きこまれ、僅かに脚を踏ん張り、顔が仰け反る。

——が。

「馬鹿な、無傷だと!？」

ゴッドハンド、十二の試練、ヘラクレスの逸話を昇華したその宝具は、その真の効果とは別に、およそ全てのBランク以下の攻撃を無効化してしまう。

「なかなかの拳打だが…私にその程度の攻撃は意味を成さんよ、猛々しきマスターよ。」

「なっ——」

「返礼だ、受け取りたまえ！」

ゴッ。

空気を裂く音と共に衝撃を受けた。

全身に響く重い衝撃。

二度の衝撃でガードがこじ開けられた。

三、四、五度目でルーンの護りが吹き飛んだ。

七、八度目で肋骨がへし折られ。

九つ目の衝撃が身体を天高く打ち上げた。

「があつ、カハ!」

それは、軽く打ち出されただけ——剣から離れた右手の、腰すら入らない体制からの牽制程度の拳だった。

体内に治癒を施しながら、空中で身をひねり、着地する。

「——わざと見逃した、なセイバー、いいや…ヘラクレス…。」

「貴公では…私に傷一つ負わせられぬからな…わざわざ殺す意味があるか?」

悔しいがそれは事実。

あの一撃を意にも解さない防御に、あの技術、あの力。

かなう、道理がなかった。

「へえ…セイバーの一撃をもらつて生きてるだけで凄いわよ、貴女?」

「…想像以上の化け物を従えている…流星はアインツベルンということか。」

打撃に吐いた血反吐を拭い、答える。

「では、幕だ…ケルトの英雄、誇り高き騎士、フィン・マックール…もう少し刃を交えたところだが、いささか急ぎの事情があつてな。」

そう前置いた後、ヘラクレスは今迄片手で振り回していたその神剣を両手で握り、構えた。

「火を呑め、獣を屠れ——それは、荒々しき牙、吠え、猛れ……」
刃に、恐ろしいくらいに魔力が集まって行く。

「宝具を、解放する気か!!」

フィンが慌てて、自らも槍を構え——

「堕ちたる神霊をも屠る魔の一撃……!」

「剛なる者——」

「その身で、味わえ……!」

『無敗の紫靱草!!』

槍に満ちた水が、全てを穿つ光となり。

『獣屠る灼熱の剛剣!!』

剛剣に宿る猛々しい炎が、あらゆる邪悪を、獣を屠る斬撃と化す。

圧縮された水の槍と、超高温の炎。

それらがぶつかれば、水蒸気爆発が起こる。

熱された水は気化し。

炎により急激に気化した水の、その体積は実に1700倍にも膨張する。

無敗の紫靱草は圧縮された水、なればその圧縮された大量の水が膨張すれば——

爆散した水は辺りの物体を薙ぎ倒し、その高熱は人の肺腑を焼く。

「——!!」

慌ててルーンによる護りを展開。

(これでは…、あれを使えない!)

本来ならばセイバーの宝具開帳は絶好のチャンスだったのだが、これでは切り札を切ることも叶わない。

「ぬ、うううー!!」

「おおおー!!」

炎と水は、未だせめぎあいを続けている。

大量の水蒸気が晴れた時。

両者は共に立っていた。

但し、フィン^は満身創痕。

護りを抜けた熱波に焼かれた肌は灼け爛れ、その美貌が損なわれている。

人であるならシヨック死しているであろう重度の全身火傷だ。

対するヘラクレスは、無傷。

先にこちらの拳を防いだ護りは威力を削がれた無敗^{マク・ア・ルイン}の紫鞞草では貫けなかったのだろ。う…あちらのマスターもまた何らかの魔術防御により熱波を免れた様だ。

「く、くく化け物、め…我が神霊を穿つ一撃を…完封してのけるかよ。」

「相性も悪かったな、フィン・マックール…火と水では、威力を發揮しきれまい。」
「…だが、我が槍は…折れてはいないぞ大英雄…!!」

灼け爛れ、掠れた声を張り上げるランサー。

「ふ、マルミアドワーズを受けて立っただけで貴様は十分すぎるほど強い。」
ならば、それを蹂躪する貴様は一体なんだと言うのか。

「は、はははは、は！」

一声笑い、そして焼けて白く濁った眼で睨む。

なんとか自己修復し、視界が戻ってきた。

「正真正銘、我が最後の一撃…受けよ！」

振り絞り、決りこむ槍の一刺し。

「疾い、が、哀しいかな…刺突では…読み易すぎる。」

僅かに身体をずらし、その刺突を躲し。

マルミアドワーズが閃いた。

「終わりだ、フィオナの長よ。」

ナインライヴズ。

ヘラクレスのその究極の武技が形を成した、獲物次第で形を変える概念宝具。

一瞬にして放たれた九つの斬撃が、ランサー、フィン・マックールを引き裂いた。

「ランサーツ!!」

バラバラと、地に落ちたフィン「だった」モノ。

それが一瞬遅れて、金の粒子と化して消えて行く。

「……あ、ああ!」

崩れ落ち、涙を見せるバゼット。

「……いくわよ、セイバー。」

興味をなくしたとばかりにまだ蒸し暑い蒸気が纏わりつくのを嫌う様にイリヤが告げた。

「ではな……強きものよ……さらばだ……女、諦めるな……この街は、狂っている。」

「……セイバー、何を言ってるの?」

「……なんでもない、それではアーチャーを探しにいくとしようか……この惨劇……奴を殺して終われば良いのだが。」

再びイリヤを抱え上げ、跳び上がる。

後には、膝をついたバゼットが一人残されるのみであった――。

——ステータス情報が更新されました。

○ 獣屠^{マル}る灼熱^{ミア}の剛劍^{ドワーズ}

ランク：EX

種別：対獣、対神宝具

レンジ：???

最大補足：1〜???

鍛冶神、ヘパイストスが鍛えた神鉄の劍。

その劍は獣を屠り、炎の如く美しい刃紋を持つ神器名劍。

今作では火属性を帯びており、対獣、「人類悪」にも特攻を発揮する。

元来通常の刃や、エクスカリバー（カリバーンであるという説もあるが）ですら傷つけない怪物をも斬り裂いた名劍で、一時はアーサー王が所有する事もあったと言われる。

真名解放時にはエクスカリバーにも匹敵する炎の帯を放出するが、ヘラクレスが使えばそれを斬撃として放つことができ、もちろんナインライヴズによる九連撃も可能。

単体を対象とした斬撃から、大軍を想定した一撃まで幅広い運用が可能な神造兵器。

鍛冶神が鍛えたこの剣は、エクスカリバーをも純粹な格としては上回る。

ただし、星を護る、と言う条件下であれば、エクスカリバーに対してはその限りではない。

第39話 『昏き聖女』

「…この、魔力…魔神柱!?!」

かつての時間神殿で感じた魔力。

人類史を焼き尽くさんと画策した王。
????

その眷属が、確かにこの山の麓に現れたのを感じる。

「…マキリ…そうか、最後の殻を脱ぎ捨てたか。」
ふ、と。

音もなく現れたのは遠坂時臣。

「…お父様…」

息も絶え絶えに、膝をついたままの桜が呻く。

「…桜、無理をしてはいけません…貴女は今、何者かの侵食を受けている…」

そう、間桐桜と言う個人は崩れる寸前だった。

幾たびも死を見た。

大切な人の断末魔を聞いた。

忘れることも出来ず。

告げることも、助けることも許されない。

ただ、見る事だけしか許されない。

「…救国の英雄、ジャンヌダルク。」

杖を突きつけ、ルーラー、ジャンヌダルクを睨みつける時臣。

「…。」

「貴様は何をせんと現界した？そのモノを護る為か、或いはクラス通りに聖杯戦争のバランサーとしてか？…半端なものよな、そ奴を護るが故に貴様はそこを動けない、役目を果たせないわけだ？」

ニヤ、と笑う。

それはやはり時臣ではなかった。

「…貴方、やつぱりお父様、じゃない…」

「……ふん、言つたであろう桜、私はお前の父であつた、ものだ。」

今はもう、ベツモノだと。

『全く…魔神柱？もしくは使い魔？なんだか知らないけれど——私を、悪し様に言つて許されるのは私と、マスターだけよ…燃やしてあげる！』

それは、内から響く声。

「——ま、待ちなさい……ジャンヌ！」

ジャンヌダルクが、ジャンヌを止める。

影を割って飛び出した……「黒い」ジャンヌダルクを。

「……残念、私は私に言われても止まってなんか——あげないわっ！」

「ぬっ新手のサーヴァントだど!？」

「……汝が路は——すでに途絶えた!」

黒いジャンヌが手を翳し、振り降ろす。

黒く燃え盛る鉄の杭、復讐の炎を纏う槍群が時臣に迫る。

「があ!？」

あつさりと貫かれた時臣が痙攣したかと思えばドロリ、と黒いタールの様になり大地の染みと化す。

「……何を、貴女は!」

「は、まだ姿を晒す時でないとも?」

「……あな、たは?」

桜が呆然としたまま黒いジャンヌダルクに問う。

「私はジャンヌ、ジャンヌ・ダルク・オルタ：救国の英雄などではない……全てを怨み、呪い、焼かれて死した反英雄——アウエンジャー復讐者 クラスのサーヴァントよ……可愛らしいお嬢さん

？」

ジャンヌ・オルタが強く、嗜虐心を満たした目で桜を射抜く。

「さあ、そろそろ頃合いでしょう…動けない貴女の代わりに引つ掻き回して来てあげるわ、私。」

「…あまり無茶をしないでくださいね…本当に。」

諦めた様のため息を吐くジャンヌダルク。

ニヤ、と唇の端を吊り上げるジャンヌ・オルタ。

「見てなさいよ…黒幕気取りの三下…本当の悪とは、黒幕とはどんなものか教えてあげるわっ…あーははははははははっ！」

そうしてオルタはひとしきり笑い、暴風の様(ルイ)に洞窟を飛び出していく。

「…貴女方は、一体…」

「…言つたでしょう、私は調停者(ラ)、ただし今の私は…人類史の、と前置きがつくかもしれませんけど。」

くすり、となぜだか本当に嬉しそうに微笑むジャンヌダルク。

背後に護る翡翠の結晶に向けた視線は…慈愛に満ちたものだった。

「…桜、安心してください貴女もまた…私達の腕に抱かれ護られるべき…魂ですよ…この言葉は受け売り、ですけどね？」

慈愛が、確かな愛情を含んだ声音に変わる。

ああ、きつとその言葉を贈ったのはその視線の先の――

||

「…無茶をするからじゃよ。」

「…全くね、幾ら何でもあんなものを自分の心象風景の具現に取り込むとか正気の沙汰じゃないわ、幾らサーヴアントでも病むわよ…」

「…この馬鹿の自己犠牲癖は今に始まったもんでもねえからな。」

と、クー・フリーン・オルタと凜の視線が士郎に向いた。

「…ああ、確かに。」

「なんで俺を見るんだよ…」

「そりゃ…ねえ。」

凜と朔弥が倒れて朔弥の膝で眠るアーチャーと、士郎を交互に見やる。

「だからなんでさ!?!」

「んん〜お主とそのアーチャー!…ああ!」

目を細め、二人を見比べたグラウンドキヤスターさんもまた納得する。

「だからなんなんだよ!」

はあ、と盛大なため息をついて凜が口を開く。

「聞いてなかったの? さつき: 朔弥がこの馬鹿の真名を零してたわよ: エミヤ、つてね。」

「……は、はああああ!」

魔神柱が葬られ静寂の戻りつつある夜空に、士郎の叫びが: 盛大に響き渡った。

—————

「……神気を辿ってきてみたはいいが何だ今のは。」

士郎が叫んでいる開けた場所から数メートル離れた木々の合間、鈍色の肌をした巨漢と、藤色のロシアンハットと白いフリルをあしらったショートラインのドレスに、肩には帽子と同じ藤色のケープを羽織った少女が先の戦いを眺めていた。

「……まさか遠坂のアーチャーが禁呪の使い手だとは思わなかったわ。」

「……ああ、私を一度殺したあの攻撃も先の固有結界の派生技能だった様だな: おそるべき使い手よ。」

「どうする、セイバー？」

「…いや、彼らの相手をしてもらっても仕方あるまい…先ほどの異形の柱と言い…やはりこの聖杯戦争は狂っている…確信したよ、此度はまともな願いなどまず叶うまい。」

「…どう言う意味よ、それは？」

返答次第では許さない、と視線にその気持ちを察したセイバーは自らの主人に跪き、答える。

「どうもこうも…先ほどの異形は明らかに英霊ですら殺す類の災厄だ、そして神霊の降臨…それもゼウスだけでは無い、あのキャスターらしき老人…あれもおそらくは神に類するモノだ。」

そう、此度はイレギュラーが多すぎる。

「…正直わけがわからないわ…」

「だろうな、今は静観するべき、かもしれないぬ…一度監督役とやらに聞いただけではどうだ。」

「…あの神父、私苦手なのだけど仕方ないわね。」

今は自体の把握が急務か、と納得しその身を翻すアインツベルン主従。

…まさかそこに、恐るべき災厄が座しているとも知らずに。

「…ねえ、ギル。」

「なんだ、白野？」

「…本当に放置してて大丈夫なの？」

「は、構わん構わん…見ればフェイカーだけでは無くいろいろと居るようではないか…一人は氣にいらぬ氣配を纏うておるようだが——まあ、今は良からう…暫しはお前との逢瀬を堪能しようではないか、ん？」

くい、と白野の顎を持ち上げて見つめる英雄王の視線に白野の顔がさあ、つと赤みを帯びる。

「ちよ、すとぷ、すとぷ…どうどう…すていすてーいー！」

英雄王の頬を両手で挟み込むようにしながら慌てて顔を逸らす。

くきや、とか音がした氣がするが氣にしないでおこう、そうしよう。

「…照れ隠しにもほどがあるぞ？」

ちよつといけない角度にそらされた首をコキコキと鳴らしながら戻すギルガメツシユ。

ちなみに今は、空中に展開された彼の宝具…とある小説にも登場した有名な空中の

城、その原典の一部である黄金の庭の上、やたらふわふわのクッションを敷き詰めた場所二人は抱き合い：いや、白野が一方的にギルガメツシユに抱き締められていた。

「ギルとイチヤイチャしたくないわけ、ではないんだけどそろそろやめやがれください
：私は貴方と違って人間なので！そう何度も何度も体力が持たないのですよ!!」

真つ赤に茹で上がったみたいにな上気した彼女の首筋や横腹には赤い、小さな花びらの様な跡がいくつもつけられていた。

「…ふむ、まあ仕方ない。」

と、言いながら片手に持っていたピンク色の小瓶が黄金の波紋の中へと投げ入れられた。

「…ギル、今のナニ？」

「媚薬だが？」

「ニヤ~~~~~／／／／!?」

スザザ!

と、白野が飛び退く様に後退した。

「…その反応はいささか傷つくのだが？」

「やかましい! さつきあれだけ、あれ…だけ…うにやあああ!!」

ジャラララ!

と、鎖が波紋の中から伸び、白野を拘束し、引き戻す。

すぼん、とギルガメッシュの胸に収められた白野は観念したかの様に大人しくなつた。

「……うう、再会数時間でどんだけさ！ケダモノ！ビースト!？」

「ふはははは、我は人類悪にはならんから安心しろ！」

「意味わかんない!？」

王様は絶賛ストレス解消中でした、まる。

え？生贄にされた私はどうなるって？

……ナレーションに突っ込むなよう。

まあ、人間諦めが肝心ですよ、リア充モゲロ。

—————

山道を走り抜ける。

元々農家の出であつた彼女は生前から荒地を走り回るのも大して苦にはならなかつた。

「……この気配……大空洞内部にあつた気配とはまた別の……」

街中へと降りた彼女の足は自然と元来ルーラーであつた時の感覚を頼りに、今は薄れ

たそれを絞るようにして感じ取る。

「……ちら、かしら……」

やがて見えてきたのは一台の車。

新都側から橋を越え、住宅街へと入り込んできたワゴン車をとらえた。

確かに、その車から感じるのは巨大な力。

「……先手必勝！」

地についた手が、暗赤色の輝きを放つ。

アスファルトを透過し、伝わった熱が形を成し、土砂を伴いながら車の直下から噴き上がった。

「あははは、脆いわね！」

ドガン！

ワゴン車はその勢いに負けて横転し、地面を横滑りしながらガードレールに激突してようやく停止する。

「……あら、確かに貫いた筈なんだけど……無事みたいね、おかしな話だわ。」

ワゴン車突き上げた一撃は、先の時臣を貫いたのと同じ黒い槍。

炎熱を纏うそれが確かに貫いたと思ったが、ワゴン車は横転したもののその車体は無

事である。

「…なんと手荒い歓迎か…しかしワシは気の強いおなごも嫌いでは無いがな。」

シユン、と霊体化を解いて現れたのはグランドアーチャー、ゼウス。

ワゴンからはなんとかドアを開いて二人の男女が這い出してきた。

「あいたた、確かに荒い歓迎だね…」

「…下からだなんて…しかも不意打ちですか…全く、相変わらず…です…ね…」

頭を左右に振り、そう呟く切嗣とエレイン。

「…私、貴女に会ったことあつたかしら…?」

「…この姿ではわからないでしょうけれど…会つてはいますよ。」

不意に睨み合う女性二人。

「…まあいいわ、貴女は今私の敵ではあるのでしょうし…あんな汚らしい存在にいいよ

うにされている時点で…ね!」

踏み込み、エレインに突進するジャンヌ・オルタ。

「…ワシを忘れとらんかお嬢さん!」

横合いからまさに雷速で迫るゼウス。

「なっ、早っ!?!」

バチ!、と火花を散らして炎と雷が弾け合う。

一瞬にして後退を余儀なくされたジャンヌ・オルタ。

「…楽しませてくれそうね…おじさま?」

暗い炎がジャンヌ・オルタの足元から噴き上がる。

「…マスター、ワシ…あの手のおなごはちよつと苦手かもしれん…あやつを思い出すんじゃが…逃げたら怒るか?」

自分の妻を思い出したのか微かに震えを覚えるゼウス。

「当たり前ですちよつとお灸を据えて上げなさい、多少セクハラしても許します、あのダーク聖女にだけは。」

「…ちよつとあなた、なんだかわからないけどそれ、明らかな私怨よね!?絶対!」
意味もわからないながら何かを感じたジャンヌ・オルタが叫ぶ。

「……承知した、マイマスター!!!」

このゼウス、先程の気後れなど無かったかのような…満面の笑みである。

第40話『魔術師（キャスト）』

「聖杯、聖杯さえ手に入れば——全ては救われるんだろ……だから！桜を放せよ、キャストー！？」

赤毛の少年が、私を見つめる。

切迫した表情で。

だが、それは私を求めてでは無い。

無償の奉仕。

かの者の本質はまさにそれだ。

「……生まれてこの方……人が、私を見て私を無視した事などありませんでした。男はもとより、女も、すでに枯れ果てた老骨でさえも私を見れば虜になった、そして何も考えられないヒトガタと化した……貴方は、何ですか？何者です、神の眷属ですか？」

虚ろな目で、腕の中で浅く呼吸をする桜。

意識も半ば無く、この会話自体聞いているかも怪しい状態だ。

「…何を言っているかわからない、俺は俺だ、衛宮士郎——人間だ！」

「…馬鹿な、ありえませんが、ありえませんが、ありえませんが、ありえませんが、ありえませんが、ありえませんが！」

誰もが美しいと褒め称えた黒髪が揺れる。

「今更！私に、希望など持たせないで！神様！」

細く、しなやかな。

誰もが白磁の如く美しいと褒め称えた指が赤毛の少年に向いた。

「何を言ってる、君はもう手に入れただろう、聖杯を——それを用いて全てを救うんじゃないか！そう言ったからこそ、俺も、セイバーも…受け入れたんじゃないか、全てを救うと言ったからこそ!!」

足らない。

全て叶えるのであれば、まだ足らぬ。

だから、この極小の可能性すらもワタシハ、欲した。

「…士郎、いけません…もはや彼女は正気では無いっ！」

金髪の、可愛らしい少女。

だがその手には似合わぬ黄金の剣。

息も絶え絶えに、しかし流れる血を厭わず、彼女は士郎と呼ばれた赤毛の少年の前に

出た。

セイバークラスの耐魔力でならば耐えうらと思つたのか。

——愚か。

「——絶望よ、此処に。」

白い、指先に集まつた黒い靄（もや）。

それが錐の様に尖り、打ち出された。

「…ガツ！ば、馬鹿な…耐魔力が、まるで働かない…？」

銀の鎧を貫き、少女の胸に風穴が開いた。

同時に——背後に庇われていた少年の腹にも。

「…あ？！」

「…あ、ああああ——先輩、先輩！先輩イ！」

意識を殆ど失いかけていた桜が、火がついたみたいにかげろい叫びはじめた。

ああ、これは夢。

ほんの少し前を見た、今とは違う筋道に見た、泡沫。

「——そう、貴方は…そうでした、聞いていた、そうだ、士郎、士郎と言うのですね…セイバー、貴女にこのマスターは…勿体無い、余りに、過分——」

己が口角が釣り上がるのを意識する。

アア、ワタシハ、嗤ッテ、イル——。

||

街灯が明滅し、辺りがチカチカと照らされては薄暗くなるのを繰り返す。

戦鬪の余波か、辺りの電子機器が狂いを生じさせていた。

「ハ、貴方みたいな輩が黒幕、あり得る話ね、その神気、後ろにいる胡散臭いスーツの如何にもな女誑し、果ては私を貶す悪女と来た…決定、貴方達が敵ね、そうに違いないわ！」

黒い聖女様は絶好調。

一人テンション高めに叫んでいた。

「いやいや、おまちよつと極端じゃろ、少しは考える努力をじゃな？」

ゼウスがわずかばかり呆れて返し、後ろにいる切嗣がお、女誑し…となんだか顔をしかめていた。

「…はあ、脳筋此処に極まれりですね。」

エレインも呆れた顔。

しかしゼウスは仕切り直しとばかりに頭をガシガシ搔いた後に口を開いた。

「まあよいわ、良い女には違いあるまい、行くぞ性女とやら！ふはははー今夜はハッスルじゃあ!!」

……端的言つてにこの非常時にそんな時間は無い筈なのだが、当のゼウスはすっかりやる気である。それに「せい」の字が違うだろ。

「…キモツ！このヒゲ…黒髭とはまた違うキモさを感じるわ、燃えてしまえっ!!」
「ゴウ！と放たれた炎は赤から青に。」

高温のそれがまるでアイスの様にゼウスが立っていた場所を溶かし、円形範囲のアスファルトが一瞬に蒸発した。

「うははは！ヨイヨイ、抗つてこそ乗りこなし甲斐があると言うものぞ、ワシはライダーでもヤつていけそうじゃな！」

「吠叫ほぎ いてろっ…エロジジイ！」

旗を振りかぶり、炎を放ちつつ即座に突進。

勢いのままに突きを繰り出し、敵の胴を狙う。

「は、見え透いた狙いじゃな！」

雷速一閃、素早く回り込んだゼウスがジャンヌオルタの背後から雷光を放つ。

「…っ！」

かろうじてそれを躲すが体制が大きく崩される。

そこへ滑り込んだゼウスの手が、するりとジャンヌオルタの胸へと伸びた。

「うははっ良い触り心地じゃ、役得役得！」

もにゆもにゆと、如何にも手慣れた手つきでジャンヌオルタの豊満な胸を円を描くように揉みしだき出すギリシヤエロシヤの主神。

「ひゃ…つどい触つてんのよこのっ!!」

慌てて身を捻り、地べたを転げながらも炎を操るジャンヌ。

それはゼウスの回避を見越しての連撃。

「ほ、甘いあま——うひゃっほい!？」

躲した場所に再び炎が上がり、慌てて飛び退くゼウスだが、その髭にわずかに火の粉が燃え移った。

「あぢやぢやぢやっひっ、髭に火が!？」

バンバンと叩きながら火を消すゼウスを脇目に立ち上がり、旗を構えるジャンヌオルタ。

薄い笑顔を貼り付けながら。

「う、うふふ…あの馬鹿以外に許す気なんかなかった私の——を、ブチ殺す…、
汝が路は既に途絶えたムカつきすぎワロタ——楽に死ねると思わないでね、おじさま?」

——その眼は、全く笑っていないかった。

全く、ほとほと雌虎の尾を踏むのが得意な神である。

…ところで、この真つ黒聖女にネットスラング教えた馬鹿は誰だ？

…などと、無益なことを考えているエレインだった。

~~~~~

「さて、遠坂のアーチャーこそ戦闘不能だが…なんとかあの化け物は退けた、残るは大空洞内部の本命だけ、か？」

「いや、まだ他のサーヴァントも残つてやがるからな…事情を知らない奴らからすれば俺達がやろうとしていることは間違いなく障害以外の何者でもねえだろ。」

「ええ、まだ問題は山積みよ。」

士郎の言葉に、クー・フリーリン・オルタが答え、確かに。とメディアとキャストも同意する、いやグランドキャストだと本人は名乗っていた…ややこしいので今後はメディアはメディア、グランドキャストの方をクラスで呼ぶ方が良さだろうか。

最早、聖杯戦争として真名を隠して戦う意味合いも薄くなつて来た気もするし。

「…ねえ、キャスト…いいえ、グランドキャストさん？ 貴方がグランドクラスだと言うなら千里眼である程度事情は把握しているんじゃないの？」

「…ふふふ、ああ、そうじゃな、エインヘリヤルの乙女よ。」

「エイン……？」

「エインへリヤル、北歐神話にある死後、戦乙女に導かれた勇者が集う神の神殿よ——それを語るといふ事は……貴方は北歐所縁の英霊？でも北歐神話にキヤスター適性のある英霊つてそんなに多くは……むしろ殆どがセイバーやランサー、バーサーカーじゃ？」

そう、北歐神話に語られる英雄の殆どは剣、槍、弓、斧などを獲物としており、恐れを知らぬ勇猛果敢な戦士ばかり。

故に壮絶な死を迎えたものも多く、バーサーカー適性のある者も数多い。

女性ならばキヤスターに見合うものも幾らか居た気はするが……男性となれば稀有だろう。

「まあ、ワシについては後で良からう。なんにせよ時はあまり無い、早急に事態を收拾せねばこの世界事態が危いのでな。」

「……なんとなく想像はして居たけれど……彼処に巢食うのは……神にも等しい力を持っている何か、なのね。」

「そうじゃなあ……なんの因果かそのような力を持つてしまったようじゃがな。」

元々はそうではないのだ、と言下に告げるような言い回し。

「……それが何なのか貴方は理解しているのですか？」

メディアアが、どこか敬意すら含む口調で問い返す。



「…推測でしかないがな、まあ一番理解しているのは先ほどから街中でドンパチを始めたグランドアーチャーのクソジジイじゃな。」

「グランドアーチャー…って、何人グランドクラスが現界してるのよ、どんなインフレよ!?」

凜がキレ気味に叫びだした、無理もない。

「…驚かないんじゃないのかよ、遠坂。」

「いまいち理解していない士郎が呑気につっこむと、凜は更にヒートアップした。」

「やかましいっ、こちとらありえない事だらけで常識が家出中よ、もうっ!」

「あいたっ!事あるごとに俺を殴るのやめろよな!」

「…仲良しさんだねえ…」

「…お前が言うか?」

…倒れたエミヤを膝枕しながら言う朔弥の姿には説得力のかけらも無かった。

「…正直話についていけないのだが、私はどうしたら良いと思う?」

と、忘れ去られていたように黙っていたロードエルメロイ二世が、同じく黙っておすわりしている二匹の狼に尋ねた。

「…アオン?」

同時に首をかしげる二匹が妙に可愛かったたかなんとか。

「…ライダー…お前がいたらなあ…」

見上げた月は怪しく紅い光を、湛えていた。

第41話『

——普遍的無意識。

或いはアカシックレコード。

創作の世界では手垢のついた表現ではあるが、事実それに類するものは絶対の法則、神如き何者かの意思であるとすら言える。

それはこの世界に於いてはこう呼ばれる。

「根源」或いは「」。

魔術師の目指す最終目的であり、且つ魔術師はまずこれについてこう習う。

「」を指せ。

されど

「」は人にはたどり着けない。

なんたる矛盾。

なんたる無意味。

しかし、逆しまに考えるならば。

それは、人の身ではたどり着けない。

ただ、それに尽きる。

ならば、人を逸脱すれば良い。

寶石の翁、万華鏡の様に死徒になるか？

否、半端な死徒になってしまえばあらゆる意味で存在が格落ちしてしまう。

万華鏡は遙かに高みにいるからこそそこに至った、前提から違う。

それに、他者に寄りかかって世界の枠組みから外れた者が、世界の理を変えられる道理もない。

元来私は半ばとは言え人から外れていたのだから。なれば、至るために我が身を捧げるか？

否。

それでは見届けることができぬ。

ならば。

創れば良いのだ。

我が身、我が魂、我が力を継いだ私を超えた人形を。

「…そうだ、貴様が望むままにすれば良い…力を貸そうではないか、私が。」

黒い法衣<sup>カッツ</sup>。

いつの間にやら私が創り上げた結界を音もなく踏み越えてこの工房の最深部にたど

り着いたその異端者、三日月のように裂けた微笑みを浮かべ、舐める様にこちらを見下すその視線。

「ああ、悪いがこの工房の魔術的な結界は少々乱暴に扱ってしまった、いいやあ、参つた参つた、まあさか私が手えずうから引き千切る羽目になろうとは、流石は神代に近い古代から生きた者なだけはある。」

「……神の下僕が何用か。」

「信心せぬ輩には罰が下るぞ魔龍公<sup>マジダハカ</sup>。」

「心にもないことをよくほざく。」

「——私ほど敬虔な神の使徒は居らぬとも。」

確かに、この男の眼は狂気さえ伴う盲信した者にも見える。だが。

致命的に何やらズレている様に思えてならないのだ。

「……ふん、貴様が敬虔かどうかなどどうでも良い事だ、まして私が基督教の神に迎合すると思うか?」

「……いいや? 思わんね。」

殊更に理解ができない。

そう答えながら彼はまだ私に何かを見出している様子だが、こちらからすればこの様に芯がない癖に変容を良しとせず、あからさまな程に全てが己が思惑通りに進むと信じ

きつた眼。

「ならば失せるがいい、私としてもなんの得もないと言うのに貴様の様な化け物を相手にする気もない。」

「…それはそれは、だが！だがっ、しかし！お前はいずれ識る。いかに貴様が竜に連なる先祖返りであろうと、神代の魔術を体得しているとしても！たった一人、孤独な貴様には何一つなし得ないと…いや？気づいているのだらうう、気づいたからこそ…今更に、今の今まで考えもしなかった行為に手を！染めっ…」

バシヤ！

水音と共に首が落ちた。

苛立ちとともに放った不可視の刃が法衣の男の頭蓋を宙に飛ばす。

それが落ちた先には水槽があつた。

二人の子供が薬液に浸された、透明な棺桶コフィンが。

「…け、けひひひ！凶星かね、魔龍公マジダハカ。」

「黙れ、瞽めくらが。」

長く伸びた爪が、紅い鱗に覆われた半竜の足が見える。

それが、瞽の狂信者を踏み砕いた。

たまたま、その位置にあつた水槽に映る我が姿。端が擦り切れた魔獣の皮でできた

ロープ。

そこからはみ出した半人半竜の脚。

顔は齢を重ねた年経てなお厳つい皺が。

紅白入り混じる、肩甲骨辺りまで伸びた髪と、胸元まで伸びた髪と色彩を同じにした髭。

数多の排斥と絶望を受けてなお諦めきれぬ愚かな願いを抱いたその決意の証。

金の瞳を怒りと、憐憫と、悲しみと愛憎に染める己が身を見やる。

「…なんとも、浅ましい貌だ。」

血に汚れた足下を見れば、断たれてなお嗤っていたそれは既に消えていた。

「——ああ。やはり…ワシは醜いか？」

その問いに答える者は、居なかった。

「これは…なんだ？」

円蔵山、柳洞寺大空洞——本寺建立の際に既にあった天然の洞穴。

約200年の昔にそこに設置された巨大な魔法陣：アインツベルンの悲願、第三魔法

を再現するための器、始まりの回路。

『大聖杯。』

「——これが大聖杯、アインツベルンの誇る大魔術式よ……けれど、おかしいわ。」

「うむ……これは最早高々魔術式には到底見えぬ代物よ……イリヤよ、此度はここまでにして引いた方がよい……」

「何を気弱なことを言ってるの、セイバー、ギリシャ最強の英雄が——」

ぱち、ぱち、ぱち。

両手を打ち合わせる、控えめな拍手。

そこに立つのは黒い法衣に身を包んだ長身の男。

「おや、おや、おや、敗退したが故にその理性を取り戻し、剣の英雄として現界した大英雄様ではないか、ふ、ふはは！」

「……貴様は、そうか……」

「気づいたかね、気づいたのかね？そう、そうともさ……狂化を持ったままのシャドウなど相手にもならなかったな、セイバー。」

「……なんなのあなた？」

「は、はははイリヤスフィール、イリヤスフィール！貴女は私、私は貴女だよ！いや、あえて今、この姿の私の名を語るとすれば……ただ、こう呼びたまえ……第九韜<sup>ナイン</sup>、と！」



「イリヤ、とりあえず殺すが構わんか？」

「やっちなさいなさい、セイバー!!」

「——応!!」

一瞬、膝がたわんだかと思えば、次の瞬間にはドンツと音を残してその鈍色の巨軀が跳んでいた。

「は、流石に早い!」

笑いながらも手を振ったナインの影から伸びたのは闇の触腕。

「虚数魔術…?!」

その状態に気づいたイリヤが叫び、セイバーに回避を促す。

「セイバー、それに触れてはだめ!」

1を0に還す。

稀なる魔術属性、虚数。

それはおよそ真つ当な人間に使えるものではなく、素養を持つものとはごく僅か。

しかも、アレは不味い、あの虚数の内包する魔力は、私に匹敵する…!

そう感じたイリヤは即座に反応し、魔術を飛ばしてナインを牽制する、が。

「ははは、針金細工かね、他愛無いな!」

腕の一振りで渾身の魔術は無効化され、地に墮ちる。

「やっぱり、あいつ…魔力を喰つてる！」

魔力を喰らい、とりこむ。

その性質にしてあの力量は不味い。

恐らく使い方次第でサーヴァントの霊体すら貫通、切断せしめる魔技だ。

「…人の域を超えているな、ナインとやらー！」

ヘラクレスがその手に顕現した炎剣を振るえば、九つの斬撃が火の粉を散らしながら影の触腕を断ち切っていく、が、敵もさる者。

触腕は数を増してヘラクレスを四方から追い詰めようと包围を狙いう。

「は、はは！ 貴様こそ…流石ギリシヤの大英雄、この私をして動きが、把握しきれぬとは、化け物め!!」

「…人の身で英霊の動きについて来る貴様が言うか…最早呆れるな。」

しかしそこはギリシヤ最強。

数々の武勇を残した偉業は伊達では無い。

「——ッ、オオ!!」

彼が着込んだ獅子の毛皮、其れが姿を変えて鎖に繋がれた獅子の顔を象つた。

ガチン！と音を立てて触腕を噛み、止める。

「は！ 触れたな、ヘラクレスウ!!」



ヘラクレスの胸で獅子が啼いた。

その咆哮は空間を伝播し、周囲に見える己が敵——この場合は触腕のみを音の波が震え砕く。

「なっ、私の…無貌の腕がッ!?!」

ねじ切れるように砕かれていく触腕。

そしてその一瞬の動揺はヘラクレスにとって十分すぎる隙だった。

「終わりだ、人間——」

肉を斬り裂く音が大空洞に、響いた。

「おるくー。おるくー…ばーさーかあー。」

「…んだ、情け無い声出すんじやねえよ朔弥<sup>マスター</sup>。」

「エミヤンが目覚まさない…」

と、涙目で訴えて来るマスター。

…正直うざつたい、と適当な対応をするクーフリーン・オルタ。

「あ？知るか、そりやアレだけやりや疲弊するだろう、暫くすりや復活するからそこらに放り投げとけ、だいたい今のそいつは他所のマスターのサーヴァントだろうが。」

「だつてエミヤンだよ!？」

「だから知るかよつ!？」

などと戯れていたら冷たい視線がこちらに向いた。

「……ねえ朔弥…それ、ウチのアーチャーなんですけど…ねえつてば。」

「エミヤンはあげないよ!？」

「だからウチのアーチャーなんですけどつ話聞いてよこのスウィーツ脳!？」

御三家の一角がご立腹だった。

さもありなん。

「…しかし聞くだに壮大な話だな…グランドオーダー?…レメゲトンの七十二柱の魔神だど?…」

「ええ。信じられないでしょうが事実よ。そしてこの特異点の元凶は…多くの英霊を擁し二度にわたりピーストを討ち、人理を救済したカルデアさえも壊滅寸前に追い込んだ。」

メディアから事情を聞いたロードエルメロイ二世が眩き、メディアが補足する。

「しかしおかしくはないか…何故それほど存在が冬木に唐突に現れた?」

「…唐突ではないわ、カルデアの事前の観測によれば1999年にはその前兆は確認されている…だからこそこうして今、この2004年の冬木に我々が送り込まれたの。」

「それだけでは無い、お前さんがたは知覚できていないかまだ体験しておらんようじゃがそこな小僧とその騎士…いやアサシン?…他にもおるが…この閉じたピュトスの中で繰り返して聖杯戦争に駆り出されとるぞ?」

「…そう!それですよ、おじいさま…いいやグランドキャスター!貴方がかけた呪いとやらで私は見たんだ…幾度も夜が、昼が、瞬時に明けては沈む…異様な光景を…っ!」

「ちよつと待って…今あなた、ピュトスと、言ったかしら?」

「…おつと口が滑ってしもうたな…」

「やっぱりあなた、黒幕を知ってるわね?グランドアーチャーの方が良く知っているとか言っていたけれどあなたも十分に知っているのではなくて?」

「…お主には今の一言でわかったやもしれぬがな、今はまだ伏せておけ。」

「何故!」

「…ここは奴の腹のなかに等しい…今はまだ微睡んでおるが、もし奴の真名なぞ口にしてみよ、やっこさん飛び起きてしまうぞ?」

「…そう、今は寝た子を起こす時では無いというのね?」

「寝た子と言うより眠れる厄災とも言えるがな…なんにせよそう言うことじゃ。」

あごひげを撫で付けながら答えるブランドキヤスター。

目頭を抑えて天を仰ぐメデイア。

「あは、あはは…洒落にならない…もし予測通りの相手ならカルデアが情報不足で壊滅寸前に追い込まれりわけだわよ！」

「…そんなにヤバイ相手な訳？」

「ええ、今はまだ明かせませんが…下手な破壊神よりある意味で厄介極まりない相手だ  
とだけ言っておくわ…。」

神代の魔術師たる彼女がこうまで畏れる相手。

一筋縄ではいかないだろうなあ、と…

その頃のはくのん。

上空高く浮かぶ黄金の船。

そこには黄金の王と、不屈の契約者が居た。

「あつ、ちよつ、ぎぎるー！」

「なんだ、はくの?」

「……だからっ、本当にいいの、こんな?」

先ほどから感じる大きな不安。

あの戦いの最中身についた獣じみた第六感がこの地が危険極まりないと告げていた。

「…我に今、お前を愛でる以外に大事があると思うか?」

などと、危険を危険とも思わぬ唯我独尊。

「……!!? // // // // //」

結局。

…王様はどこまできても我様だった。



## 第42話『仇 ～アダ～』

「——不覚、」

「……ええ？」

一瞬の静寂。

ネメアの獅子による破壊は周囲の対象のみを砕き、敵を捉えた。追い打つ様に放たれたヘラクレスの斬撃は確かに目の前の神父を捉えていた。

燃え盛る炎の刃は情け容赦なくその法衣ごと体を引き裂き、灼き尽くし、悉くを真っ黒な塊に変える。

だが。

「ひ、ひはははっ可愛い、可愛いねえ大英雄！ワタシが、ワタシタチが、この程度で亡びると…思ったのかね!？」

炭化した塊に三日月のような裂け目が開く。

それは歪な震えを声のごとくして空間に伝えていた。

「…きさ、ま…」と人に外れた化外けがいであったガ…ゴフツ！

口から盛大に血を吐き出しながら眼前の黒い塊を睨みつける。

炭の様だったそれはいつの間にかタール状の粘性を持つツナニカに変わり、ウゾウゾと蠢きながら形を変える。

そこから伸びた長い、金属にも見える闇色の錐がヘラクレスの腹を抉っている。

「ああ、ああつ、やはりいつ如何なる時代も綺羅星の如き輝きを放つ貴様らをこうして戮り尽くすのは甘美にすぎるな！」

「セイバー!？」

「…大事なイリヤ、たかが命を一つ持っていていかれただけの事——ヌウン！」

バギン!、と乾いた音を立てて錐がへし折れて細かな破片となって散った。

「戮るなどと言わず最大の一撃を持って俺を殺し尽くすべきだったと後悔するがいい…  
得体の知れぬ亜神めが！」

ゴウツ!

神剣から迸る焔は苛烈さを増し、今度は炭化何処か一切焼滅させてやろうと燃え盛る。

「怖い怖い、は、ははは助けておくれよ、クロウくん！」

タールが形を成し、今度は女の姿を見せた。

かと思えば次はスーツ姿にサングラス、その下には痛々しい傷跡が刻まれた眼光鋭い

男に成り替わる。

「…貴様の思い通りに全て運ぶと思うなよ、愚物が…ああ——、おまえならば如何する、このシステムですらない幻想の坩堝を——」

誰に向けたかすらわからない要領を得ない独白を吐き出し、男から再び神父の姿に戻る。

「又ウア!!」

轟。空を引き裂き唸りを上げるヘラクレスの丸太の様な蹴りが、神父の体軀を捉える。

紙木細工の様に吹き飛ばされるかに見えたその身体はしかし、ふわり、と音も立てずに地に降りた。

「——つはあ、やはりこの姿が一番安定するな、——や、——イアの姿ではここは位相がズレすぎているか。」

岩をも砕く様なヘラクレスの蹴りをこともなしにいなし、呟くナイン。

「何を訳のわからない事を…つセイバー！令呪を以つて命じるわ——宝具の全力での限定空間への開帳を…このバケモノを跡形もなく消し飛ばしなさい！」

本来、この閉所で宝具の開帳をしようものならば天井を崩してマスターであるイリヤ諸共に生き埋めである、故の…令呪。



黒い聖女は怒りに任せて炎を繰り出し続けるも、先から一向に当たらない。

「ふははは、甘い甘いそんな事でワシに当たると思うか、幼いのう、身体以外は！」

「やかましいこのセクハラサーヴァント!？」

…本当に神だろうか、このアーチャー。

ちよつぱり本気で自害させた方が全国の女性のためなんじゃないかなと思う。

「アーチャー、あまり巫山戯ているとお仕置きしますよ?」

「気持ち良いので頼む！」

……殴っていいだろうか?

「私を無視してイチャつくな！」

「あ、そういう感情一切金輪際、未来永劫過去現在全てに於いてありえませぬので。」

「マスターが酷い!？」

私の言葉に涙目になりながら、器用に炎をかわし、更にはまた背後に回り込んで後ろから抱きしめる。

「ちよ、早つ…はなせ!？」

「わはははは、やはり良い乳じゃ！」

「またもやその豊満な胸を好き放題にされて顔を真っ赤にしながら暴れるジャンヌオ  
ルタ。」

「やつ、んっ…こいつなんなの妙に上手い…は、あっ！やめっ…このお!!」

手から発した黒い炎、宙空から放たれた槍がゼウスを襲うも全てひらひらと、ジャンヌオルタを抱きしめたまま避け続ける。

「けしかけてなんですけれどコレ、矢張り止めるべきでしょうか?」

つい、勢いでお灸を据えろなんて言ったものの早々に罪悪感が込み上げてきた。

「…あの猛攻を避けながらよくあんなコントをしていられると言うか、最早呆れを通り越して畏敬の念を抱けるレベルだな…」

などと言いながらありありと呆れを含んだ物言いの切嗣。

「あのいやらしさが無ければ文句なしに最強のサーヴァントの一角なんです…はあ、残念でなりません。」

返した言葉に苦笑いしつつもそれ以上言わないあたりは切嗣も似たような事を思ったのか。

いよいよ持つてジャンヌオルタが組み伏せられそうになったのでゼウスに待ったをかけようとした、刹那。

地面が、激震した。

「ちよ、なんなの今の!?!」

とてつもない魔力の奔流。

それが先ほどジャンヌオルタが後にした大空洞の辺りから逆る。

「…こりやあ急いだ方が良いかのお…。」

「えーちよ、やめなさいこの！」

ひよい、と軽々とジャンヌオルタを担いだゼウスはこちらに向き直る。

「マスター、遊んでいる暇は無くなった…残念でならんがここからはしりあすだ。」

「…そこはかとなく発音がおかしいのは突っ込むべきなのかな？」

担いだジャンヌオルタの臀部を撫でながら尻…、もとい。

シリアスとか言われても台無しである。

「…聞かないでください。」

「…そうだね、うん。僕が悪かった。」

神様は自由。

自由すぎるのがギリシヤである。

---

「…なんなんだここ、おかしいってレベルじゃないぞ。」

「そうだね、嫌な気配がぶんぶんするよ、鼻が曲がりそうだ。」

異変を察知し、大空洞に踏み込む。

その入り口は間桐に残っていた資料から突き止めたいわば裏口だった。

莫大な魔力の流れ、光の柱。

その上先ほどの激震。

「あの化け物どもをどうにかできないかと探りを入れに来れば何だいこの展開は、聖杯戦争なんだろうがこいつは？なら勝ち抜き戦になるもんだろう、普通。」

「いや、聖杯戦争つてのはバトルロイヤルだろう何言つてんのさおまえ。」

「…まあ、以前経験したのは勝ち抜きだったのさ、慎二…ところでライダーとは呼んでくれないのかい？」

悪戯っぽい微笑みに思わずたじろぐ慎二だが、そこは虚勢を張った。

「…は、実力も示さないうちからこの僕のサーヴァント気取りかよ、安くないんだよこちとらさあ…第一、あの神様だかにビビってたくせによく言うよな全く。」

「は、言うじゃないか…別に勝ち目が絶対にないとまでは行かないよ、切り札も無いでもない…少なくとも一対一ならなんとか、ね。」

実際は口とは裏腹に認めてはいた。

あの破格の力を持った黄金のサーヴァントを出し抜いてみせたその手際、力押しだけで勝てない相手とみるや観察に徹し、しかし勝ちを諦めてはいないその貪欲な精神を。



「はは、しかし寂しいもんだねえ…月でのあんたはもつと素直だったのに。」

とはいえ、それを言えるほど素直でも無い。

「ハ、それならソイツは僕じゃないな。」

それは暗に自身が捻くれていると認めたようなものだが気にしたら負けだ。

「いいや、やつぱり似てるよ。」

フランシス・ドレイク。

稀代の海賊が何故女の姿などしているのか。

…年上ぶってくるこの態度も気に入らない。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか…」

「ああ…もうすぐ最深部だ、資料通りならこの先に大聖杯がある筈。」

「全てを適える願望機、その大元かい…そんなもんに願っても碌なことにはなりやしないだけどねえ。」

とてもじゃないが召喚に応じたサーヴァントのセリフでは無い。

「いや、だつたらおまえなんで召喚に応じたんだよ？」

「ああ、そりやそうだけどね…月じゃああたしは単にそれが、お宝としか思えなかつたらさ…でも今は違う、聖杯を持ってみて、いや…グランドオーダーなんてものに関わって知つたんだ。」

やけに優しい顔で語るドレイク。  
まるで誰かを想うような女の顔。

「…はん、グランドオーダー？なんだいそりやあ…そもそも答えになってないぞ。」  
「ああ、悪いねえ、そいつは企業秘密って奴かな、ははは！」

快活に笑い飛ばすドレイクだがびたり、とその笑いを止める。

「どうやら此処が事を中心のようだね。」

その声に、反応する者がいた。

鈍色の巨軀と、視線だけを投げかけてくる紅い瞳の少女。

「新たなサーヴァントか、或いは再び湧いて出たか、ナインとやら？」

「ナイン…なんの事だいそりやあ？」

大空洞の中心にほど近い開けた空間、そこには凄まじい破壊痕があった。

不可思議なのはそれが綺麗に一定の範囲だけを抉っている事。

「……お前は…、見つけたぞライダーの仇…セイバー!!」

知らず、そんな言葉が口をついて飛び出した。

「これは異な事を、仇だと言ったか小僧。」

「…ああ、そうさ…お前は僕から、ようやく見つけた小さな感情の元を奪った！」

自分でも思いもしなかった言葉が後から後から湧き上がる。

「…若いな、そうは思わんかその女サーヴァント。」

そうだ、確かにあのセイバーの言う事は正しい、これは殺し合いの奪い合いだ、勝者はただひと組のバトルロイヤル。

仇だなどと言い出すのが烏滸がましい、ただ弱かったことこそ罪なのだ。

「…否定はしないさ、だが若さつてのもいいもんさ、いくら一度は死んだ身とはいえ年寄り染みた事を言いなさんな。」

だけど、それを否定はしないで、それでも背中を押すように理屈じやない、心を認められたみたいでどこか照れ臭いが、認めたくはないが嬉しくなった。

「…まあ、なんであれ貴様らは敵だ、小僧…小物と思いい見逃したが二度はないぞ…逃げるならば最後だ…さあどうする?」

「…クソが!今更逃げられるかよつ、これでも間桐の後継なんだよ、僕はあ——行け、ライダー ツ!!」

「あいよマスターツ、いっちょ」  
「rb:英雄 > 怪物」  
「殺しと洒落込もうか!」

勝ち目など薄い事も解っていた、それでも引けない戦いだつた。

「ああ、証明しろ、ライダー…一対一なら勝てるつてのを!」

応えてくれた彼女に、密かに感謝しつつ。

「あいよつ、少なくとも負けない戦をしてやろうじやあないか!」

拳を、握りしめた。